
ラグナロクオンライン達

叶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラグナロクオンライン達

【Nコード】

N1412F

【作者名】

叶

【あらすじ】

男は、拳動不審な少女に声を掛けただけ。少女は、初めての土地で緊張と不安を抱えていただけ。もう一人の男は、悲鳴を聞いて駆けつけただけ。全部足したらどうなった？

誤解から始まる関係（前）（前書き）

ラグナロクオンラインというゲームの世界観が好きで書いてみましたが、ゲームを知らない方にも喜んでいただけたらと。
ほとんど勢いで書いていますが！

誤解から始まる関係（前）

男は、拳動不審の少女に声をかけただけ。
少女は、初めての土地で緊張と不安で一杯だっただけ。
もう一人の男は、悲鳴を聞いて駆けつけただけ。
全部足したらどうなったか？

ミッドガルドの首都、プロンテラの町外れ。

木々が並ぶ場所でキヨロキヨロしている少女。

それに目が留まった男が声を掛けに近づく。

「なあ、あんた冒険初心者じゃ・・・」

「っ？！きゃあああ！」

不意に聞こえた声に思わず出る少女の声。

通りすがりの別な男がその悲鳴を耳に拾う。

（っは、あれはか弱き乙女の・・・助けを呼ぶ声！）

ドドドツという勢いでそばに駆け寄り、フラチな男（勝手な想像）

に声を投げる。

「その野蛮な男！ いたいけな少女から離れなさい！ でないと・・・」

「なっ・・・俺はただ声をかけ・・・」

シュンツ

「！？」

ビイイン

とっさに避ける男、そばにあつた樹に突き刺さった一本の矢。

ビュウ・・・

心地よい風が、場の空気を癒す。

・・・わけがなかった。

「当てますよ？ 色々と。」

男が一言。

「・・・」

もう一人の男が無言。

・・・こうなっちゃいました・・・

「・・・てめえ。」

そう呟いた男は、矢を放った男を睨む。めっちゃ見てる。

赤い短髪、ギロリと睨む悪い顔。男はローグ（ならず者）と言われる職業を持つ冒険者。

目付きもガラも悪いため、色々誤解されがち。今回が特に。

「離れなさいと、言いましたよ？」

キリつとした顔をし、手にしてる弦楽器で軽く弦を引く。

青い長髪、整った顔、心地良い透き通る声。吟遊詩人と呼ばれているその男。

矢は何処から放ったのか。弦を使って矢を飛ばす器用な奴。人の話を聞け。

「あ、あの！あたしあの・・・御免なさい！大声出しちゃって・・・。」
突如謝りだした少女、緊張不安に加え目の前の光景に戸惑いを隠せない。

取りあえず謝ってみたらしい。

栗色の柔らかな肩までの髪。小柄で幼顔。少女はノービス（冒険初心者）。

それこそ「初めてのおつかい」LVで危なっかしい。
今すでに危ない状況下になってしまった（誤解だらけの）。

吟遊詩人はローグから少女に視線を移し、微笑みかける。

「ああ、野に咲く可憐な花の様な愛らしい貴女。」

突然何を言い出すのやら、吟遊詩人は続けた。

「不安な闇が、貴女の素敵な笑顔を遮っているのですね？」

「え・・・え？あ、あたし？」

急にポエムのような語りで質問され、ますます困惑の少女。
オロオロオロ。

構わず語り続ける吟遊詩人、弦を優しく弾く。
ポロン。

「その闇を照らし、貴女の笑顔を見るために僕は・・・」
そう言いながら少女との距離を縮める。

「おい。」

「愛を語り、心で弾き、想いを奏でるのです。それが僕の使命なのです。」

キツパリと言い放ち、少女を真っ直ぐな眼差しで見つめる。
ポロン。

合いの手を入れるように、弦を撫でる。

「あ・・・うう、よ、よく判りませんが！」

ドギマギしながらも少女は続けた。

「友達から始めましょう！うんそれがいい！」

よく判らないままよく判らない納得をしつつ、判ってもらおうと言葉を並べる少女。

「おい！」

「ともだち・・・。」

吟遊詩人はポツリと呟き・・・そして。

「こんなに純で可愛い方の方の友達になれた事、僕はとても嬉しく、誇りに思います！」

前向きにも程がある。

「あた、あたし、ふつ、ふつつかなものですがよろしくです！」
噛みまくり。そして使い方違って少女。

人は動揺するところまで機能がおかしくなるものである。

「あたしミリリといいます・・・よね？うんそうだそうだ・・・」
（ブツ
ブツ）

未だ混乱している少女ミリリ。まあ落ち着け。

短剣ではなく、それを握り締めた拳をスライドさせ、殴りつけたのだ。

ヨロ・・。

トリッキーな動きを見せるローグに、体勢を立て直そうとする吟遊詩人。

ズシヤアッ

その顔に、目一杯の砂を当てられる。

「っう！」

視界を遮られ、吟遊詩人は身動きが取れない。

（けっ・・んな野郎にコケにされたと思うと・・）

スウ・・

隙を見て背後に回るローグ。

（ムカついてしょうがねえな！！）

吟遊詩人の背中に狙いを定める。がら空きだ。

ブンッ

ありったけの苛立ちを短剣に込め、振り下ろす。

（終わったな）

（やれやれ、戻ってこないと思ったら・・。）

その修羅場の側には行かず遠巻きに眺めている女が一人。

肩までの銀髪がサラサラと風に揺れている。切れ長な目。

端正な顔立ちが今とても呆れ顔。

ごつい装備に身を固めている女は、クルセイダー（聖騎士）と呼ばれる職業。

防御も攻撃も長けている。

「クエ」

女が乗っている生き物、ペコペコという名の大きな鳥が声を上げた。橙のが主体の鮮やかな色彩のこの鳥は、馬の代わりに騎士たちが愛用している乗り物。

飛べないが、大きな羽を広げてはパタパタと羽ばたかせる。
よしよし、と言わんばかりにペコペコの頭を撫でる女。
嬉しそうに目を細めるペコペコ。

(・・・そろそろだろうね、流れるに。)

吟遊詩人が目潰しを喰らい、ローグが背後に回る。
その側で、少女が泣き出しそうな表情をしている。

(しかし女の子を困らせるとは、正直頂けないな・・・後でデコピン
だな。)

手を握って開いて、準備に備える(デコピンの。)

ローグが短剣を振り上げ、吟遊詩人目掛けて振り降ろす。
クルセイダーは歩き出す、その場に向かって。

(終わったな)

その後の展開が判るかのように、心で呟く。

(反撃開始だろ？そろそろ)

ギイイイン

「な！」

ローグの振り下ろした短剣は、振り返った吟遊詩人の弦楽器によっ
て防がれた。

短剣と楽器がギリギリと力を押し付けあう。

一瞬何が起こったかローグは理解できてなかった。

「・・・コンタクト、外しましたから。」

吟遊詩人はしっかりと口調で言う。

(・・・)はあ？と言わんばかりのローグ。

(このふざけた野郎が俺の攻撃を・・・？いや楽器で防ぐとか・・・)

(いやコンタクト外してどうにかなるとか・・・いや)

冷静な判断をしようとするローグ。たいして冷静じゃない。

「つつはあ！」

ギン

楽器で押し切り、短剣をはじき飛ばす。

「ちいっ！」

ザッ

後方に飛び距離を置くローグ。短剣は吟遊詩人の背後。

(短剣はそっちか・・)

一瞬だけ気をそちらに向ける。

その一瞬の間、地を蹴り距離を一気に縮める吟遊詩人。

ダダッ

「！」

ローグが注意を向けた時、すでに目の前に居た。

ブウンッ

楽器を振り上げ、無造作に振り下ろす。

(喰らってたまるかよ！)

寸前でかわすローグ。

ヒュッ

だが楽器は横にスライドした。

(！俺のさっきの・・！)

とっさに腕でガードする。

ガンッ

ミシィッ

骨に響く、嫌な音。

「っ！」

ローグの顔が苦痛に歪む。

(なんて楽器だ・・かてえ！)

ザザッ

一撃を当てた吟遊詩人は後方に下がった。

楽器をポンポンと叩き、言葉を放つ。

「・・・さっき痛かったんでお返しです。」

声は淡々と、でも怒りを含め、殴られた頬は赤く腫れている。

その表情は静かで確実な怒りを表していた。

「・・・そいつぁ悪かった。謝る。」

痛みで悲鳴を上げている右腕を押さえながら、表情なく言い放つ口グ。

痛む顔の熱を感じつつ、でも思いのほか謝られ、表情が少しだけ和らぐ吟遊詩人。

「判ればいいのです。」

「・・・げん・・・」

ポツリと呟くローグ。

「え？」

呟きに聞き返す吟遊詩人。

「・・・手加減して、悪かったなあ!!」

ザンツ

地を蹴り、吟遊詩人との距離を縮める。

はっとして身構える吟遊詩人。

目で追っていたローグの姿を見失う。

「消えた?!」

寸前まで迫ったローグを見ていた、のに見失った。

「足元にも留守番置いとくんだな!」

ローグは後方に回り、足払いを仕掛ける。

ガンツ

「っ!」

とっさに身をよじり直撃は免れる、しかしバランスを崩す吟遊詩人。

その隙に、吟遊詩人の側にあつた短剣を拾い上げるローグ。

チャキツ

今度は攻撃をせず、短剣を構えるだけ。

「優男から男に昇進だ、喜べよ。」

ローグは、まだ痛む腕に力を込める。

ヒュウ・・・

吟遊詩人の、殴られて熱を持った頬を、風が優しく撫でてゆく。体勢を立て直し、遅れて楽器を構える吟遊詩人。

「昇給ありますか？」

「ねえよ。」

「じゃあぬか喜びですね。」

「贅沢な野郎だ・・・。」

よく判らない会話をする二人。

そして完全に展開についていけない少女、ミリリ。

（あうあう・・・あ、あたし・・・の）

声にならない声を出すミリリ。

（あたしのために争わないで！！）

とても真剣に、心で叫ぶ。落ち着け、何を言っているんだ。

「落ち着け、何を言っているんだ。」

その場にいた三人がはっとする。

いつの間にか来ていた第四の人物。

放ったそのセリフ、むしろ全員に対するツッコミである。

肩までの銀髪が風に揺れている。切れ長な目に端正な顔立ちは、今も呆れ顔。

クルセイダーなるその女。

キリっとした表情に切り替わり、美形さに磨きがかかる。

そして呟く。

「デコピンをしに来た。」

真剣なその眼差し。

その場にいた3人が、は？となる。

第四の人物が放ったそのセリフ、むしろ全員に対するボケではなからうか。

(落ち着け、何を言っているんだ)
(思ったことが息がぴったりの、その場にいた3人

ヒュウ・・・。

風が吹く、よく判らないこの空間に。

誤解から始まる関係（前）（後書き）

ローグの設定はぶっちゃけ適当だったはずなのに、結構好きなキャラになってしまいました（苦笑）

名前なりにしよう・・・（まだ決めてなかった

誤解から始まる関係（後）（前書き）

誤解なまま芽生えるライバル意識、そして新たな人物は、天然女戦士。

バトルシーンはありません、原作知らない方でも安心して読めるはず！

誤解から始まる関係（後）

町外れ、古びた外観の一軒家。

広すぎず狭すぎず、めったにない来客を今日は迎え入れる。怪我人だ。

「少し痛むと思う、食いしばれ」

肩までの銀髪、つり目の綺麗な女戦士。

ベッドの上に座らせた怪我人の腕を掴み、力を込める。

「ついてええ！少しじゃ無え！んで力込めんだよ！」

痛みを堪えき・・れてない赤髪のローグが文句をいう。

「骨にビビはいつてたり、折れてたら大変だ。」

真顔でさらりと、理由になつてない理由を述べる。

「お前の行動が大変だ！当て木を使い！当て木を！」

これ以上無い正論を言い放つローグ。

「当て木が無いんだ。」

ガーン

（この女・・天然か？それとも判つててやってるのか？）
残念ながら前者である。

「ふむ・・呼ぶか。」

ポツリと呟く女戦士。胸元の十字架ペンダントを口元に、通信だろうか。

「・・・何を呼ぶんだ？」

ピツと音が鳴り、ペンダントを首に下ろす。

「知り合いの聖職者だ、傷をやわらげてくれるだろう。」

「腕握る前にやってくれ！」

これ以上無い正論を言い放つローグ。

「あ、あの、大丈夫ですか？いや大丈夫じゃないからえっと、あの」

ミリリという名の、肩までの柔らかな栗毛の少女が怪我人に声を掛ける。

事件のど真ん中で挟まれっ放しの冒険初心者。

ちなみに怪我人2名は共にベッドの上。

「大丈夫ですよ、貴女の看病で私の顔のやデコピンの痛みはおるか、荒んだ心も癒されます!。」

オロオロするミリリに穏やかに声を掛ける。怪我人その二。
デコピン喰らったのは彼だけだった。

青い長髪の優しい顔立ちの吟遊詩人。いちいちポエムっぽい。

早とちり、相手に挑発をした挙句、放置までするというとつても失礼な奴。

「俺は大丈夫じゃねえ!。」

ローグがすかさずツッコミを入れる。そりゃ、怒る。

「いや、てつきりいたいけな美少女にフラちな真似をする極悪人と思っただもので・・・。」

「てつきり極悪人だと思っただ!。」

まあ顔がそういう顔なので仕方が無いようだ。

「怪我人、うるさい。」

ビチャリ

そんな音を立てて濡れタオルを、ローグの腕の怪我の部分に当てる。

「・・・っ」

急な感触に一瞬戸惑うが、徐々に腕の熱が和らいでいく。

(初めからやってくれよな・・・)

そう思いつつも、痛みが落ち着いてゆく感じは心地よかった。

ガチャ

不意に開く入り口のドア。

「!。」

ローグとミリリは驚いて突然の訪問者を見る。

(・・・気配あつたか?)

とっさに身構えるローグ。

ズキリと腕が痛み、顔をしかめる。

「大丈夫、彼だから。」

ローグの上に新しい濡れタオルを置き、女戦士は入り口に向かう。

「鴉、^{からす}ノックしなきゃダメだ。来客が驚くよ。」

「そーだよー、あんなことやそんなことの最中だったらどうするのさー。」

殴られた顔を濡れタオルで冷やししながら、会話に割ってはいる。

「たま、自重。」

吟遊詩人、たまをジロリと睨み、彼の発言を制する女戦士。

(ペットの名前じゃないか・・・まさか、愛称だろう・・・それもいやだな。)

ローグは素朴な疑問をうやむやにし、再び入り口に来た男に視線を戻す。

「ああ、すまなかった。」

鴉と呼ばれた男は扉に向かい、

コンコン

ノックを済ませる。鴉は女戦士に聞く。

「これでいいかな？」

(いいわけねえ!)

ローグは思わず心で叫んだ。

「ああ、バツチリだ。」

綺麗な顔でコクリとうなずく女戦士。

「バツチリなのかよ!!!」

ローグは思わず口に出して叫んだ。

ズキッ

「つぐ!」

叫ぶときに力を入れた拳が、腕の痛みを増加させた。ツッコミ損。

「君が怪我人か、どれ・・・。」

鴉と呼ばれたその男。

黒い長髪を上での位置で束ね、深い闇の色の目。

黒を主体とした服、すその部分は赤色のデザイン。

長い足がコツコツと床を鳴らし、ローグに向かつて歩みを進める。

（これが聖職者・・・？しかし悪い感じは全然しない、むしろ落ち着く・・・）

ローグは他の人間の反応を見る。

ミリリはどうやら目が離せない模様、それはもう憧れの意に近い。

大人っぽい。背が高い。黒い長髪。吸い込まれそうな闇色の目。むしろカツコイイ。

（そりゃしょうがねえよなあ。）

ローグは次にたまと呼ばれた吟遊詩人に目を移す。

「かゝらゝすゝ、ぼくにわあああ？」

子供のような声を、鴉に向ける。

何だこの甘ったれば。

（さっき外で俺とやり合ってたあの気迫は何処いったんだ・・・）

「ふん。」

鴉は呟き天井に手を掲げ、ぱりぱりと空气中に小さな磁場を起こす。レックスディービーナ。

沈黙の術である。

「これで我慢だなお前は。」

手のひらに出来た磁場を、たまに投げつける。

「！むぐぐ」

「た、たまさん?!」

口を抑えるたま。

そばにいたミリリが驚き、たまに視線を移す。

「口は災いの元。どうせ今回もたまの余計な思い込みや発言から起きた事故だろう?」

子供にお仕置きをするように、語りかけ術を使う鴉。

まったくその通り。たまがいなければ争いも怪我もなかった。

「今回・・・も。」

ポツリと呟くミリリ。

もがもが言って暴れてるたま。

「たま、良く考えて行動しろって。」

女戦士が言う。

「クエツクエー」

「だよ、お前もそう思うよね。」

ペコペコという大きな鳥も同意見らしい。

割と散々な言われ様のたま。

スッ

ローグの怪我している腕に、優しく触れる鴉。

(！しまったいつの間に・・・)

目で追わないと感じられない気配に戸惑うローグ。

「少し痛む、少しの辛抱だ。」

ローグの右腕を取る鴉。

「ん？」

かかっていた濡れタオルを外す鴉。

(さっき聞いたような台詞が・・・いやまさか。)

痛みがあるその場所に、両手で力を込める鴉。

「な?!よせやめろ!」

さっきの女戦士による痛みを思い出し、振りほどこうとするローグ。

逃がさないよう、更に力を込める鴉。

見守る女戦士。

それどころじゃないたま。まだモガモガ言っている。

ミリリはずっとオロオロしっぱなし。

腕がきしむ。

ギリギリ・・・ッ

締め上げられる感覚が、腕を通して伝わってくる。

「っやめ・・・!」

激痛の覚悟を少ししつつ、でも拒絶はやめないローグ。

「痛いかな？」

不意に問いかける鴉。

「？痛いに決まって・・・！」

そこまで言つて、ローグは言葉に詰まる。

「何処が痛いかな、指で指してくれ。」

(・・・何処だっけかな？)

「だ、大丈夫ですか！腕取れそうなくらいギリギリやられてたようですが！」

ミリリが目一杯心配そうに声を掛ける。

「取れたらやべえよ・・・。」

正論を語るローグ。怪我をしていた手を、握っては開いてを繰り返す。

ふう。と息を吐く鴉。安堵でだ。

「あと二、三回やれば完治だ、少し時間を置いてからまたやろう。」

「一体何が・・・。」

戸惑うローグ、さっきまでの痛みも熱もすっかり引いた。

(例えば、力を込められたときにも、痛みは感じなかったような・・・)

「筋の部分がやられていた、刺激をすることで再構成をする。」

不思議そうな表情のローグに、鴉は説明する。

「骨にはヒビが入っていて、皮膚も内出血していた。個々で治癒をただけだ。」

「・・・さっきその女にミシミシやられたときは、ただ痛かった。ちらりと視線を向ける鴉。

気まずい表情の女戦士。

「ぼち、私と同じ事しても同じ結果にならないんだ。」

女戦士をぼちと呼び、側に行く鴉。

(おいおい、たまの次はぼちかよ・・・。)

普通にしていれば美男美女の吟遊詩人と女戦士。でも名前はペット愛用の名前。

「名前、かわいい……。」

うっとりするミリリ。女は考えがわからない。

鴉は、ぼちの銀髪を優しくポンと叩き、そのまま撫でる。

「途中濡れタオルで冷やしたのは正解だ、よくやった。」

「……悪いことしたのに褒められた。」

立ち直りきれないぼちに、優しく話す鴉。

「悪いのは、理解しないまま治療したこと。もうやっちゃあいけない。」

「……理解した。」

「良い事は褒めるに決まってる、良くやった。」

もう一度繰り返す鴉。

表情が少し和らぐぼち。その視線を鴉からローグに移す。

「さつきは、悪い事した。申し訳ない。」

いきなり謝り出すぼち。

「え？あ、いや！ほ、ほらすっかり大丈夫になったし！」

とっさのことでわけがわからないローグ。

が、とりあえず元気をアピールする為、腕をぶんぶん回す。

ビキッ

「つつつ……！」

痛みで声にならない。

「まだ完治じゃないんだ……よしもう一回やろう。」

鴉が若干呆れ顔でローグを見る。

「ぼち、さつきの要領で新しい濡れタオルを頼む。」

「判った、替えを取ってくる。」

別室に向かうぼち。

頼まれて嬉しいのか、足取りが軽く感じられる。

「その君、名前を覚えてくれるかな？」

ミリリを真っ直ぐな目で見る。

「あ、あの！ミリリといいます！よ、ヨロシ・・・。」

「うん、ミリリ、ぼちと一緒に行って換えのタオルを持ってきてくれるかな？」

落ち着いた柔らかかな声のせいか、ミリリの表情が和らぐ。

「あ・・・はい！」

パタパタ・・・。

ぼちの後を追いかけるミリリ。

「いいねえ、初々しい。」

鴉は呟き、そしてローグの腕を取る。

「・・・またさっきのをやんだろ？今すぐできるんじゃないの？」

「ああ、だが熱を持ったら冷やしてからじゃないと駄目なんだ。」

「へ？」

きよとんとするローグ。

「私は怪我は癒せる、だが怪我が原因で発した熱は癒せない。」

「・・・はあ。」

「熱を持ったまま治療をすると、痛みが増す。冷やせば痛まずに治療できる。」

(うん、よく判らない。)

心の中でローグは呟いた。

「万能ではないということさ。誰だって。」
スッ

不意に移動をする鴉。

その先は口をもがもがさせてるたま。

手を掲げ、手から霧の様な光を出し、たまに掛けていく。

「っはあ！ぷはあああああ！」

静寂を打ち破る声、良い声だけに無性に腹立たしい。

「もーひどいよ鴉！僕のふつくしい声を封印するなんて！」
わーわー騒がしいたま。うっさい。

ヒュンッ

風を切る音

バチコーンッ

たまに遠慮無しの手をお見舞いする鴉。

「「?!」」

飛ばされかねない威力の手にお見舞いする男子二名。

ポフッ

まったくの無法備を狙われ、ベッドに倒れこむたま。

「~~~~んなにするんだよお！」

(うるさいと思ってる俺の代わりに平手を?!・・・)
んなわけない。

ニヤリと笑う鴉。

「頬の痛いのが取れたかい？」

「もう何言ってる・・・。」

・・・。

数分前のローグの様な反応を見せるたま。

(・・・なぬ?)

「い、痛くないよ?!叩かれたのに!僕Mじゃないのに!」
後半はどうでもいい。

「荒療治だ、拳より物でできる怪我のがよっぽど重症なんだ。」

色々お見通しらしい。

シユン・・・。

叱られた子供のように(叱られているが)落ち込むたま。

「・・・ごめんなさい。」

視線は合わないが、はっきりとローグに言い放つ。

「あ、ああ、まあうんあれだ、俺も悪かったし・・・たぶん。」
まったく悪くないと言い切っても良いが、やめた。

「女の子の前じゃ出来ないからなーこんなお仕置き。」

鴉の呟きが聞こえる。なるほど正論だ。

「持ってきたよ。」

「も、もってきましたー!」

パタパタと戻ってくる女子2名。

「お帰り、早速だが二人とも濡れタオルを彼らに頼む。」

「わかった。」

「わかりました!」

タオルを冷水に浸し軽く絞る。

ミリリはたまに。

「あ!お置き取れたんですね!よかつたあ・・・。」

もがもがしていないたまをみて安堵する。

「ありがとう、貴女のお陰で僕はまた癒されました。」

「あの、いえ!」

ピチャリ

熱を持っている頬に、ミリリは濡れタオルを当てていく。

落ち着いてやれば何てことない手際よさ。

ヒョイ

ローグの腕を取るぽち。

今度は手つきが優しい。熱を帯びたその腕に濡れタオルを当てていく。

「・・・気持ちいいな」

ローグは思わず呟く。

冷えてゆく心地よさ以上に、優しさと、温もりを側に感じ、感想を述べる。

「うん、熱あるときにやると気持ちいいな。」

普通の感想を述べるぽち。

「・・・サンキュな」

ボソッと呟くローグ。面と向かって言う感謝は恥ずかしい。

「うん?」

ぼち、一瞬きよんとする。そして、

「何かよく判らないけど、良かった。」

安堵の声をだすぼち。

何気なしにその表情を見るローグ。

「!！」

「どうした？」

元より顔立ちが整ってる上、こつも無法備な表情をさらけ出すとは思わなかったローグ。

(・・・顔みれねえ！)

顔に熱を感じてくるローグ。

はっとして変化に気付くぼち。

熱が出たと思ひ濡れタオルをローグの顔に掛ける。

「むぐあ！」

濡れタオルを掛けられ息苦しいローグ。

「熱でたら冷やさないとだからね。」

ガン

(この女・・・天然か？それとも判っててやってるのか？)

残念ながら前者である。

そんな様子を眺めている鴉。

ニコニコしながら思う。

「幸せだなあ、こつという光景。」

(頼む・・・続いてくれ・・・)

表情には出ない、悲痛な叫び。

「平和平和。平和が一番だ。」

(壊さないで、壊れないでどうか・・・)

パラパラと外に雨が降る。

恵みの雨が、それとも・・・

誤解から始まる関係（後）（後書き）

まだローグ君の名前が決まっていまぜんorz
完全に突っ込み役なので、早いところ付けて上げたいです。

過去との出会い(前)(前書き)

黒い人の過去を書いてみました。

話が続いているような居ないような・・・。

あいまいですみませんorz

過去との出会い（前）

ピカッ

ゴロゴロ・・・

・・・ザア・・・

雷光と共に振り出した雨。

乾き、熱された大地を潤す恵みの雨。

突如降る雨に、雨宿りを求める人々。

干していた洗濯物を慌てて取り込む人。

店頭販売の商品を店内に移動する人。

冒険者などは、時に外で雨に降られることが多い。

木陰で雨を凌いだり、びしょぬれ覚悟で街に走ったり。

カチャ

教会の一室。聖職者、鴉のいる部屋に入る少女。

水色の短髪、白い修道女の服。

可愛らしい顔立ちなのに大人びた雰囲気。

机の上の山ほどの書類を処理している鴉に声を掛ける。

「鴉様。」

「うん？」

「一休みしては如何ですか？」

「うん、そうだな。」

「・・・そう言っただけで休まれているじゃないですか。」

「休んださ。眠ったよ。」

「どれほどですか？」

「10分も。」

「それ、気絶って言います。」

「そうか。でも休んだ。」

「・・・紅茶を入れますね、軽く甘くてリラックス効果あるような。」

「お菓子は何かがあるかな？」

「クッキーがあります。バターと牛乳を多めに入れました。」

「ということは君の手作りか？」

「はい。こんな雨の日に教会にお見えになる方に、少しでも満たして頂きたく。」

「優しいんだな。」

「なので鴉様のは余り物のクッキーになります。」

「ガーン」

「口でガーンって言う人いません。」

「(´・`・´)」

「しょぼんって言う人もいません。」

「よく判ったな。」

「何となくです。」

「しょうがない、クッキーが無くなったら、紅茶を少し甘くして飲むもう。」

「判りました。入れてきますね。」

「ああ、頼む。」

パタパタと部屋を出る少女。

それを確認する鴉。

そして机の上の山積みの書類に取り掛かる。

連日、古木の枝によるモンスター召還、そして被害が後を絶たない。

ここ町外れの教会に助けを求める人々も多い。

鴉と少女の2人しか居ないので割りと忙しい。

治療をしたり相談を受けたり。

その時の報告書を、首都プロンテラ大聖堂のビスカス神父に提出する。

更にその上のバンプ神父に最終確認をもらい、プロンテラ城に

届く。

被害状況によっては国から援助金も出る。

どんな些細なことでも報告書を出す。

小さな不安でも、裏にどんな事件が関わっているかも判らないのだ。

「鴉様。」

「うん？紅茶が出来たのか。」

「はい。プロンテラ城内のコック、シャルル・オルレアン直伝のものです。」

「ほう・・・幻の料理人と言われているあの・・・。」

「ええ。2種あるので、選んでください。」

「2種は、どんなのだい？」

「ハーブと蜂蜜、香辛料を若干使用した物。」

「すつきり甘く、キリリとしそうだな。もう一種は？」

「果実を4種使用して作る・・・物です。」

「ふむ・・・単なる果汁ジュースにならないか？」

「・・・ならないです。」

「なぜ？」

「・・・紅茶に入れるので・・・。」

「・・・違うな、紅茶は香りが命。そんなに果実を入れて紅茶になるわけがない。」

「・・・。」

「名前、聞かせてもらおうか。その料理の名前をね。」

「・・・。」

「レシピのある料理、すべてにおいて名前があるはず。幻の料理人なら尚更だ。」

「・・・ハーブ八子蜜茶。」

「もう一つのは？」

「モロク果実・・・ゆ。」

「聞こえないぞ。」

「モロク果实・・・しゅ」

「・・・酒か！」

「・・・はい。」

「うーむ。」

「少し休んで頂こうと・・・体温まるので・・・。」

「・・・。」

「・・・不謹慎で申し訳ありませんでした。」

ポン

鴉は目の前の、少女の頭に軽く手を置く。

水色の短髪が柔らかく、撫でる手を心地よく刺激する。

「・・・くすぐりたいです。」

自分の髪をくしゃくしゃにしていく大きな手、それが心地よく少女の頭を刺激する。

優しい手、暖かい手。少女を安堵させるには十分だった。

「ハーブのを少しもらおうかな。」

「・・・はい。」

「今日の被害報告は？」

「あ、はい。深夜に起こったもので、ここ周辺の民家が数件狙われ・・・。」

「そうか。もしかするとここに助けを求める住民がいるかも知れない。」

「・・・はい。」

「体が温まるもの、用意しておいて欲しい。子供は無理だろうけど大人になら。」

「？」

「飲んでももらえるだろうさっきの。」

「・・・あ、はい。」
「クッキーあるかな？今。」
「・・・仕方がないですね。少しあります。」
「とりあえず一枚。」
「はいこちらです。」
「とてもいい香りがするな・・・どれ。」
「・・・如何です？」
「・・・これは美味しいな」
「ありがとうございます。」
「もぐ・・・香ばしく旨みが強いのにもぐ・・・くどくない、歯ざわりももぐ心地よい。」
「もぐ心地よいつてなんですか、食べ終わってから観想言つてください」
「これは食が進む。さっきのを頂こうかな。」
「！」
「ああ。果実酒だ」
「鴉様・・・」
「この上等のクッキーをつまみにな。」
「あ・・・はい！」
嬉しそうな顔の少女。準備に取り掛かる。
「・・・やっぱり笑顔だな人間は。」
鴉は見守るような微笑をしつつ、次のクッキーに取り掛かる。
「もぐ美味しいな。」
「もぐ美味しいって何ですか。食べ終わってから感想言つてください。」
レシピ通り作りつつ、ツツコミは忘れない少女。

カランカラン・・・。
教会に来た人の呼び鈴が鳴る。

出入りは割りとは自由なので、教会の扉を開けられない人が使用する。すでに食べ終わって一息ついたあとの事だった。

「鴉様、私見て参ります。」

「ああ、頼むよ。」

パタパタと教会の入り口へと足早に歩いてゆく少女。

「……。」

カタン

上着を羽織り、入り口に向かう鴉。

（酒が入ったからだろうか？）

カツカツ

廊下を足早に進む。

（そうだ、そうに違いない）

角を曲がり、入り口のある空間へ。

（鼓動が早い、酒のせいだ……）

カツ

いつもどおりの広い空間が視界を埋める。

（胸騒ぎなんて……）

居るのは水色の短髪、白い修道女の服装の少女。

（悪い予感なんて……）

入り口に倒れこんでいる、銀髪で、雨に濡れて、血に染まった女性。

（あつてほしく……）

その女性に抱かれている赤ん坊。

（……なかつたのに！）

「……たす……け……この……だけ……。」

息も絶え絶えの女性、最後の気力で伝えようとする。

「駄目です！気を確かに！今治療を……！」

ゾクッ

少女は見てしまった。

女性が抱きしめている赤ん坊の左腕の位置には・・・。

「場を空けてくれ！私が見る！」

全力で入り口に向かい、倒れている女性に手を触れる鴉。

（！脈を感じられない・・・間に合うか?!）

「あ・・・は・・・。」

苦しそうな呼吸、それをしているのは少女のほうだった。

ガクガクと足元が振るえ、一点を見て動かないその少女の姿は・・・。
まるで悪夢を目の当たりにしたようだった。

・・・赤ん坊の左腕の位置には、腕が無かったのだ・・・。

過去との出会い（前）（後書き）

人は乗り越えて強くなるのです。
才手は深い意味はありません（たぶん

過去との出会い(後)

シューウウ・・・。

治癒魔法を施す鴉。

だが効果がない。

「婦人！私の声が聞こえますか！・・・婦人！」

「・・・。」

ガクッ

微かに動いていた女性の気配が、途切れる。

(・・・間に合わなかった・・・。)

自分の無力さを実感し、目の前の事切れた女性を見つめる鴉。
着てきた上着を女性にかぶせる鴉。

「か・・・ら・・・さ・・・。」

震えが留まらない、辛そうな呼吸の少女。

(・・・そうだ、シヨックを受けてる場合じゃない。)

少女に目を移す。少女は赤ん坊を見ていた。

「・・・ああ、赤ん坊をせめて・・・。」

赤ん坊を婦人からそとはずし、抱き寄せる鴉。

「な?!！」

ピチャ・・・。

赤ん坊から滴る血。

赤ん坊をくるんでいた布をはずす。

左腕が食いちぎられたかのように、無かった。

(馬鹿な・・・残酷にも程がある！)

「ヒール！」

シューウウ・・・。

傷の治癒魔法。

「ブレッティング！」

キュウウン・・・。

神よりの祝福の力。

「リカバー！」

ツパア……。

状態異常の治癒魔法。

ポタタ……。

それでも赤ん坊の左腕の血が止まらない。

（なぜだ……どれも効果が無い……！）

泣かない赤ん坊。すでに意識がないのか。

「たすけ……」

少女がおびえた表情のまま、途切れ途切れに鴉に訴える。

（傷口を見たシヨックが大きいのか、確かに私でさえ辛い……。）

少女に目を向ける鴉。

「！」

涙でぐしゃぐしゃになっている少女。

「助けて……あげてください……うく……。」

しゃくりあげながら、それでも続ける少女。

「酷すぎ……ます、つうう……生まれて間もないのにこんな……！」

「……。」

そう、何も知らないまま赤ん坊は命を落とすのだ。

（……ものか……。）

赤ん坊を優しく、そして力強く抱きしめる鴉。

（……させてなるものか！）

思いを高め、少女に指示をあおる。

「緑のポーシヨンと媒介石……それと濡れたタオルを頼む！」

「う……くつ」

涙を堪えようとする少女。それでもこぼれる悲しみ。

「やれるだけやる……急ぐんだ……！」

「つ……あい！」

流したままの涙をグイと服の袖でぬぐい、足早に駆けて行く少女。

その間鴉は赤ん坊の傷口を見る。

(何としても・・・助けたい！)

血は少量だがまだとまらない。

(・・・しかし。)

赤ん坊を包んでいた布で、赤ん坊の腕の血をぬぐう鴉。

(普通の赤ん坊が、この傷に、出血量に耐えられるものなのか？)
腕がもげ、止まらぬ血。

(・・・考えても仕方が無い、今は生きていてほしい！)

バターッ

不意に開く教会入り口の扉。

はっとして音のする入り口を見る鴉。

軽く息切れをしている、雨に濡れた茶毛の男が一人。街中に居るような普通の格好だ。

(！タイミングの悪い・・・ここは一度引き取ってもらおう。)

赤ん坊を抱えなおし、男に視線を向ける。

「・・・申し訳ありませんが・・・」

男に話しかける鴉。

きよろきよろしつつ、男が逆に話しかけてくる。

「あの・・・この辺で赤ん坊を・・・」

(！関係者か・・・いやまて。)

入り口はいつて直ぐの所には、さっきの女性が倒れたままだ。

床は赤ん坊の左腕からの血が広がっている。

この場に居るものなら誰もが気付くはず、この惨劇に。

(なにも・・・なにも思わないのか？・・・この状況が！！)

「お？」

男は鴉の抱えている存在に気が付いた。

「なんだ、あんたが持つてんじゃん。」

コツコツと足音を立て、鴉・・・もとい赤ん坊に近づく。

「返せよ、それは俺のモノなんだからさ。」
血だらけの赤ん坊に、無造作に手を伸ばす男。

(こいつが・・・元凶なのか！)

ジリ・・・。

赤ん坊を護るように抱え、後ざざる鴉。

下がった分だけ歩み寄る不気味な男。

「だから俺のつってんだろが、とつと返せよおら。」

苛立ちを隠そうとしない男。

「・・・貴方の子ですか？」

時間稼ぎに質問をする鴉。

「はあ？わけわかんねえ。そう言っただけ返さないわけ？あんたは。」

質問に答えようとしない男。

「・・・この子をどうするおつもりですか？」

更に質問する鴉。

「ああもつめんどくせーな！」

うんざりという顔をする男。

「赤ん坊を何に使おうと勝手だろうがよお。」

文句あるのかといわんばかりの男。

(・・・使うだと?)

ピクリと男の言葉に反応する鴉。

「・・・命は・・・。」

「あ？」

「育って・・・感情を覚えて・・・大事に思うもの。」

思い思いに言葉を吐き出す鴉。

「はあ・・・んで？早くかえせっていつてんじゃん耳ねえの?。」

「・・・そんな命を・・・。」

「うるっせえなあ俺が使っつってんだろ早く返・・・。」

「道具みたいになああああああ！」

力の限り叫ぶ鴉。悲痛な心の声。

(こいつには絶対に渡さない・何があっても！)

「あーうつせえうつせえ、バカみたいな声だすなよバカだろあんた？」

耳栓するような仕草をみせ、何とも思わない様子の男。

「もういいや、あんたつかえねえし訳わかんねえし。」

拳をコキコキと鳴らし、歩みを速める男。

「力尽くでいくわ。」

ズカズカと歩み寄る男。今度は下がらない鴉。

「つうりゃ！」

ブンツ

鴉に殴りかかる男。

「っ！」

とっさにしゃがんで回避する鴉。

目の前に男の足元。赤ん坊を抱えた体勢で足払いを狙う鴉。

だが、男が鴉の頭上に標準を定めるほうが早かった。

両手を組み、鴉の頭上へと振り下ろす。

ニタリと笑う男。

その時。

ドベチャッ

目一杯水分を含んだタオルが男の顔に直撃する。

「ぶあ?!」

一瞬何が起こったか理解できず、男は宙にもがく。
ガッ

その間に決まる鴉の足払い。

ほんの瞬時の出来事だった。この場を交差した音はこうだ。

ツカツカブンドベチャガツ。

体勢を立て直そうと足を踏ん張る男。

その足元には、血の海。

ズルリッ

踏ん張った分空回りする力。

つまりは盛大に転ぶ男。

その姿はバナナの皮で滑る芸人のよう。

ゴンッ

「うぎゃ！」

そして盛大に頭を床に打ち付ける男。

その姿は体を張ってボケをする芸人のよう。

一つ違うのは・・・。

「なんでやねん！」

のツッコミの声が無く、ドツとした観客の笑いも無く。

その場が静寂に包まれたのだった。

床には縄という縄でぐるぐる巻きになった男。

赤ん坊を抱えた鴉が少女に話しかける。

「ナイスタイミングだった、感謝でいっぱいさ。」

濡れタオルを投げつけたのは少女だった。

「いえ、夢中で手元にあったものを・・・。」

ポン

少女の頭に手を載せる鴉。

「無駄だ、私があるがとうといったらありがとうなんだ。」

「・・・どういたしました。」

「よし、早速試そう。品を。」

「はい、こちらに。」

床に並べられる物。

緑色の液体の入った小瓶、魔力のこもっている媒介石、2、3枚の

濡れたタオル。

タオルで赤ん坊の傷口をそっと拭く、タオルが血で染まる。

次に小瓶に媒介石を入れる。細かく碎ける音がして溶けてゆく。

「……。」

溶けきつたのを確認してから、赤ん坊の左腕周辺に掛けていく。

パシッ

はじけるような音がし、血の流れが止まる。

「！鴉様これは?!」

「……毒。それも特殊な毒に対して反応するものだ。」

「毒を……体に持っているのですかその子は！」

「そのようだ……呪われた体で世に生を受けてしまったのか……。」

「なんて酷い……。」

居た堪れないといった表情の少女。鴉も同じ気持ちだった。

「ほどけ！縄をほどけえええええ！」

はっとして声のする方向を見る鴉と少女。

芋虫のようにうごめく縄男。もとい不気味な男。

「……赤ん坊を。」

「え？」

少女に赤ん坊を預け、つかつかと男に歩み寄る鴉。

「あの毒の体の赤ん坊を売るんだ！研究所に売りゃあ多額の謝礼が・

・！」

ガシッ

男の首を掴む鴉。

「ぐえっ」

「いいか、よく聞け？」

少しずつ、でも確実に掴んだ手に力を込めてゆく鴉。

「……鴉様！」

「人間、死ぬために生きていく、意味のある死を求めてな。」

「ぐ……ぎぎ……。」

ギリギリと締めてゆくその首から上の色が変わってゆく。

「生きてて良かったと思える死を迎えるために生きる。」

男は何も話さない。話せない。

「その意味も知らずに生れ落ちた命・・・おまえの都合で弄ぶんじゃない!!!」

心の叫びを声に出し、鴉は腕の力を・・・。

ピカッ

ゴロゴロ・・・

・・・ザア・・・

雨が降る。大地をぬらす恵みの雨。

町外れの教会にも当然降る。

カチヤ

教会の一室に入る女性。

水色の短髪、青み掛かった聖職者の服。

可愛い顔に大人びた雰囲気。

机の上の山ほどの書類を処理している男は、黒い聖職者の服装、鴉。

「鴉様。」

「うん？」

「少し休まれては如何ですか？」

「うん、そうだな。」

「・・・そう言っただけで休まれているじゃないですか。」

「休んださ、眠ったよ。」

「どれほどですか？」

「5分ほど。」

「それ瞑想って言います。」

「そうか。でも休んだ。」

「・・・飲み物お持ちしますね。体休まって温まるような。」

「ワインがいいな、赤ワインより白で。」

「しょうが湯を予定してます。」

「ガーン」

「口でガーンと言う人いません。」

「（・・・）」

「えーって普通に言ってください。」

「よく判ったな」

「何となくです」

「しかたが無い、せめてワイングラスに注いでくれ。」

「湯のみとコップしかないんです。」

パタパタと部屋からでて準備に掛かる女性。

（湯のみでしょうが湯・・・歳とったなあ・・・）

ふうとため息を尽き、目の前の書類に取り掛かる。

十数年前、この教会で起きた、毒を持つ赤ん坊をめぐるの惨劇。赤ん坊の母親らしい人物に手をかけ、その赤ん坊を研究所に売りつけようとした男。

連日のテロ犯もその男という調べが付き、国により処刑された。そして赤ん坊は、暗殺者ギルドに。

毒に関しての専門家である彼らに預けたのだ。

（元気で、とは言わないが・・・無事に過ごしているだろうか？）

赤ん坊の生命力の強さを信じての決断だった。

「鴉様。」

「うん？用意が出来たのか。」

「はい、しょうがを多めに。蜂蜜も入れてあります。」

「ほう・・・いい香りだ。どれ・・・。」

「しょうがの繊維を断つ様にすりおろしてますので、飲みやすいと思います。」

「なるほど、これは飲みやすい。もらおうかな。」

「お替りですか？」
「いやお嫁に。」
「いつてらっしやいませ。」
「これだけ真つ向から断られたのは初めてだ。」
「よかつたですね。」
「しょうがない気分になる。」
「しょうが湯はありますよ。」
「そうだな。じゃあしょうが湯をもらおう。」
「初めから言ってく下さい。」

カランカラン・・・。

教会に来た人の呼び鈴が鳴る。

すでに飲み終えて体が落ち着いた後の事だった。

「鴉様、私見て参ります。」
「私も行こう。」
「体に堪えますよ。」
「君のことが心配だからな。」
「一緒にいる方が心配です。」
「これだけ真つ向から断られたのは2回目だ。」
「よかつたですね。」

入り口のある空間に着く鴉と女性。

一足先に扉に向かう女性。

（しょうが湯のせいかな・・・きっとそうだ。）
扉を開ける女性。

（胸騒ぎ・・・？でも悪くない感じだ。）

「じゅーしょーですくたすけてください。」

外から聞こえる情け無い声。

「！鴉様！」

「何だどうし・・・。」

扉を開け、目の前の光景にドキリとする二人。
肩までの銀髪に、射抜くかのような同色の瞳。
黒っぽい布を巻いたような格好の女。

体のあちこちから血を滴らせ、それでも表情一つ変えず真っ直ぐに
鴉と女性を見る。

そしてなにより、左腕が無かった事に動揺を隠せない二人。

「君はあのときの・・・！」

間違いない、鼓動がそう訴えている。

「鴉様・・・傷を癒しましょう、まずそれからです。」

「・・・ああそうだな。」

テロでもあったのか、傷のすべてが痛々しい。

目の前の重症人を教会内に迎え入れる。

（・・・ではさっきの声はなんだ？あれがこの子の声なのか・・・？）

そう思っているときまた声が聞こえた。

「じゅーしょーですってば。」

まったく重症じゃなさそうな情けない声。

足元からのようだ。

左腕の無い女がしゃがむ。

緑の物体を器用に拾い上げる。

「おなかすきました。」

ぶるぶると体を震わせ空腹を訴える丸い生命体。

正体は、毒を体にもつポポリンというモンスターだった。

腕が欠け、毒の体の女の姿。

実に十数年もの月日が流れての再会だった。

十数年前とは違うのは、種族は違えど彼女に仲間が居るということ
だった。

過去との出会い（後）（後書き）

シリアスになり切れなかったですがよしとしてください）あ

新たな展開（前）（前書き）

「過去との出会い」を見なくてもOKなお話です。
どたばたいきましょう

新たな展開（前）

雨が降ったりやんだりの昼下がり。

町外れの古びた外観の一軒家から町へと向かう一人の男。

赤い短髪、服装も赤いその男、ローグと呼ばれる職業を持つ。

顔つきが悪く、誤解されてはいざこざに巻き込まれる。さつきもそうだった。

そのお陰で知り合いが出来たわけだが。

早とちりで喧嘩を吹っ掛けてきた吟遊詩人、たま

（ふざけた奴だが割と強かったなあ・俺のほうが強いけど。）

真顔で天然全開の女戦士、ぽち。

（おしゃべりな女は苦手だが、奴は話しやすかったなあ・綺麗だし。）

黒い服の聖職者、鴉。

（つかみ所が無いのに不安要素が無かった、不思議な奴。）

そして女戦士の飼って（乗って？）いる大きな鳥。

（知り合いでも何もねえなこいつは・・・）

物思いにふけるローグ。

馴れ合いの苦手な彼はその人達を背に、一人街に向かうのであった。

「おにいさああん」

後ろから聞こえる少女の声。

（昼間っからうつせえなあ・・・）

耳栓をしたくてしょうがないローグ。

「おにいさんおにいさんおにいさああああん」

更に続く少女の呼びかけ。

（まだ言っただがやる・・・とつと返事しろよおにいさんとやら。）
スタスタと足早にその場を離れようとするローグ。

「あ、あかい・・・」

ぜーはーいいながら少女は呼びかける。

「赤い髪とふくのおにいさあああああああん」

ピクッ

(赤い髪に赤い服・・・?)

ローグは一瞬足を止める。

(いや・・・俺妹いないし、人違いだ。)

そして再び歩き始める。

「ま、まってくらはい！」

ガシッ

誰かに後ろから服を掴まれるローグ。

「おわ?!」

「はあ・・・はあ・・・やつちよつかまつひゃ・・・」

息切れてまともにしやべれない少女。

「いきなり何すんだお前は!!」

突然のことで驚きを怒りにするローグ。

「はあ・・・うゝヒドイ・・・あたしですミリリです!!」

呼吸を整えローグに話しかける少女。

そう、少し前まで一緒にいたはずの冒険初心者の少女ミリリ。

「ああ。」

ポン

手を叩く。

「だれだっけか？」

素で忘れていたローグ。

しかも女戦士ぼちのペットは覚えていたというのだから大分失礼といえよう。

ガーンといわんばかりにうなだれるミリリ。

必死に追いかけて捕まえてのこの仕打ちならではの反応だ。

地面にペタンと座り込むミリリ。

プチャッ

「うひゃあ?!」

座り込んだ地面に水風船を潰してしまつたかのような感触。慌ててミリリは立ち上がり、感触の正体を見る。

正体はピンク色のスライム。ここ周辺ではもつとも弱いモンスターだった。

潰れたスライムははじけて急激に蒸発してゆく。

「お?」

ローグは消えたスライムの後に残つた地面を見る。敵の結晶石と、もう一つ。

「お前・・・それカードじゃねえか。」

「ほ、ホントだ!あたし初めてみました!」

歡喜の声を上げるミリリ。

モンスターを倒すとごく稀に、そのモンスターはカードの様な結晶になつて世に残す。

そのカードは装備品に貼り付けると特殊な効果を出す。

効果はモンスターによって様々、物によっては高値で売り出されることもある。

「そいつのカードは大したこたあねえが、お前の運の良さはたいしたもんだぜ。」

ローグを追いかけて捕まえてショックをうけ、座り込んだ先にスライム。

倒した拍子に、ごく稀にしか出ない魔力のこもつたカードと呼ばれる結晶を残す。

これらの流れが成り立つ確立は、ほぼ皆無。

「えへへ・・・偶然でもすごい嬉しいです!おにさんおいかけよかったです!」

カードを拾い、ニコニコと嬉しそうなミリリ。

「そいつあよかった。んで?何の用だつたんだ一体。」

「かわいいな〜ポリン。この羽根の絵が愛らしさ増します!」

夢中なミリリ。ローグの声が届いてないらしい。

カードにはそのモンスターの結晶、つまりその姿が凝縮されている。冒険して初めてのカードに大興奮のミリリ。

(そりゃそうだよなあ、偶然でも手に入れ……。)

ローグは一瞬考える。

「……いまなんていった？」

「え？あ、はい？」

夢中になっていたミリリ、問いかけられ我に返る。

「えっとえっと……かわいいな〜?。」

「違う！その後！」

ローグの真剣な表情。戸惑うミリリ。

「んonton・愛らしさを増します?。」

「間!。」

すごい形相のローグ。何事がよくわからないミリリ。

「は、羽根の絵が……。」

「それだ!。」

ビシイッ

そこが重要だった。

同じピンクのスライムでも、羽根がついたスライムがいる。

「ふえ?。」

よくわからないミリリ。

「とんだ幸運だ、そのカードがありゃあしばらく金には金には困らねえ!。」

(\$ \$) な顔になってるローグ。

羽根のついたピンクのスライムのカードは、それこそ破格の値がつけられているのだった。

(ルートの習性があるモンスターだ、何かの拍子で拾ったんだろうか?)

「まあいい、そいつをちつと貸してくれ。」

売る気満々なローグ。

「えーせっかく初めてのカードなのに……。」

すっごい嫌そうなミリリ。

「それがありや好きなモン大概買えるから！」
言い放つローグ。

しぶしぶとカードを差し出すミリリ。

手を伸ばすローグ。

ヒュウツ

軽く吹く風。

「んな?!」

急な風に飛ばされるカード。

「ああ?!」

手元に力が入っていなかったミリリの手から風が拾い上げたのだっ
た。

地面に落ちるカード。

「おいおい遠くに飛んだらやばいって……」

拾いにいくローグ。

ヒョイツ

拾い上げたのは、ヨーヨーという名のいたずら猿。

(なんでこのタイミングで……ここに居るんだこいつは!)

「俺のカード……かえせ!」

すでに自分の物にしようとしている。猿にムキになるローグ。

「ムキーツ」

一声鳴き、森に向かって逃走する猿。

これらの状況が重なる確立は……0に等しい。

「この猿!返しやがれ!」

怒りの表情のローグ。猿を追いかけて森に向かう。

「ムキ!(サルに猿と言われる筋合いは無いわ!)」

そんなローグをサル呼ばわりする猿。

ローグに背を見せ尻をペンペと叩いてみせる。

ピキッ

「ほう・・・良い度胸だ・・・」

拳を合わせペキペキと関節を鳴らしてみせるローグ。

「数え終わる前に返したら無傷で許してやる・・・1。」

スタタタタッ

とつとつその場を離れる猿。

「・・・2、つておい!!」

数えている間に距離を置かれた事に気付くローグ。

(・・・人間様を・・・)

「なめんじゃねええええええ!!」

ドドドドドドッ

猿は後ろの気配に思わず振り向く。

ものすごい形相で追っかけてくるサル。もといローグ。

「ただじゃおか・・・!」

クルッ

距離は置いてるものの、素直に体をローグに向ける猿。

(お?)

そんな猿の行動に、追いかけていた足の速度を緩めるローグ。

「そうそう、そうやって大人しくしてりゃ・・・」

ヒュンッ

「悪いようにはしな・・・」

ゴンッ

コロンコロン・・・

気を良くしたローグの額に、石ころが直撃する。

「・・・」

その額からつつすらと血が滲む。

「ムキーキ!(やーい引つかかった引つかかった!)」

一声鳴き猿は森へと逃げていく。

プチ・・・

その時、何かが切れる音がした。
堪忍袋という奴だろうか。周囲に、はつきりと、聞こえたような。

「五体満足で・・・居られると思うなあああ!!」

猿の後を追ひ森に向かう。

その顔は鬼神の如く、猿を追いかけるサル。もといローグ。

「つくそ!ちょこまかしやがって!」

昼だというのに暗い森の中。

猿の後を追って森に来たローグ。汗だくで息切れている。

ブンツ

目の前に居る猿に腕を振るが、掠りもせず猿に避けられてしまふ。
ヒョイヒョイと軽やかな足取りで避けていく猿。

森は彼らの庭の様なものであった。

「ムツキー! (青二才のサル風情に捕まる我ではないわ!)」

「あー!何言つてつかわかねえけどすげえムカツク!」

種族は違えど、悪口は何となく判るものである。

カサカサカサツ

隙を見て傍にある樹によじ登る猿。

(させるかよ!)

足元の小石を掴み猿目掛けて投げつけるローグ。

ビシッ

登っている最中の猿の手に見事的中。

「ムキ! (な、なんだと?!)」

掴もうとした手を小石に叩かれ。バランスを崩す猿。

ひゅー・・・ベチャツ

そのまま落下して地面と接触。大人しくなった。

(初めからこうすりゃ良かったのか・・・)
やれやれと肩を竦め、猿に歩み寄るローグ。
その時。

「ブレッツシング！」

キユウウン・・・

「速度増加！」

ピシーンッ

「キリエエレイソン！」

キイインッ

そんな声と共にローグの体が神の加護で満たされる。

(?何だ一体・・・)

ローグは声の主へと振り返る。

そこには一人の女聖職者。

水色の短髪、可愛い顔に大人びた雰囲気。

緊迫した表情がローグを見ていた。

「ここは危険です・・・速やかに非難をしてください！」

その女聖職者が口を開く。

「一体何が・・・」

状況を飲み込めないローグ。女聖職者は言葉を続ける。

「枝テロでモンスターが暴れ回っています・・・非難を！」

「枝か！」

古木の枝。

魔の力が込められており、それにより世の中のモンスターを一体ラ
ンダム召喚出来る物。

討伐による収集品だったり、首都プロンテラの露店通で売られてい
たりする。

多くの冒険者が、腕試しの為に使用したりする。

が、中には悪意を持って使用し、周囲に多大な被害を与える者も居

る。

(もしかしたらさっきの猿も杖で召喚されたかも知れねえな。。。)
苦い顔をするローグ、地面に寝ているはずの猿を見る。

「あん？」

そこに猿は・・・居なかった。

(しまった！話してる隙に逃げられたか！)

慌てて周囲を見回すローグ。

「こ、こら離れなさい！」

「ムキ」(良いではないか良いではないか)

探す必要は無かった。

女聖職者の足元にまわりついてたのだ。

「何てうらやまし・・・もとい！」

女聖職者に軽く睨まれて慌てて言い直すローグ。

「とにかく！すぐさまその人から離れる！そしてカードを返して服
従しろ！」

自分にだけ都合の良いように話を進める。

その間にも猿はよじ登り、現在女聖職者の腰周辺。

(猿・・・かわれ！)

願望を飲み込み、猿を睨みつけるサル。もといローグが居た。

キシヤア・・・

不気味な声が聞こえた。

ハッとなってローグと女聖職者は振り返る。

そこにはボロボロの布が全身を覆った骸骨。

カタカタと音を鳴らし宙を浮き迫ってくる。

腹部には、人間を一飲み出来そうな大きな口がついていた。

「・・・マジかよ・・・」

一言呟き、ローグは身構えた。

「おにいさああん、どこですかああ？」

そんな声を上げ森に続く道を足早に進む少女、ミリリ。ローグを追って来たのだ。が、見失って彷徨っている。

（せっかく会えたと思ったのに・・・どこいつちやっただらう？）
キョロキョロしながら取り合えず足を進める。

周囲は至つてのどか、草木がちらほら。
ガサツ

「え？！な、なに？！」

不意にそばにあつた茂みから音が聞こえ、慌ててそちらを向くミリリ。

「あつゝいたいですよ。」

同時に、セリフの意味と声のトーンがまるで一致しない声が聞こえてきた。

ポヨンツ

「やゝいたいですつてばゝやめてください。」

そんな緊迫した（本人は本気）声を上げ姿を見せたのは、緑色の丸い生命体。

先程ミリリが倒し（潰し）たポリンの色違い。

その後ろには大きな蟻が緑色の生命体をピシピシと攻撃をしている。ポヨポヨと跳ね、ピシピシと突付かれている緑色の生命体。

（な・・・何とかしてあげたい・・・そうだ！）

そんな危機迫る（？）光景を見てミリリは鞆を探る。

ゴソゴソ

ジャーン

そんな音は出ていないが、ミリリは鞆からナイフを取り出す。

ミリリはナイフを構え、大きな蟻に立ち向かう。

「・・・どうやって使うんだらうこれ・・・。」

もとい、使い勝手の判らない刃物に戸惑いを見せるミリリ。

そうしている内にも、大きな蟻はピシピシと標的を突付いている。

「あつゝやめてください。」
大変な状況（には見えないが）を思わせる声に、ミリリは決心をす
る。

「そ、その緑しゃんから離れなすあい！」

ミリリとしては冒険初のバトルシーンに、動揺が隠せない。

その声に反応・・・はしない蟻。

無視。 蟲だけに。

「は・・・はなれなさいってばああ！」

ブンッ

叫びながらナイフを投げつけるミリリ。

そのナイフは大きな蟻・・・の隣の緑色の生命体に当たる。

しかし無事に（？）ナイフの鞘側が的中した。

「あひゃ〜。」

情けない声を上げる緑色の生命体。

プヨンッ

プスッ

軟らかい体がナイフを弾き、そのままそばにいる大きな蟻に突き刺
さる。

「や、やった！計算どおり！」

そんな馬鹿なと誰もが言うであろう状況にはしゃぐミリリ。

クルッ

頭にナイフが突き刺さった大きな蟻は向きを変えた。

「あ、あれ？」

ミリリと大きな蟻とで目が合う。致命傷ではなかったらしい。

カサカサカサカサッ

すごい速さでミリリに向かってくる大きな蟻。

「や、やあああああ！」

恐怖で思わずしゃがみこんでしまうミリリ。

距離はもう目と鼻の先。

大きな蟻がミリリに襲い掛かる。

ザアンッ

不意に聞こえた衝撃音。

その音と共に蟻は真っ二つになり、地に帰って行く。

(食べないで食べないで・・あたし美味しくないから！)

それに気付かずしゃがみこんだままで衝撃を待つ。

「あのねーおねーさんにたすけてもらったの〜。」

「・・・。」

「ぶんつてやったらぽよんつてなつたけどぶすつてなつたの〜。」

「・・・。」

何やら話し声が聞こえる。片方は先程の緑色の生命体。

(・・・あれ?)

しかしいくら待っても衝撃は無い。

ミリリは顔を上げた。すると目の前に緑色の生命体が居た。

「おねーさん、ありがとーなの〜。」

追い掛けられている時とまったく同じ口調で話しかける。

「う、うん！無事でよかったです！」

何があつたか判らないが、お礼を言われたからにはそれなり(?)

を返すミリリ。

ザッ

その場に、一人の人物が現れる。

足音に振り向くミリリ。

「！」

そこには一人の女が立っていた。

左腕が、無い女。

肩までの銀髪、同色の瞳はすべてを射抜くように鋭い。

黒い布を巻きつけた様な服装。そんな体を黒いマントが覆っている。

そんな異様な雰囲気を出している女を目の前に、言葉をなくすミリ。

「……。」

言葉を発さない女。

「おなかすきました。」

そして緊張感0の緑の生命体。

この異様な組み合わせの三人(?)が時を進めるのは、それから数分後であった。

新たな展開（後）（前書き）

ミリリの前に謎の女と一匹。
そしてローグに襲い掛かる敵。

新たな展開（後）

「ザザア・・・。」

周囲の木々や草が風に揺れてざわめく。

「・・・・・・・・あのー！」

沈黙を打ち破ったのはミリリ。

「・・・・・・・・。」

「あ、あたしはミリリっていう名前です！よ、よろしくですー！」

「・・・・・・・・。」

「え・・・えつとあの・・・。」

「・・・・・・・・。」

ずっと無言の銀髪の女。

「ぽにんはね〜ぽにんっていうんです〜。」

緊張感台無し of 生命体。

「ぽ、ぽにんさんですか！よろしくですー！」

足元からの自己紹介（？）にあわてて返すミリリ。

「で・・・あのですね？」

ぽにんと銀髪女を交互に見るミリリ。

「ああーわかりました〜。」

それを察してか、答える緑色の生命体。

「ぽにんのすきなことはたべることです〜。」

全然察していなかった。

「・・・・・・・・。」

ヒョイ

少女の足元にいたぽにんという生命体を右腕で拾う女。

「わひゃ〜。」

驚きの（全然だが）声を出し、でも大人しく抱えられるぽにん。

「あ・・・・・・・・あのー！」

声をかけるミリリ。

「……」

「またあつですよ。」

スウ……

女（とオマケ付）が闇に溶ける様に消えた。

「おい！その君！」

「え?!あ、あたしです?!」

背後から不意に声を掛けられ驚きのミリリ。返事をし振り向く。

一人は男聖職者。同じ聖職者の鴉の服に白を強調させた服装。

一人は黒尽くめの男暗殺者。

「そつだ！片腕の無い女だ……見なかったか！」

「！」

確かに見た。でも消えてしまった。

「だめだ、奴は不意打ちでないと見つけれない！」

「闇に隠れてしまうのか……くそ！」

なんやら二人は話している。

「仕方が無い、一度合流して打ち合わせよう。」

「ああ。」

勝手に納得してその場を去って行く二人。

ポカーン……

声を掛けられたのに放置のミリリ。

「っは！いけない！おにいさん探さなくっちゃ！」

話をする緑色の物体。

謎の女。

もひとつ謎の二人組。

でも考えていても解ける謎ではない。ので始めの目的を実行に移す
ミリリ。

「おにいさああん、どこですかあああ？」

布をかぶった骸骨の手が動く。

ドシユドシユッ

突然ローグの足元の地面が突き上げられる。

「！」

ザッ

地を蹴り横に回避。

トンッ

その足で骸骨の懐に飛び込むローグ。

「っせい！」

肩を狙いを定め、短剣を一気に振り下ろす。

ガシユッ

キシヤアア・・・。

鈍い音。骸骨の肩が外れ、奇声を発する骸骨。

「サンクチュアリ！」

フオオオン・・・。

聖なる領域。

女聖職者により、ローグと骸骨の足元に敷かれた魔法。

ローグの傷は癒えていき、対照に骸骨がもがき苦しむ。

攻撃も出来ず、ただ消滅を待つばかりの骸骨。

「とつとと成仏しやがれ！」

ズアシユンッ

短剣を振り上げ、骸骨の頭上から大きな口までを引き裂く。

キシヤア・・・。

真つ二つに裂け、風化してゆく。

「ふー、やれやれだぜ・・・。」

振り向いて女聖職者に近寄ろうとするローグ。

「！後ろ！」

「！」

ザッ

振り向くより先に体が横に動く。

ビュンツ

矢が飛んで来る。

すでに避けているローグ、そして対象の懐に。

ゴアア・・・。

相手は大きな弓を持ったオーク。次なる攻撃へと構えている。

「っしや！」

ズバアツ

横一直線に短剣をスライドさせる。

噴出す血、だが仕留め切れていない。

ヒュヒュヒュンツ

雨のように多数の矢が放たれる。

「っ！」

避けきれず数本が体をかすめ、思わず後方に下がるローグ。

ギリリ・・・。

オークが大きく弓を引く。

「っさせるか！」

足をバネにし、再び懐に飛び込もうとするローグ。

グイ

「！足が?!」

畏がガツチリとローグの足に噛み付いていた。

(いつの間に・・・！)

ビュンツ

オークから解き放たれる矢。

(避けられない！)

喰らう覚悟を決めるローグ。

「ニューマ！」

フワツ

遠距離攻撃無効の領域。

ローグ目掛けてきた矢は、その領域を前に消滅する。

「！そいつを奴の前にも置いてくれ！」

女聖職者に指示するローグ。

「はい！」

再び領域を設置する女聖職者。

その間、効果が切れる前にと畏をはずすローグ。

再び弓を構えるオーク。

(！よし、畏が外れた！)

自由の身になるローグ。

オークの目の前には遠距離無効の領域。

そこを狙い飛び込むローグ。

ビュンツ

次の矢がローグを襲う。だが領域により無効。

「であああ！」

ズバンツ

オークの左肩から右腹部にかけて、勢いつけての振り下ろし。

グオオオ・・・。

ドシャツ

地面に崩れ落ちるオーク。

「ふ・・・。」

周囲を見回すローグ。今の所敵の気配は無い。

「お疲れ様です。」

戦い終わったローグに声を掛ける女聖職者。

「おかげで助かったぜ、サンキュな。」

「貴方が闘ってくれたからです。お礼は私のほうが・・・。」

「んじゃあ互い様ってこつたな！」

ニヤッと笑うローグ。

真似て微笑む女聖職者。水色の短髪が風に揺れる。

「ムキキキー（終わりよければすべてよし。じゃ）」

すべてを悟ったかのような猿。女聖職者から離れて安全を確保して
たらしい。

「・・・さあ猿。そろそろ諦めてもらおうかねえ」
ペキペキと拳を鳴らすローグ。

「ムキ？（なんだと？しつこいサルじゃな）」
クルッ

背を見せ逃げ去ろうとする猿。

「あ、こら待ちやが・・・。」

「きゃああああああ！」

（な、なんだ?!）

声のする方を振り向くローグと女聖職者。

木々の隙間から見える光景。

黒い大きな馬にまたがった、大きな黒い騎士。

大きく、黒い槍に黒い盾。

（深淵の騎士・・・あんな奴まで枝で・・・!）

「!あぶない!」

叫ぶ女聖職者。黒い騎士の進む先には・・・逃げ惑うミリリ。

「あうっ」

ベシヤッ

足がもつれて転んでしまうミリリ。

黒い騎士の槍がミリリを狙う。

（くそ!間に合うか!?!）

向きを変えるローグ。その隙に逃げようとする猿。

「おめーも闘え!」

ギユンッ

足をバネにし猿との距離を一気に縮め、鷲掴みするローグ。

「ムキヤ!（な、なにをする貴様!）」

「だりゃあ!」

ビュンッ

風の音と共にその場に居たローグと猿が消える。

うづくまり、目をぎゅっと閉じるミリリ。

(神様っ！)

黒い騎士の槍が、遅くしかし的確にミリリを捉える。

ドンッ

突然の衝撃。

ミリリの前に現れたのは槍の攻撃ではなく、探していた赤髪のローグ。

「あ！」

「いっけえええええ！」

ブウンッ

驚掴みしていた猿を思いきり投げつける。

「ムツキヤー！（年寄りを大事にせんかー！）」

ドゴンッ

黒い騎士の顔に的中。狙っていた槍は宙を彷徨う。

ベチヤッ

地面に転がる猿。

「ムキユ〜（ああ、走灯馬がみえる）・・・」

ガクつとなる猿。しばらくは大人しいだろう。

チャキッ

短剣を構えるローグ。

「大丈夫かあんた！」

後ろにいるミリリに声を掛けるローグ。

「あ・・は、はい！おにいさんのお陰で大丈夫です！」

安堵を込めた返事をするミリリ。

「あれ？お前はさっきの・・・」

誰かわかっていなかったローグ。

「誰だっけ？」

しかも名前まで忘れている。失礼な奴。

コケそうなミリリ。

オオオ・・・。

そんなやり取りの間にも距離を縮める黒い騎士。
槍を振り上げ、突き刺そうとする。

「！」

(しまった、まともに喰らっちゃおう！)

しかし避ければ後ろのミリリに狙いがいく。

(俺に耐えられるのか？・・・いや無理だ！)

歯を食いしばるローグ。

ブオンツ

黒い騎士の槍が襲い掛かる。

「キリエエレイソン！」

キイインツ

体の周囲に聖なる防壁が設置される。

ドシユンツ

降りかかる槍の攻撃。しかし聖なる防壁により無効となる。

だが衝撃は逃れられなかった。

「つぐ！」

「きゃあ！」

後方に飛ばされるローグとミリリ。

「大丈夫か二人とも！」

「！あんたは！」

聖なる防壁を張ったのは、黒い聖職者、鴉だった。

「鴉様！」

さっきの女聖職者が遅れて駆けてくる。

「冥も無事か！」

「はい、そこの方のおかげです！」

冥と呼ばれた女聖職者が答える。

オオオ・・・。

(！次が来やがる！)

再会の喜びを感じる間もなく、黒い騎士が次の攻撃に移す。
ブオンッ

大きな槍が降り注ぐ。

その時。

ポロン。

聞き覚えのある弦楽器。

ギューンッ

激しい音色になり、周囲に活力を与える。

「グランドクロスッ」

ギューウウンッ

十字に敷かれる聖なる領域。

黒い騎士目掛けて放たれたその領域の中心には……。

「！お前達！」

「たまさん！ぽちさん！」

オオオオン……

十字の聖なる領域を前に、消滅する黒い騎士。

「みんな無事なようで！」

ポロン。

優しい弦楽器の音色。

吟遊詩人、たまが安堵の声を出す。

「テロ警報が出てたから、ミリリを追いかけて来たんだ。」

女戦士、ぽちが声を掛ける。

「君もいたのか、でも無事で良かったよ。」

ホッと息をつくぽち。

（まさかこんな形で再会するとはな……。）

急な展開に、驚きと喜びを隠せないローグ。

「さて……と。」

まだ地面に伸びている猿。近づくローグ。

「その猿は？」

ローグに声をかけるぽち。

「ああ、俺の大事なカードを持って逃げやがったんだ。」
すっかりローグの所有物。

「へえ！何のカードです？」

興味津々のたま。

ゴソゴソと猿に付いているポケットを探る。

「そいつは・・・お？これか！」

お目当てのものが手に触れる。

ジャーン

そんな音は出ていないがアイテムを取り出す。

「・・・・・・・・」

周囲に沈黙が流れる。

そのカードにはかわいいピンク色のモンスター、ポリン。

そこには羽根が・・・。

「な？！ミリリ、これ羽根が手描きじゃねえか！」

そのカードにはかわいい白い羽根が書き足されていたのだった。

「え？え？」

わけが分からないミリリ。

(・・・・・・・・？！そういえば・・・・・・・・！)

「ー」かわいいな、ポリン。この羽根の絵が愛らしさ増します！」

「ー」

「羽根の・・・「絵」。」

ポツリと呟くローグ。

カードにはそのモンスターの結晶、つまりその姿が凝縮されている。そう、倒されたモンスターが残すのは己の結晶体。絵ではないのだ。

「・・・それ私が描いた奴・・・。」

ポツリと呟いたのは何とぽち。

(・・・なぬ?)

驚きの表情でぽちを見るローグ。

「欲しかったんだ．．でも描いてて虚しくなったからポイしたんだ．．．」

寂しそうに言葉を吐き出すぼち。

つまり捨てたカードをポリンが拾い、そのポリンをミリリが踏み潰す。

出るカード。浮かれるローグ。拾う猿。その先には．．．。

「はあああ．．．．」

一気に力が抜けるローグ。このカード一枚でどれだけ振り回されたことか。

「ごめんね、まさかこうなるなんて思っても見なかったんだ．．．」

「そいつあ同感だぜ．．しかし。」

周囲を見渡す。

吟遊詩人、たま。

女戦士、ぼち。

冒険初心者、ミリリ。

黒い聖職者、鴉。

「皆さんご無事なようで何よりです。」

そして水色の短髪の女聖職者。優しい笑みを浮かべている。手描きのカードのお陰でできた新たな出会い、そして再会。

「．．．まいつか！」

これも経験だと納得する事にするローグ。

(．．．本物のカードだったら良かったのに。)

納得しきれていなかったローグ。

「そう言えば．．．何の用だったんだ俺に？ミリリ。」

不意に思い出し、最初の疑問を投げかけるローグ。

「ああ、そうでした！」

ポントと手を叩くミリリ。

「実はギルドをですね．．．。」

「ギルド？」

「はい！」

この後の物語は

「幸せとは充実なりて。」という名のギルドを結成させた彼らの
家族にも近い関係の絆が中心に
・・・なるかもしれない。

新たな展開（後）（後書き）

やっと続きが書けましたorz

次はローグ君の名前がでます。もう決まってはいるんですが出す機会が。。。

人々色々。(前書き)

自己紹介含めのお話です。やっとこ決まったローグ君の名前は割り
とフツーです。

バトルは無いので悪しからず。

人、色々。

町外れの古びた外観の一軒家。

6人の男女が集い、テーブルを囲んで自己紹介をしている。

「それじゃあミリリ、君から。」

黒い聖職者の格好の男が言う。

「えっと・・・あ、あたしからでいいんしょうか？」

「そうですねー。」

少女が問いかけ、吟遊詩人の男が答える。

「はい！あの、あたしミリリって言います！冒険初心者ノビスやっています！」

初心者やっています、というのもおかしな話だが。

栗色の柔らかな肩までの髪。小柄で人懐っこい幼顔。

ミリリは続ける。

「まだどの職業やるとか決めていませんが・・・色々お世話になります！」

ペコリ

元気に頭を下げ、紹介を終わらせる。

「初々しいねえ。次、ローグ君よろしく。」

「いや名前あるんで・・・。」

ローグと呼ばれた男がすかさず突っ込む。

「あるのか！」

驚きの声を上げる男聖職者。

「あるわい！」

「そうか、じゃあローグ君次よろしく。」

マイペースな男聖職者。

「つたく・・・調子狂うぜ・・・。」

頭を掻きつつ、紹介をする。

「俺はアキラ、ローグ（ならず者）をやっている。」

赤い短髪、睨むかのような悪い顔。目もガラも悪いため、色々誤解されがち。

続けるローグ。もといアキラ。

「一人放浪の旅にと思ったが、こうして出会ったあんた達に付いて行く事にする」

（出会いは誤解と早とちりだったけどな・・・）
苦笑しつつ、アキラは吟遊詩人を見る。

「何かと迷惑かけちまうかもしれないねえが、そこん所よろしくな。」
紹介を終わらせるアキラ。

「サバサバしていいねえ。次、たまよろしく。」

「しょうがないなあ、鴉の頼みなら聞くしかないなあ。」

たまと呼ばれた男が満更でもない顔で答える。

青い長髪、優しい目の愛嬌ある顔。心地良く透き通る声。

ポロン

手に持っていた弦楽器を弾き、語りだす。

「僕はたま。愛と平和の伝道師、吟遊詩人^{バード}やってます。」

「次、ぼちよろしく。」

次へと促す男聖職者。

「えええ?! 飛ばさないですよ、まだ終わってないのに!」

いきなりのバトンタッチに抗議をするたま。それはそうだ。

「お前の紹介は弾き語りで長いから飛ばした。」

キツパリと言いつ男聖職者。

「ちよつと一曲分になるだけなのに!」

不服のたま。

（5分前後も掛かるのかよ・・・）
呆れ顔のアキラ。

「長いのは髪だけにしろ。という訳でぼちよろしく。」

畳み掛ける男聖職者。たまの紹介が強引に切り上げられる。

「鴉はたま相手には厳しいからね。」

やんわりと声を掛け、ぼちと呼ばれた女戦士が自己紹介に入る。

「私はぼち、クルセイター聖騎士やっっている。」

肩までの銀髪、切れ長の目、端正な顔立ちは今は表情柔らか。淡々と話すぼち。

「新しい仲間が出来て嬉しい、共に苦難を乗り越えよう。」
あつという間に終わる紹介。

「たまと違つてぼちはあつさりしているね。」

男聖職者が感想を述べる。

「僕がくどいみたいない方じゃないか・・・。」
たまが呟く。

「みたい、じゃない。くどいんだ。」

はつきり言う男聖職者。

「・・・クスン。」

同じ部屋のベッドの隅で膝と弦楽器を抱えていじけるたま。

「あ・・・あの、たまさんが・・・。」
心配がちのミリリ。

「大丈夫、いつものことだから。」

そんなミリリの様子を見てフォロー(?)するぼち。

「は、はあ・・・。」

「次は冥、よろしく。」

「はい。」

冥と呼ばれた女聖職者が答える

「私は冥と申します。プリースト聖職者で鴉様の助手をやっております。」

水色の短髪、可愛い顔に大人びた雰囲気。
こちらも淡々と語る。

「あれ？マイワイフ・・・。」

「助手は助手なりに、鴉様や皆さんを支えていければと思っております。」

男聖職者の言葉に、助手連呼で回避する冥。

「足りないところも有りますでしょうが、皆さんどうぞよろしくお
願い致します。」

頭を下げ、紹介を終わらせる冥。

「嫁……」

「最後はギルドマスターの鴉様です、どうぞ。」

鴉と呼ばれている男聖職者の言葉は無かったことにし、さくさくと進める冥。

「(……)」

「しょぼんと言う人居ません。自己紹介をどうぞ。」

ピシャリと言い放ち、次へと促す冥。

(判るのか・長い付き合いあつてのモノだろうなあ。)

微かな感心と納得をするアキラ。

「仕方が無い、キリが無いから先に進むとしよう。」

ちよっぴり残念そうな鴉。自業自得である。

「私は鴉。このギルドのマスターであり、町外れの小さな教会で神父の代理等もやっている。」

黒い長髪を上の方位置で束ね、同色の優しい目にはどこか安心感を与える。

一呼吸置き、続ける鴉。

「このギルドでは仲間や家族の様な助け合い、支え合いを主とする。」

「

(家族かあ……)

なんとなくしんみりするアキラ。

「質問や疑問、不安は何でも話し合う事。問題や揉め事は私がフォローする。心配は無用だ。」

当たり前。と言わんばかりの表情の鴉。

(何と言うか……すげえ心強いわこの人……)

安心感はそのにあるらしい。感心するアキラ。

「ただしプライベート部分は考慮するように。」

フウと一息つき、皆を見渡す。

「あとは何しても良い。判らないことは訊くように！以上！」

「わかりました！」

「あいよ。」
「・・・OKです。」
「理解した。」
「判りました。」
各自それぞれが返事をする。一人は拗ねたままだったり。

「それじゃあ、私は一旦教会に戻る。何かあればギルドチャットでよろしく。」
「パタン。」

そう言い残しこの場を去る鴉。

「あの・・・ギルドチャットってなんででしょうか・・・？」
「おずおずとミリリが問いかける。」

「うん、ギルド内のみ通信機能だよ。」
「ぼちが答える。」

「ほええ・・・。」

「さっき配ったそのバッヂ、小さなボタンが付いていますね？」

「たまがミリリの胸元のバッヂを指差しながら話を進める。
鴉が居なくなつて落ち着いたらしい。」

「あ、下のところにありました！」

「十字架を象った小さなバッヂを見て声を出すミリリ。」

「そのボタンが切り替えです。ギルド内のメンバーにだけ内容を送ったりすることができます。」

「たまが続ける。」

「これで何処に居ても仲間、あるいは自分の居場所や現状を伝えることが出来ます。」

「おお。」

「ギルドバッヂの説明を受け、新鮮な反応をするミリリ。」

「どうかなさいましたか？」

椅子に座っているアキラに声を掛ける冥。

「え？あ．．．いやぼーっとしてただけだ。」

急に声を掛けられ内心驚きのアキラ。無理して平常を装う。アキラの目の前にはミリリに色々教えているぽちとたま。

その光景はとても微笑ましく、誰が見てもそう思うだろう。

「何でもない、大丈夫だ。」

冥にそう言い聞かせるアキラ。

「そうですね．．．。」

うつむく冥。

「．．．いらぬお節介かも知れませんが。」

「んあ？」

「「何に」対して、「大丈夫」なのですか？」

「！」

思い耽っていた核に触れられ、思わず冥を見るアキラ。

「．．．。」

「．．．失礼しました、勝手に人様の気持ちに入るものではありません。せでしたね。」

寂しそうな顔で謝る冥。

（．．．何だか見透かされたような感覚が．．．）

冥を見つめ戸惑うアキラ。

「．．．。」

二人の間のしばしの沈黙。

「．．．なあ冥さんや」

アキラがその沈黙を破る。

「．．．はい。」

返事をする冥。

「俺は、孤児だったんだ。」

「．．．。」

ポツリと語りだすアキラ。

「だから鴉は僕には意地悪なんだよー。聞こえているぞギルドチャットで。だあああ誤爆した！」

周囲が何やら騒がしい。気にせず話をするアキラ。

「俺が覚えてないくらいガキの頃に、おふくろが病気で逝っちゃったさ。」

「……。」

じっと黙り、アキラの話を聴く冥。

「親父はろくに仕事もしねえで、ガキの俺をほったらかしては酒に溺れる毎日。」

淡々と語るアキラ。

「ある日俺はローグギルドに売られちゃった。」

「……！」

「親父が金欲しさか、俺が邪魔だったか。わからねえけどな。」

「アキラさん……。」

思わず名を呼ぶ冥。続けるアキラ。

「ローグギルドじゃあ色んな事教わった。戦い方や脅し方、金品の掠め取り方。」

「……。」

「人として大事なモン、知らずに育ったさ。」

続ける言葉が無く、黙り込む冥。

「たま五月蠅い。鴉さんーここはひとつ穩便に……。たまはMだからいいんだ。ちがうよー！」

真剣な話をしている横で、ギルドチャットが賑やかである。

「……ったく。」

不意に軽い笑みが出るアキラ。

「アキラ……さん？」

アキラの思わぬ表情の変化に戸惑いを見せる冥。

胸元のギルドバッジのボタンを押すアキラ。

「ドM。」

一言いい放ち、ニヤリと笑うアキラ。

「ほらアキラもそう言ってるよ。ガーン！ほう・・周囲も認めるMか、もといドM。クスン皆して！」

賑わいが増すギルドチャット。

「親の温もりとかさ。」

「え？」

アキラのいきなりの言葉に聞き返す冥。

「家族のふれあいとか知らずに育った俺が、皆の様子を見て心底羨ましいと思った。」

「・・・アキラさん・・・。」

切ない思いで一杯の冥。

「・・・大丈夫。」

続けるアキラ。

「・・・？」

不思議そうに、次の言葉を待つ冥。

一呼吸置き、言葉を続けるアキラ。

「羨ましいと思うその中に、「俺」が居る事に気付いちまったからな。」

ニツと笑ってみせるアキラ。

「・・・はい。」

その様子を見てほっと胸を撫で下ろす冥。

その場の空気が穏やかになる。

(しかし・・・)

不意に、思った事を口に出すアキラ。

「何の疑いも拒絶も無く、身元不明な奴を受け入れてくれるたあとという了見だろつな。」

「・・・実はですね。」

思い切ったように話し出す冥。

「ん？」

「彼らもまた、孤児だったのです。」

「・・・そうだったのか。」

「鴉様に拾われ、名付けられ、育てられました。」
「なるほど・・・。」

(だから安易に・・・いや、素直に俺を受け入れられるのか。
冥の話に納得を・・・しかけたアキラ。)

(・・・ちよつとまで。)

一つ、いや二つほどの突っ込みがあることに気付いてしまう。

「・・・なあ冥さんや。」

「はいな？」

キョトンとした表情の冥。

「まず・・・一つ。」

一呼吸置き、質問をするアキラ。

「ぼちとかたまとか・・・あれ鴉がつけたのか！」

「そうです。」

「クリとうなずく冥。」

「呼んだ？」

「なんでしょお〜っ?」

名を呼ばれたと勘違いし、側によってくるぼちとたま。
ギルドチャットは終わったらしい。

「呼んでない! いや関係はあるか・・・。」
「思い直すアキラ。」

「いや、お前達の名前の由来をだな・・・。」

「あーあたしも気になりますよー!」
後からミリリも身を乗り出してくる。

「言っちゃ何だがよ・・・ペットっぽいなって思っちまってな、名前。」
「

割とはつきり言ってしまうアキラ。

「素敵な由来だよ。」

嬉しそうな笑みを浮かべるぼち。

「鴉も粹な理由で名付けましたからねー。」

こっちも嬉しそうなたま。姉弟のような息の合わせ方をする二人。

「粹な理由・・・？」

さっぱり意味が判らないアキラ。

「私達の名前は・・・。」

ぼちが途中で言葉を切る。

ポロン

たまが持っている弦楽器でリズムを取る。

「世界で一番〜。」

息を吸い、ぼちとたまはタイミングを合わせる。

「もっとも多く、もっとも愛玩動物として使われている名前！」

ジャカジャン！

力強く弦を弾き、歌紛いの発表が終わる

胸を張り、満足気なぼちとたま。

「・・・その発想が素敵過ぎて理解に苦しむ。」

思わず本音が声に出るアキラ。

「わあ！とっても愛情を感じる由来ですね！」

感激するミリリ。

「どこが愛情だ！」

「前向きな鴉様らしい名付け方でしょう？」

割って入る冥。

「いやそりゃネコや犬ならわかつけど！」

「まさにそれだよ。」

「皆の身近に居る家族の様な癒しの存在・・・それが愛玩動物！むしろ僕！」

「僕！」

さらに割って入るぼちとたま。

「たま、私は？」

すかさず指摘するぼち。

「訂正！むしろぼちと僕！」

即訂正するたま。

「アキラも鴉に拾われてたら良い名前になってたよ。ミケとかシロとかタローとか。」

ニコニコしながら思いつく名を提示するぼち。

「・・・俺鴉に拾われてなくてよかった・・・。」

いろんな意味で今までに感謝をするアキラ。

「アキラさん。」

アキラを呼ぶ声。冥だった。

「うん？」

返事をするアキラ。

「「まず・・・一つ。」とおっしゃいましたが、その他にまだ何か？」

「ええつと・・・ああ、うん。思い出した。」

ペット名祭りですっかり忘れていたアキラ。

「鴉ってさ。」

「はい。」

「・・・歳いくつ？」

「歳？」

「いや・・・ぼちやたまを名付けて育てたっていうから・・・。」

（実際のところ、せいぜい二十台後半くらいにしかみえないんだよなあ・・・。）

「僕は十代後半です。」

「私は二十歳くらいだよ。」

再び割って入るペット二名。もといたまとぼち。

「お前らじゃない！しかも揃って曖昧すぎる！」

すかさず突っ込むアキラ。

「あ、あたしは14歳です！今年で15歳になります！」

仲間に入ろうと、元気一杯年齢を公開するミリリ。

「おお若いなーってそうじゃない！今は鴉の歳を・・・！」

「誕生日これから何ですわね!。」

「誕生日なったらお祝いだね。」

「お気持ちだけでも嬉しいです!。」

「ええい話を聴けお前ら!。」

突っ込みが間に合わないアキラ。

「私は四捨五入で三十路です。」

冥まで割って入る。

「冥さんまで!俺は鴉の・・・って、なにいいいいいいいい?!!」

可愛い顔に大人びた雰囲気の冥。だがぼちより年下だと思っていた故に衝撃のアキラ。

(女ってすげえ・・・いやそうじゃない!)

自分にすら突っ込むアキラ。

「幼少の頃から鴉様の所で修行を積み、教会での助手をやっておりましたが・・・。」

「お・・・おりましたか?」

まだショックが抜けないアキラ。頑張って返事をする。

「変わっていませんね、鴉様。姿、形。」

思い返しながら答える冥。

「うん、鴉変わってない。」

「僕らが出会った時と同じですわねえ。」

うんうんと頷きながら答えるぼちとたま。

「何だか頭痛くなってきたぜ・・・。」

(大体三十路の冥さんの幼少の頃・・・仮に十歳として・・・)

(その時から、二十代後半にしか見えない今の鴉と変わらないって

事は・・・)

「ああ。」

ポンッ

拳でもう片方の手の平を叩く冥。

「髪の毛は少し伸びているようです。」

そんな事はどうでもよかった。

人々色々。(後書き)

初1話完結(?)です。今後もう一つ形のも混ぜいれていきます
よ

ある教会の出来事（前書き）

タイトル通りの鴉視点です。今回もバトルシーはありませんがノリは相変わらずです。

ある教会の出来事

キイ・・パタン。

「あ、鴉さまお帰りなさい。」

栗色の短髪、新米聖職者の男が鴉に声を掛ける。

教会に入ると少し先に椅子が左右で十脚、その先に教壇。新米聖職者はそこに居た。

学校の教室ほどの小さな広間である。

「済まなかつたな、留守番させて。」

そう言いながら教壇に向かい、書類や報告書を引き継ぐ鴉。

「いえ、代理でも神父さまの業務が体験出来ましたので。」

少し弾んだ声で返事をする新米聖職者。

そんな様子を見て微笑む鴉。

「それは良かった。」

「はい、では町に戻ります。」

「ああ。」

チラツ

教会内の右奥の隅に視線を移す鴉。

冥がために掃除をしている為、埃一つも無い。

左奥には鴉や冥の部屋、キッチンに繋がる廊下が続いている。

「先刻のテロの報告書も提出しておきますね。」

数枚の報告書をファイルにしまい、胸に抱える新米聖職者。

「ん？ああ、助かるよ。」

声を掛けられ、視線を新米聖職者に向ける鴉。

「それでは、また御用あらば飛んできますので。」

トトト・キイ・・パタン。

足早に去って行く新米聖職者。見送る鴉。

「・・・さて。」

狭い教会。ひと気が無いとそれも広く感じられる。

教会内の右奥の隅に視線を移す鴉。

「暗殺者ギルドの使いの者ですね？」

静寂の空間。そこに声を掛ける。

「如何にも。」

何も無い空間から男の声が返ってくる。

「よく使いの者と判断できたな。」

「殺意を感じなかった。そして微動だにせず私が一人になるのを待っていた。十分でしょう？」

他にも闇に身を隠せる者は居る。

が、忍ぶ礼儀を備えているのは暗殺者ならではである。

「流石だな、ならば話は早い。マルザナ様からの伝言だ。」
姿を隠したまま、話を進める男。

「「片腕の悪魔」を狙っている輩が居る。とな。」

(片腕の悪魔・・・か。)

思い当たる人物を記憶から取り出す鴉。

「・・・分かりました。しかし神出鬼没のあの子は監視も拘束も出来ませんよ？」

「見かけたら支援する程度で構わんそうだ。・・・しかし。」

「？」

「貴様位だぞ？「片腕の悪魔」を「あの子」と表現するのは。」
理解不能、とでも言いたげな男。

「悪魔でも死神でも、私から見れば「あの子」なのです。」

当たり前のように答える鴉。

「度し難いな、貴様は。聖職者であろう？・・・まあ良い、伝言は以上だ。」

質問しかけて思い直し、話を切る男。

「一言だけ、マルザナに伝えてもらえますか？」

男の居る空間に声を掛ける鴉。

「何だ？聞くだけ聞いてやろう。」

「・・・ありがとう、と。」

（「あの子」を無事に育ててくれて。）

「？暗号か何かかそれは。」

その言葉を伝える意味が判らない男。

「まあ、そんなものです。」

苦笑の鴉。

「致しかたない、伝えてやろう。」

スウ・・・。

そこに居た男の気配が消える。

その場は静寂に包まれた。

「じゅーしょーです、たすけてください。」

外から聞こえる情け無い声。

（あの声は・・・。）

その場から入口に向かう鴉。

辿り着き入口の扉に手をかけ、扉の向こうの相手にぶつからない様にゆっくりと開けていく。

キイ・・・。

べちっ

それでも当たる不可思議な相手。

「あつ〜じゅーしょーなのに〜。」

緊張も緊迫も緊急も感じられない声。

「・・・そう思ったらドアの軌道を避けてくれ。」

「うーんと〜わかりました〜。」

鴉の言葉に返す声。

「全力で嘘臭い。」

思わず出る本音。

「んじやくもつかいやりますから〜。」

反省も無いような声。それが素なのだろう。

「やれやれ・・・開け直すぞ？」

「はい。」

相手の姿も見えないまま、扉を一度閉める鴉。

「じゅーしょーです。たすけてください。」

「そこいらないから。」

扉を軽く開け、一旦手を止める。

「今から開けるからな？」

「はい。」

「ドアから離れたか？」

「それはもうはなれました。」

若干遠のいた声、点呼は終了。一呼吸置き、扉をゆっくり開けていく鴉。

キイ・・・

べちっ

それでもあたる不思議な相手。

「あうーじゅーしょーなのに。」

「離れてなぜ当たるんだ。」

「うーん、はなれたか？ってゆわれて。」

「離れたんだろう？」

「なかなかあかないからーしんぱいでちかよっちゃいました。」

「何でそこだけせつかちなんだ・・・」

溜息をつき、扉の隙間から手を伸ばす鴉。

ムンズ

相手を少々強引に掴み挙げ、動きを固定。

「あひゃ。」

情けない声の主。

肩で扉を押し、開けていく鴉。

ギイ・・・

鴉の視界に入ったのは、今にも振り出しそうな外の景色。

掴んだ手には、丸みを帯びた軟らかい緑色の生命体。

「あうーぽにんおれちやいますよ。」

「折れる骨も関節もないだろうお前は。」

掴み挙げた緑色の生命体、もといぼにんを両腕に抱え直す鴉。腕の中でプルプル動くぼにん。

「こら、あまり蠢くな。くすぐりたいぞ。」

軽く力を入れ動かないように抱え込む鴉。

「あひゃ〜ちよつとはずかしいですよ〜。」

体が緑色で判り辛いのが、照れているらしいぼにん。

「お前と対等に話をしている私が恥ずかしい。」

ぼにんの頭（とりあえず上の部分）をポムポムと弾き、周囲を見渡す鴉。

民家が数軒、少し遠くに森が見える。

「一緒にいるお前の相棒はどうした。ぼにんに問いかける鴉。」

「あいぼーって〜おいしいやつ〜？」

「うまい棒はうまいけどな。」

「あう〜おもいだしました〜。」
ポムッ

と叩く手が無いので弾むように体を動かすぼにん。

「忘れていたのか・・・で、何処に居る？」

気を取り直して更に問いかける鴉。

「ぼにんじゅーしよーでした〜。」

「そつちじゃないっ」

「あう〜じゅーしよーなのに〜。」

「・・・こつちは頭痛で重症だ。」

「ぼにんはおなかがすきました〜。」

「私はお前で手一杯だ。」

「も〜おなかがぐ〜ぐ〜ですよ〜。」

「・・・私の手がグーになりそうだ・・・。」

ぽりぽりぽり。

教会の一室。鴉の部屋に響く音。

「はううおいしいです〜。」

ベッドに座っている鴉の足元で、満足げな声を出す緑色の生命体。美味さ故か、ぽにんの目がとろんとしていて。

「・・・ハーブを食べている音じゃないんだが・・・。」

目の前の数種のハーブを平らげている生き物に話しかける鴉。

「え〜？」

不思議そうな声を出すぽにん。

「おいしいのに〜。」

「いや疑問に答えてないから。」

試しにと鴉もハーブに手を伸ばし、口に運ぶ。

シヤク・・・。

口一杯に広がる苦味と清涼感のある風味。

「・・・。」

食べかけのハーブをぽにんに与えてみる鴉。

ぽりぽりぽり。

「はううおいしいです〜。」

足元で満足げな声を出すぽにん。

「お前の構造はどなんだ。」

「はい〜おいしいですよ〜。」

食べたハーブの評価が返ってくる。

「感想じゃなくて構造だ。」

目の前の生き物の謎はずっと解けないであろうと、何となく悟った鴉だった。

（まあ・・・美味しそうだからいいか、もう。）

むしろ諦めの鴉。

足元でぽりぽりとハーブを噛み砕き（？）まだ食事中のぽにん。

「・・・私も何か食べるかな。」

そう言っ立ち上がり、机に向かい引き出しを開ける鴉。

“ 疲れた時に食べてくださいね。 ” と冥が鴉に渡した小瓶。中には一口サイズの焼き菓子。

小瓶から焼き菓子をとり出し口に運ぶ鴉。

香ばしい香り、ざっくりした歯応えが心地よい。

「 やっぱり美味いな、お前はたべ・・・。 」

ぽにんに勧めようと振り返り、途切れる声。

「 ……黄泉よみ・・・。 」

鴉のすぐ後ろ。一人の女がそこに居た。

肩までの銀髪、同色の瞳はすべてを射抜くかのよう。

黒い布を巻きつけたような格好。

同色のマントの間から覗く左半身に、腕は無かった。

暗殺者の中でも、更なる高みを目指し転生した姿。

そしてその女が「片腕の悪魔」の異名を持つている事を鴉は知っていた。

「 相変わらず神出鬼没だな、黄泉は。 」

驚きはしたものの、直ぐに表情を和らげる鴉。

「 ……。 」

無言のまま視線を移す女、黄泉。その先は緑色の生命体。

ぽりぽりぽり。

「 はうっおいしいです。 」

未だにハーブを食べているぽにん。側に居る黄泉に気付いていない様子。

再び鴉に視線を戻す黄泉。

「 君の相棒、じゅーしょーですっつて騒いでいたぞ。 」

「 ……。 」

「 君にはこっちなな、食べるかい？ 」

焼き菓子の入った小瓶を差し出す鴉。

小瓶をじっと見つめる黄泉。

少し間をおいて、手を伸ばし小瓶の中身を取り出す。
物珍しそうに見つめ、ゆっくり口に運ぶ黄泉。

「……………」

一口サイズなのに2、3回に分けて食べている。

(あんまり好きじゃなかったかな?)

鴉は思った。が、思いの他おかわりの手が伸びてきた。

その様子を見て微笑む鴉。小瓶をもっと近づける。

(……………ん?)

「……………」

ほぼ二人同時に気付く。教会に向かってくる人物の気配。

「アキラとミリリかな。心配無い、味方だ。」

「……………」

おかわりの手を止める黄泉。

スツ

しゃがみ込み、足元のぼにんを抱えて立ち上がる黄泉。

「あゝ、ぼにんのごはん。」

床に散らばっているハーブを求めて止まないぼにん。

「あ、よみだ。さがしてたのに。」

今頃黄泉の存在に気が付くぼにん。

「お前は食料を探していたろ……。」

「……………」

呟く鴉。変わらぬ表情の黄泉、慣れているらしい。

「……………黄泉。行ってしまふのか？」

「……………」

「これ、持って行くといい。」

そう言っつて焼き菓子入り小瓶を黄泉の手に持たせる。

足元に散らばった(食い散らかし)ハーブや回復剤をまとめて袋に

詰める。

「食料も多少入っている。でもお腹空いたり疲れたりしたらまた来るといい。」

「……。」

「君を狙っている輩が居るそうだ。気を付けてくれ。」

「……。」

「何があっても、君を見捨てたりはしないから。」

「……。」

抱えていたぽにんをベッドに降ろす黄泉。

銀色の眼が再び鴉を捉え、近くまで歩み寄る。

「うん？」

黄泉の行動を目で追う鴉。

バツ

いきなり鴉の鼻の先に手の平を広げる黄泉。

「わっ」

咄嗟の事で思わず眼を閉じる鴉。

直後。

鴉の左頬を、手の温もりが優しく撫でる。

(え?)

目を開き目の前の人物を見ようとする鴉。

しかし目の前にはすでに誰も居なかった。

頬に触れた温もりだけがその場に残った。

「たのもーう」

教会に響き渡る声。

「道場破りと間違えてないか？」

教壇から入り口の人物に声をかける鴉。

「いやあ、よく響くからつい言いたく。」

そう言いながら近づくのはアキラ。

「ホント響きますねーこういう所で歌ったら気持ちいいですよ!」

目新しい物を見る様に教会を見渡すのはミリリ。

「コンサート会場じゃあるまいし。」

新鮮な反応の二人に思わず苦笑の鴉。

「・・・さて、君達の用は何だい？ギルドチャットでも良いのに。」

「いやあ、直接訊きたいと思ってなあ。」

「んですよ〜！」

「？何をだ一体。」

目の前の二人を交互に見る鴉。

「ズバリいうとだな！」

「おいくつですかと！」

ずずいと身を鴉に近づけるアキラとミリリ。

何となく息ピッタリの二人。

「178cm。」

即答の鴉。

「わあ、やっぱり背が高いですね！」

「違う身長じゃない！」

「26,5cm。」

「足のサイズでもない！」

「上から92・66・85だ。」

「な、ナイスバディですね！」

「男のスリーサイズ訊いてどーする！」

「ちなみにぼちのサイズは3cm違いだ。」

「・・・どこの部分？」

「アキラさん！目が真剣です！」

この場でポケとツツコミが成立しているような3人。

「と、とにかく！」

コホンと咳払いをし、場をごまかすアキラ。

「年齢不詳なマスターの歳を訊きに來たわけさ。」

「アキラさん、今メモに書き込んだ数字は何ですか？」

「な、何でもねえよ！」

慌ててメモをしまい込むアキラ。

「まったく君達は・・・後どこのサイズ知りたいんだい？」

「サイズじゃねえ！歳だつて言ったよト・シ！」

「ああ、そういえばそうだったな。・・・まあ。」

一呼吸置き、言葉を続ける

「毎年変わるモノなんて、いちいち憶えていないけどな。」

そう言っつていつもと変わらぬ笑顔を二人に向ける鴉であった。

ある教会の出来事（後書き）

鴉びいきということがバレバレですが主人公ではありません（あ）
次回はバトルシーンを予定しております。

男性サイドストーリー「枝の薦め」(前書き)

外に出たアキラとたま。ふとそこで目にしたのは枝を折って遊ぶ
人の男だった。

男性サイドストーリー「枝の薦め」

町外れの古びた一軒家。

「あつはつはつは、鴉らしい答えだなあホント。」

・・・に響く、良く通る笑い声。吟遊詩人たま。

「無駄足だったね。」

悪気も無くピンポイントの言葉を発する声。女戦士ぼち。

「直なら訊けると思ったんだよなあ、歳。」

「サイズは訊けましたね！色々。」

「あんま必要無かったぜ。」

「でもメモ書いてまし・・・。」

「見間違い、気のせいだ。」

そしてローグのアキラに冒険初心者ミリリ。

この四人がテーブルを囲んで話している。

「鴉のサイズをメモしたの？」

話の間に入るぼち。

「ばっか、そこまでファンじゃないぜ。」

即答するアキラ。

「メモはしたんだ、じゃあ誰のサイズメモしたの？」

素朴な疑問を投げかけるぼち。

「・・・」

言葉に詰まるアキラ。

（墓穴掘った・・・）

よく判らない沈黙が場を流れる。

「そ、そうだたま！アレ見せてくれよアレ！」

ガタン。

アキラは立ち上がり座っていた椅子がずれる。

話を逸らすのに必死なアキラ。

「あ、え？」

不意に話を振られ反応できないたま。

「うーんと・・・そうだアレだ！その楽器で矢を撃つ奴！」

思いつくままに言葉を吐き出すアキラ。

「ねね、誰のサイズ？」

食い下がるぼち。別に深い意味はないのだが。

「ああ、あれか〜あれはミュージカ・・・」

「よし！見せてくれ！さあすぐ今すぐもつとすぐ！」

いつの間にかたまの真横に来たアキラ。

ガシッ

たまの腕を掴んで外へと連れ出す。

「わわ！ちよつとアキラ強引す・・・」

セリフが終わる前に、姿が見えなくなる。

「・・・何だろ一体。」

不満げなぼちの顔がその場に残った。

町外れの古びた一軒家から少し離れた所。

もう少し歩くと森の入り口。

木々の側に居るのは男二人。

「まあったく〜強引なんだからアキラは。」

ぶつぶつ言いつつ弦楽器を構えるたま。

互いすっかり慣れたようで、話し方も懐っこいモノになっている。

「んで、どうやって飛ばすんだ？それ。」

何事も無かったように問いかけるアキラ。

（そう言えば初めに矢が飛んで来た時訊くどころじゃなかったからなあ。）

とんだ出会いの二人だったが、後を引きずらない辺りが彼らである。

「ふふ〜ん、ちよつとコツが要るんだよね。」

得意げな顔をするたま。

弦楽器を左手に構え、膨らみの部分を外側に向ける。

ピンツ

右手に持ち、弦に合わせて矢を素早くスライドさせつつ付ける。どうやら弦同士を縫う様に矢がはめられている模様。

「とう！」

ブンツ

弦楽器を振り上げ、素早く下ろす。

そこから矢が勢い良く射出される。

「うお?!」

とっさに矢を避けるアキラ。割りとスレスレであった。

ピンツ

アキラの後ろにあった樹に矢が刺さる。

「。。。。」

「うん、やっぱり避けられると思ったよ。」

少年の様に無邪気な顔を見せるたま。

「お前は どうして先に体が動くんだ！」

たまを睨みつけるアキラ。

「これね、矢を装着させたらすぐ飛ばさないとだめなんだ。」

反省0。だから人の話を聞け。

再び弦に矢を装着させるたま。

「。。。」

二秒と断たず矢が弦から外れてしまう。

「弦がしななって戻っちゃうからさ、スピード勝負なわけ。」

「だからって側に居る俺をターゲットすんな！」

不機嫌そうに腕を組み、側にある樹にもたれるアキラ。

「? ねえアキラ、あれ何してるのかな。」

樹にもたれているアキラの後ろを見るたま。

「誤魔化すなつての!.. あん?」

と言いつつたまの視線を追うと、少し遠くに人影が見える。

カートを引つ張る男が一人。ブラックスミス鍛冶屋である。

辺りを見廻す男。アキラ達には気付いていない模様。

カートを漁り、何かを取り出す。

「何か言ってるよ？」

微かにその男から聞こえる声を拾うたま。

「・・・サ・・・ンスター。」

かろうじて聞こえる声を口に出すアキラ。

同時に気付く二人。

「サモンンスター?!」

二人は男に視線を移す。

男の目の前には真っ赤な毛色の熊が出現している。

「ありや枝だな、カツコ付けて呪文唱えたタイミングで枝を・・・」

たまに話しかけるアキラ。

だがそこにたまは居なかった。

「あん？」

周囲を見廻したまを探す。

いつの間にかたまは男の元に駆け寄っていた。

(ホントちょっととした事で首に突っ込むのなアイツ・・・)

そんな場面を目の当たりにして納得するアキラだった。

斧を熊目掛けて振り下ろす。

ザシュツ

オオン・・・。

断末魔を挙げ、熊が地面に倒れこむ。

「雑魚いな・・・ドロップも落とさねえし。」

気だるそうに熊を見つめる男。

黒い短髪にグラサン、パイプタバコを銜えている。

ラフな格好が涼しそうだ。

カートにある袋を漁る男。カートには「鍛冶屋ブラックスミスたくみ「匠」」と書かれている。

「後2本か・・・しけてんな・・・。」

そう言いつつ袋から取り出したのは枝。

「サモンモンスター！」

ベキッ

ポヨンッ

妙な音を立てて出てきたのは大きな箱のモンスター。

「はぁ・・ドロップに期待するしかねえのな・・。」

パイプタバコを吹かしつつ斧を構える男、匠。

「その男！すぐさま枝折りをおやめなさい！」

その時、よく判らない男が乱入してきた。

青い長髪の吟遊詩人。なんだか弦楽器を構えている。

（はぁ・・誰も居ないと思ったんだがなぁ・・面倒くせえ。）

匠は溜息混じりに吟遊詩人を睨みつける。

「何だてめえは。オレの遊びの邪魔するんじゃないやねえよ。」

「！遊びで枝だなんて・・強敵が出たらどうするつもりですか！」

引かない吟遊詩人。そして責めるような言い方。

（しかも一番嫌いな「イイ子ちゃんタイプ」かよ。）

敵はシヨボイわ説教垂れる吟遊詩人は出現するわで、少々ご立腹な

様子。

ブンッ

目の前の大きな箱のモンスターに斧を振り下ろす。

はじける様に割れ、結晶石を残して消滅するモンスター。

「見ての通り、雑魚しかでねえし一本ずつしか折らねえ。周囲に民

家も無え。」

（こう言つイイ子ちゃんタイプには理屈じゃなく事実を言うのがネ

ツクだな。）

そう思い、目の前の吟遊詩人に言い放つ。

「誰もいねえのに危険信号鳴らすほうがどうかしてるぜ。てめえの

は過剰反応だ。」

「！偶然でも僕は居合わせました・・成り得る可能性の種は避ける

べきです！」

イラッ

匠に湧き上がる苛立ち。

「・・・キャッチボールをしていてだな？」

「・・・え？」

急な語りに戸惑う吟遊詩人。

「投げた球が偶然手元が外れて偶然通行人に当たって偶然打ち所が悪かった。」

「・・・。」

匠は続ける。

「こんな低い可能性の為に、キャッチボールすらしちやいけませんって言うのか？ん？」

「だ、だから人気のない広い所で・・・。」

「ここ、人気も無えし、十分過ぎる位広い。なのにてめえはわざわざ突っ込んできた。」

パイプタバコを吹かしながら畳み掛ける匠。

「危険の偶然を必然に変えたのはてめえだって気付けや。」

「！」

「人の遊びにケチつけんじゃねえ。分かったらとつと他所行きな。」

「・・・枝はやめてください。とても危険な物なんです。」

まだ引かない吟遊詩人。

「・・・やんのか？」

ブオンッ

斧を振り吟遊詩人に刃を向ける。

シリ・・・

間合いを取る両者。

「・・・。」

流れる沈黙。

その時。

「はいはいまってまってストップだ！」

第三者の男が間に割って入る、赤髪のローグだった。

(増えやがった・面倒くせえなもう・。)

部外者の乱入にいい加減苛立ちが上昇していくのが分かる。

「邪魔すんなや、真つ二つに割られたいか? うん?」

ベチツ

思いの他、赤髪のローグは吟遊詩人の頭を引っぱたいた。

「お前は状況を理解してから突っ込め!」

「あう! アキラ痛いよ!」

どうやら二人は知り合いらしい、ローグが吟遊詩人を叱り付けている。

「いやあ、悪かった。うちのがちよっかい出したようで。」

「だってアキ・・むぐぐ・。。」

口を手で塞がれる吟遊詩人。

「いいから、黙ってみてろ。」

そんなやり取りをし、匠をみるローグ。

「俺も好きだぜ、遊び。」

ニカッと笑ってみせるローグ。

(どうやらコイツはオレと同類のようだな。)

少しばかり収まる不機嫌。

「んでさ、俺も折りたいんだけど一本貰っていつかな?」

匠を期待の眼差しで見るローグ。

(・・こっちは図々しい方か・。)

「・・あいにくと持ち合わせが無え。折りたきや買ってこいや。」

ジャン

そんな音はしていないがローグが懐から何かを取り出す。

「へへっなんと此処に一本あったりして!」

枝を手は何故か得意げなローグ。

(ガキはやることがわからねえ・。)

肩をすくめながらローグに話しかける匠。

「・・んじゃあ折りたきや折れや。その代わり持ち主が責任取れよ

「？」

「わあつてるって！」

保護者のつもりではないが、目の前のローグを見ているとそんな気になってくる。

わくわくしながら枝に力を込めるローグ。

「こうか？サモンモンスター！」

ベキッ

匠を真似てか、召喚の呪文を唱えてから折る。

出てきたモンスターは……。

この世を彷徨う侍の骸骨・彷徨う者。脅威の攻撃速度と回避率に苦戦を強いられる相手。

「ハゲでた！」

でも毛が無いため通称「はげ」

「ふん、手応えあるの出すじゃねえか。」

少しばかり強敵召喚運に羨ましがる匠。

シャキンッ

彷徨う者の鋭い刃先がローグを狙う。

「あぶね！」

スレスレで剣技を避ける。

「おいおい・・・攻撃しなきゃ倒せないぜ？」

呆れ顔で見守る匠。

「だな！よっし、こっちだ！」

そう言いながら敵を誘導するローグ。

「んな！？」

急に匠の目の前に現れる、彷徨う者。

シャキンッ

敵の剣技が匠を捉える。

「ちい！」

とっさに脇に置いてた盾でガードする。

ギインッ

鋭い刃先は盾に衝撃を与える。

「てめ・・・てめえで責任とれつつあったろうが！」

標的を匠に向けた張本人に怒鳴る。

ギンツギインツ

剣技の衝撃に、盾で耐えている腕が麻痺してくる。

「あん？」

キョトンとした顔のローグ。そして言葉を続ける。

「あなたのカートから掠め取った。あなたの枝だぜ？」

「んなにいー？！」

(このガキいつの間に・・・ふざけやがって！)

ヒュオンツ

そうしている内にも、敵は盾以外に的を変える。

「遊びなんだろう？だったらそんな熱くなんなって。」

ヘラヘラと笑ってみせるローグ。

「あほ！下手したら死ぬだろうが！」

ギイン・・・ザシュツ

盾を装備している腕をかすっていく刃先。

「つてえ・・・。」

流れる血、盾が落ち腕を押さえる匠。

「え？死ぬの？」

ローグが悪気無い顔で聞いてくる。

「つたりめえだろうが！」

怒りをぶつける匠。

呼吸が荒くなる。

ヒュオンツ

ガキンツ

装備していた斧で攻撃を防ぐ。

「遊びだったら危険じゃないんだろ？あなたの言い分だと。」

「つだあ！」

ガギインツ

「時と場合による！」

斧で剣技をはじく匠。

「おかしいな、俺はあんたがさっきから折ってたのと同じ事しただけだぜ？」

「てめえみたいになすつたりはしねえ！」

ザシュツ

もう片方の腕も切っ先がかすっていく。

「・・・っ！」

「遊びは遊び。偶然側に居たあんたに偶然タゲが行ったただけだ。」

ヒュオンツ

敵の剣が大きく振り上げる。

「それともあんた。」

戦いのすべてを見ながら、言葉を放つローグ。

「遊びもまともでできねえの？」

敵の大きな剣が匠に向かって振り下ろされる。

ドゴゴオオ・・・ン。

鍛冶屋の男が手持ちの斧を大地に叩きつける。

「おわ！？」

「あう！」

周囲に響く振動は、アキラ達の足元を狂わす。

男を狙っていた彷徨う者の剣技も止まる。

「・・・そこに、居ろや。」

静かに低い声、ゆっくりと立ち上がる男。

パイプタバコをはずし、大型の斧を取り出し両手に構える。

スウ・・・。

軽く息を吸い込む。

「っはああああああ！！」

気合の咆哮。

ビリビリと空気に振動が伝わるほどの。

「マキシマイズパワー！」

「ウエポンパーフェクション！」

「アドレナリンラッシュ！」

「オーバートラスト！」

見る見るうちに斧が輝き、切れ味が増す

動きに隙が無くなり、その鋭い眼光は的を逃さない。

無駄の無い動きが、彷徨う者を確実に捉える。

攻撃速度の上昇効果のあるポーションを飲み干し、親指で口を拭う。

はつと我に返るアキラとたま。

同時に敵の攻撃も再開される。

ヒュオンツ

大きく振り上げ、振り下ろす敵。

しかし男の攻撃速度が僅かに上回った。

ゴシヤアアツ

彷徨う者の脳天から一気に下まで振り下ろす強烈な一撃。

「すげ。。。」

凄まじい気迫に圧倒されるアキラ。

「アキラ。」

呼びかけるたま。

「あん？」

応えるアキラ。

「こうなる事計算してた？」

「いやまったく全然。」

キツパリと答えるアキラ。

「・・・そう。」

「俺はな？」

ゴシヤツ

目の前の男が止めを刺す。

そして敵は燃える様に消滅していく。

「あの男の言い分は有りだと思った。」

「そんな・・・！」

抗議をしようとするたま。

「まあ聞け。」

制するアキラ。

「遊びにしても危険には変わりねえ。だからそいつを判って貰おうとおもったのさ。」

男はアキラ達に視線を移し、ゆっくりと歩いてくる。

その背後。

ヒュオン・・・ッ

敵の振り回していた剣だけが現世に思いを残し、男を狙っていた。

「！」

一瞬反応が遅れる男。

「ミュージカルストライク！」

ピンッ

弦に矢を縫い合わせ、素早く振りかぶるたま。

ドシュッ

射出された聖なる矢が、現世に留まる最後の魂に止めを刺す。

・・・。

音も無く消える存在。

男が振り向いたときには何も居なかった。

ザッ

二人の男の前に着く匠。

「・・・最後、何をした？」

吟遊詩人を見ながら問いかける。

「え？あ・・・ミュージカ・・・。」

「んじゃなくてだ。」

静かに話す匠。だが怒りはこもっていない。

「何で助けた？」

「・・・危ないと、思いましたから・・・。」

「オレそんな弱そうに見えるか？」

「いえ！そんな事は！」

慌てて首を横に振る吟遊詩人。

「たまは体が先に動くんだもんなあ。」

人事のように言うローグ。

「君が言うな！」

「てめえが言うなや。」

たま、と呼ばれた吟遊詩人と意見が一致する。

ポロン。

吟遊詩人、たまが弦楽器を抱えて優しい音色を奏でる。

「・・・どんな仕組みだ？傷が塞がっていくぜ。」

匠が負った傷が見る見る内に癒えていく。

「「イドウンの林檎」はそう言う効果があるんです。」

「・・・たまつつたか、名前。そっちの奴は名前はアキラでいい

のか？」

急に話題を切り替える匠。

「はい。」

「おう、いいぜ。」

返事をする男二人。

「たまは枝が嫌い。そうだな？」

たまの目を見ながら質問する匠。

「・・・はい。」

「わかった。何があったか知らねえが、たまの側では折らねえ事に

する。」

向きを変え、アキラを見る匠。

ブオンッ

「！」

匠は斧を振り上げ、アキラの顔寸前で止める。

「・・・よく避けなかったな。」

「・・・さっきのあんただったらやばかった。」

「本音はどうだ？」

「俺の人生終わった」って思った。」

冷汗気味のアキラをみてニヤリと笑う匠。

「・・・遊びもまともでできねえの？」・・・あれ相当堪えたぜ。」

斧を下ろしアキラを正面に見据える匠。

「今度オレと遊ぼうや。まともに、全力でな。」

「俺死ぬ気で行くわ、でない我真っ二つにされそうだし。」

「はは！覚悟決めてから来な。」

斧を肩に担ぎ、二人を見る匠。

「オレの名前は匠。また会ったら付き合えや。」

「枝以外でしたら。」

「俺棺おけ持ってたほうがいいかな？」

「線香でいいぜ。」

冗談（一人真面目）を交えながらの会話。

そっいつてアキラ、たまと匠は別れた。

・・・数時間後に会うとも知らずに。

男性サイドストーリー「枝の薦め」(後書き)

タイトル通り女性パートもあります。

女性サイドストーリー「訪問者」(前書き)

男性軍を他所におやつを楽しむ女性軍。そこに来た訪問者は・・・。
ギャグ風になったはず！なお話です。男性サイドとちよつと繋がって
ます。

女性サイドストーリー「訪問者」

町外れの古びた一軒家のキッチン。
カチャカチャ・コト。

一人の聖職者、冥がおやつの準備をしていた。
何だか皆の居る部屋が賑やかである。

食器棚からカップや受け皿を取り出しセットしていく。
お皿には得意の焼き菓子、紅茶をお盆に乗せて皆の居る部屋に向かう。

「あら？お二人見当たらないようですが。」

部屋に入って見渡す冥。さっきまで賑わっていたのに。

「たまとアキラ外行っちゃったんだ。」

寂しそうに言うぼち。

「男性は元気でいいですね。」

カチャッ

お盆をテーブルに乗せる冥。

「ねね、冥。」

冥に何か聞いたそうなぼち。

「人に聞くサイズって言ったら何かな？」

「え？サイズですか？」

ぼちに聞き返す冥。

「うん。アキラってば教えてくれないからさ。」

「ぼ、ぼちさんその辺りで……。」

落ち着かない様子のミリリ。

「サイズと言ったら……。」

一瞬考える冥、そして出す答え。

「足のサイズでしょうか。」

「だよね、足だよね。」

ぼちと冥で一致した答えに納得する。

「えええっ足ですか!？」

「一番まともな反応を返したのはミリリだった。」

「足以外で言うサイズって？」

「マークのぼち。」

「え?いやその・・・胸とか・・・」

「口ごもるミリリ。」

「ああ。」

ポンッ

何かを閃く冥。

「身長ですね。」

ミリリは何か言いたそうに首を横に振っている。

「なるほど。やっと理解したよ。」

少し晴れた顔になるぼち。

「で、アキラは誰のサイズをメモしたんだろうね。」

肝心の部分は未だ謎のままだった。

テーブルでおやつを楽しむ三人。

「ん、帰ってきたな。」

カタン。

椅子から立ち上がり、外の出入り口に向かうぼち。

「?たまさん達でしょうか。」

冥にそれとなく聞くミリリ。

「話し声は聞こえませんかね。」

入り口に視線を向ける冥とミリリ。

カチャッ

扉を開けるぼち。

「お帰り、彩。」

そう言って相手を迎える。

「クエー」

「あーさっきのペコペコー!」

相手の姿を見て声を上げるミリリ。

色鮮やかな配色の大きな鳥。

色々あったがペコペコの彩含め、ミリリが皆と知り合ったのは数時間前である。

「彩さん、久々に見た気がします。」

ポツリと冥。

「彩は放浪癖があるからね、私もなかなか乗れないんだ。」
主人の放し飼いの結果である。

「クエー」

「キ」

「彩、変な声出さない。」
ペコペコに軽く注意をするぼち。

「後の声は背中からしたような・・・。」
おずおずと会話に入るミリリ。

「ん？背中？」

視線を背中に移すぼち。

するとそこには大きな羽に埋もれている猿が。

「彩、このヨーヨーどうした？」

「クエ」

答えるように鳴くペコペコ、もとい彩。

「落ちたから食べられるかと思って拾ってきた」って？
代わりに答えるぼち。

「ぼちさんペコペコの通訳出来るんですね！」

「割と長い意味合いを持つ鳴き声でしたね。」

各自感動と納得をしているミリリと冥。

余談だが、アキラがこの場に居たら・・・。

「判るのかよ！意味なげえよ！」

の一言で済むのだった。

「・・・っあ。」

カタン。

思い出したように立ち上がり、彩の元に駆け寄る冥。

「？冥さんどしました？」

冥の後を追うミリリ。

彩の背中の上に居る生き物を観察する冥。

「・・・やっぱり、さっきアキラさんが追いかけていた猿ですね。」

「え？」

「ほえ？」

一瞬何のことか分からないぼちとミリリ。

冥は覚えていた。

何と言っても自分の体にまとわり付いていた不届き者だからである
当の本人（本猿？）は彩の大きな羽に埋もれ、バナナなどを頬張っ
ている。

「私の落書きカード持ってっちゃった奴か。」

「アキラさんのシユートが決まったあの時のお猿さんですね！」

個々の記憶を述べるぼちとミリリ。大した評価が無い。

猿、バナナを食べ終わり羽から出て背中に移動。

腹を押さえ満足気である。

「彩、ヨーヨーの拾い食いはお腹壊すよ。」

「重要なのはそこじゃないと思います！」

ぼちとミリリのそんなやり取りの中、横になろうとする猿。

「ムキー（ふー、さて羽毛で一休み一休み）」

数秒の間。

「.....」

沈黙が流れ.....

っは！

急に体を起こし周囲の変化に驚く猿。

「ムキ？！（な、なんだお前達はいつからそこに！）」

「よく判りませんがずっと居ましたよ。」

「どうやったらここまで気付かないんだろっね。」

「野良猫がよくそういう反応見せますよね.....」

冥、ぼち、ミリリの順で猿の行動に突っ込む。

「ムキ！（おお、よく見たらさっきの女子に愛いお供までついて！）」

目を見開き、鼻の下が伸びている猿。元々だが。

「目つきがエロいね。」

「存在がセクハラです。」

ぼちと冥は何気に毒舌コンビである。

「こんにちはー。」

外からの声。その場にいた皆が外を見る。

「あら、銀さん^{キン}こんにちは。」

開いた扉から冥の見知った顔が覗く。

カートを引つ張る一人の女がそこにいた。

腰までの長い黒髪を下の位置で軽く縛っている。

大きな瞳に活発そうな雰囲気。

胸元が開き短いスカートから健康そうな足が覗く。

「旦那見なかつたかなあつておもつてね。」

「旦那さん？この辺りでは見かけていないですね。」

銀に聞かれ、答える冥。

「私の知っている人かな、どんな人？」

聞いてみるぼち。

「んーガラの悪そうな鍛冶屋かなあ。」

「・・・怖そう。」

ボソツと言ってしまうミリリ。

「あっあのそういうつもりでは・・・！」

「あはは！ガラは悪いけどイイ男だよ。」

正直な感想のミリリに笑顔で答える銀。

「旦那さんと何かあつたんですか？」

ふと聞いてみる冥。

「んやー喧嘩したら収集品の枝持って行かれちゃってねー。」

「！枝ですか！」

軽く言う銀。即反応を見せる冥。

「銀と喧嘩すると枝折に行っちゃう人なの。ストレス解消かなー。」

「ちよつと問題児だね。」

半ば諦め顔の銀。怒るでもなく思ったことを口にするぼち。

「まさかさっきの・・・！」

枝から出たであろう敵に襲われかけたミリリが、その時の恐怖を思い出す。

「うん？そいえば数時間前に小さいテロあったねー。」

前後の記憶を辿る銀。

「ついさっき喧嘩したからそれは違うかなー。」

「そ、そうでしたか！たたた大変なるシツレイばかりですみませ・・・！」

「いいのいいの。こんなんで怒らないって！」

動揺気味のミリリにケラケラと笑っている銀。

「銀が気にしないんだから、あなたも気にしないの。ね？」

「あ・・・はい！」

銀の見せる明るい笑顔に安心するミリリ。

「んまあ、今頃折っちゃってストレス解消してるかもだし。」

銀。

「旦那さん、お強いですからね。枝運無いですし。」

冥。

「たま達が外行ってるから、枝折ってるの見かけたら飛んでいくよ。

あの子枝嫌いだから。」

ぼち。

「止めに入って逆に注意されそうですね！」

ミリリの順に言いたい放題である。同じ事が起こっていると知らずに。

「あ、銀さん。せっかいですからお菓子持って行ってくださいな。」

「お菓子？」

「はい。喧嘩の後は気分を落ち着かせる甘い食べ物です。」
そう言ってテーブルに向かう冥。

「冥お手製の焼き菓子なんだ。」

「とってもオイシイんです！」

感想をそれぞれ述べるぽちとミリリ。

「クエ！」

ペコペコの彩が間に入る。

「（食べ）と掛けたんじゃないだろうね？」

横目で彩を見る銀。

首を横に振る彩。

「不発だった・・・。」

よく判らないがガツカリしている銀。

「ん？何猿がいないって？」

彩の言葉を通訳するぽち。

「あ！こらお待ちなさい！」

「ムキ！（しまった見つかったか！）」

皆が視線をテーブルに移すと、そこには猿がいつの間にかお菓子を

頬張っていた。

冥が猿に手を伸ばすが避けられてしまう。

猿は残りのお菓子をポケットに詰め込み外に。

ヒョヒョイ

軽やかなステップでこの場にいる人達を避けて行った。

「私達のおやつ！」

「皆さんの為に焼いたのに・・・。」

「こういう光景さつきも見ました！」

「やだ！あのヨーヨー私の足触ってた！」

割と抜かりない猿の行動。

各自怒りをあらわにしたり落ち込んだり感動したり性的嫌がらせに腹を立てたり。

「冥！私と彩に支援を！」

「あ、はいっブレッシング！速度増加！」

キユウウン・・ピシーンッ

「冥ちゃん！銀にも掛けて！一緒に行く！」

「ならカート置いて彩に乗って。二人までなら大丈夫だから！」

銀に言い、彩に視線を移す。

「いいよね？彩。」

首を横に振る彩。

「よし！銀、乗って！」

「うんありがと！」

「ペコペコが凄く嫌がってますが！」

「こういつ時仕えている者は弱いですよね。」

上下関係を目の当たりにして各々感想を述べる冥とミリリ。

振り出しそうな空。しかしその空の下は至つてのどか。

草木がちらほら。森に続く緩やかな道のり。

のほろ。

ヒョヒョイ

ドドドドドッ

騒がしいのは一匹の猿とペコペコに無理やり乗った二人の女。

「おやつ返せ！」

「銀にお触りしていいのは旦那だけなんだから！」

凄く勢いでたつた一匹の猿を追いかける。本人達には重要な事らしい。

「ムキー（食後の運動じゃ）」

ヒョイヒョイと軽やかなステップで逃げる猿。

しかしその距離は、支援魔法のかかった彩によりどんどん縮まってる。

「コールホムンクルス！」

ポンッ

ペコペコの彩の上で銀がホムンクルスを召喚する。

生物の根元を理解し、生命の論理を学んだ者のみか手に入れる事が出来る。

共に闘う仲間である。

可愛らしい蒼い小鳥が小さな羽根をパタパタさせている。

「お？フィーリルか、強いよね。」

彩を手綱でコントロールしつつ、後ろにしがみついている銀に声をかける。

「うん、旦那ほどじゃないけどねー。」

ニコニコしながら答える銀。

「銀はホント旦那さんラブだね。」

「そだよー私が攻めに攻めてようやくだったんだからねー。」

「旦那さん根負けか。」

銀の告白に、動じずいつも通りな調子で返すぼち。

「喧嘩したって言ったけど、何が原因で？」

不意に湧き上がる疑問を投げかけるぼち。

これだけ揺ぎ無い愛情ならば、他に原因があると思ったのだ。

「この子の名前。旦那が気に入らなくてちよつと言い合いになっちゃったの。」

少し寂しそうな表情をする銀。

一度つけた名前は、それ以外の名前では反応しなくなるのである。

「嫁さんが付けた名前に文句言うとは、正直頂けないな。後でデコピンだ。」

女ひいきのぼちは、お仕置きはデコピンと決まっているのである。

「良い名前だと思ったのになー。」

ホムンクルスの小鳥を見ながら話す銀。

「その小鳥何て名前に？」

「哺乳類。」

「全角度から見ても鳥類だよね。」

「うんでも哺乳類。」

「そっか。」

ドドドドドッ

猿を追跡する彩。

その上での一瞬の沈黙。

「良い名前なのにな。」

「だよね、意外性が良いよね！」

なぜか分かり合う二人だった。

そうこうしているうちに猿との距離が間近に迫る。

「真後ろに来たら哺乳類行かせるからね！」

「哺乳類vs哺乳類だね。」

獲物を目の前に、余裕の二人。

その時。

急に彩の追いかける速度が落ちる。

「！支援魔法が切れた？！」

タイミングの悪さに驚くぽち。

直後、みるみる内に距離が遠ざかる。

「後少しだったのにー！」

凄く悔しがる銀。無断でのお触りに、平手でもかますつもりだったらしい

「銀、その小鳥で追跡出来ない？」

「小鳥じゃないの哺乳類なの！」

「ああ、うんそうだね。その小鳥の哺乳類で追跡出来ない？」

ちよっと呼びづらい名前である事に気付くぽち。

「この距離はちよっと・一瞬でも止まってくれば！」

「ムキッキー（ふふふ、女子に負けるほど我は落ちぶれていない様だな）」

距離を置かれ続けるぽち達を尻目に、スタスタと先を行く猿。

なんだかスキップしているようにも見える。

クルクルと回転までつけて何とも腹立たしい。

軽やかに跳ねて着地を華麗に決めようとする猿。

スチャッ

地面に猿の足が付く。
その瞬間。

ドゴゴオオ・・・ン。

鈍い地鳴りが周囲に響く。

「ムキヤ！（な、何だ地震か！）」

着地直後の揺れの為、バランスを崩す猿。

わずかの間、猿の動きが止まる。

「！銀、小鳥で追いかけて！」

「哺乳類！」

「いいから早く！」

「う、うん哺乳類行っちゃって！」

ぼちの気迫に若干押されながらホムンクルスに追尾をさせる銀。

「ムキ！（不覚、こんな着地では点数を取れないではないか！）」

揺れのせいで失敗した着地に悔しがる猿。

ベチコーンッ

隙だらけの猿にタツクルをかます小鳥、の哺乳類。

「ムキユ！（ぬお！無抵抗な年寄になんて事を！）」

ガシッ

猿を摘み上げているのはぼち。彩から降りていた。

いつの間にか追いついてたぼちと銀。

「彩、銀、小鳥の哺乳類ありがとう。」

「クエ〜」

「それほどでも〜あるよ。」

パタパタと飛び回っているホムンクルス。

猿追跡に協力してくれた仲間（名前がややこしいのも居るが）にお
礼を一言。

そして猿に睨みつける。

「そろそろ観念してもらおうかな。」

そう言うぼちの足元に十字型の聖域が現る。

「グランド・クロス！」

「ムキヤ〜（ああ、走灯馬が見える・・・）」

シューウウ・・・。

ぼちの足元にあつた十字型の聖域が、消える。

「嘘だよやんないよ、おやつ壊れちゃうし。」

観念してか気絶してかグツタリする猿。

そんな様子を見ながら笑顔を見せるぼちだった。

「はいおやつ。」

気絶中の猿のポケットから焼き菓子を取り出すぼち。

その中から取り分けて、彩に乗っている銀の手の平にのつける。

「え？こんなにもらっていいの?!」

驚きの銀。何せ両手一杯に焼き菓子があるのだから。

「うん。手伝ってもらったし、冥も銀にあげたがってたしね。」

「そっかー、うんありがと！旦那と仲直りに食べるよー。」

満面の笑みを浮かべる銀。

「よし、じゃあ戻ろうか。銀のカート置いてきたからな。」

銀の笑顔に笑顔で返し、彩の上に乗るぼち。

彩の足が来た道を戻る。

その時。

ポロロン。

どこからか聞き覚えのある旋律が、風に乗ってかすかに聞こえてくる。

「！・・・たまの曲調だ。」

「たま？さつき言ってたけど人の名前なの?」

ぼちの反応に聞き返す銀。

「うん、吟遊詩人やってる私の・・・弟?の名前。」

「んじゃーたまちゃんだねー。そいえばあなたのお名前は？」
「たまは男の子だけどね、私はぽちだよ。」
「んじゃーぽちちゃんだねー。」
「呼び辛いでしょ。」
「ぽちちゃん。」
「水溜りに落ちたみたいだよ。」
「ぽちちゃ。」
「新しいお茶だよ。」
「ぽちーにする!」
「うん、お菓子の名前みたいだけど好きな名前で呼んでいいよ。」
「んじゃぽちー、家戻るー。」
「そだね。」
そんな他愛の無い会話をしながら来た道を戻る。
「少し遠くで曲が聞こえたから、少ししたら戻ってくるよ。」
「たまちゃんのご対面だー。」
「もう一人居るよ、ガラ悪そうなのが。」
「えー?んじゃ旦那と良い勝負かもしれないなー。」
「二人で会ってたら良い感じにやりあつてそうだ。」
そこそこの中している会話を、本人達は知らずにしている。

数時間後に起こる出来事も、知らなかった。

女性サイドストーリー「訪問者」(後書き)

ドキ！女だらけの・・・ではないですが(笑)
ちなみに彩も女の子なので、一人(一匹?)だけハーレムしてます。
ホムンクルスは性別あるんでしょうか・・・。

孤高のサイドストーリー（前）（前書き）

サイドストーリータイプ3です。シリアス要素が高めですので苦手な方は避けましょう（笑）
黄泉のお話です。

孤高のサイドストーリー（前）

振り出しそうな雲行きの中。

森へと進む一人と一匹。

肩までの銀髪、同色の瞳。

黒い布を巻きつけたような格好。そして同色のマント。

「片腕の悪魔」の異名を持つ女、黄泉。

「おーさーんーぽ。」

黄泉に抱えられている緑色の生命体。ぽにん。

周囲を見渡す黄泉。

草木がちらほら、目の前には森に続く緩やかな道筋。

すぐ側にある岩場に向かい、一休みをする。

「あ、よみ〜これ。」

地面に降ろされたぽにんは、急に体を振るわせ始めた。

ポント

ぽにんの口から奇妙な形の剣が飛び出る。

剣の類は通常柄の部分を持って振り回すものだが、それは違った。

刃の切っ先から中央に掛けて軽く広がり、その間にグリップがある。

グリップの部分を握りこみ、肘に掛けて柄らしき部分が伸びている。

その武器の系統はカタールという種類。暗殺者だけが扱える代物。

「ぽにんしまつてたんだっ。」

「.....」

装備を、と思つた黄泉の手が止まる。

「よみ〜?」

腰に持っていた袋を取り出し、中身を漁る。

綺麗な蝶の羽根に術を掛けたと言われる物、蝶の羽。

「それおいしーやつ〜?」

体を弾ませながら寄って来るぽにん。

ペタッ

その羽をぼにんの頭(?)に貼り付ける。
直後。

シユンツ

「あひゃ〜。」

情けない声を最後に、空間へと消え去るぼにん。

その様子を見送る黄泉。

バサツ

マントの位置を調節。前まで包んでいた部分を後ろに流す。
武器を手にし、立ち上がる。

チャキツ

グリップの握りこみが深く、馴染む様に手にフィットする。
ザア・・・。

湿り気を帯びた風が、草木やマントを撫でて行く。

「・・・。」

目を閉じその風を頬に感じる。

・・・それ以外も。

スツ

足を広げ上体を軽く下げ、右腕を胸元の構える。

ザアンツ

構えた腕を水平に、素早く体を捻りつつ風を切る。

ドシユツ

「つつう！」

黄泉のすぐ背後からの声。姿を消して迫っていたのだ。

喰らった衝撃で姿が現る。

振り向き構える黄泉。

その男はローグを極めた者の姿、チェイサー追跡者。

紫を主体にした服装、裾には毛皮がついて派手だ。

同色の短髪に、獲物を狙うギリリとした眼が黄泉を捉えている。

「ひゅう！いい反応だねえ、流石は片腕の悪魔様って所か。」

斬られた胸元を押さえつつ、大した苦痛も無い模様。

「どんな怪物かって思ったら、随分とまあ可愛い顔してんじゃんか。」

「……。」

「よし決めた！アンタを頂くぜ。」

大きな刃渡りの短剣を構え、男は言葉を続ける。

「体も・命もな！」

ザンツ

地を蹴り距離を縮め、黄泉の懐に飛び込む男。

胸元に狙いを定める。

ヒュッ

刃が届く寸前、後方に下がる黄泉。

その足で前方に、男の目の前に迫っていた。

「つと！」

思った以上の反応速度に、軽く下がり武器を構える男。

大きく武器を振りかぶる黄泉。しかしその速度は隙を見せない。

ギギイインツ

重く早い攻撃。

男は短剣でその攻撃を受け止めていた。

ピシッ

「うえ！？」

短剣にヒビが入り、驚愕の男。

その間にも、次の攻撃モーシヨに入る黄泉。

その動きを見て焦る男。

「……ではなかった。」

ザッ

ニヤリと笑い、黄泉の懐に。

「！」

まともな武器も無く飛び込む男に目を見開く黄泉。

ガシッ

すでに振り降ろしかけていた右腕を掴まれる。

「っは！もちつと暗がり行つて楽しもうぜ？色々とな！」
ビュオンッ

男のセリフを合図に、二人の姿が空間へと消える。

町外れの古びた一軒家、その中には二人の女。

「ぼちさん達を待ちましょう。きっと大丈夫です。」
パタン

冥が開いていた扉を閉める。

「凄い勢いでお猿さん追いかけて行きましたからね……。」
置き去りになつたカートを見ながら話すミリリ。

「……あ。」

思い出したように冥が声を出す。

「？冥さんどうしたんですか？」

気になり声を掛けるミリリ。

「お菓子を作る材料が教会に……。」

新たにお菓子を焼こうと思つていたようだ。

「ワープポータルで、すぐ教会に行けます。」

「わーぷぼーたる？」

初めて聞く単語を聞き返すミリリ。

「はい、空間移動ですね。」

冥はうなずき、常備している小物入れから小さな青い石を見せる。

「わあ……何だかキラキラしてますね！」

見る物すべてが目新しい物に見えるミリリ。

「術者に掛かる反作用を、この石が代わりに受けてくれます。」

そう言うとき冥は石を持ち、床に向かって何かを唱えている。

すると床が丸い線を描き、放出するような光を放つ。

パリ……ン

手の中の石が音を立てて弾ける。

「！石が壊れました！」

「魔法の反作用の身代わりです。さ、その中に。」

「えええ？！大丈夫なんですかこれ！」

光の中へと促す冥に驚くミリリ。

「はい。では一緒に。」

ミリリに近づき軽く抱きしめる冥。

「わわ！」

急な抱擁に焦るミリリ。

冥はそのまま光の輪の中に寄せ、一緒に中心に乗る。

ヒュンッ

そして人気のない小屋が残った。

森の中。

湿った風により木々がざわめき、不気味さを増す。

スタッ

マントをなびかせその場に現れたのは、黄泉。

「！お前は片腕の・・・！」

背後から掛けられた男の声に振り向こうとする黄泉。

「おっと！」

ザッ

突如その場に現れたのは、さっきの紫の服の男。

「よっ！」

ヒュオンッ

掛け声とともに腕を振る。

バサッ・・・ゴトンッ

黄泉が身に着けていたマントと武器が外され、地面に落ちる。

「スパイダーウェブ！」

左側から女の声が響くと共に、黄泉の手足に薄細い糸が絡みつく。

糸は地面と繋がっており、黄泉の動きを固定する。

「何だ居たのかよお前ら。」

紫の服の男が残念そうな声を出す。

「何を言っている、片腕の悪魔の討伐だと言っただろう。」
白い聖職者の服を着た男が冷静に答える。

金色の少し長めの髪。無表情な切れ長の目が、紫の服の男を見る。

「こんな小娘がねえ・私のほうがずっと美人じゃない。」
教授の女が呆れた様な声を出す。

腰までの金髪が柔らかかそうに揺れ、優しそうな目が嫌味に黄泉を見る。

細い毛皮を首に巻き、チャイナ服の様な赤い服。

「熟れる前に頂くのがこのジク様よ！」

にやりと笑う紫の服の男が答える。

「とりあえずさっきの何とかつてのを一回掛けてくれよ。」

「スしか覚えてないじゃないの。」

紫の服の男、ジクに呆れ顔を向け、術を掛けなおす女教授。

黄泉を縛り付けていた糸が、強化される。

「っと！」

ジクは黄泉に手を伸ばし、首元を掴む。

そのままの勢いで地面に叩きつける。

ドンッ

鈍い音がし、倒れた黄泉の上にジクがまたがる。

そしてさっきの戦いでヒビ割れた短剣を取り出す。

ズシュッ

その刃を黄泉の右手に突き刺し、貫通し地面に固定する。

「うわ・相変わらず鬼畜ねジクは・。」

またかという表情の女教授。

「どうせ狩るんだからいいじゃん。大事なのは顔とか・ら・だ」

目の前の獲物に、期待に胸を躍らせるジク。

「まったく・お前は悪魔でも怪物でも女であれば食いつくのだな。」

男聖職者も呆れ顔。

「ついでにアレ掛けてくれよ。」

ジクが聖職者の男に向かって言う。

「タレか？」

真顔で言う男聖職者。

「タレ付けて女食わねえよ！」

「付けなくてもお前は女食いだしな。」

皮肉な表情を見せ黄泉に向かって術を唱えると、空气中に磁場が発生し黄泉に掛かる。

舌を麻痺させ、術等が使えなくなるという言語封じ。

「さんきゅー！これで心置きなくキスから始められるぜ！」

ますます期待が高まるジク。

「何あなた、律儀にキスから始める気？悪魔の小娘に？」

ジクが来てからずっと呆れ顔の女教授。

「何言つてんだ。キスに始まりキスに終わる！紳士なら当然だろ？」

女教授に向かってこだわりを言うジク。

「剣で串刺しにしてキスをする紳士が何処に居る。」

無表情に正論を言う男聖職者。

「細かい事にすんなって！」

そう言ってから黄泉を見るジク。

「んだよ、心配すんなって。狩るのはお楽しみの後にしてやっから

さー！」

ニヤニヤしながら黄泉の上に覆いかぶさるジク。

「あーもう見せないで欲しいわそういうの。」

呆れ顔を通り越し嫌そうな顔の女教授。

「ウォールオブフォグ！」

女教授が唱えると、黄泉とジクの周囲を黒い霧が囲む。

「音声だけでお楽しみ下さい、だな。」

「余計なこと言わなくて良いの。」

男聖職者の言葉にピシヤリと言い放つ女教授。

ザッ

その場に現れたのは修行僧^{モンク}。

緑掛かった短髪。目隠しをしており表情は読み取れない。素肌白い上着、下半分は黒っぽいデザインの服装。

「遅かったじゃないかダクツ。奴はすでに来ているぞ。」

「奴が？」

男聖職者に名を呼ばれ修行僧、ダクツが聞き返す。

「まあお楽しみ中だけれども。」

黒い霧の中心を思い心底嫌そうな顔をする女教授。

「・・・おかしいですね。」

ダクツが気配で周囲を読み取る。

「ジクの無類の女好きは確かにおかしいな。」

「ではなくてですね？」

「なによ？」

男聖職者の言葉を否定し、女教授の反応に返すダクツ。

「俺、ここまでずっと歩いてきたんです。」

「律儀だな。」

「静かなものでした。だからまだ遭遇していないものだ。」

淡々と語るダクツ。

「だつて動き封じたもの。」

交互に間に入る男聖職者と女教授。

「抵抗しましたか？奴は。」

「何が言いたい・・・先に言え！」

回りくどい言い方に苛立ちを覚える男聖職者。

「・・・チャンスの到来を、待っているとしたら？」

ダクツは目隠しで見えない表情で、言った。

シュンッ

町外れの教会の前。そこに現れたのは冥とミリリ。

「すごい！本当にすぐ何ですね！」

初めての体験に驚きを隠せないミリリ。

その様子を見て微笑む冥。

「楽しそうで何よりです。．．あら？」

「どしました？冥さん。」

ミリリの足元を見る冥。ミリリも視線で追う。

「あつ。」

気の抜けた声。

「きゃあああああ！」

足元から声が聞こえてくるとは思わず、叫んでしまつミリリ。

「ミリリさん、一歩だけ横に。」

優しく声を掛ける冥。

「ええうつつはい！」

ズザザッ

動揺すると激しいミリリ。勢いで十歩ほど下がっている。

「ぼにん。貴方はそこで何をしているんですか？」

足元に居た物体に癒しの魔法を掛け、しゃがみ込む冥。

「あつよみがぶんつてとんできづいたらぼにんここにいたの。」

「

「貴方が飛ばされたのだと思います。」

緊張感0の緑色の生命体と冥、難なく会話をしている二人(?)を

みて戻ってくるミリリ。

「あ！もしかしてぼにんさん？」

「あゝおねーさんだ。」

ぼにんもミリリを発見して体をプルプルさせている。

「また会えるとは思いませんでした！」

再会の喜びを分かち合うミリリとぼにん。

「？面識があるのです？」

意外そうな表情の冥。

「はい！少し前に知り合いました！冥さんもお知り合いだったんですね！」

少々興奮気味のミリリ。

「びしびしってところを、おねーさんがぶんってなってぶすってしてくれたの。」

少々興奮気味（かどうかは特定不能）のぼにん。

「敵に襲われている所をミリリさんが助けたのですね。」

冷静に的確な解釈をする冥。

「ぐーぜんですよーぜん！・・冥さん？」

恥ずかしがるミリリ。そしてふと冥の表情を見た。

「！あ、いえ、何でもありません。」

ハッと我に返り、ミリリの目を見つめる冥。

「この子と一緒に・・女性もいましたか？」

気を取り直し、真っ直ぐミリリを見ながら問いかける。

「あの・・左腕の無い人を・・あ！」

出会った記憶を手繰り寄せるミリリ。そして他の事も思い出す。

「どうかしましたか？」

「あの・・その人を探している人も居ました・・。」

冥の言葉に、口籠りながら言葉を続けるミリリ。

二人組の男、白い服の聖職者に暗殺者。確かに片腕の無い女を捜していた。

ミリリの話聞いた冥の表情が沈んでいく。

「・・・鴉様の所に行きましょうか。」

「え？材料を取りに行くんですよね？」

「・・・ご報告を。」

立ち上がり、教会の扉まで向かう冥。

「・・さつき何で辛そうだったんだろう・・ねえぼにんさん？」

ミリリは足元に居るはずのぼにんに話しかけた。

孤高のサイドストーリー（前）（後書き）

前のサイドストーリーと違って前後話に分かれてしまいました。
収まりきらなかったんですorz
今回はがつつりバトルシーンです。

孤高のサイドストーリー（後）

「ぐえ・・・っ」

ドサッ

「!？」

その音と声に、三人は黒い霧の中央を見る。

同時に霧が晴れ、一人の人物がゆっくりと上体を起こす。

ジクは口から血を吐き出しうつ伏せに横たわっている。

右手が刃で地面に串刺しになっていた人物、黄泉。

根元まで刺さっていた短剣の鞘をその手で掴み、地面から抜き取る。

刺さったままの手を口まで運び、噛み付いて短剣を抜く。

ズルリ・・・ポタタ・・・

抜いたその場所から血が流れ出す。構わずその手で短剣を掴む。

苦痛の表情も無く、流れ出る血を舐め取る。

ポタ・・・シューウ・・・

滴り落ちた血が、地面で煙を上げる。

「・・・く・・・。」

男聖職者がようやく声を搾り出した。

「早く・・・やれえええ!!！」

その言葉が合図の様に、時は動き出した。

「っはああ!気功!」

周囲に気を溜め手に力を込めるダクツ。

「アスムプティオ!」

フォオン・・・

男聖職者の術により、聖なる光の加護を彼らに掛けていく。

「そ、ソウルストライク!」

ドシュドシュッ

女教授が黄泉に照準を合わせて気を放つ。
傷口を舐めていた黄泉が顔を上げる。

ドゥンッ

爆発音、しかしその中に黄泉は居なかった。

ザシューッ

「きゃああつ！」

入れ違いに血まみれの短剣を女教授が喰らう。

同時に鎌の様な衝撃波がダクツを襲った。

「っ 残影！」

それを残像が代わりに受ける。

黄泉は足元にある武器に手を伸ばす。

ズシャアッ

その先にあつた武器が弾かれる。ダクツが滑り込みで蹴り飛ばしたのだ。

「はあつ！」

体を起こし気を抱えた右腕を突き出し黄泉の腹部を狙う。

ガシッ

その腕を黄泉が掴む。掴まれた部分が黄泉の血により皮膚が煙を上げる。

「ぐっ！」

苦痛の声を上げるダクツ。

ミシミシと骨が軋み、溶かされた皮膚も悲鳴を上げる。

その間もダクツは反撃を狙っていた。

左手を黄泉に突き出す。

「っ 指弾！」

ドゥンッ

その手から複数の気弾が、至近距離で黄泉を襲う。

衝撃で上半身を仰け反らせる黄泉。しかし表情は変わらない。

「っ フロストダイバー！」

ピシンッ

飛んできた短剣による腕の傷を抑えながら、氷の呪縛魔法を掛ける女教授。

黄泉の足元から上にかけて、氷漬けになっていく。

ブンッ

「うわ?!」

掴んでいたダクツの腕を放り腰を落とし、腕を足元に向かって振る。

ザンッ パリインッ

その腕から放出される衝撃波は、氷の結晶を破壊した。

直後、男聖職者が黄泉に向かって声を張り上げる。

「武器ならこつちだ!」

声に反応し、振り向く黄泉。

武器は男聖職者の足元にあった。武器を目掛けて地を駆ける。

「くう・気功!」

痛みを堪え、気を周囲に集めるダクツ。

ザアンッ

鎌のような形の衝撃波を放つ黄泉。

「ニューマー!」

目の前に迫る衝撃波に遠距離攻撃無効の領域を設置する。

そのすぐ後ろに黄泉も迫っていた。

「ファイアーウォール!」

ゴオオオッ

炎の壁が黄泉の目の前に現れる。

女教授が見計らって設置したのだ。

スピードに乗った足は、止まらない。

ジュウッ

男聖職者の目の前で、黄泉の黒い影が炎の中に消える。

同時に設置した領域も消える。

「っマントか!」

目の前で焼ける黒い布を見つけた瞬間、男聖職者の背後に気配を感じた。

背後の気配は黄泉だった。

腕を振り上げ、そのまま拳を叩きつける。

「セイフティウォール！」

キュウンッ

女教授が新たな防壁を男聖職者の足元に設置する。

ガガンッ

攻撃無効の防壁の為、黄泉は透明な壁を攻撃する形になる。

「グロリア！イムポシティオマヌス！」

振り返りながら黄泉の攻撃が届く前に、男聖職者は次々と術を唱えた。

一人に、神の加護が掛かっていく。

黄泉の素早い攻撃が、防壁の効果を早々に打ち砕く。

腕を大きく振り上げ、力任せに叩きつけようとする。

「ヘブンズドライブ！」

ゴゴゴッ

女教授が唱えると地面が槍のように鋭さを持ち、その周辺を串刺しにする。

地が歪み足元のバランスを崩した黄泉は、それでも男聖職者の胸に拳を当てた。

ドンッ ドシュッ

「がっ・・・！」

聖なる加護を受けた体にも、黄泉の血塗られた拳には激痛が走った。同時に黄泉も、大地の攻撃により足が串刺しになる。

男聖職者は骨が軋むのを感じた。聖なる加護が無ければ確実に折れている。

「っぐ・う・っレックスエーテルナ！」

キイインッ

苦しげに胸を押さえ、男聖職者が黄泉に術を掛ける。

対象の受ける衝撃が二倍になるという物。

直後、大地の槍は地に帰り、黄泉も串刺しから解放される。

両足のあちこちから血が流れる。それでも黄泉の表情は変わらない。

「お待たせ、しました。」

激しい攻防戦の中に聞こえた、静かな声。

声のする方に振り向く黄泉。

声はダクツから聞こえた。

淡い小さな光がダクツの周囲をまわり、パチパチと火花を散らしている。

男聖職者が唱えた術の中に、攻撃力を高める魔法があった。

その魔法を備えたダクツがゆっくりと黄泉に近づく。

「待ったわよ！とつと決めちゃって！」

甲高い声を上げる女教授。

ダクツは右腕を前に出し、黄泉に狙いを定める。

チャキツ

男聖職者の足元にあった武器を拾い上げ身に付ける黄泉。

「今更装備しても無駄だ・・・所詮は時間稼ぎの・・・余興に過ぎん。」

息を切らしながら男聖職者が言葉を放つ。

黄泉、ダクツの両者が一瞬の間を置く。

共に狙うは、一撃必殺。

先に動いたのは、黄泉。

ザンツ

負傷した足で地を蹴り、一気に間を詰める。

空を舞う蝶の様に武器を振り下ろす。

攻撃はダクツに当たる・・・はずだった。

ガシンツ

ダクツは刃先を両手で止めたのだ。

気を極限まで高めた者の反応速度が、黄泉の太刀筋を捉えた。

「動きのきれいな技・・・でしたね。」

一言呟き、ダクツは大きく息を吸い込んだ。

「お返しです・・・はああああ！！」
思いを吐き、気を極限まで高めさせた拳を構えて。

「阿修羅霸王拳！！」

ドゴゴオオ・・・ン。

「きゃっ！！」

「うわわ！地震です！」

地響きに驚く冥に、足元がぐらつきよろめくミリリ。

その足元にぼにんは・・・居なかった。

ボタンツ

いきなり開く教会の扉に、その前に居た冥はぶつかりそうになる。

ブニユウツ

何かが潰れたような音がした。

「やはり君達か！二人とも無事か?!」

出てきたのは聖職者、鴉。

「はっはい！ヨロヨロしただけです！」

「私も無事です。」

返事をする二人。同時に地響きも収まる。

「そうか良かった・・・しかし何故ここに？」

「お菓子の材料を取りに。そしたら・・・あら？」

冥が周囲を見回すと、鴉は扉の下にびろーんと広がっている緑色の存在に気付き声を掛ける。

「頼む、学習をしてくれお前は。」

しゃがみ込み、広がったぼにんを手で形を整えながら話しかける鴉。

「あひゃ〜びつくりしたの〜。」

いつの間にか扉の側に居たぼにん。そして扉が急に開き潰れた。

「お前の広がり具合にびつくりだ・・・所で。」

一呼吸置き、再び話しかける鴉。

「相棒はどうした。さつき一緒にいただろう。」

「とんでいなくなっちゃったの。」

険しい表情の鴉にいつも通りのぽにん。

「さつき？来ていたのですか？」

冥の問いかけに頷く鴉。

しばしの間。

「……冥とミリリは教会に居てくれ。」

そう言い鴉は立ち上がる。

「あ、あの……一体……」

話が飲み込めないミリリ。

「後で話す……今は行かせて欲しい。」

そう言うのと鴉は何かを唱え、その場から消える。

「……教会に行きましょう。」

静かに話しかける冥。

「あの……はい……」

言われた通りについて行くミリリ。

「あゝぽにんのごはんは？」

把握も何もしていないのはぽにん。それぞれ教会に入っていく。

そしてその場には誰も居なくなつた。

「……つつ！」

よるめきながら立ち上がり、地面にめり込み横たわつた黄泉を見る男聖職者。

大の字に倒れ、右手から血が流れ腕が変な方向に曲がっている。

目は虚ろで動く気配すら感じられない。

「……殺つたの……か？」

自分や女教授、ダクツに癒しの魔法を掛けながら聞く。

「上半身の骨は砕けたでしょう……はあ……ですが……」

大技には大量の精神力を必要とする為、ダクツも息が切れている。

「ですが・・・何なのよ!」
ヒステリックに声を出す女教授。肌につけられた傷が不機嫌の元である。

「俺の阿修羅・・・防がれました・・・。」

「馬鹿な!? 確実に当てていたじゃないか!」

驚愕の男聖職者。その言葉に首を振るダクツ。

「ええ、その通りです・・・その直後。」

一呼吸置いて続けるダクツ。

「奴の体が少し下がったんです・・・衝撃に合わせて・・・!」

「・・・あの技を耐えようとした・・・のか。」

苦い顔をしながら黄泉を見る男聖職者。

「ふん! 私の体に傷つけるなんて!」

そう言うのとツカツカと黄泉の側に寄り蹴飛ばす女教授。

「女性がその行動・・・あまり頂けませんね。」

音と気配で行動を察し、注意するダクツ。

「いいから! しっかりとどめさしちゃってよね!」

女教授が術を唱えると、ダクツの精神がみるみる落ち着いていく。

「おい、ジク生きてるか? 一緒に止め刺すぞ。」

横たわっている黄泉の足元にいるジクに呼びかける男聖職者。

ピクリともしないジクに、蘇生術を試みる。

「はあ!」

ドオンッ

気を溜め止めの一撃を準備するダクツ。

「あら?」

黄泉の側に有るものに目を留める女教授。

蹴飛ばした時に腰の袋から零れた小瓶。

「お菓子なんて入れて・・・馬鹿みたい!」

その小瓶も蹴ろうと足を出す。

ガシッ

「え?!」

その足を、止められた。

黄泉の血まみれの右手が、女教授の足を掴んだのだ。虚ろな眼が、女教授を見る。

掴んだ部分を血に染めつつ、力を込める。

「あ・・・いやあああああ!」

ミシミシと骨が軋む音。果たして自分の骨の音か女教授のものか。

「な・・・っ!?!」

「どっし・・・。」

同時に気付くダクツと男聖職者。

ドサッ

「きゃあっ!」

掴んでいた女教授の足を開放すると、そのまま女教授が倒れる。

ぎこちない動きの上体をゆっくり起こす黄泉。

動くたびに骨の擦れる音が聞こえ、関節が増えたようにぐにゃりと傾いている。

「あ・・・阿修羅・・・霸王・・・!」

目の前の信じ難い状況に、ダクツはとっさには動けなかった。

ザンッ

上体を起こした状態から、素早く戦闘態勢をとる黄泉。

骨が折れ砕けた腕と上半身、血を流した右手。

そこから繰り出される技は、まさに「悪魔」そのものだった。

ザアア・・・

湿った風がその場にあるすべての物を撫でて行く。

ポタ・・・。

その場に立っていたのは、武器を備えた右手から血を流す一人の人物。

銀髪が風に揺れ、頬を撫でる。

「……………」

周囲を見渡す黄泉。

うつ伏せの男聖職者。

横たわる女教授。

仰向けのダクツ。

皆服も体もボロボロである。

ピクリとも動かないジクは、生きていないのかもしれない。

「……………は……………あ……………っ！」

その中で一人苦しげに立ち上がる。

「……………あなた……………は……………何者です……………か……………？」

荒い呼吸を堪えながら口を開くのは、ダクツ。

「その体で……………動けるわけが……………生きていられるわけが……………ない……………」

一言一言をゆつくりと吐き出す。

その体。

腕は関節以外で曲がり、肩からぶら下がっているだけ。

上半身は骨が折れ支えを失い、右腕の重みで右寄りに曲がっている。

負傷した足でかるうじてバランスをとって立っている。

きつと蘇った死者は、そんな動きをするのかもしれない。

「つく……………ワープポータル！」

また一人立ち上がる。男聖職者だ。

そう唱えると、地面の三箇所光の輪を設置する。

それぞれ男聖職者、女教授、ダクツのすぐ下に輪が広がる。

「一時……………撤退です。」

ポツリと呟くダクツ。

「次があれば……………狩る。」

男聖職者がそう言い放つと、光の輪が三人を吸い込む。

「あ、忘れ……………」

ヒュンッ

ヒュンッ

謎な一言を残し、三人は光の中へと消える。

周囲に静けさが戻った。

消え去った三人を見届け、黄泉は視線を地面に移す。

男が一人倒れたまま。謎な一言はこれだったのかも知れない。

黄泉はその先の地面を見る。

焼き菓子の入った小さな小瓶。

ザツ・・・

少しずつ前に進む黄泉。

歩くというよりは、足を前に動かしてかろうじて進んでいる。

先刻まで暴走していた者とは思えないくらいに、ぎこち無さ。

途中で倒れている男、ジクの手に黄泉の足が当たる。

バランスを崩し、前に体が傾く。

ゴトツ

そのまま地面に「落ちる」黄泉。

支える腕も受身を取る事も無く。

それでも視線は小瓶から離れなかった。

手を伸ばせば、届く場所。

折れ砕けた腕では伸ばす事も出来ない。

肩と血だらけの手だけで動かす。

ズリ・・・

関節が無い腕が、地面を這う。

地面が皮膚を削り汚していく。

構わず這うように腕を動かしていく。

コツン・・・

指先に小瓶が触れる。

その衝撃で小瓶が転がる。

遠ざかる小瓶を、血で汚れた手が追う。

今度はしっかりと手の中に納まる。

「……………」

手の中で感触を確かめる。

少し前まで所持していた人物の、温もりを想い出す様に。
そしてゆっくりと……目を閉じた。

ザッ

その場に、森の中から一人の男が現れる。

「……何だこりゃ……」

パイプを啜えつつサングラスをはずして惨状を見る。

男の後ろには、「鍛冶屋」「匠」と書かれたカートがあった。

孤高のサイドストーリー（後）（後書き）

いつも後書きに困ります（告）

女の子に乱暴は良くないですよね（説得力無）

その後のサイドストーリー（前書き）

その後のアキラ達他です。

その後のサイドストーリー

「いやあマジでやばかったわ。棺おけに片足突っ込む所だった。冷や汗気味のアキラ。それを見ていて呆れ顔のたま。」

「自分でやつといてよくいうよ・・・。」

鍛冶屋、匠と別れたアキラ達。

さっきまでの緊張は何処へやら、のどかな道なりを歩く。

「お前が突っ込んで行くからだろ！」

「いや〜つい条件反射で。」

「条件反射で喧嘩売るな！」

頭を掻きながら答えるたまに突っ込むアキラ。

「お前はとりあえず落ち着け。まずそっからだ！」

「ええ？こんなに落ち着いているのに！」

心外だと言わんばかりのたま。

「落ち着きと考え無しは違う！」

「人の事言えないくせに・・・。」

遠慮無い言葉のアキラにぶつぶつと文句を言う。

「まあ、嫌いなモンだからしゃーないんだろっけどな。限度があるぜ？」

さっきの古木の枝での拒絶っぷりを思い出し、最後に付け加えるアキラ。

「・・・うん。」

大人しく返事をするたま。

「・・・。」

しばしの沈黙。

そして。

ヒュオンッ

「え!？」

ギギインッ

いきなりたまの目の前に短剣が襲い掛かり、とっさに楽器で防ぐ。

「な、何するんだよアキラ！」

ギリギリと短剣を押し付けてきたのはアキラ。

「反応はええな。」

真顔でたまを見据える。

「は、反応しなかったらやられちゃうじゃないか！」

「まあな。」

ギインツ

楽器でアキラの短剣をはじく。

ザッ

両者距離を置き武器を構える。

「な・・何で攻撃してきたんだよ・・。」

呼吸を整えながらアキラに問いかけるたま。

「野郎が落ち込む顔は嫌いだ、うっぜえ。」

「えええ！？そんな理由で攻撃されるのは理不尽だよ！」

驚きアキラに文句を言ったたま。

「だろ？」

そんなアキラはニヤリと笑う。

「う？」

「嫌いつてだけで責められるのは理不尽じゃね？」

「・・・！」

「ま、程度問題ってこつた。」

そう言い構えていた短剣を降ろすアキラ。

「・・・アキラに。」

ポソッと呟くたま。

「あん？」

「異議ありだよ！」

ダダッ

駆け足でアキラに寄り、楽器を振り上げる。

「おっと！」

たまの楽器による攻撃を後方に下がり回避する。

楽器を振り下ろした時のたまの表情は、なぜか得意気だった。

ビュンツ

楽器の先から矢が射出される。

「っ！」

さつき以上に至近距離での矢の攻撃。

顔を傾けスレスレで矢を避ける。

「・・・ばつか近すぎだろ！」

突然の出来事に今度はアキラが被害者(?)である。

「これでも当たらないって・・・やっぱ凄いや。」

「さすが俺だろ？ってそうじゃねええええええ！」

感心するたま。ノリツツコミのアキラ。

「異議って何だ異議って！攻撃するのが異議の申し立てか！」

「うっん何となく言ってみた。」

さらっと言い放つたま。

「お前の発言と行動に異議ありだ！」

「何かかつこいいでしょ？」

「そんなんで俺を試すな！」

突っ込みが冴えるアキラ。

それを見てふつと笑みを見せるたま。

「ねえアキラ。」

「何だよ！」

まだ興奮が収まらないアキラ。

「僕アキラが好きだな。」

「・・・」

無言でたまに歩み寄るアキラ。

ペチツ

「あ た っ」

頭を叩きそのままたまの額に当てる。

「知恵熱か？」

「誰が頭の足りない子だよ！」

アキラの手を払うたま。

「俺芸人は好きだがゲイ人は憤んでお断りしている。」

「ソツチ系の話でもないよ！」

「実は女だったとか。」

「ちゃんと喉ぼとけあるよ！」

道のと真ん中で戦闘かと思いきや、よく判らない漫才を（自覚無）
繰り広げる二人。

「まったく・変なアキラ。」

「お前が！好きとか変な事言うからだろ！」

本気で拒否反応のアキラ。

「あのねアキラ？」

半ば呆れた顔をし、アキラを見るたま。

「好き〓LOVEじゃないんだからさー。」

「あ、ああ。そうなのか。」

たまの言葉に少し落ち着きを取り戻すアキラ。

「好きって言われる状況下にまったく縁が無いからなあ。」

「今君はとて不憫な事を言った。」

哀れみを込めた表情をアキラに向けるたま。

「うっせえよ！」

「とにかく！」

コホンと咳払いをし、話を続けるたま。

「こうやって体張って話したり、共感したりっていうのが嬉しくて
さ。」

「共感してたら攻撃しねえだろ。」

「僕の周りにはそういうぶつかり合いの話が出来る子、居なかった
からさ。」

「俺の周りには話を時折スルーする奴も居なかったぜ。」

「一緒に居て楽しいって思ったんだ。で、好きなわけ。」

「そうそう俺も……って言うワケねえだろ！話を聞け！」

たまの語りによる温和な雰囲気、アキラの正当な突っ込みで台無しである。

「ええ?!」

予想外のアキラの反応に驚くたま。

「ここは「うん俺もなんだよね」「って言うべき所だよ！」

拳にぎって力強く言うたま。

「弾むように言わねえよ！キャラ変わってるし！」

拳握って力強く拒否をするアキラ。

「でも、楽しいでしょ？」

「……。」

しばし考え込むアキラ。

「……まあ、退屈はしねえわな。」

今までの行動を振り返り、思ったままを言う。

勘違い。喧嘩。揉め事の仲裁。

ろくな事が無かったが、退屈しないのは確かだった。

「ほら〜だったら好きって言う好きって！「たまが好きだー」って言うー！」

「うっわ有り得ねえ……。」

ハイテンションのたまに、絶望的な表情のアキラ。

「あ、僕ソツチの気無いから。」

「俺も無えよ！だったら例えでも出すんじゃねえ！きめえだろ！」

「ちなみにアキラの事は……。」

たびたびスルーされるアキラ。仕様らしい。

「サイドメニューくらい好き。」

「基準が判らねえ。」

「ぼちが定食でーミリリさんがデザートかな！」

「じゃ俺は「物足りない時にあればいいかなー」LVだなきつと。」

「鴉と冥は定食とデザートのお代わり。」

「サイドメニュー出番なくね？」

「・・・あ。」

「瞬考え、盲点(?)に気付くたま。」

「あ。じゃねえよ。」

「ど、ドリンクバーもつけるから！」

慌てて次の案をだす。

「何のサービスだよ！」

「じゃあ氷もつけるね。」

割って入る女の声。

「付いてなかったのかよ！」

「クエ〜」

「食わねえよ！」

とっさに突っ込んだが、途中からたまが話していない事に気付くアキラ。

「あん？」

「あ、ぼちだー。どうしたの珍しく彩に乗って。」

いつの間にかアキラ達の後ろに居たぼち達。

ペコペコの彩の上に乗る、アキラ達を見下ろす。

「仲直りのおやつを取り返してた。」

ぼち。

「そっかー大変だったねー。」
たま。

「悪い、状況がさっぱりなんだが。」

アキラ。

「あのねー銀の哺乳類が体当たりで活躍したの！」

ぼちの後ろに居た女。銀。

「・・・俺が知恵熱出そつだ・・・。」

この後の展開を想像し、頭に手をやるアキラであった。

森の奥。

男が二人。血を吐いてうつ伏せに倒れている追跡者チェイサーに・・・。

「ジク、起きてっか？」

しゃがみ込みその男に呼びかけている鍛冶屋ブラックスミス。

・・・。

返事は無い。

「世界の女達がお前を呼んでるぜ？」

パイプタバコを吹かしつつ更に呼びかける男。

ピクッ

ジクと呼ばれた男が微かに反応する。

「ふん・・・相変わらずな奴だな・・・。」

呼びかけた男は立ち上がり、傍に置いたカートの中に手を入れる。

一枚の葉っぱを取り出し、それを手で破る。

するとうつすらと天使が舞い降りたような幻覚が見える。

「この無類の女好きで甲斐性無しでどーしようもない男に、今一度生の権利を！」

男が呪文（皮肉）を唱えると、天使の幻覚は倒れている男の上に着地した。

天使の幻覚は持っていた杖を振り、直後消滅した。

ピクッ

「・・・う・・・俺様の・・・女達・・・。」

倒れている男、ジクがうめき声を上げる。

ツポン

ジャババババツ

その顔にありったけの白い水が降り注ぐ。

「っだ・・・ぶはあ！」

ガバッと起き上がり、顔にかかった水を腕でぬぐい辺りを見渡すジク。

「よ、目え覚めたかよ？」

空っぽのビンを持った男が声を掛ける。

「くはあーっ！目え覚める前に死ぬつての！タコ匠！」
びしょ濡れのジクは男、匠に怒りをぶつける。

「はは！回復剤ぶっかけなくても良かったみてえだな。」
匠はしゃがみ込んでジクと視線を合わせる。

「顔にかけんな！森で溺死とかマジありえねえ！」

「半年ぶりの再会の友人は森で溺死。犯人は不明。」

「おめーだおめー！！んな事すんのはおめーだけだつての！」

「まあまあ。んで？何やった、ここで。」

ジクをなだめ（効果無）周囲を見回し問いかける匠。

地面は大きくえぐれ血の跡が広範囲に付いており、乱闘を繰り広げた様な場所。

「おおー、だいぶ暴れまくったみてえだなアイツ。」

「アイツ？」

「片腕の悪魔」さ。」

ジクは気を失う前の記憶を手繰り寄せる。

初めて目の当たりにした「片腕の悪魔」は銀髪の女だった。

鋭くジクを見据える眼に整った顔。

華奢な体からは想像出来ない程のスピードと破壊力。

無類の女好きであるジクにはたまらない存在である。

「ほー、んでジクはその女にやられたと。」

感心を込めて言う匠。

「いやあ完全に油断した！キスしたら死ぬとか！」

悔しさ半分興奮半分のジク。

「・・・あほだなマジで。」

「やあらかいなあとか思ってたらよ、急に舌と喉に焼ける様な痛みがさー！」

「やわ・・・何触ってんだてめえは。」

本気で呆れ顔の匠。しかし想像しかけて軽く照れ顔でもある。

「んとき。」

ジクはそう言う周囲の土を少し集め、片手に収まる位の小山を作

る。

「こんくらい！」

「誰が胸の大きさを表せと言った。」

得意げなジクに真顔で突っ込む匠。

「だって匠が・・・。」

言いかけた言葉を呑み、一瞬考え込むジク。

そして匠の顔をまじまじと見つめる。

「んだよ？あんま見んなよ穴開くだろが。」

冗談混じりにいつもの調子でジクに話しかける匠。

「俺がさ。」

喜怒哀楽の激しいジクだが、この時に限っては真顔だった。

「・・・どした？」

そんな変化を感じ取る匠。

「「片腕の悪魔」って言った後さ。」

「ああ、名前しか知らんがね。それがどした？」

「だよな？俺も初めて会ったんだもん・・・で。」

「何で「女にやられた」ってわかったん？」

「・・・何だこりゃ・・・。」

パイプタバコを咥えサングラスをはずして惨状を見る男、匠。

地面が大きくえぐれ、血の跡が物語る様な場所に倒れている男女二人。

「!?!?ジクじゃねえか!」

知合いを見つけ駆け寄る匠。すぐ傍に倒れてた女が視界に入る

「!?!?。」

ジクに駆け寄る匠の足が止まる。

左腕が食い千切られた様にこっさり無い女。

戦いの傷跡か、服も体もボロボロである。

血に塗れた右手が何かを掴み、動く気配が無い。

(この服装は・・裏切りの暗殺者)

匠はジクを見た。

血を吐いている以外の外傷は見当たらない。

しやがみ込みジクの腕を取る。

微かに脈を感じる。匠はその腕を置き、再び女を見る。

(・・毒にやられたとすりや、ジクはこの女に盛られたか・・。)
倒れている女に歩み寄り、腕を取る。

弱弱しいがこちらも脈はある。

握り締めているのは小瓶。大事な物なのか、握ったまま離さない。

「・・。」

改めて周囲を見渡す匠。

(地面がえぐれてんのは阿修羅か・・地面の焦げや糸は教授の術だ
るな。)

(ジクが油断する位守備が完璧つて事は、聖職者も居ただろう。)
女の血に濡れた右手を見ると、刃物で深く刺された様な傷だった。

(・・動きを封じて・・ジクだなこれは。)

すべての攻撃を受けた様なポロポロの体を見る。

観察していき、何ともやるせない気持ちになる匠。

(敵かも知んねえ・・がよ。)

匠は立ち上がり、カートを漁り木の実を取り出す。

手の平ほどの黄色い木の実、イグドラシルの実。

口にすればみなぎる生命力を体中に感じるほど回復する物。

それを小さく千切る。

女の体を起こそうとすると、ぐにやりと曲がる体にギョツとする

(こいつあ・・骨までイツちまってんな・・。)

体を支える骨が感じられない肉体に、苦い思いをする匠。

女の、触れたら壊れそうな体をゆっくり腕で支えながら、仰向けに
していく。

首に手を回し軽く持ち上げると、女の僅かに口が開く。

千切った実を女の口に運ぶ。

体はなるべく見ないようにと、女の口元に神経を集中させたのがアダとなった。

(くそ・・・んでこんな柔らげえんだよ！)

指先に当たる唇の感触に、不謹慎ながら男としての動揺が隠せない匠。

色々耐えながら(?) 実を口の奥目掛けて押し入れる匠。

そして女の喉に触れ、飲み込んだかを確認する。

(ふう・・・これで少しは良くなるはずだ・・・)

軽く安堵する匠。そして不意に見てしまう女の体。

「っだあ！」

バサッ

一声叫びカートからマントを取り出して女に掛ける。

(何も見てない何も見てない何も・・・)

脳内で必死に言い聞かせる匠。

ヒュンッ

そんな匠の目の前に男が一人。

黒い長髪を上に乗せた黒服の聖職者、鴉。

「これは・・・！」

死闘を繰り広げたような場を目の当たりにし、言葉を失う鴉。

(な・・・なんでこいつが、ここに、このタイミングで！)

違う意味で言葉を失う匠。

鴉は後ろの気配を感じ振り返る。そして匠の存在に驚く。

匠は女を軽く抱えているような姿勢。マントから見え隠れする肌。

はたからみたらちよっと・・・な光景である。

「なにもしてない！」

気まずさを感じている所の、思わぬ友人との遭遇に動揺を隠せない匠。

「何も言つて無い。」
現状を把握出来てない鴉はただ呆然とするばかりだった。

「……。」

しばしの間。

匠は口を開いた。

「ジク、てめえはオレを疑いてえのか？うん？」

「や！そう言うワケじゃねえけど……。」

慌てて否定するジクに、言葉を続ける匠。

「オレと互角に渡り合える奴がやられるとしたら、そいつめ弱点つて相手が敵だ。」

パイプタバコをはずし、ジクの目を見る。

「つまり……ジクがやられんのは、相手が女つてわけだ。」

「はあくそゆことか！ナイス推理！」

ビツと親指を突き出し少年の様な笑顔を見せるジク。

「ったく……調子良い野郎だぜ……。」

やれやれと肩をすくめる匠。

「よつし、一旦戻るわ。」

不意に立ち上がり口を開くジク。

「ん、もう行つちまうのか？」

それをみて匠も立ち上がる。

「おう、女達が俺様を呼んでるからな！」

回復剤でびしょ濡れのジクは、濡れた紫の髪を軽くかき上げる。

「水も滴る超美形つて言うだろ？」

「初耳だぜ。」

サングラスを掛けながらしつかり指摘をする匠。

「んじゃ！また今度話そうぜ！」

「おう、話そうや。」

バシッ

互いの右手を叩き合わせて別れを告げる。

「っよ！」

ヒュンッ

掛け声と共に、ジクの姿が消える。

(・・・嘘ついちまったなあ・・・でも今回だけだかな、ジク。)
わずかな罪悪感を感じずには居られない匠。

女は鴉が連れて行った。知合いのようだ。

いくら元気になる実を食べた所で、外傷や折れた骨がどうにか成る訳ではない。

あまり公に出来ない存在のようで、自らの教会で看病するとか。

(無事だと良いが・・・様子見に行っとくか。)

カートを引つ張り、歩みを進めパイプタバコを啜えようとする。

「・・・。」

不意に、パイプタバコを持った手に、女の唇の感触を思い出す。
慌ててもう片方の手に持ち替え、パイプタバコを啜え直す。

(これも浮気にカウントされるんかな・・・。)

苦い顔をし、匠は鴉の居る教会へと向かうのだった。

その後のサイドストーリー（後書き）

男ってそんな生き物です（ナニガ）
次回はもっとアフオになるといいなあ。

合流（前書き）

鴉の居ない教会に留守番として中に入る二人と一匹。
そこで・・・。

合流

町外れの教会。

誰も居ない教会に入る二人と一匹。

教会に入ると少し先に椅子が左右で十脚、その先に教壇。学校の教室ほどの小さな広間である。

ひと気が無いと、それも広く感じられる。

「部屋に行きましょうか、飲み物ご用意します。」
口を開く冥。

「あ、ありがとうございます！」

ぺこりと頭を下げるミリリ。

「あゝぼにんには？」

そんな二人の足元をぼよぼよと弾みながら付いてくるぼにん。

「外に貴方のゴハンが生えてます。」

表情を変えずに言い放つ冥。

「え〜？いまがいいのに〜。草がいいのに〜。」

不服そうな顔（に見えないが。）で要望を続けるぼにん。

「冗談です、ハーブを用意しますね。」

軽く微笑みながら返事をする冥。

教会の左奥には鴉や冥の部屋、キッチンに繋がる廊下が続いている。

「私の部屋で待っていてくださいな。」

部屋の入り口に案内した冥はキッチンに向かおうとする。

「あっお手伝いしますよ！」

ミリリが慌てて声を掛ける。

そんなミリリを見て微笑む冥。

「それでは、その子を見ていてくださいな。どっかいつてしまわな
い様に。」

そう言いながら足元に居るぼにんに視線を向ける。

「は、はいー！」

「どつかいつちやうゝわるいこはだれ〜?」

「凄く貴方ですぼにん。」

そんな二人と一匹のやり取りをしつつ、冥はキッチンに向かった。部屋に残されたミリリは、改めて部屋を見る。

「整理整頓されてるなあ・・・。」

部屋に入って右にベッド、正面に机と窓、左に洋服ダンス。

シートもシワが無く、部屋の隅まで埃一つ無い。

「ぼよんってするの〜。」

足元のぼにんが軽く跳ねるとそのままベッドの上にダイブする。

ポフッ

シワ一つ無いベッドに着地する。

「あ!冥さんに怒られますよ!」

そんなぼにんに注意をするミリリ。

「とーう〜。」

気合を入れた(?)ぼにんが、ベッドの上でまた跳ねる。

ポフッ

「っわ!」

跳ねた勢いでミリリの胸元に飛び込む形になる。

慌ててミリリはキャッチする。

「あ〜おねーさん、これなに〜?」

驚いてるミリリにお構い無しに問いかけるぼにん。

「え?あ、それはギルドバッヂですよ!」

胸元にある十字架を象ったバッヂに興味を持ったらしい。

「おいしいやつ〜?」

「食べちゃだめですから!」

興味津々のぼにんに手間取るミリリである。

のどかな道なりを歩く四人。

ペコペコに乗っている二人の女。その横を男二人が前後に並んで歩

く。

「もっかい言うよ？アキラ。」

「さて、頭痛くなってきたからちと保留で……。」

「今覚えなきゃ忘れるでしょ。ほら、言うから。」

ペコペコの上から女戦士が口を開く。

「私がぼち、彼女が銀、ペコペコが彩、小鳥の哺乳類。」

女戦士が自分、一緒に乗ってる女、乗り物のペコペコ、浮遊してる小鳥を順に紹介していく。

「わかった？」

「おう、わかんねえ。」

自信たつぷりに答える男、ローグのアキラ。

「何だよ、四つ覚えるだけでいいんだよ？」

「名前があべこべ過ぎんだよ……。」

名前講座（？）を繰り広げている後ろでは、吟遊詩人の男と製薬者の女が話している。

ポロロン。

弦楽器を弾きながら話しかける吟遊詩人。

「銀さんと言うんですね、綺麗な名前です。貴方のほうが綺麗ですが。」

「もーたまちゃんは口が上手いんだから！」

「僕は口下手なので、本当の事しかいえませんよ。」

照れ気味の銀に、いつもどおりの口説き文句（？）を披露するたま。

「旦那いるから口説いても駄目だよ！私はあげないよ！」

たまのアタックに、ストップをかける銀。

「恋する女性は可愛いと言いますが……。」

ポロロン。

お構い無しに話し続けるたま。

「銀さんは旦那さんという愛情で、そんなに綺麗な花を咲かせているんですね。」

穏やかな表情で歌うように語るたま。

「わ！そんな風に言われると流石に恥ずかしいよ！」
テレ顔目一杯の銀。

「本当の事言っただけなんですけど・・・」
ポロロ・・・ガシッ

続きを弾こうとしたたまの手が、別な手で遮られる。

「ちょ、アキラ何するんだよ！」

「キモい語りはいいから！バトンタッチだ！」

その手はアキラ。たまの手を引き寄せ列の先頭へ。

「キモいとかホント失礼だなあ、これが僕なのに・・・」

アキラの強引さに文句が出るたま。

「で、何すればいいの僕は？」

「代わりに名前を憶えてくれ。」

残念そうに言うたまに、指示(?)を出すアキラ。

「何言ってるんだい、ぼちは判るでしょ？」

呆れ顔でアキラを見るたま。

「いや、だって銀って名前あったらそっちっぽくね？」

そう言っアキラはぼちを見る。

肩までの銀髪が時折風に揺れ、切れ長な目に端正な顔立ち。

勇ましい戦士の鎧を纏い、凜々しいまでの姿。

「私はぼち以外の名は認めない。」

しゃべったりしなれば。

「ほらー、ぼちはぼちだよ、見れば判るでしょ？」

「見て判る奴の方が分からねえ・・・」

苦い顔をしながらたまやぼちを見つめるアキラ。

「銀は銀だよ！それからこっちが哺乳類！」

ペコペコの彩に乗っている銀が、鳥型のホムンクルスを指差し抗議をする。

「何でそんなややこしい名前にするかな・・・」

疲れた表情のアキラに、たまが口を挟む。

「女の子の名前はきっちり憶えなきゃ駄目だよ？彩も哺乳類も。」

子供に言い聞かせるかのように話す。

「二匹ともメスとは予想外だった。」

「見たら判るでしょ？」

「お前は相当な無理を言う奴だ。」

たまの発言に、半分感心半分諦めの表情をするアキラだった。

「わわ！あんまり暴れちゃ駄目ですよ！」

不意に聞こえる声。

アキラ達が胸元に付けているギルドバッヂからである。

「あん？」

「今のは……。」

「ミリリさんが僕に助けを求めてる声だ！」

アキラ、ぽち、たまの順に反応する。

「助けも求めも名前指定も無かったろ。」

すかさず突っ込みを入れるアキラ。

「声的には、悪戯っ子の相手をしててギルドバッヂに誤爆したとしか。」

冷静に判断をするぽち。

「いや！きつとフラちな輩に……急がなきゃ！」

ダッ

突如駆け出すたま。

「たまー、そつちは教会だよー？」

距離を置かれたぽちが声を掛ける。

「僕のセンサーはこっちって言うてる！」

ドドドド……

たまの姿が遠ざかる。

「はー……たまちゃんはせっかちさんだねー。」

のほほんとした表情で銀が遠ざかるたまを見る。

「なあぽち。」

「お、憶えてくれてた。で、何？」

「アイツは本気でバカだろ。」

「アキラって結構失礼だね。」

本人の居ない所で繰り広げる会話。

「バカに失礼だよ。」

もっともシツレイな事を言ってる事に気付いていないぼちだった。

コツコツコツ・・・

教会内を足早に進む音。

冥はミリリとぼにんがいる自室に向かう。

飲み物を取りに行った筈が、その手には何も無い。

顔にはわずかに緊張が見え隠れする。

ギルドチャットから聞こえたミリリの声。きつとぼにんの悪戯だろう。

しかし冥が感じたのはそこではなかった。

部屋の前に辿り着き、扉を勢いよく開ける。

バタンッ

その目の前に、アサシン男暗殺者。

大きく武器を振り下ろす瞬間だった。

「ソニックブロー！」

「うっ！」

思わず目を閉じる冥。

ギギインッ

しかし透明な壁に、攻撃が届かなかった。

「ちっ・・・防御壁を唱えていたか。」

ザッ

部屋の窓際に下がる男暗殺者。

紫色の短髪に、黒い動きやすい装束。冷酷な目が冥を捉える。

「ふん、奴がここに居ると思ったんだがな。まあいい。」
構えていた奇妙な形の武器、カタールをベッドに向ける。

「あうう……。」

「はじめまして。」

そこには恐怖に震えるミリリとぽにん（緊張感0）が居た。
ぽにんを抱きしめ、目の前の刃に身動きが取れないミリリ。

「その生き物は、あの女のものだろう？どこに居る。」
ぽにんに視線を向け、そして冥を見る。

「……何の事でしょう？私の友達ですよ。」

ヒュンッ

「！」

カッ

冥のすぐ横の壁に、ナイフが突き刺さる。

「もう一度だけ訊く。あの女はどこに居る。」

男暗殺者は手にナイフを隠し持っていた。

次なるナイフをちらつかせながら、冷酷な目を冥に向ける。

「ここには……居ません。それしか判りません。」

真っ直ぐ男暗殺者を見つめ、答える冥。

「……ふん、こいつを連れて行った方が手っ取り早いか。」

冥から視線をぽにんに移す。

「あ……。」

ミリリがとつさにぽにんを庇うように身を縮める。

「そのガキ、そいつを渡せ。」

武器を下ろし、近寄り手を伸ばす男暗殺者。

ギユッ

「あう〜くるしーですよ。」

抱きしめる腕に力を込めるミリリ。

「もう一度だけ言う。そいつを渡せ！」

スムーズに行かないやり取りに、苛立ちを憶える男暗殺者。

「ホーリーライト！」

突然の声に、反射的に避ける。

バシッ

聖なる気孔が男暗殺者のすぐ横を掠り、窓に当たる。

湿った空気が、隙間から微かに流れてくる。

「・・・いい覚悟だな。」

スッ

ミリリに向けていた足を冥に向き直す。

「・・・。」

術を唱えた手を下ろし、男暗殺者と距離を置くためにすぐ下がる冥。

「女、お前に教えてやるう。」

武器を構え、軽く腰を下げる男暗殺者。

「一度きりの・・・死をな！」

ザンッ

瞬時に縮まる距離。

冥に掛かっていた防御壁の術も、切れた。

振り上げ、降ろされる武器。

術を掛けなおす時間も、無かった。

ドシュッ

「がっ!？」

鈍い音と共に、苦痛に歪む男暗殺者。

振り上げた腕が宙で止まり、背後の激痛が走る腕に手をやる。

「矢・・・だと?!」

そこには深々と刺さった矢があつた

抜けば大量の血が溢れ出す為、抜く事も出来ない。

「女あ・・・何をした！」

正面にいる冥に、苦しげに話しかける。

ガターンッ

その時、不意に窓が開いた。
思わず振り返る男暗殺者。

「とっつ！」

スタツ

窓から軽やかに侵入（？）してきたのは、たまだった。

「たまさん!？」

ベッドの上からミリリが驚きの声を上げる。

「ふふん、やっぱり居ましたかフラチな輩が。」

弦楽器を軽く振り、男暗殺者に向ける。

「冥が窓を開けてくれたからね、外から撃たせてもらいましたよ。」

「!・・狙っていたのか、初めから!」

冥に視線を向けようとする男暗殺者。

ヒュオンッ

その頭上を、たまの弦楽器が狙う。

「!」

ギギンッ

とっさに怪我をしていない腕側の武器で受け止める。

「ぐ・・っ!」

それでも矢が刺さった腕に伝わる衝撃。

男暗殺者の顔が苦痛に歪む。

ギリリッ

徐々に攻撃を受け止めた武器が、たまの力により頭上から顔にまで下がる。

「この位置から・・。」

その時ぱつりとたまが呟いた。

「矢、放つたらどうなりますかね?」

弦楽器の正面には、男暗殺者の顔がある。

「なっ?!よ、よせ!」

引きつった顔の男暗殺者を無視し、片方の手で背中に備えた矢を取り出す。

「はずし、ませんよ。」

ぽつりと、でもはつきりと。たまは言った。

「ちっ！」

ギンッ

力を振り絞り、たまの弦楽器を何とか弾き返す。

「去りなさい。この楽器が血を覚え無いうちに！」

ピンッ

弦楽器を構えなおし、矢を弦に取り付けるたま。

「くそ・・・憶えている！」

ダダッ

一言吐き捨て、男暗殺者は教会の出口に向かう。

射出されなかった矢が弦からはずれ、それを手に取りしまったま。

「フラグ立てていった・・・。」

男暗殺者を目で追い、たまが呟く。

「フラグって何ですか。」

パタンッ

部屋の扉を閉め、たまに向きなおして口を開く冥。

「いや、何でも無いんだ。」

冥の突っ込みを流し、たまは冥とミリリを見る。

「二人とも無事なようだね。」

「は、はい！」

「貴方のお陰です、たまさん。」

各自返事をする冥とミリリ。

「冥がギルドチャットで指示をくれたからね。」

「ええ！？そうだったんですか！」

驚きの声を上げるミリリ。まったく気付かなかったのだ。

「Whisperです。」

冥が間に入る。

「あれ？そうだったっけ？」

「はい。」

「ういす・・・な、何ですか？」

たまと冥を交互に見つめるミリリ。

「ウイスパー。囁くと言う意味で、特定の人にだけ伝える事が出来るのです。」

「ほえ・・・。」

たまの説明を聞いて、色々な機能があることに感心するミリリ。

「まあ僕は・・・。」

言いかけ、ミリリに視線を移しにつこりと微笑みを見せる。

「ミリリさんのウイスパーも直に聴きたいものです。」

「たまさんセクハラです。」

たまの言葉にぴしゃりと言い放つ冥。だが・・・。

「ちよ、ちよっと冥！」

たまは慌てて冥を止める。

冥は、胸元のギルドバッヂに手を添えていたのだ。

「・・・。」

一瞬無言の冥。そして・・・。

「誤爆です。」

「そんな作為的な誤爆ないよ！」

「あつゝおにーさんはじめまして？」

冥とたまとの会話に割って入ったのは、ミリリに抱えられたぼにんだった。

「おや、これはまた可愛らしい・・・はじめまして、僕はたまと言います。」

丁寧な自己紹介をするたま。

「ぼにんはね〜ぼにんっていつの〜。」

間延びした声で自己紹介をするぼにん。

「ぼにん・・・憶えました。ミリリさんのキューペットですか？」

ミリリに視線を向け、問いかけるたま。

「きゅー・・・え？」

再び聞き慣れない名前に聞き返すミリリ。

「キューペット。モンスターをペットにした時の呼び名ですね。」
「あつそうなんですか！あ、でも私のじゃないんですよ。」
「たまの説明に納得し、聞かれたことに答える。」
「そうでしたか、ではこの子は一体……。」
「ぼよぼよと弾む生き物に視線を向き直すたま。」
その時。

「たまあー！君は何をやってるんだあー！」

外から聞こえる、聴き慣れた女の声。

その声が教会の中に入ってくる。

「うわっちよつと冥！ぼちが来ちゃったよ！」

その声にオロオロしたたま。

「ええ、なぜか叫んでますね。」

「なぜかじゃないよ！さっきのギルドチャットの事でだよ！」

不思議そうな顔をする冥に、すかさず突っ込みを入れるたま。

「たまさんセクハラです。」

「ですか？」

ギルドバツチに手を添え冥がそう言った。

「何で二度目もギルドチャットなの！きっちり切り替えて話してるし！」

そんな冥に抗議をするたま。

バターッ

勢い良く扉が開く。

すごい形相のぼちが其処に居た。

「冥！ミリリ！大丈夫？！」

各自の安否を確認するぼち。

「あ、あのえつと！」

突然の出来事に、とっさに言葉が出ないミリリ。

「たま、君は何を考えているんだ！女の子に手を出すなとあれ程……」

」。

つかつかとたまに歩み寄り右手を上げるぼち。

「わわ！ちよ、誤解だよ！」

回避しようと後ろに下がるたま。

「言っただろ！」

「た、たまさんは私達を助け・・・！」

ビシッ

ようやく搾り出したミリリの声も虚しく、ぼちのデコピンがたまの額に炸裂する。

「あたっ」

「・・・え？たま良い事したの？」

きよとんとした表情でミリリを見た。そのまま視線をたまに移す。

「デコピンする前に止まってよ！」

うつすら涙目でぼちに抗議をするたま。

そんな様子をくすくすと笑いながら見守る冥。

「冥さん。」

不意に後ろから聞こえる声。

「あ、アキラさんも来ていたんですね。」

「途中で会っちまってね・・・ところで、外の血痕は一体・・・。」

「冥ちゃああん！鴉ちゃんが女の人連れてきたああ！」

外から聞こえる、別な女の声。

今日は教会が静寂に包まれる・・・事は無いようだ。

合流（後書き）

週一掲載予定が、だいたいぶ崩れてしまいましたorz
お約束はとっても好きなんですゴメンナサイ

ある教会に運ばれた女（前書き）

教会に戻った鴉が運んできたのは、重症の黄泉。
賑やかな教会に忍び込んだのは・・・。

ある教会に運ばれた女

町外れの教会。

その教会で神父を務める男聖職者、鴉。

鴉が両手で抱えて来たのは片腕の無い女、黄泉。

意識が無いのか、グッタリしたままだ。

体には黒いマントが掛けられている。

その横には興奮気味の製薬者の女、銀。

「鴉ちゃん！その子どうしたの！どっからさらって来たの！」

「誘拐犯になるつもりはないぞ。」

そんな銀に冷静に返す鴉。

「女の人はどこ！」

ドドド。

駆け足で教会の入り口に来たのは吟遊詩人、たま。

「一番乗りで来るな！」

こっちには叱り付ける様に返す鴉。

「うっっっ。心配で来たのに……。痛かったり怒られたりと散々だあ。」

。。。

軽くへこんだ様子のため。

額が軽く赤いのはデコピンの所為である。

「。。。ねえ鴉。」

不意に真顔になって鴉に話しかけるたま。

「何だ？この子のスリーサイズなら教えんぞ。」

そう言いながら黄泉の体に振動を与えない様に、慎重に教会内に進む鴉。

「うん、それは後でチェックするから良いんだけど。。。。」

「チェックをするな！」

すかさず突っ込む鴉。

「その人。。。何だろ？不思議な感じするね。」

興味深々のたま。女性だからというわけでは無さそうだ。

「判るのか・・・後で少し聞かせてくれ。」

「うん、分かったよ。」

そんな鴉とたまのやり取りの直後、教会の奥から数人の男女が出て来る。

「鴉様！」

「怪我人？気絶してるね。」

「あ！あの時のお姉さん！」

「よみ〜よみ〜。」

「たま、セクハラすんなよな。」

「してないよ！」

「たまちゃんのえちー。」

はぁ・・・。

思わず溜息の出る鴉。賑やか過ぎる面々である。

「冥、治療の準備を！」

「はい！」

気を取り直し指示をする。

「ぼちも一緒に行ってくれ。」

「了解。」

「たま、私の部屋の仮設ベッドを解放してくれ。」

「うん。」

指示を受け、冥とぼちは教会の奥に。

たまは先に進み、鴉の部屋に入る。

後続き、鴉も部屋に向かう。

「俺たち出来る事なさそうだなあ。」

「そうだね〜。」

「あつ・・・おねえさんが心配です・・・。」

「よみ〜よみ〜。」

アキラ、銀、ミリリ、ぼにんと各々に口を開く。

そうしていると鴉の部屋からたまが出てきた。

「お？どうだ様子は。」

アキラがたまに声を掛ける。

「うん。」

アキラを見て口を開くたま。

「とっても綺麗な人だよ。」

「顔じゃねえ。容態を訊いてんだ！」

「うん……。」

お馴染みの突っ込みをするアキラ。しかしたまは曖昧な返事をする。

「……悪いのか？」

察してか、アキラがたまの顔を覗きこむ。

「……左腕、無くて……体もボロボロで……。」

暗く沈んだ表情をするたま。

「そ、そっか……マントの下はそんなだったか……。」

思いのほか深刻な事態に、アキラの表情も暗くなる。

「女の人だよ？……なのにあんな……！」

「た、たまさん！あの！」

熱くなりそうなたまに、ミリリが声を掛ける。

「ミリリさん……。すみません、取り乱してしまって……。」

申し訳無さそうにミリリを見つめるたま。

「いえ！あ、あの！」

何か言いたげなミリリ。中々言葉にならないらしい。

「ミリリちゃん、言葉が出ないときはイメージを思い浮かべて話す

といいよー。」

その時、間に銀が入ってきた。

「い、いめーじ……。」

「何がどうしたんだ？」

瞑想中（？）のミリリに話しかけるアキラ。

「あのおねえさん……左腕は元々無かったです……。」

少し落ち着いた様子のミリリ。ぽつりと話し出す。

「元々……無かった？」

「ミリリ、知合いなのか？」

「よみよみどこ？」

アキラとたまが驚くと同時にミリリを見る。

「えっと・・・あたしがアキラさんを探してた時に会いました・・・」

「あつじゅーしょーです。」

銀の助言のお陰か、スムーズに話すミリリ。

「あん時か・・・」

色々あったが、ほんの数時間前の出来事である。

「左腕・・・その時には無かったんですか？」

「あ、はい！・・・でも痛そうじゃ無かったので、もしかしたらずつと前に・・・」

「ぼにんはおなかがすきました。」

「てか何だそのポポリンはさつきから！」

ビシッとアキラが指を突きつけたのは、ミリリが抱えているぼにんだった。

「ぼにんはね〜ぼにんっていいます〜。」

ポヨッ

ミリリの腕の中で弾みながらの自己紹介。

「「名前は何だ？」って訊いたんじゃねえ！ちよこちよこ入ってくんな！」

「あの一！この子はさっきの・・・女の人のきゅーぺつと、みたいですよ！」

険しい顔のアキラに、慌てて声を掛けるミリリ。

「ぼにんちゃんか〜銀はね、銀って言うの。よろしくね！」

ぼにんに負けず(?)に自己紹介をする銀。

「綺麗な人に可愛らしいキューペット、ですか。」

納得しているのか、軽く頷きながら口を開くたま。

「なあ、たま。」

「うん？何アキラ？」

「・・・ひよつとしてメスか？そのポポリン。」

「うん、そつだよ。見たら判・・・。」

「判るか！」

ぼにんのお陰（？）で少しばかり気が晴れた様子のアキラとたまであった。

コンコン

カチャ

扉を開け鴉の居る部屋に入るぼち。

「鴉。」

入ってすぐ目に付くのは、仮設ベッドに横たわる黄泉。マントの代わりに薄地の掛布が覆いかぶさっている。その黄泉に治療用の術を掛けている鴉に呼びかける。

「どうした？」

目を逸らせない為、声のみをぼちに返す鴉。

「冥が、石が足りないってさ。」

簡単に用件を述べるぼち。

「石が？・・・ふむ、ホールに居る黒髪の女の子に訊いてみてくれ。」

「銀だね、さつき知り合っただ。」

そう言っつてぼちはそのまま部屋を出た。

入れ替わりに冥が部屋に入ってくる。

「鴉様。私にも手伝わせてくださいな。」

手に抱えていたタオルや様々な器具を机の上に置きながら鴉に話しかける。

「冥か、すまないが胸骨から腰椎の辺りを頼む・・・その損傷が一番酷い。」

そう言っつと鴉は黄泉の右腕に廻る。

「はい。」

言われた通りに黄泉の胸元から腹部に掛けて手をのせ、治療を施していく冥。

「・・・苦しいな、冥。」

ぽつりと呟く鴉。

「・・・はい。」

静かに頷く冥。

体の外部、内部に至るまで危険度の高い損傷。

そんな状態を、ただ一人が背負っているのだ。

やるせない気持ちか二人に募る。

「暗殺者ギルドの者からの忠告は、あつたんだ。」

「・・・。」

手を治療に専念しながら、話し出す鴉。

「未然に防げたものを・・・合図を・・・私は易々と見送っていた・・・

！」

後悔を語る鴉の表情が、悲痛なものになっていく。

「・・・鴉様。」

鴉の様子を見て、悲しそうな表情をする冥。

「過去を悔やんでも、「今」は助けられませんかよ。」

「・・・！」

冥の言葉を聞いて、はっと我に返る鴉。

「・・・そうだな、この子を救うのが優先だったな。」

鴉の表情が和らぐ。その様子を見て安堵する冥。

「ええ・・・続けましょう。」

改めて治療に取り掛かる二人。

「冥、炎症止めを取って欲しい。」

「はい。」

治療の手を止め立ち上がり、机に置いた器具の中から一つの小瓶を

取り出す冥。

「ありがとう。」

その小瓶を鴉に渡す。

「冥、鎮痛液も欲しい。」

「はい。」

再び机の上の器具の中から小瓶を手取る。

「ありがとう。」

その小瓶も手渡す。

「冥、結婚して欲しい。」

「やです。」

落ち着いたので改めて治療を再開する。

「ありが・・あれ？予想外な返事が来た。」

「私は予想通りです。」

「(、；；)」

「そんな雨の中に捨てられた子犬の表情をしても駄目です。」

「それじゃ！銀、行つて来るね！」

ホールから元気な声が響き、静かになる。

コンコン

カチャ

「銀はカート取りに行つたよ。そっちにあるかもだつてさ。」

扉を開け入ってきたのはぼち。

「どうしたの鴉？雨の中に捨てられた子犬みたいな顔して。」

「何でも、ない。」

そう言いながらも切ない表情の鴉。

「ええ、何でもありませんね。」

本当に何でもないかの表情をする冥。

「？ならいいけど。」

そんな二人を不思議そうに見るぼち。

ふと窓を見る。

軽く小雨が降りだしている。

「銀には雨具持たせし、彩が居るからすぐ戻って来れると思つ。ぼち。」

「私の心も雨模様だ・・。」

ぼそつと言つ鴉。

「放つておいても晴れますよ、きつと。」
冥。

「うん、この程度なら心配ないと思う。」

冥の言葉に返事をするぼち。

一人どしゃぶりの雨の中（？）に居ることに気付いてはいなかった。

「ただいま〜！」

教会の入り口から響き渡る声。

「お、早いじゃん、おかえり。」

入り口から少し奥に居るアキラ達。

「あ！お帰りなさい！」

ぼにんを抱えたミリリが駆け足で銀の元に向かう。

頭、肩辺りが雨に濡れている。

「ぎん〜おへやから〜かえってこない〜。」

「だから俺と同じ間違いないよ！あつちはぼちだつての。」

銀本人を目の前に、人違いをするぼにん。銀が出掛けた後からこんな調子だったり。

ミリリはポケットからハンカチを取り出し、銀の濡れた体を拭く。

「ありがと！ついでに背中もお願いできるかな？代わりにその子持つてるから。」

「あ、はい！背中届きませんからね！」

そう言うとミリリはぼにんを銀に渡そうとする。

「お願いしま・・・。」

ヒョイッ

「あひゃ〜。」

そのぼにんを、別な手が持ち上げる。

「あ、たまさん？」

銀ではなく、たまがいつの間にか側に来ていた。

たまの腕にぽにんが抱えられる。

「おいおい、楽器は人に持たせて雨に濡れた女性鑑賞かよ？たま。」
手には弦楽器を持ちながら、たまに歩み寄るアキラ。
下心が無い。とは残念ながら言い切れない。

「うん、そうだね。」

否定をまったくしないたま。いつも通りである。

「・・・僕の名前はたま。愛の伝道師、吟遊詩人をやってます。」
突然の語りに、アキラとミリリが驚きの表情になる。

「じ、自己紹介？」

「あゝ何？まともな自己紹介してなかったから今やっちまおうってか？」

「うん、そうだね。」

不思議そうな顔をする二人に、視線は銀を向いたまま返事をするたま。
そして銀に向かって話しかける。

「名も知らぬ可憐な花の名を、教えていただけますか？お嬢さん。」

一瞬静まり返る教会。

「あん？何言つてやがる、その人は銀さんだろが。」

怪訝そうな顔をたまに向けるアキラ。

「ぎん〜どこ〜？」

「ぽにん、目の前に居ますよ。」

腕の中にいるぽにんに話しかけるたま。

「さっき紹介し合ったじゃないですか。銀さんと。」

「あゝそうだった〜ぽにんわすれてたんだった〜。」

「そうです。銀さんだったら言えるはずなんです。」

ぽにんの言葉に頷きながらも、視線は銀を向いたまま。

「え？え？何の事言ってるの？」

当の銀は訳が分からないといった様子。

「「その子」ではなく「ぽにんちゃん」とね。」

銀の表情が、驚きの表情に変わる。

「そしてぽにんは貴女の名を目の前で呼んでいたにも関わらず、貴女は無反応だった。」

淡々と語るたま。

「名を呼ばれて反応しなかったのは、違う人物を銀という名と思ったでしょう。」

「違う人物・・・？」

ミリリが不思議そうな顔でたまを見る。

「銀髪の凛々しい女戦士、ぽち。彼女は銀さんに頼み事をしました。そして・・・。」

一呼吸置き、言葉を続けるたま。

「銀さんは出掛けて行きました、一声掛けて。」

「・・・。」

一言も発しない銀。たまの様子を見ているだけ。

「女戦士を見ながら」「それじゃ！銀、行って来るね！」と。

「あゝ・・・銀さんそんな感じだったなあ、一人称が名前だし。」

記憶をたぐり、感想を言うアキラ。

「そう・・・でも外部からの人がそこだけ見たら、相手の名を指してるように見える。」

「だな、俺だったら間違いないと思う。今は覚えただけだな。」

「ここに居る誰かが一人でも貴女に対して名を呼んでいけば・・・。」

そこに居る全員が、銀・・・らしい人物に視線を送る。

「自分が銀である事に気付いたでしょう。」

「・・・。」

「・・・まだ足りませんか？名も知らぬ可憐な花のお嬢さん。」
その人物に話しかけるたま。

バサアッ

どこから取り出したか、銀の姿の人物からマントが翻る。

「あーっはっは！よう見破ったなあ！」

マントが床に落ち、現れたのは赤い短髪の幼顔の少女。

踊るようにクルクルと丸まった毛先、星が散りばめられたピンクと白のシルクハット。

手まで覆ったつぷりとした生地を使ったピンクの衣装。そこに白の生地も重なる。

「うちがかの有名な！世間を騒がす「怪盗アニバーサリーちゃん」
や！」

胸を張って（開き直って）自己紹介をする少女。

「今回は隠密行動やねん、大人しゅうそこのポポリンをうちに渡す
んや！」

ビシッと少女が指さしたのは、たまが抱えているぽにんだった。

「強引な隠密行動だなおい・・・。」

「アニバーサリーさん・初めて見ました！」

思わず呟くアキラ。感動するミリリ。

「目的は・・・何ですか？」

ぽにんを抱えながら当然の疑問を投げかけるたま。

「ええから！黙ってうちに渡したら良いんや！」

甲高い声で催促をする少女。

「いくら素敵で可愛いお嬢さんでもだめです。」

褒めつつもきっぱりと拒絶をするたま。

「お？あんた、うちが素敵で可愛い超絶美少女やて？照れるやん。」

「言ってねえ。」

「仕方あらへん、今回だけやで？」

アキラの言葉をスルーし、少女はたまに近づく。

「ポポリン！さっきの地響きん時に拾った写真、とつと返しや！」

「写真・・・ですか？」

きよとんとした顔のたま。

「そつや！うちが持ってたダイージな写真を、その子が食べてしも

たん！」

「地響き・あ！あたしと冥さんと教会入ろうとした時！」
不意に記憶が甦るミリリ。

「ぼにんさん、急に見当たらなくなつて・すぐ後に地響きあつて・
。」

「それや！そんな時うちの落とした写真食べてしもて、取り行くにも
中に入られたらあかん。」

ミリリの言葉に頷き、次々と語る少女。

「せやから待つとつたんや、中入った子が出て来るのを！」

「そこで変装したつてわけか。」

「はよう済ますつもりやつたんけどなあ、もつとはよう見抜かれて
もつた。」

感心の表情をたまに向ける少女。

「雨の濡れ方が違うんです。普通に雨に濡れた時と、ペコペコに乗
つてる時と。」

「勉強になるわあ・ま、それはええとして・写真返しいや！」
たまの言葉に納得しつつ、話題を戻す少女。

「ぼにんはくしゃんしらないの。」

「あん？見た事ねえのか。んじゃさつき拾ったモン出してみ？」
アキラの言葉に反応してか、ぼにんが体を震わせ始めた。

その様子を見てたまがぼにんを床に降ろす。
ポンス

ぼにんの口から吐き出された。

「写真つて、言わなかったか？」

「言つたよ、写真やん。」

吐き出されたものは、厚さ10cmもありそんな分厚い本だった。
少女はそれを拾い、パラパラとページをめくる。

「見てみい、うちのアイドル「アティル君」の写真だらけや！」

「それは写真集つてんだ！そんな分厚いのはもう辞書だ！」

「せやから写真やん！口うるさい赤髪やねえ小姑みたいや。」

溜息交じりにアキラを見る少女。

「お前も十分うるさいわ！」

「なあたま君、アレ、悪い赤髪やねんなあ？うちと違って。言い返すアキラを指さし、同意見を求める少女。」

「ええ、悪い赤髪です、貴女と違って。」

微笑みながら同意見を返すたまだった。

小雨の降る教会までの帰り道。

「だ、大丈夫？！回復剤あるから待っててね！」

小屋に行きカートを取り戻した銀が見かけたのは、矢が刺さった男暗殺者だった。

「あゝゝでもごめん！私も大怪我した女の人待たせてるからゝゝ。」

そう言うところがあったけの回復剤を男暗殺者に渡す。

ガシッ

その腕を男暗殺者が掴み上げる。

「きゃ！な、何っ？」

「ゝゝゝその女は腕が無い奴かゝゝ？」

突然の出来事に、驚く事しか出来ない銀。

「腕が無い奴かとゝゝ訊いているんだ！」

必死な形相の男暗殺者。

「や、やだ！離して！」

振りほどこうにも、力の限り握られてる手を、ほどけない。

ドバギヤッ

「ぐお！」

ズシャアッ

不意に背後に喰らう衝撃。3mばかり男暗殺者の体が吹っ飛ぶ。

「た・・・。」

ザッ

銀の目の前に、代わりの男が現れる。

「たくちゃああああああん！」

カートを引つ張りパイプタバコを啜えた男。

蹴り飛ばした側の足を軽く回しながら、一言。

「雨で足、すべったわ。」

ある教会に運ばれた女（後書き）

なぜ出したし。

と言われそんな人物が後半いますが・・時期的に何となくです（き
っぱり）

結構いい味だしてるんですよねえ・・RONのNPC。

というわけでひょっこり出して楽しんでます。

不一致（前書き）

ぎやーぎやーと喧嘩を繰り広げる二人。
そして思わぬ人物との遭遇。
そしてここでも・・・。

不一致

「んじゃ、うちはもう行くわ。ダイジな写真も戻ったことやし！」
再度パラパラとページを開きながら、「怪盗アニバーサリーちゃん
」は口を開く。

「そうですね、今度は落とさないようにしないとですね。」
そんな少女に微笑みながら、ページをめくる動作を眺めるたま。
ちらりと見えた被写体の男は、緑の髪に探偵の様な格好をしていた
が、なぜかすべて他所を見ているのだ。

「ところでそのモデルの子・・・カメラ目線のものがないようですが。」
「

「うん？ああ、これはなー苦労したんやあ。」
たまの言葉に苦笑いで返す少女。

「隠密行動やねん、ばれんようにこそーっと撮影したんや。」
「立派な盗撮じゃねえか！」

悪い赤髪・・・もとい、アキラがすかさず割って入る。

「そないストーリーみたいなさしてパシヤパシヤやっとならあか
んやん！」

「お前がやってんだろ！」

「アホ！うちのは「隠密行動」や！犯罪者紛いな事やらへん！」

「「怪盗」の時点で犯罪者だつての！」

「わーまさかローグに言われよるとは思わんかったわあ、悪い赤髪
の癖に！」

「悪い赤髪って言うな！それ言ったらお前も悪い赤髪だ！」

「人の揚げ足ばーっか取ってホンマ小姑やあんただけ悪い赤髪や！
悪髪や！」

わーわーぎゃーぎゃーと賑やかな男女二人。

そんな二人を見て溜息交じりのたま。

「アキラ。」

騒がしい二人に割って入る。

「あんだよ！」

少女とのやり取りに息が切れ始めているアキラ。

「うるさいよ。」

「俺だけ言われんのかよ！！」

怒りの標的がたまに変わる。

「そりゃー悪髪やからなあ当然やろ。」

すかさず少女が間に入る。

「お前もこまめに出て来んな！」

標的が戻るアキラ。

「あーあー、ここおつたらアホ髪がうつるわあ。」

そんなアキラを煙たい表情で見る少女。

「アホ髪って言うな！ガキかお前は！」

ぜーはーと肩で息をしているアキラ。

手に持っているたまの弦楽器を支えにしている。

「アキラ。」

「んだよ！」

「うるさいよ。」

「また俺だけかよ！！」

再度たまに突っ込みを入れる。

「ホンマ騒がしわ。」

チャキツ

少女はそう言うと、ポケットから取り出した片眼鏡を装着する。

「これで素顔もばれんようになったし、ほな行くわ。」

「全然隠れて・・・、もがが！」

不意にアキラの口を塞ぐたま。

「ええ、まるで別人です。それではお気を付けて、・・・それと。」

「ん？なんや？」

たまの言葉に首を傾げる少女。

「写真の彼・・・今度は貴女に向くと良いですね、目線も気持ちも。」

「はー．．たま君はええ事言う男やねえアホ髪とちごつて。これやるわ、ほな！」

たまに何かを手渡し、右手を振り別れの合図。

その手を目元に添えアキラに向かってアカンベーをして去っていく。

「ぶはあつ！」

ようやくたまの手から解放されるアキラ。

「はああ．．何で邪魔すんだよ！」

呼吸の自由も戻り、深呼吸し口を開く。

「いちいち突っ込んでたら終わらないじゃないか。」

意外にも正論を述べるたまに、バツの悪い顔をするアキラ。

「う．．悪いつい癖が．．。」

素直に謝る姿が何だか可笑的い。

「ミリリさんもきつと呆れて．．。」

そう言つてミリリの居る方に視線を向けるたま。

ミリリは．．床にうづくまっていた。

「ミリリさん?!」

「お、おい!」

慌ててミリリに駆け寄る二人。

「はあ．．っ!」

辛そうに呼吸をするミリリ。そして．．。

「あっははははは!わ、笑わせないでください!あっはははは!」

三人のやり取りに笑いが堪えきれなかったらしい。

お腹を抱えてまた床にうづくまる。

「アキラ。」

「驚かせやがって．．ん?」

「笑い死にしたらアキラの．．。」

「俺ばっかりかよ!」

アキラとたまのやり取りに、まだ笑いが収まらないミリリだった。

「ただいまあああ！」
「バターンッ」

声と同じく、勢い良く入り口の扉が開く。

「お、本物がお出ましたぜ。」

広間に居た全員が入り口を見る。

簡単な雨具を見に付けた銀。カートを引きずっている。

ちょうどその場にぼちがやってきた。

「銀、ご苦労様。暗かったけど大丈夫だった？」

そう言っつて銀の居る入り口に向かうぼち。

「うん！あ、これだよね必要なやつ！」

銀は雨具をはずしてカートの中を探り、黄色い石をいくつか取り出す。

「ありがとう、先に渡してくるね。」

石を手にのせられ、ぼちはそのまま鴉の部屋に向かう。

「あ、お帰りなさい！」

ぱたぱたと走り寄るミリリ。

「どーしたのミリリちゃん？！涙目で！」

そんなミリリを見て驚く銀。それはそうだ。

「危うく、「死因は笑い死に」になる位笑ってたぜ。」

「えー？そんなに面白かったのなら見たかったな！」

残念そうな表情の銀をみて微笑むたま。

「機会あればお見せしますよ、アキラが。」

「俺が過労死するわ！」

ミリリがそんな二人を見てまた笑いそうになる。

「あひゃ〜。」

不意に外から聞こえる頼りない声。

「足元ウロウロすなや、踏みつけちまうぜ？」

その声の主を拾い上げるぶつきらぼつな男の声。

「・・・たま、後は任せた。」

ポンッ

たまの肩を叩き弦楽器を押し付けるアキラ。

「え？ちよつとアキラ何処に・・・。」

入り口に背を向け奥に向かおうとするアキラを、引きとめようとするたま。

「お？聞き覚えある声人居やがるようだな。」

その声と共に開いている扉から中に入ってくる。

カートを引つ張るその男、匠。

片手にぼにんを鷲掴み、片手には器用にサングラスとパイプタバコを持っていく。

「おい、オレに背中向けるたあどう言つ了見だ？うん？」

逆方向に進もうとするアキラに声を掛ける。

「あ、あはははは・・・ヒサシブリ。」

引きつった顔で匠に振り向き、棒読みで答えるアキラ。

「おう、2、3時間ぶりだろうがな。」

「あれ？知合いさんだったんだ？・・・わっ！」

匠はにやりと笑い、掴んでいたぼにんを銀に持たせる。

獲物を狙う鋭い眼光をサングラスで隠し、パイプタバコを啜える。

「丁度いい・・・さっきの野郎じゃ物足りなかった所だぜ・・・。」

ドカドカとアキラに歩み寄る。

「た、たくちゃん！喧嘩はダメだよ?!」

銀が心配そうに匠に声を掛ける。

その隙にとこつそり距離を置こうとするアキラ。

クルッ

歩む足はそのままに、銀の声に振り向く匠。

「銀。」

「うん？」

匠の声に反応する銀。

「遊びなら構わねえだろ？」

「あーそれならOKだよー。」

銀の心配そうな表情がすぐ明るくなる。

「はは！許可が出たぜ？遊びの。」
銀の表情を確認してからアキラに振り返る匠。その顔はとっても嬉しそう。

「あ、あははははは・・・オテヤワラカニ。」

「心配すんなって、当然・・・。」

引きつった顔に棒読みで返事をするアキラ。

そんなアキラに、一呼吸置いてから答える匠。

「全力に決まってるなあ。」

ガターンッ

教壇前の椅子が二、三脚倒される。

アキラが足止めにと、匠の前に倒したのだ。

ガタゴトンッ

匠は目の前に倒れてきた椅子を足で蹴り道を開ける。

「いや！まじで！心の準備が！」

必死な形相で匠に、アキラは遊び（狩られる）意思が無い事を伝える。

その間にも教壇の後ろにまで距離を置く。

「あ？オレは出来てんぜ？こういう小細工に対抗する準備もな！」

そう言うと匠は素早くカートから小振りな斧を引っ張り出す。

その斧をアキラ目掛けて投げつける。

ブオンッ

「んなにいい！」

斧は空中で回転、カーブしながらアキラに向かう。

アキラはとっさにしゃがみ込む。

アキラの頭があつた場所を、斧はギリギリで通過していく。

頭上に飛んできた斧の風力を頭で感じ、全身から冷や汗が止まらない。

パシッ

ブーメランのように手元に戻ってきた斧を、匠は難なくキャッチする。

「た、たまさん・あれ大丈夫なんですか?!」

その場から離れて見ている三人の男女（おまけが一匹）。

「猫の遊びは本気狩り。と言いますからねえ・・・。」

「たくちゃん猫なのか、そう思ったら可愛い!」

「それよりぼんはおなかがすきました。」

心配する男女に、緊張感0の一人と一匹。

「トマホークすらも避けんのか・・・つま。」

戻ってきた斧を両手に構え、振り上げる。

「避けられねえようにしちまうまでだ!」

そのまま勢い良く振り下ろす、床に向かって。

大地を揺るがすあの技だ。

アキラとの距離があり、攻撃は届かないがしばらく足元が思うように動かないだろう。

そうしたら逃げられないアキラは・・・。

チーン

アキラは一瞬だが、自分が棺おけに入っている姿を想像したのだった。

「何している!?!」

教会の広間に響き渡る鋭い女の声。

突然の声に、その場に居た全員動きが止まる。

振り下ろし、床に当たる寸前で匠の斧の動きも止まる。

鴉の部屋からツカツカとアキラ達に歩み寄る。

「重体で意識の無い子が居るのに、無神経だよ!」

「わ・・・悪い・・・。」

凄惨な形相のぼちを見てとっさに謝ってしまうアキラ。でも内心助かったと思っている。

まあアキラが椅子を倒したりしなければ匠も手を出さなかった（と思っ）のだが。

「っち……しらけるぜ……。」

遊び（狩り）を中断させられた匠は、不満そうに斧をカートに放る。

「そのブラックスミス。」

そんな様子の匠に目を留めるぼち。

「……あ？」

不満な表情のままぼちを見る匠。

「君も謝りなよ。」

「……理由は？」

パイプタバコをはずし聞き返す。

「私が声掛けなきゃその斧振り下ろして地響きが起こった……違う？」

「違わねえな、……で？」

「アキラ以上に無神経じゃないか。謝るべきでしょ？」

名前を出されて一瞬ヒヤリとするアキラ。

だがそれ以上に目の前の光景にも、ただならぬ気配を感じていた。

「何でやってねえ事で謝んだよ？きつちり止めたろっが。」

「やろっとした事に罪の意識は無いの？」

「「罪を犯そうとしてスミマセンでした。」って神に懺悔すんのか？アホらしい。」

パイプタバコを啜えぼちに背を向け、銀の元に歩み寄ろうとする匠。その背中に声を掛けるぼち。

「謝罪の一つも出来ないの？大人の癖に。」

ぼちの一言に、周囲の空気が一気に冷えていく。

「……引く事も知らねえのか？ガキが。」

歩く足を止め、その体をぼちにと向ける匠。

「自分のやってる事が良い事だつて勘違い、直せや。」

「悪いって事を認識出来ない人が居るようだけど？そっちを直すべ

きでしよ。」
一歩も引かないぼち。正面から匠を見据える。
シン・・と静まり返る場。
しばしの沈黙。
そして。

ギユギヤギヤインツ

「うあっ！」

「ぐおっ！」

突然脳に突き刺さるような音。

思わずぼちと匠は苦痛に頭を抱える。

「不協和・音！たまあー！！！」

犯人がすぐわかったぼちは、素早い反応でたま目掛けて走り出す。

「わーっ！」

弾いていた弦楽器をやめ、たまは教会奥のキッチンへと逃げ込む。

「ぼちさん！たまさん！」

ミリリもその後を追う。

「もらったああ！」

ガシャンツ

匠のカートの後ろから声を上げたのはアキラ。

その手には匠がブーメランのように扱ったトマホークがある。

「あ、てめ！返しやがれ！」

匠が気づいた時には十メートルほど距離が置かれていた。

二人で教会の中心を廻るように追いかっこ（全力の）をしている。

「ええつと……。」

ぼつんと入り口に残された銀が呟いた。

「やっぱさっきのたくちゃんより、今のたくちゃんのが好きだなー。」

「ぼにんはたべることが好きです。」

銀に抱えられながら、相変わらずマイペースのぼにん。

この追いかけてつこが終わる十数分間、ただただ眺めていたのだった

パリリ・・シユウ・・

瓶の中で黄色い石が細かく砕け溶けていく。

冥はその液体を小瓶に移し変え、半分を鴉に渡す。

「ありがとう。これで傷口の治療に専念できる。」

「お礼は銀さんに言っておきな。」

「そうだったな。」

そう言うとき鴉は、液体を黄泉の右手の傷口に掛けていく。

パシンッ

はじけるような音と共に、うつすら流れていた血が消えていく。

冥は黄泉の足の傷に、鴉と同じように掛けていく。

「・・・鴉様。」

「どうした？」

「これを使って、黄泉の毒は消せないものでしょうか・・・。」

「難しいだろうな・・・見てくれ、液体を掛けた血ごと消えているだろっ?。」

こくりと頷く冥。

「もし体内に投入して、血液や、毒を含んだ物ごと消滅となれば・・・。」

「・・・悲しいですね。」

眠っている黄泉を見て、辛そうな表情になる二人。

「ああ・・・私達は無力さ・・・だから出来る範囲で力を尽くす。」

「それしか・・・無いのですね。」

そう言うとき冥は治療の手を止める。

「こちらは落ち着きました。」

「私のほうもさ。後は様子見だな。」

ゆっくり立ち上がり黄泉を見下ろす鴉。

二人の聖職者が出来うる治療を終え、掛け布で黄泉の首元まで覆う。

「さて・・・外が随分賑やかなようだが、少し見てくるとするよ。」

「はい。私はもう少し黄泉を見ています。」

「何かあったら呼んでくれ。・・・囁き（ウイisper）でな。」

「・・・。」

鴉の言葉に無言で返す冥。

「水臭いじゃないか、心配かけまいとしてくれるのはわかるが・・・。」

「

心配そうな表情を冥に向ける鴉。

色々お見通しらしい。

「君にもしもの事があつたら・・・。」

「呼吸置き、口を開く。」

「生涯独身で過ごさなければ成らない。」

「一人の時間も大事ですよ。」

「・・・くすん。」

凹み気味の鴉は冥を部屋に残して部屋を出た。

部屋に残された冥。

誰とも無く呟く。

「・・・嫌いだなんで一言も言った事、無いですよ。」

その言葉は、その場に居た者しか聞こえていない。

唯一、冥以外の人物の黄泉は、まだ目覚めていなかった。

不一致（後書き）

前半はノリで書きました（いつもですが）

後半は・・アキラがんばれ？ってところでは。

リアルだったら彼色んな死に方あしてると思います

今回は脱線して、クリスマス用のお話書きます（たぶん）

番外編「クリスマス」(前書き)

どの話飛ばしても大丈夫そうなお話です

主にアキラ、ぽち、たま、ミリリ以外のクリスマス風景です
ドタバタ好きな方は回れ右です

番外編「クリスマス」

ルーンミッドガッツ王国の首都、プロンテラ。
鮮やかな彩りで街の人々を迎えている。

大きなモミの木に「MERRY CHRISTMAS」と書かれた看板代わりの赤いリボン。

そこを目印に待ち合わせする人も少なくない。

「特別の日にしよう。」

「また二人で迎えられたね。」

「デイナー、予約取れたんだ。」

「はい、これプレゼント！」

「我らが無敵のソロ軍団！」

などと色んな声が街を飛び交う。

そんな様子を街の外から眺め、一人背を向け歩き出す。

「よみ〜これもらった〜。」

足元の緑色の生命体、ぽにんが目の前のモノに興味深々。

「片腕の悪魔」の異名を持つ女、黄泉はそれに目を向ける。

赤いビロード生地三角帽に、先端と縁取りは真っ白いふわふわの毛。

「これを被れば気分はサンタクローズ！」な物である。

ふと横を見ると、そこにはぽにんと色違いのポリンが居た。

この時期になると現れる、サンタポリンだった。

ポフッ

しゃがんでサンタの帽子を手に取りぽにんの頭に乗せる。

「ぽにんサンタさん〜。」

嬉しそう(?)に地面で跳ねるぽにん。

「……………」

スッ

立ち上がり、黄泉はある一点を見つめる。
何も無い空間。

「あれ？ひよっとして俺バレてたり？」

・ ・ から発せられる男の声。

その声に答えず、黄泉はずっと見つめる。その声がある空間を。

「隠れてても見つかるのか！モテる男は辛いねえ。」

そう言う声の主が姿を現す。

紫色の短髪に同色の派手な服、裾には毛皮。

以前黄泉を襲った追跡者、チェイサージクだった。

「何だ、せつかくのクリスマス満喫しないのかい？」

「・・・。」

「しょうがねえなあ俺と一緒に・・・と言ってえ所だけど！」

残念そうな表情で自分のポケットを探る。

「生憎と予定があるもんでね、こいつで我慢してくれよな？」

そう言って取り出した物を黄泉に投げつける。

パシッ

それを受け止める黄泉。手の中の物を見る。

小さな銀色の指輪。

「俺の名入りだぜ？気に入った女「達」にだけ渡してるから、貴重

よ超貴重！」

不思議そうに指輪を見つめる黄泉に、少年のような笑みを見せるジク。

「んじゃ、俺そろそろ行くわ。日を改めてアンタを頂くぜ、色々とな！」

ニヤリと笑い、そして消えていく。

「メリークリスマス！」

その声と共に気配も消える。

黄泉はジクを見届けた後も、手の中の指輪を見つめている。

ポケットに入っていた所為か、人肌の温もりがある。

「よみ〜それなーに〜？」

足元からの声に、しゃがんで指輪を見せる。
パクッ

「あうっこれおいしくない。」
見せた瞬間に指輪をぽにんに食べられてしまう。

「。。。。。」

ガシッ グニーッ

黄泉はぽにんの口を問答無用に押し広げる。

「やくーいたいのやだ。」

サンタの帽子以外はいつもと変わらぬ緊張感0のぽにんの声。

黄泉がサンタぽにんから指輪を奪い返すのに、実に5分は格闘するのだった。

「た〜くちゃん！」

既婚者専用の島、ジャワイ。そのホテルの一室に響く元気な声。

「。。。何だその格好は。」

ゆったりとしたソファーに座る匠。目の前の銀に、呆れた声を出す。

ウェディング姿に、サンタの帽子。

結んでいた長い黒髪は今は解いている。

匠は普段通りの格好。

「花嫁サンタさんだよ！」

「まんまじゃねえか。」

「さあ！たくちゃんもこれを見て花婿サンタに！」

「やんねえよ。。。。」

乗り気の銀に、まったく気が乗らない匠。

「大体な？サンタほど損な役回りはねえぞ？」

「えー？夢を運ぶ大事な職業だよ！」

目を輝かせながらサンタの帽子をいじっている銀。

「世界中の見ず知らずのガキ共に、出費が激しくて割に合わないプレゼントを配るんだぜ？」

かったるそうに話を続ける匠。

「しかも毎年。財産と体力がいくら有っても足んねえよ。」

「うゝ．．たくちゃんにはサンタさん好きじゃないんだ．．。」
残念そうな声を出す銀の表情は、少し寂しそう。

「おう、なりたいとは思わねえ、そんな苦勞職。」

真顔で言う匠を見て、サンタの帽子をはずそうとする銀。

「まて、ちと着けとけ。」

その行動を制する匠。その発言にキョトンとする銀。

「え？たくちゃんイヤそうだからはずすん．．っわ！」

グイッ

急に匠に右腕を引っ張られ、体の重心がそつちに傾く。

ポフッ

ソファーがクッションになり、銀の下半身を支える。

上半身は．．匠の腕に支えられていた。

匠はそのまま銀を自分の胸元に引き寄せる。

「そらっ、こいつをやる。」

ポンッ

「いきなり危ないよ．．ん？」

匠にしがみついた銀の手に小さな箱を乗せる。

「おお？」

「サンタもたまには貰いてえだろ、プレゼント。」

「たくちゃん．．。」

突然の嬉しい出来事に思わず顔がにやける銀。

その顔を匠に向けようとす。

グイッ

向けた顔を匠に押さえつけられてしまう。

「むぐゝたくちゃん見えないよゝ！」

「見んでいい！」

そう言ってる匠はガラにも無く照れ顔である。

ジタバタと自分の胸の中でもがく、サンタの帽子を被った純白の花

嫁。

普段は結んでいる髪を解いた姿も新鮮だ。
銀自身は気付いていない。

匠へのプレゼントが自分だと言う事を。

年中雪が降る街、ルティエ。

深々と降り積もる雪。

雪が降る音と、その雪を踏みしめる音が耳に心地よい。

「雪はもつと冷たい物だと思っていたが……。」

私は空からの雪を手取る。

「雨の日より雪の日の方が暖かいかも知れないな。」

手の平と肩にかかった雪を軽く払う。

「雨は濡れますからね、粉雪には水分があまり有りませんからその為でしょう。」

そんな私を見ながら、彼女は口を開く。

「なるほど……。」

私は呟くように言う。

そしてふと思いつきしゃがみ込む。

「冥……大変だ！」

「どうなさいましたか？ 鴉様。」

私の声に返事をする彼女に、雪の塊が崩れた物を両手にすくい上げて見せる。

「雪ダルマが出来なかった……。」

「……粉雪には水分がありませんから……。」

彼女はまるで保護者の様な表情で返事をする。

「この雪では雪ウサギも雪男も作れない……。」

「雪男は雪から作れません。」

「そつだ、かまくらは……。」

「空洞の無いかまくらは出来そうですね。」

「・・・雪山だと思う。」

「出来るじゃないですか、雪で。」

そんな他愛の無いやり取りをする私達。

気を取り直して（その内雪ダルマを作りに来よう）目指す小屋へと進む。

「よし、ここにお目当ての物が・・・。」

私が向かった先の建物の天辺には十字架が飾られている。

「そこ、期間限定で結婚式が出来る教会です。」

予想通りの反応を返してくる彼女。

「いやあ、ついうっかり結婚してくれるかなと。」

「ついうっかり入った場所で百万Zny以上出して結婚しません。」

「今なら期間限定で何と通常の半額で幸せに！」

「お買い得な幸せなんて要りません。」

キツパリと言い切る彼女の言葉が、私の心をバツサリ切り捨てる。

当たり前のように言ってしまった自分が恥ずかしい。

結婚は娯楽じゃあない。もっと清く深いものなのに。

それでも怒った様子の無い彼女。いつも通りといった雰囲気だ。

こんなやり取りを、私達は今までずっと続けてきた。

だからこそ易い考えをしまいそうになる。今のように。

気を付けよう、押したら引く。

どこかの標識の様な考えをまとめ、私は改めて彼女を見る。

「仕方が無い、本来の場所に行くか・・・冥？」

「あ・・・そうですね、行きましょう。」

慌てて返事をする彼女。

「てつきり」初めから行って下さい。「って返ってくるものだと・・・」

「予想外もたまにはいいでしょう。」

私の言葉に、難なく切り返す彼女。

何となく思い詰めた表情と見えたのは気のせいなのだろうか？

そうして私達は教会を後に、歩き始めた。

キイ・・・

目当ての小屋の扉を開ける彼。

その小屋内は暖炉に火が灯っており、雪で冷えた私達を温かく迎えた。

室内に入ってすぐ右にクリスマスツリーがあり、暖炉の側にはサンタクロース。

「すぐ戻るから。」

そう言うと彼はサンタクロースの側に行く。

箱の様なものを手渡された彼は、そのまま左奥に向かう。

少しすると、困ったように嬉しそうな表情で私の所に戻ってきた。

「何かあつたんですか？」

「うん？いやあ・・・ラッピングを頼もうと思ったんだ。」

そう言うて手の平を開けて私に見せた。

箱の代わりに、金色の指輪が一つ。

「そしたらまあ、色々あつて・・・こいつに名前を入れてくれる事になつたんだ。」

そこまで言つて彼は私の手を軽く掴み、その指輪を持たせた。

「結婚指輪じゃないから、安心して受け取って欲しいなこれは。」

「・・・・・・。」

私はその指輪をじつと見つめたままだ。

「クリスマスプレゼントさ、まあ魔除けにはなると思うぞ。」

彼は年齢に合わず、無邪気な表情を私に向ける。

胸が、苦しい。

「お返しは・・・有りませんよ。」

感情を抑えながら私は口を開く。

「構わないさ、私があげたかっただけだからな。」

気にするでもなく彼は笑顔で私を見る。

そんな彼の表情を見ると、苦しくなる。

「構わない」・・・私は望まれていないのだろうか？

「結婚指輪じゃないから、安心して」・・・私に嫌われていると思っ
ているのだろうか？

二つの沈んだ感情が、私の心を締め上げていく。

望みを与えなかったのは私なのに。

嫌われても仕方がない様な態度を取ってきたのは私なのに。

反対に、この彼の名入りの指輪を私にくれた事をとて嬉しく思う。

反する気持ちが共鳴し合う思考回路に浮かんだ言葉は・・・。

・・・変わらないで欲しい。

「・・・い・・・冥！」

不意に掛けられた鋭い声にハツとなり、私は我に返る。

コンッ

驚いた拍子に、持っていた指輪を落としてしまう。

「おっと、活きが良い指輪だな、私の名入りだからこそだな。」

彼は足元に落ちた指輪を拾い上げる。

「冥・・・？すごく辛そうだぞ？」

そして心配そうな表情で私を見つめる。

「大丈夫です・・・あの、指輪・・・」

私は彼の手の中にある指輪を見る。

「ああ、大丈夫。簡単に傷ついたりしないさ。」

彼はそう言つと指輪を自分のポケットにしまった。

「冥、教会に戻ろう。雪の温度差で具合が悪くなったのかも知れな

い。」

本当に心配そうな顔だった。

彼の行動に、きつと深い意味は無い。

言葉通りの意味なのだろう。

私に負担掛けないようにと言ってくれたはずの言葉が。

そう思つても、私の心はぎゅうぎゅうと締め上げられている。

彼の名が入った指輪。

それすらも私の手には入らなくなってしまった。

私は望むのが遅すぎてしまったのだろうか。違う。

自分の気持ちに気付くのが、遅かったのだ。彼は瞬間転移の術を唱えていた。

「はあ・・・っワープポータ・・・」

バターンッ

その時入り口の扉が勢い良く開いた。

「くあーっ寒！マジで寒かった！」

「外で延々とアンソニ狩りしてるからでしょ。」

「まゝアンソニの持つてる靴下集めてプレゼントボックスと交換出来るからねえ。」

「あんな悪い顔のサンタさんは初めて見ました・・・」

そこには、気の知れたギルドメンバー達が居た。

髪や衣服に掛かった粉雪を払い、室内に入ってきた。

「お？マスターに冥さんじゃんか。」

その内の一人、アキラが私達に気付く。

ツカツカと歩み寄り、私と彼を見比べる。

「何で二人してそんな難しい顔してんだ？」

アキラは当然な疑問を投げかける。

そう、周囲は賑やかで楽しそうなのに私は・・・。

また気分が沈みそうになる私の前に、アキラは何かを差し出してきた。

「?・・・これは・・・」

手を伸ばそうとする私はアキラの顔を見た。

少年のような、いたずらっ子の顔がそこにあった。

シユパパパッパッパ!

「っきゃあ!」

目の前で突然の破裂音。

そして空中に広がる花火。

数個の花火を使用したのだ。

「よし！メリークリスマス！」

ガッツポーズを取っているアキラ。

「よし！じゃありません！いきなり何ですか！」

得意げなアキラに私は声を荒げる。

「うん、やっぱり難しい顔より普段どおりの顔がいいなあ。」

ニカッとアキラは笑いながら言った。

元気付けようとしてくれたらしい。

「まったく・強引ですね。」

そう言いつつ私は少し気持ちが落ち着いている事に気が付く。

「たま！このヒゲ外れないじゃないか！」

不意に彼の声が聞こえた。

「30分はそのままだよ。」

ドドドド・

室内を走り回る彼とたま。

「まったく・男共は何時まで経っても子供だね。」

呆れ顔で私の近くに歩み寄るのはぼち。

「若いつて言えよな。」

「幼いつて言うの。」

他愛の無いやり取りをするアキラとぼち。

「はい！冥さんにもプレゼントです！」

いつの間にも側に来たのか、ミリリが私にラッピングされた箱を渡してきた。

「私に・ですか？」

「はい！あたし達の分はもう有りますので！」

そう言うミリリの後ろには、数個のラッピングされた箱が置かれていた。

「鴉さんにも渡してきますね！」

元気な声を出し、ミリリは後ろにある箱を彼の元へと運んでいく。

ポンス

不意に私のもう片方の手に置かれる物。
ラッピングされた箱と・・銀色の指輪。

それを渡してきたのはアキラとぼちだった。

二人は小声で話しかけてきた。

「今のうちに名前入れてもらっちゃいなよ。」

「たまが引き付けてっからさ。」

彼の方を見ると、まだたまと追いかけてっこしている。

ミリリは彼に何時渡そうかと迷っている。

「・・・皆さん、ありがとうございます。」

私は頭を下げた後、今出来うる限りの笑顔を作った。

辛い気持ちから解放された感謝に、チャンスをくれた感謝の気持ち
でいっぱいだ。

「冥。」

頭の中に直接聞こえる声。

「どうしたんですか鴉様？囁き（ウイスパ）なんて・・・。」

突然の声に動揺を隠しながら返す私。

「指輪、冥の気分落ち着いたら渡すよ。日を改めてでも。」

優しい声が頭に響く。

当の本人はたまと一緒に息切れて座り込んでいる。

そのギャップについつい笑いそうになる私がいる。

「ほら冥、早くやつちゃう。」

ぼちに背中を押され、私はアキラとぼちに渡されたものを持って力
ブラ嬢の元に向かう。

「はい、ありがとうございます。」

二人にもう一度礼を言い、彼にも返事をする。

「いいですよ、日を改めなくても。」

そして交換しよう。指輪の。

結婚は、しないけれど。

その気持ちは告げずに、私は名の入った指輪を手にするのだった。

番外編「クリスマス」(後書き)

全然クリスマスじゃないなんて聞こえませんが、あ
き、気分だけでも！

ぐだぐだになってしまいましたしてホントごめんなさい
女の子には幸せになって欲しい叶でした！
皆様良い御年を！

一致（前書き）

タイトル通り（？）の続きです。

いやずっと続きっぽいですが・・・。

二手に別れた男女達のドタバタから始まります。

一致

とある街はずれの教会。

外は小雨が降り、静かに大地を濡らしていく。
ダダダダダダッ

そんな中、その教会内では二組の男女が駆け回っている。

一組目。

弦楽器を手にキッチンへと逃げ込む青い長髪の吟遊詩人、たま。

その後を追う肩までの銀髪の女戦士、ぽち。

「ま、待った待った！落ち着いてよ！」

追いかけてくる女戦士に向かって呼びかけるたま。

「騒がしくされて、誰が落ち着けると思ってる！」

もつともな事を言い放つぽち。

気付けばキッチンの端に追い詰められているたま。

「大人しくデコピンされるんだね。」

追い詰めたと思いき走る足を緩めるぽち。

クルッ

たまは振り返った。

観念した表情・・・ではなく。

キリっとした真顔で片手をぽちに向ける。

軽く息を吸い込み呼吸を整える。

そして発する一言。

「ブドウ・・・一粒どう？」

たまの寒いジョーク発動！

「足りない。」

だがぽちには効果が無かった。

「むっ・・・欲張りさんめ！」

「一房どう？だったら効いてたかもね。」

氷化効果のある技を難なくかわし、涼しげな表情のぼち。

「ジョークにならないし！」

そんなぼちに言い返すたま。

「まああれだよね」

つかつかとたまに歩み寄り、右手を額へと向ける。

そして一言。

「おつかれさま。」

その右手をデコピン体勢に変える。

ピキピキ・・・ピキンッ

「え？」

「なっ?!」

その時キツチンに響く氷化の音。

ぼちとたまはとっさに互いの体を見る。

しかし、どこも氷化の形跡は見られない。

「ど、どういう・・・。」

ぼちは辺りを見回す。

「うわああ！」

不意にたまが声を上げる。

「たまうるさい！」

たまを叱り付けつつ視線をそっちに向けるぼち。

そこには厚い氷に覆われている一人の冒険初心者の姿。

「ミリリ?!」

「ミリリさん！」

肩までの栗毛に小柄で幼顔の少女が、きつちり凍ってしまっていた。

二人の後を追って、到着直後にたまの技が炸裂(?)したらしい。

「ぼちにかかれれば良かったのに・・・。」

ビシッ

「あたっ！抜き打ちなんて酷いよ！」

ぼちのデコピンが的確にたまにヒットする。

「いいから！氷壊すよ！」

「う、うん！」

ぼちの勢いに押され、弦楽器を構える。

ギュギャギャインツ

綺麗な音色ではなく、その音が衝撃を放つ不協和音。

「ぐう・・・っ！」

その音に耐えつつ、ぼちは氷漬けのミリリの胸元に左手を置く。

ピシ・・・ッ

不協和音の衝撃で、厚い氷の全体に亀裂が入る。

「よし、いける！」

右手を構え、氷の上に置いた左手に向けて叩き付ける。

ビキビキ・・・ッ

叩き付けた衝撃で大きな亀裂が入る。

ビキ・・・パキンツ

厚い氷が割れ、ミリリを覆ってた氷は衝撃ですべて砕けた。

「あ・・・っわわ！」

急に解放された体はバランスを取れず、よろめくミリリ。

それを傍に居たぼちが片手で支える。

「大丈夫？ミリリ。」

「あ・・・はい！えっと、一体何が・・・。」

周りをキョロキョロと見回すミリリ。

「す、すみません！僕のジョークの所為で！」

弦楽器を抱えミリリに駆け寄るたま。

「ジョーク？」

「はい、「ブドウ、一粒どう？」等のジョークを僕が言っと低確率

で氷化する・・・。」

ピキピキ・・・ピキンツ

「あ。」

「あ。」

厚い氷が再びミリリの体を覆う。

「たま。」

「・・・はい。」

静かに怒りのこもった声がたまに向けられる。

「何ケタが良い？」

「デコピンの回数がケタ単位?!」

察しの良い反応を示してしまったたま。

数分後に、額が真っ赤なのは言うまでもない。

二組目。

教壇を中心に広間を駆け回る赤い短髪のローグ、アキラ。片手には小さめの斧を持っている。

「トマホーク返しやがれ!こんガキ!」

そのローグを追いかけ回すのは黒い短髪のブラックスミス、匠。啞えていたパイプタバコをはずし、追跡に専念する。

「返したらまたこっちに投げるじゃんかよ!」

追いかけてくる匠に声を掛けるアキラ。

「逃げなきゃ投げねえよ!」

その声に返事をする匠。

「ああそれなら・・・。」

ピタリと逃げる足を止めるアキラ。

「って、逃げなくても攻撃してくるだろおおおお!」

ツッコミするなり逃走を続行させるアキラ。

「っち、ひっかからねえか・・・。」

一瞬縮まった距離も、またひらく。

息を切らしつつ追いかける匠。

十分間は走り回っている。

互いの体力も削れつつある。

アキラはこまめに匠を見つつ、一定の距離を保つ。

(捕まったら、俺は終わる。)

匠の体力の消耗を祈りつつも、棺おけの中の自分も想像するアキラ。匠も、アキラを見ていた。

こまめに匠を見つつ、一定の距離を保つ・・・そんな様子を。そして、目を逸らす瞬間も。

アキラは後ろを見る。

息を切らしつつ自分を追ってくる匠。

(もう少し耐えられれば・・・)

そう思っただけ前を向くアキラ。

「 よお。 」

ドンッ

後ろに居たはずの匠が、アキラの目の前に居た。

匠は右手を突き出しアキラの左肩に当てる。

「 んな!?! 」

走っていた勢いに匠の突き出した力が加わり、左肩に衝撃が走る。

思わぬご対面に、衝撃とバランスが対応できず床に倒れこむアキラ。

ドンッ

「 つがは! 」

床に叩きつけられた衝撃に、思わず声が出る。

そんなアキラの様子を見つつ、しゃがみ込み斧を取り返す匠。

「 つはあ・・・くそ、手間取らせやがってっ・・・。 」

息切れが止まない匠。

その左手には空の瓶を持っていた。

「 きったねえ・・・ドーピング・・・かよ! 」

ゼーハーと匠以上に息が荒いアキラ。

全力で逃げていた気力が抜け、ドッと疲れが襲ったのだ。

「 人のモン盗んどいてよく言うぜ・・・つま。 」

呼吸が少し整い、匠は両手を組み振り上げる。

「続けようぜ？」

ニヤリと笑みを浮かべ、その手をアキラの胸元目掛けて振り下ろす。
シユルシユルルツ

「な！？」

突然匠の振り下ろした両手に絡みつく植物。

十数本にも及ぶ植物の蔦が匠の動きを止めた。

「たくちゃん、遊びすぎだよ。」

のんびりとした女性の声が匠に声を掛ける。

「ぎ、銀！」

その声に驚き視線をそっちに向ける匠。

黒い長髪を軽く束ね活発そうな雰囲気製の製薬者、銀。

彼女が植物を操って匠の動きを止めたのだった。

「た・・・たすかった・・・」

全身から冷や汗を出しているアキラが、安堵の声を上げる。

「銀！ほどけてこいつ！」

「だめ。アキラちゃん疲れて動けないでしょ？」

身動き取れずにいる匠に歩み寄る銀。

（銀さん・・・実は最強なんじゃないのか？）

乱れた呼吸を整えながら、アキラはまじまじとその光景を見ていた。

「もう、魔法かけちゃうんだから！」

「なっ？！アホ！此処でやるな！」

嬉しそうな表情の銀に、引きつった表情の匠。

「ま・・・まほう？」

床に大の字で倒れたままのアキラが聞き返す。

「そだよ。」

一呼吸置き、言葉を続ける銀。

「沈黙の魔法。」

そう言っって銀は匠の目の前に来て、背伸びをする。

「よせ銀！やめろ！」

匠の必死の抵抗にもがうちり絡み付いて離れない植物の蔦。
ポヨン

「おにーさんおねんね？」

その時間の抜けた声がアキラの傍で聞こえた。

プニツ

「ぶあ！」

緑色の生命体、ぼにんが跳ねた拍子に横たわるアキラの顔を覆う。
突然の事でもがと宙を彷徨う両手。

ガシツ

ようやく顔に居る生き物に手を伸ばし、呼吸が自由になる。

「っはあ・・おま・・寝てると思ったら顔に乗るんじゃない！」

上半身を起こし片手で掴み上げたぼにんに文句を言う。

「まくらがわり？」

「なら下に来い！永遠に眠っちまうだろ！」

「おにーさんがぼにんのまくらなの。」

「まくら要らないだろ！存在が！」

ツツコミつつ、掴んだぼにんを床に降ろす。

「おや、随分と仲の良い事だな。」

不意に頭上から聞こえる声。

「仲良すぎて窒息死するぜ・・。」

その声に言葉を返すアキラ。

「いやあつちだ。」

頭上からの声は長い黒髪を軽く束ねた男聖職者、鴉。

鴉が指した方向を見ると、匠がうずくまり口を押さえていた。

銀は匠のそんな様子をしゃがんでニコニコしながら覗き込んでいる。

匠を縛り付けていた植物の蔦は、いつの間にか消滅していた。

「若いなあ、いや良いモノを見せてもらった。」

「・・・っあつち行けよおっさん・・。」

「えへへ〜こうでもしないと出来ないんだよね。」

耳まで真つ赤な匠を、挟み込むように銀と鴉が笑い合いながら両側に居る。

一人かやの外のアキラは不思議そうにそんな光景を見る。

「ったく・・・よくわからねえが見逃しちまったじゃんかオイ。」

アキラは側に居るぽにんに怒りをぶつけ・・・。

「あん？アイツどこ行つた？」

・・・るはずが、ぽにんはの姿はなかった。

辺りを見回すと、いつの間にか教会奥の廊下に居た。

(いつの間に・・・そいや、あいつらもあつちにいるんだっけか。)

アキラは立ち上がり、教会の奥へと足を進めた。

場に残つた三人。

「しかし銀の沈黙魔法は効果抜群だなあ。」

マイペースな鴉。

「すごいね、たくちゃんもつかいやつていい？」

同じく銀。

「断る！」

すっかりペースが崩れた匠。

どうやら銀の沈黙魔法には、沈静効果もあるようだった。

教会内のキッチン。

三人の男女が話をしている。

「まったく・・・ろくなことしないんだから。」

右手をコキコキと鳴らし愚痴をこぼすぽち。

「うっ・・・じんじんするよ！」

デコピンで真つ赤になった額を押さえ涙目のたま。

「た、たまさん！この氷で冷やしましょう！」

さつきまで自分を覆っていた氷を拾い、ハンカチで包み差し出すミリリ。

「ああ、ミリリさんの温かい優しさで、僕の心の氷河期が終わりを

迎えそつです。」

差し出された氷を手に取り、たまはお得意の口説き文句（無意識）を口にする。

「氷河期で終わればいいのに。」

言葉通りに（？）冷たく言い放つぽち。

「その一言で氷河期再来したよ！」

「終わらなくて良かったね。」

対照的な二人のやり取りを見て、ミリリはくすくすと笑っている。が、すぐに不安そうな顔になる。

「？どうかしましたかミリリさん？」

そんな様子の変化に気付き、たまがミリリに声を掛ける。

「あの・・・ぽちさん。」

たまの声に押されたように、ミリリはぽちに話しかける。

「ん？どしたのミリリ。」

急に話しかけられ、不思議そうにミリリを見つめるぽち。

「け、喧嘩はしちゃ・・・良くないと思い・・・ます。」

ミリリの声がだんだんと小さく沈んでいく。

「たまとはいつもこんな感じさ。ねえたま？」

「だねえ。ぽちはすぐ手が出るし。」

ビシッ

「あたっ！抜き打ちはダメだってば！」

ぽちのデコピンが再びたまの額にヒットする。

わめくたまをよそに、ミリリに話しかける。

「いいの。ああ見えてたまは頑丈だから。」

「いえ！たまさんじゃなくて・・・さっきの・・・」

「さっき？」

「ぽちんはおなかがすきました。」

「はい、あの、謝るとか何とか・・・。」

「ああ、無神経なああの男の事ね。男性軍みんなうるさかったけど。」「シロリとたまを睨むぽち。」

「僕はだつて、険悪ムードが嫌だつたんだ。」

ぼちを真つ直ぐ見つめながら答えるたま。

「何？私が原因だつていうの？」

「さつきひろつたのじゃたりません〜おやつください〜。」

「・・・こたえかねるよそれは。でもぼちは悪くない、とは言えない。」

首を軽く横に振り、ぼちの言葉に反論する。

「注意して相手が反省もしなくて、何で私が文句言われなきゃいけないの？」

「あ〜つめたいおやつがおちてます〜。」

「ぼ、ぼにんさん！それはただの氷です！」

「文句なんて言つてないよ。ただ・・・。」

「や〜つめたいです〜。」

「だああああ！その緑の物体をはずせ！状況飲み込みきれねえじやねえか！」

キッチンに響き渡る声。

声の主はぼにんを追いかけてきたアキラだった。

突然の声に一瞬静まり返る場。

「あ、アキラさん！」

その中で最初にアキラに声を掛けたのはミリリ。

「この子、ぼにんさんって言います！」

「ぼにんさんでもごくろーさんでもいい！ちょっと黙らせてくれ！」

「はっはい！」

アキラの勢いに押され、ミリリが慌ててぼにんを抱きかかえる。

「あ〜おねーさんだ〜。」

抱きかかえられてようやくミリリの存在に気付いたらしいぼにん。

「ぼにんさん、シーツですよ。」

「し〜。」

相変わらずマイペースのぼにんである。

「うるさいよアキラ、君はそんなに注意されたいの？」

呆れた表情でアキラを見るぼち。

「はあ・・・お前さあ。」

ぼちと同じように呆れた表情を返すアキラ。

「何？」

「さっきのとか、上から目線で人責めるのやめる。聞いててすっげえ不愉快だぜ？」

腕組をし、ぼちを睨むように見つめる。

「上から目線？責める？注意しただけで何でそこまで言われなきゃいけないの。」

そんなアキラを、心外だとばかりに言い返すぼち。

「謝れ謝れって、強要させる必要も無かったし。」

「謝らないで、反省したって言えないでしょ？」

「注意したら正義で、謝らなかつたら悪なんだな？お前の中で。」

アキラは容赦なく責め続ける。

「私は・・・気をつけて欲しかっただけなんだよ？」

「ならそう言えばいいじゃねえか、言い方が不愉快だっつってんの。」

「

「そういう言い方・・・嫌いだ。」

アキラの言葉に、苛立つぼち。

「嫌いで結構だ。」

一呼吸置き、アキラは言葉を続ける。

「嫌われるのは慣れてんだ、もう勝手にしろよ。」

吐き捨てるように言い放ち、体の向きを来た方向へと向けようとす
る。

「アキラ・・・」

呟くように名を呼んだのはたまただった。

「んだよ？」

顔だけたまに向けるアキラ。

ドスン

「きゃ！」

「おわ?!」

不意の衝突にバランスを崩すアキラ。

が、目の前の人物はその衝撃で床に尻もちをついている。

「後ろに冥がいるからなっつて言おうと思ったのに・・・。」

「遅えよもつと早く言え!め、冥さん大丈夫か!」

たまに文句を飛ばしつつ、目の前の人物に声を掛ける。

水色の短髪、幼顔にも落ち着いた雰囲気の水聖職者、冥。

「あ・・・はい、びっくりしました・・・。」

ゆっくりと立ち上がり、尻もちついた部分をぱたぱたとはたく。

「いや、怪我は無いか?つて意味なんだけど!」

「はい、無事です。」

「悪かった、いつもならきっちり避けられるんだけどなあ・・・。」

反省の色を見せつつも首を傾げるアキラ。

「そうですね。」

アキラの様子を見ながら冥は言葉を続ける。

「感情が高ぶると、気持ちの視野が狭まります。」

「・・・聞いてたのか。」

アキラの言葉に頷く冥。

「・・・アキラさん。」

「なんだ?冥さん。」

「・・・嫌いになる感情は、楽ですか?」

「・・・え?」

「嫌われるのに慣れた、その感情は心が安らげますか?」

「!」

はっと目を見開き、アキラは冥の真っ直ぐな目を見る。

「言われる側も、辛いんです。」

そうアキラに言い、冥はぼちに視線を向ける。

「・・・ぼちさん。」

「・・・何かな？」

「謝罪より、次をさせないことが大事です。」

「・・・あ・・・。」

「相手が次をしない姿勢であれば、そこで終わるべきですよ。」

「・・・うん。」

はつきりと、でも優しく言い聞かせる冥に、素直に頷くぼち。続いて視線をミリリに移す冥。

「ミリリさん、何か言いたげですね？たまさんも。」

「え？あ・・・はい、あの・・・。」

急に話を振られ、ミリリは動揺しつつも言葉を探っている。その間にたまが入る。

「喧嘩・・・良い喧嘩はしてもいいと思うんだよね僕は。」

「良い・・・喧嘩？」

たまの言葉に、ぼちとアキラが反応する。

「うん。ですよね？ミリリさん。」

側に居るミリリに話を持っていく。

「・・・あ、はい！・・・えと・・・銀さんが帰ってくる前ですね？言葉が見つかったのか、そのまま話を続けるミリリ」

「アキラさんとたまさんと・・・アニバーサリーちゃんが・・・。」

「え?!あの怪盗アニバーサリー?!」

意外な人物の名が出て、ぼちが驚きの声を上げる。

「うん、ちよつと来ててね。それから？ミリリさん。」

ぼちの反応に軽く答え、ミリリに次を促すたま。

「ごう・・・とつても激しい言い合いだったんですが・・・。」

「フツと、ミリリは表情を和らげた。」

「シツレイかもですが・・・見ててすつごく楽しかったんです。」

「呼吸困難になるくらい笑ってたもんな。」

「・・・さっきの喧嘩は、見てて苦しかったです・・・。」

そこまで言ってミリリの表情が暗くなる。

ポンッ

「わっ？」

その時ぽちがミリリの頭に手をのせた。

「嫌な思いさせて、ごめん。」

そう言っつてぽちはアキラに向き直った。

「つつかかってごめん、でも嫌いじゃないから。」

「お、おう。」

思わぬ素直な態度のぽちに、動揺しつつ返事をするアキラ。

「冥、教えてくれてありがと。ちょっと言ってくる。」

続いてぽちは冥とたまを交互に見つめ、鴉達の居る広間へと向かう。

その場に残った面々。

「気持ち切り替えられた様ですね。」

「あ！アキラさん今ガッツポーズとりましたね？」

「とってない！とってないって！」

「僕呼ばれなかった・・・。」

「ぽにんのおやつ〜まだですか？」

それぞれの思い（一部食欲）を口にしつつ、雰囲気は険悪から緩和へと変わったのだった。

広間の椅子に座り、何やら話が盛り上がっている鴉と銀。

「で？夜とかどうなんだ？」

「それがね〜結構やさ・・・。」

スコンッ

鴉の頭にパイプタバコがヒットする。

「あ痛！」

「変な事訊いてんじゃねえよ！このおっさん！」
投げた張本人は匠。

「軽いスキンシップじゃないか。」
「人の嫁にヤなスキンシップすんなや！」
「嫁か？嫁ねえ、お前の口からそんな言葉が出るとはなあ。」
「ニヤニヤしながら匠を眺める鴉。」
「鴉ちゃんはたくちやんと仲いいよね。」
「鴉と匠のやり取りをみて、のほほんと口を開く。」
「どこ見て言つてやがるっ人おちよくつて楽しんでるだけだろが！」
「まあまあ落ち着け匠。」
「荒れてる匠をなだめようと鴉が間に入る。」
「……おっさんの所為なんだぜ？いらいらしてんの。」
「それはそれは……ご苦労様だ。」
「だからっ！」

ポント

鴉につつかかろうとする匠の肩を、不意に誰かに叩かれる。
「……んだよおめえは、また説教か？」
振り向いてその人物を見る、そして不機嫌な表情を相手に向ける。
「……ぼちつて名前、あるから。」
「ぼちは無表情に匠を見つめ、名を述べる。」
「ふん……オレは匠つてんだ。」
よく分からないまま自己紹介が行われる。
「そう……匠。」
聞いたばかりの名を呼ぶぼち。
「あ？」
「次やったらデコピンね。」
「ああ？」
「それじゃ。」
「ぼちはそれだけ言い残すと、教会奥に姿を消した。」
「……何だありゃ。」

意味不明な行動に首を傾げる匠。

「おいおっさん。」

そのまま鴉に呼びかける。

「なんだい？」

「ここに居る奴らは何でこつもフリーダムなんだ？」

「ははは、そう言つなよ匠。」

思つたままを口にする匠に、鴉は言った。

「お前も大差無いからな。」

スココンッ

「痛！」

匠のパイプタバコが再び鴉の頭にヒットする。

「一言余計だぜ。」

言つ事を言いつつも、先程より落ち着いた様子の匠である。

一致（後書き）

やっと書ける時が来ました（涙）

続き書きたくてうずうずしてましたねえ・・・。

週一ペースが崩れっぱなしですが、細長い目で見守って下さい。

ええ、まだ何となく続きますのであしからず）あ

目覚め

サア・・・

小雨がミッドガッド大陸に降りしきる。

満遍なく大地を濡らしていく。

「ぐ・・・っ！」

プロンテラの町外れの森の中、雨に打たれ一人の男がそこに居た。

矢ガモ。もとい、矢が腕に刺さった暗殺者。

木に寄りかかり体を預けている。

ズルリ・・・。

男暗殺者が苦痛に歪む顔で矢をゆっくり抜いていく。

そりゃ恍惚とした顔で矢を抜かれても困るのだが。

「くそ・・・止血薬・・・。」

矢を抜いた場所から流れ出る血を手で押さえつつ、道具袋をもう片方の手で探る。

それらしい瓶を見つけた。

コロンコロン・・・。

だが雨に濡れた手により、滑って地面に転がる。

「ちっ・・・。」

舌打ちをし、痛む腕を押さえながら手を伸ばす。

ヒョイツ

その瓶を拾い上げた者が居た。

「ムキ？（おやおやなにか拾ったぞい？）」

「・・・人ではなく、一匹の猿だった。」

「・・・猿、そいつをこっちに渡せ。」

まずい奴に拾われた。

そう思い、気持ちが悪る。

このパターンは、そう。

「ムキ！（アイテム、GETだわい！）」

猿は止血薬の入った瓶を頭上に掲げ、なにやらご満悦な様子である。
トコトコトコッ

案の定、猿は手に入れた物を手にその場を去ろうとする。
猿だけに、去る。

「なめる・・・な！」

ヒュオンッ

男暗殺者は隠しナイフを出し、的を猿に合わせ投げる。
背後に迫る凶器に、猿は気付いていなかった。

パシンッ

「おっと、アブねえよコレ。」

猿に目掛けたナイフが、直前で誰かに止められた。
さっきまで人の気配は無かったのに。

ヒョイ

トコトコ歩く猿を片手で掴み上げる一人の男。

「おいサル太さん、何狙われてのさ。」

掴み上げた男は、猿の見知った顔だった。

「ムキ？（おお、御主こそ何をびしょ濡れておる？）」

「いやあ蝶の羽無くてさ、ハエで飛びまくったらこのザマよ。
親しげに話し合う一人と一匹。猿語が判るらしい。」

「ムキキ（相変わらずハエ運の無い奴じゃ）」

「アンタも元気に放浪癖で何よりだ。」

猿を胸に抱えた男は男暗殺者に振り返る。

「返すぜ？コレ。」

軽い手つきでさっき掴んだナイフを放るよつに投げる。

トスッ

男暗殺者のすぐ側の地面にナイフが突き刺さる。

「あ、良く見たら情報員の影かげっちじゃん。」

男暗殺者の顔を見るなり男はつかつかと歩み寄る。

「元気？」

「流血している人間にいう台詞じゃないな……。」

苦痛に歪む顔で、流れる血を手で押さえる男暗殺者、影。

「マジで？何やってんのさ暗殺者が。」

呆れた顔で影を見る男。

「その前……に……猿か……ら、止血薬を……。」

抑えてるもう片方の手を猿へと伸ばす影。

「は？おいサル太さん、変なモン盗るなっつただろ。」

「ムキ！（盗つてない！拾ったんじゃ！）」

胸を張り自己主張をする猿。

「わあっただわあっただ、後でさっき会った良い女の話してやっからさ。

それよこしな？」

「ムキ？（なんと？それじゃこいつは情報料じゃ。）」

「良い女」に目を輝かせ、猿は先ほどGETした止血薬を男に手渡す。

「サンキュ！そら、影っちコイツだろ？」

男は手に取った止血薬を影に向けて放る。

コトンッ

痛みで受け取れず、地面に止血薬が転がる。

「……状況みて……手渡……せ。」

文句を言いつつ、転がった止血薬に手を伸ばす。

「や！そいつあ気付かなかった！悪かった悪かった。」

悪びれた様子もなく、男は猿を抱えたまま影の側に近寄る。

そして足元に転がっている止血薬を拾った。

「冥、さっき運ばれた女の人の様子は……どう？」

街はずれの教会。

一段落ついて、思い出したようにたまが冥に問いかける。

「はい、後は回復を待つだけです。」
頷いて冥は返事をする。

「へえ・・・えらい重症と思ったけどなあ・・・。」

「冥と鴉が治療したんだ、病氣じゃ無い限りは治るよ。」
感心するアキラに、当然といわんばかりに口を挟むたま。

「鴉さんも冥さんも凄い方だったんですね！」

尊敬の眼差しで冥を見つめるミリリ。

「皆さん大袈裟です。」

軽く微笑みながら冥が口を開く。

「生命が持つ自然治癒能力を高めただけです。」

冥は更に言葉を続ける。

「あの子は元々自己回復力が優れているので、損傷の酷い箇所だけ治療しました。」

「元々？冥、知り合いだったの？」

「・・・ええ。」

たまの言葉に、表情が暗くなる冥。

「ご、ごめん変な事聞いちゃって・・・。」

思わぬ冥の表情をみて慌てて謝るたま。

「・・・後であの子のお話しますね。」

ぽつりと口を開く冥。

「冥？」

たまが不思議そうに冥を見る。

「無理しなくていいぜ？」

気を使わせまいと声を掛けるアキラ。

ミリリも後に続く。

「そうですね！話して辛くなるなら・・・。」

ポンッ

「っわ！ぼちさんおかえりなさい！」

そのミリリの頭に手をのせたのは、広間から戻ってきたぼち。

「ただいま、と言ってもすぐそこだったけど。」

ミリリに返事をし、冥に視線を向ける。

「私達が知らなかったら、何か問題ある？」

「知っておくに越したことは無いと・・・。」

ぼちに訊かれ、少し不安そうに口を開く冥。

「大丈夫！変なの来たらまた追い返すし、ねーぼち？」

「うん、「しっしっ！」ってやる。」

たまの言葉に、掌をパタパタさせて見せるぼち。

「野良犬かつての。」

「野良犬だったら「おいでおいで」ってやる。」

「侵入者はそれ以下って事だな。」

「未満だね〜」

「動物は大事に、ですね！」

そんなアキラ達の掛け合いを見て、表情が和らぐ冥。

「・・・分かりました。でも気になる点は訊いてくださいね？」

「んじゃあ先に一つだけ教えてくれよ。」

冥の言葉にアキラが返す。

「何でしょう？」

アキラの言葉を待つ冥。

「スリーサイズ。」

「俺の後ろでアテレコすんな！」

「それだと三つ訊いてることになるよね。」

「アキラさん！メモ帳が見え隠れしてますー！」

中々進まない話。

アキラが冥から女の名を聞きだすまでに、五分ほど話が脱線したのだった。

コンコン

キィ・・・。

鴉の部屋に入るアキラ。

入ってすぐ目に入るのは、仮設ベッドに横たわる女。

名は黄泉。

「片腕の悪魔」の異名を持つ、裏切りアサシンクロスの暗殺者。

薄地の掛布がかけられている為見えませんが、左腕が無いらしい。

「ただ寝てるだけ、に見えるけどなあ・・・。」

すやすやと落ち着いた寝息を立てる黄泉。

「随分回復したからですよ。」

黄泉を見るアキラの後ろから、冥が声を掛ける。

「ホントだ、さっきより顔色良いね。」

続いてたまも顔を覗かせる。

ぼちとミリリは飲み物の準備をしてるようだ。

「飲み物、持ってきてますね。」

「うん、ありがと。」

「んじゃ俺ら見てるわ。」

部屋から出る冥に声を掛けるアキラ。

「あ、楽器置いてきちゃった。」

「取って来いよ。」

「うん・・・アキラ。」

促すアキラに頷きたま。そして言葉を続ける。

「あん？」

「襲つちや駄目だよ？」

「ねえよ！考えすら無かつたわ！」

「えー？その考えも無いとか、それはそれで心配だなあ。」

「お前の発想が心配だぜ。って、いいから早く行ってこい！」

可笑しい発言（本人は至って普通）をするために、ピシヤリと言

放つアキラ。

「はいはい。」

パタン

扉が閉まり、部屋の中は黄泉の寝息のみ聞こえる。

「つたく・・・変な事言いやがって・・・。」

気になるじゃないか。

という考えが横切り、黄泉の無防備な寝顔が目に見え。

ブンブンと首を左右に振り、目を瞑り邪念を払おうとする。

「……よし！」

何が良しかは不明だが、意を決しアキラは目を開けた。

ミシ・ッ

「ぐああっ！」

男の片足が、流血している影の腕を踏みつけた。

思わぬ激痛に意識が飛びそうになる影。

「ほい、手渡し。」

ギリギリと踏みしめつつ、男は手に取った止血薬を影の手に握らせる。

「……つが……はあつはあ……っ！」

痛みの余り、呼吸すらままならない影。

「っは！野郎の喘ぎなんざ聞いたって燃えねえんだよタコが。」

足をどかし、つまらなそうに影を見る男。

クイクイ

「ん？何だよサル太さん。」

服を引つ張られ、影から猿に視線を移す。

「ムキ？（さつき会った良い女の話はまだかの？）」

「おーそうだったそうだった、交換条件だもんな。」

キラキラと目を輝かせて話を待つ猿。

「サラサラの銀髪でさ！出るとこ出て細いとこほっそいの！」

「ムキ！（ほうほう！それからそれから？）」

「んで、可愛い顔してるくせにめっちゃ強くてさ！腕片方無いのにさ、で……。」

ガシッ

浮かれ顔で話をしている男の服を、影が掴んだ。

「……んだよ影っち。汚れた手で掴まないでくれっかな？」

不機嫌そうに影を見る男。

「・・・っ片腕の・・・悪魔・・・か？」

痛みを堪え、男に問いかける影。

「・・・そっういや影っちは片腕の悪魔を追ってるんだっけ？」

服を掴む影の手を軽く払い除ける男。

「・・・。」

「新米暗殺者のアンタじゃ無理だ、安易に背後を狙われるようじゃ特に。」

痛みで呼吸が荒い影をよそに、話を続ける。

「すぐ大技使いたがったり、こんなナイフで脅したりさ。」

足元には地に刺さったさっきのナイフ。

それを抜き取り、軽く舌を滑らせる。

「ちやつちい毒だなあ？こんなんじゃ・・・。」

ドンッ

さっきより勢いよく影の傷口を踏み付ける。

「・・・っ！！！」

痛みの余り声が出せずにいる影。

「奴の甘い猛毒を味わったこのジク様に・・・。」

手に持ったナイフを影の首元に当てる男、チェイサー追跡者のジク。

「勝手に触るのも凶々しいってもんだぜ？なあ！」

そう言いながら、ジクは影の傷口を踏みつけた。

何度も何度も。

小雨の降る森に、一人の男の叫びが響き渡った。

バサッ

「ぶあ?!」

突然アキラの視界が暗くなった。

視界を塞いだのは一枚の掛布。

素早く掛布をはずすと視界が明るくなる。

目の前の仮設ベッドに、誰も居ない。

瞬間、背後に気配を感じた。

「!」

アキラは振り向こうとした。

ガン!

すると足元に衝撃を感じ、バランスを崩す。

足を踏ん張ろうとするアキラの背中に、衝撃が加わる。

グイッ

「おわ?!」

痛みではない、強い力と重力。

その勢いで仮設ベッドに叩きつけられる。

ドムンッ

弾むようなベッドのクッションと、突然の背後からの衝撃に挟まれる。

「ぐえ・・・!」

ガツチリと体をつつ伏せに押さえつけられ、身動きが取れない。

カチャ・・・。

不意に開く扉。

「取って来たよ!」

楽器を片手に、その場に戻って来たたま。

たまが見た光景は、一人の女によりベッドに押さえつけられている

アキラ。

・・・。

一瞬の間。

「ノックを忘れてたよ、入り直すね。」

パタンッ

「パタン。じゃねえ!逃避をすんな!」

いそいそと部屋の外に出るたまにすかさず突っ込むアキラ。

コンコン
カチャ

何事も無かったように、入り直すたま。

「取って来たよー。」

「そっからじゃなくていいから！早く助けろー！」

「・・・アキラ。」

「何だよ！」

「襲っちゃ駄目だとあれほど・・・。」

「逆！どっからどう見ても逆だろー！！」

マイペースのたまに必死のアキラ。対照的な光景である。
キイツ

「アキラさんたまさん！飲み物の準備が・・・。」

その時、部屋に元気良く入ってきたのはミリリ。
・・・。

一瞬の間。

「ご、ごめんなさい！」

パタン

「だからパタンじゃねえ！現状を見る！」

ミリリにも同じ反応を返され、そろそろ余裕の無いアキラ。
キイ・・・。

扉からそーっと覗くミリリ。

おすおすと口を開く。

「あの！大人の諸事情だったり・・・。」

「しないから！何とかしてくれ！」

ゼーハーと息が荒いアキラ。

その間にも手足をバタつかせ、抵抗を試みる。

それでもまったく振りほどけない。

抑えつけている力が、アキラの力をずっと上回っているのだ。

コツコツコツ・・・

その時、一人の男が部屋の前に来た。

「あ！鴉さん！」

その男の名を呼ぶミリリ。

騒がしさの余り、様子を見に来た鴉。

「何だ、私の部屋で随分賑やかに……。」

そして中の光景を見て、言葉を失う。

……。

「ミリリ、ドア閉めるから離れてくれ。」

「あ、はい！」

キイ……。

「閉めかけんな！マジでどうにかしてくれっ！」

「……仕方が無い。」

しぶしぶと扉を開け、部屋の中に入る鴉。

「しぶしぶすんな！」

「分かった分かった。」

捕らわれてる(？)アキラをなだめ、鴉は女に歩み寄る。

「黄泉、元気になって何よりだ。」

鴉の落ち着いた声に、名を呼ばれた黄泉が振り返る。

銀色の眼が、鴉を真っ直ぐ見つめる。

「くそ……ほつとかれた……。」

疲労(ツツコミ疲れ)の為か、力無く呟くアキラ。

「黄泉、それは獲物じゃないんだ。」

鴉の言葉を聞き、黄泉がゆっくりとアキラから離れる。

「や……やっそこ解放された……。」

ようやく自由の身になったアキラ。

そのままベッドの上で呼吸を落ち着かせる。

「よし……良い子だ。」

アキラを解放した黄泉に、鴉は優しく頭を撫でる。

黄泉は目を細め、大人しく撫でられている。

「こつ、ペットの狩りを褒めてる飼い主との光景を思い浮かぶよ。」

そんな場面をほのぼのと見つめるたま。

「俺は・・・今日・・・狩られてばかりなんだけど・・・。」
呼吸を整えつつ、アキラが口を開く。

「誰にだ？うん？」

「そりゃ斧持った鬼が・・・。」

ベッドから起き上がり、アキラは質問された声に答える。

その声の主は、肩に斧を背負っていた。

「ぎゃあ鬼！」

いつの間にか側に居た鬼・・・もとい、匠の存在に思わず叫ぶアキラ。

「誰が鬼だこんガキ・・・。」

パイプタバコを啜えつつ、サングラス越しにアキラを睨みつける匠。

「喧嘩はだめだよ？たくちゃん！」

その後ろから掛かる声は、銀。

「遊びだ遊び、なあアキラ？」

そう言いながら匠は側に居るアキラの肩をバシバシ叩く。

「つてえ！痛くない遊びにしてくれよ！」

「遊びは良いがお前達・・・。」

文句をいうアキラに、鴉が割って入る。

「痛そうだねアキラ。」

たま。

「ばっか痛えんだよ！」

アキラ。

「ご、ごめんなさい！冒険初心者ノービスなので回復スキルが何も・・・。」

ミリリ。

「そういう時は、「痛い痛い、意識ごと飛んでいけー」だよ。」

銀。

「そりゃ気絶だろ・・・つま、オレ関係ねえけど。」

匠。

「・・・。」

黄泉。

「・・・とりあえずだ。」

鴉はそんな賑やかな面子を眺め、声を掛ける。

「狭い。」

短く一言。

元は自室、来客用では無いこの部屋に五人も六人も七匹も(?)入る広さは無い。

「という訳でだ、黄泉以外は一旦広間に行つててくれ。」

そう言つて鴉は、その他の面子を部屋から追い出したのだった。

目覚め(後書き)

フリーダムですみませんorz

懐かしい出会い(前)(前書き)

目覚めた黄泉に、鴉と冥が・・・
そして教会を訪れる「男」。
実はあの男と知り合いだった。

懐かしい出会い（前）

「まったく・・・賑やかにも程があるぞ・・・」

町外れのとある教会。

男聖職者、鴉の自室である。

入って正面に机と窓、右側に洋服ダンス左側に自室用ベッドに仮設ベッド。

多人数用の広さは無い部屋で、自由（過ぎる程）に振舞うアキラ達を自室から追い出す。

冒頭の呟きは、思わず出た鴉の声である。

鴉はアキラ達を見送り、自分以外に自室に居る人物に視線を移す。

「すまないな黄泉、彼らは私のギルドメンバーと友人だ。追々紹介する。」

「.....」

黄泉は鴉と同じようにアキラ達を見送り、そして鴉を見る。

「黄泉、怪我の確認をさせてくれないか？」

仮設ベッドを指差し、鴉は黄泉を促す。

言われるままに仮設ベッドに腰を下ろす黄泉。

黄泉に続き仮設ベッドに向かう鴉。

「手足を見せてほしい。」

鴉に言われた通り、黄泉は右手と足を鴉の前に差し出す。

黄泉の手を取り、ゆっくり撫でる鴉。

「短剣が貫通した手掌の皮膚破損、化膿、中手骨破損の完治。痕が残らなくて良かった。」

続いて腕に手を伸ばす。

「上腕骨、尺骨破損も、上手く繋げる事が出来た。」

異常無い事を確認すると、今度は足を見る。

「下腿の外傷も塞がっている、脛骨には異常無かったしな。」

鴉が足を見ている間、黄泉は自分の胸元や腹部を確認するように撫

でる。

そんな様子の黄泉が目に入り、声を掛ける。

「そこは冥が治療した。気になる点があれば教えてほしい。」

「……。」

一通り確認した黄泉は腕を下ろし、鴉を見る。

「大丈夫そうだな。」

「安心、といった風に息をつく鴉。

「思った以上にずっと回復が早かった。何か口にした覚えは？」

「……。」

鴉に訊かれた黄泉は、部屋の一点に目を留める。

「うん？」

黄泉の視線の先を目で追う鴉。

机の上にある、焼き菓子入りの小瓶。

「……あれはおやつさ、冥御手製のだ。」

話しながら鴉は机に向かい、小瓶を手にする。

重症で意識の無い黄泉が、運ばれるまでずっと握り締めていた物である。

黄泉の元に戻り、黄泉の手を軽く引き寄せ手の平にそれをのせる。

「これが君を助けた……とは思いが……。」

そこまで話して、鴉は黄泉と目が合った。

黄泉の、肩までの銀髪と同色の眼が、鴉を真つ直ぐ見つめている。

数時間前、鴉と別れる前に見せた時と同じ眼差し。

その後何者かに狙われ、戦い、酷い傷を負った。

血を流し、骨が砕け、意識が遠のく程に。

それでも変わらぬ瞳が、ここにある。

スッ

小瓶を膝に乗せた黄泉が、鴉の頬に手を伸ばす。

そっと触れる温もりも、変わらない。

「……黄泉。」

鴉は自分の頬に触れている黄泉の手を、自分の左手で覆った。

そして軽く屈み、座っている黄泉の頭を優しく抱き寄せる。服越しに温もりを感じ、改めて鴉は想いを口にする。

「・・・生きていて・・・良かった。」

「あつたかい？」

「ああ・・・温か・・・。」

ズルッ

ガタガタタツガコンツ

ベシヤツ

不意の声に反応した鴉が、足元から聞こえたと判ると瞬時に我に返った。

その反動で、仮設ベッドの手すりに垂れ下がっていた掛布が服の裾に絡む。

それに気付かず体の向きを変えようとした為に、掛布に絡め取られる。

結果。

派手に転んだ。上の音はコケた音である。

「痛たた・・・急に声を掛けるんじゃない！」

床に倒れた鴉が、肩を押さえて目の前の声の主に話しかける。

「え〜じゃあ〜。」

不服そう（本人曰く）に言う生き物は、緑色の軟体生物。

「ぼにんいまから〜こえかけるの〜。」

「色々遅い！」

鋭く突っ込み、鴉は気を取り直す。

目の前のぼにんをムンズと掴み黄泉に手渡す。

「一応、相棒なりに心配していたようだ。」

そう言いながら鴉は、黄泉の腕の中にいるぼにんを見る。

「あ〜よみ〜よみ〜。」

「・・・。」

「ぼにんね〜このへやにね〜いつしよにきたの〜。」

黄泉は自分の名を呼ぶぽにんを抱えたまま、ぽよぽよと弾いている。

「ぽにんしんぱいしてたの〜。」

「……………」

「ぽにんはじゅーしよーです〜。」

「空腹の心配だけかお前は。」

すかさず突っ込む鴉。

ふと部屋の入り口を見ると、扉が少し開いているのが見えた。

ぽにんはその隙間から入って来たようだ。

「しっかり閉めておくべきだったな……。」

そう言いながら扉の前に向かう。

扉の取っ手に手を掛けようとする鴉の脳裏にふと、ぽにんの言葉が再生された。

「このへやにね〜いっしょにきたの〜。」

教会内、出入り口がある広間。

教壇があり、その前に左右分かれて十脚の椅子。

アキラ達はそこに座っていた。

「しっかし馬鹿力だったなアイツ……。」

アキラはコキコキと肩を鳴らし、強張った筋肉をほぐす。

「アキラばっかり……ずるいや。」

「喜んで襲われたんじゃねえ！勘違いにも程がある！」

不服そうにアキラに話すたまは、アキラの横に座っていた。

「違っただんですか……てつきり……。」

「ミリリはその続きを言わんでいいの！」

言葉を続けようとするミリリはたまの横に。

「オレとまだ遊びきってねえよな？」

「あんたはまだ足りないのか！」

不満げにアキラを見る匠は、アキラ達と反対側の椅子に腰掛けてい

る。

「アキラちゃんは楽しそうだね。」

「出来れば傍観者でいたいけどな！」

のんびりと間に入る銀は匠の横に居た。

「とりあえずじゃじゃ馬は遠慮したいところだぜ。」

そう言いながらアキラは座ったまま自分の椅子をバランス良く傾ける。

「誰の事？」

「そりやさっきの女だろ？アニバーサリーちゃんだろ？後なんといつてもぼ……。」

そこまでしゃべったアキラが、声が背後からということに気が付く。皆視界にいるのに。

アキラは傾いた椅子のまま首を仰げ反る。

肩までの銀髪が揺れ、切れ長な眼がアキラを上から覗き込んでいる。

「どわ?!」

ズルッ

ガタガタツツガコンツツ

ベシヤツ

不意なご対面に、アキラは椅子のバランスを崩す。派手な音と共に床に転がる。

「何さ、人の顔みて驚く事無いじゃないか。」

変わらずアキラを覗き込んでいるのは、ぼち。

手にはカップやおしぼりが乗ったお盆がある。

「ててて……急に話しかけるな！マジで焦ったわ！」

頭を抑えて立ち上がり、ぼちに突っかかるアキラ。

「ふうん……で、誰がじゃじゃ馬だつて？」

「い、いや何でもない！気のせいだ！」

冷やかにアキラを見るぼちに、アキラは慌てて手と首を横に振る。

「気のせいじゃ無いね、確かに言った。」

「言っていないってまだ！」

そこまで言ってアキラは口を噤んだ。

「まだ？」

「あ……いや。」

ぼちの鋭い突っ込みに、アキラは一瞬固まった。

「何言ってるんの、名前出したじゃないハッキリと。」

だがアキラが思ってた反応と何かが違う。

不思議そうな顔をしてるアキラに、ぼちは続けた。

「アニバーサリーちゃんは、じゃじゃ馬なんかじゃない！」

「え、お前そこが怒るポイントなのか……。」

「ファンなら当たり前！」

「……いや、気付いてないならいいや。」

ほっと胸を撫で下ろすアキラを、首を傾げて見ているぼちだった。

「あーぼち、そういえば……。」

思い出したようにたまがぼちに声を掛ける。

「うん？何？」

「あのね……あれ？」

キョロキョロと座っている場から周囲を見回すたま。

「どしたの？」

お盆を空いてる椅子に寄せ、たまを見るぼち。

「うーん……そうだ、ぼにんは何処かな？」

「ぼにんに用があるの？」

「うん、たぶん。」

「何それ？」

「たぶん拾ってる。」

「何を？」

「何か。」

ビシッ

たまの額に、ぼちのデコピンがきれいに炸裂する。

「……ったあいよ！だから抜き打ちは駄目だって！」

「うん、相手が座ってる時のがやり易い。」

額に手を当て涙目で抗議をするために、デコピンしやすい角度を発売して満足なぼち。

「たま、ずっと座ってて良いよ。」

「良くないよ！額の寿命が縮まるよ！」

「それは置いといて、煮え切らない返答するからだよ。」
抗議をするたまを無視し、正論で返すぼち。

「うっっっごめんよ。」

反省顔でぼちに謝るたま。

デコピンされたたまの額に、手際良くおしぼりを当てるミリリ。
慣れてきたらしい。

「毎度の事ながら、ミリリさんありがとうございます。」

「あ、いえ！っっそういえば冥さんも来てませんか？」

そしてキッチンに繋がる廊下を見る。

「一緒に来るんじゃないの？」

ミリリの言葉にアキラが答える。

「鴉ちゃんと女の人が二人で居る所をうっかり目撃！」

「その場に割り込んで修羅場……と。」

銀の想像に、匠も便乗する。

「そうだったら鴉も動揺するだろうねえ。」

「冥は鴉に敵しいからね。」

想像の幅を広げるのはたまとぼち。

皆呑気に談話をしている。

もう片方で起こっている事も知らずに……。

・・・キイ……。

扉を閉めようとした手で、恐る恐る扉を開ける鴉。

そこに居たのは、水色の短髪の女聖職者、冥。

手には焼き菓子がついているお盆がある。

幼なさが残るその表情は、鴉をじっと見ている。

「め、冥。黄泉の意識が戻っ……。」

「知ってます。そこ、お邪魔です。」

淡々と、でも一言一言にトゲ（むしろ剣山）を感じる鴉。

冷汗をかいている鴉の横をツカツカと歩き、黄泉の元に向かう冥。

お盆を机の上に置き、改めて黄泉に振り返る。

「ぼにん、私にその場を譲ってくださいな。」

黄泉の腕の中に居るぼにんに話しかける冥。

「え〜？ここは〜ぼにんのせきな〜。」

ぽよぽよ弾んでいるぼにんを、黄泉が仮設ベッドの上に移動させる。

「あ〜よみ〜ひどいの〜。」

不満を口にするぼにん（全然そう見えないが）。

黄泉は仮設ベッドの脇に置いてある自分の道具袋を手取る。

その中から食べかけのハーブをぼにんの前に置いた。

「あ〜じゅーしょーです〜、ごはんです〜。」

目の前の食料に嬉々として（区別が付かないが）飛びつくぼにん。

「扱いに慣れていますね、黄泉。」

ポリポリとハーブを食べているぼにんを見る冥。

そして黄泉に向き直り、おもむろに口を開く。

「……いつも、傷だらけなんです。」

冥の悲しげな表情が、黄泉の目に映る。

「傷ついて……此処に来て……。」

話を続ける冥の眼を、じつと見つめている。

「癒えてはまた何処かへ行ってしまっ……。」

「……。」

「貴女が強い事も、回復が早いのも、知ってます。」

淡々と語る冥の眼が、うつすらと潤んでいる。

「……それでも……。」

そう言いながら、冥は黄泉を抱きしめた。

「不安なんです……また傷つきに旅立つ事が……！」

冥の細い腕が、力一杯に黄泉を包み込む。

何処かへ行つてしまわぬ様に。

抱きしめた温もりが消えぬ様に。

「戻っ・・・戻つて来なかつたら・・・そう思・・・。」

涙を堪え、言葉を続けようとする冥。

その時。

ポンポン。

冥に抱きしめられた黄泉の手が、冥の背中を優しく叩く。

そしてその手で冥の頭をそつと撫でる。

「大丈夫。」と。

「ここにいる。」と言つように。

その行動に、冥の堪えていた涙が流れ出す。

「・・・子供・・・じゃないです・・・から・・・！」

ぐすぐすと噉り泣く冥。

その光景は、母親に優しく宥められている娘の様。

そんな様子を遠巻きに鴉は眺めていた。

切ないような、それでいて嬉しいような、心温まる光景。

「女性は偉大だな・・・。」

ぽつりと呟き、鴉は部屋を出ようとする。

その鴉の背中に、涙声の冥が声を掛けた。

「・・・まだ居たんですね。」

そして時に冷たい。

鴉は心でさっきのセリフの続きを言ったのだった。

部屋に残された二人。

「あつゝおいしいですよ。」

と、一匹。

黄泉を抱きしめていた冥の体がピクリと動く。

「ん・・・ちよつと失礼しますね・・・。」

そう言うと冥はハンカチを取り出し涙を拭い、黄泉から離れ背を向ける。

黄泉は側で食物摂取に勤しんでいるぽにんを掴み、腕に収める。

「あゝよみゝよみゝ。」

「……………」

「ここはぽにんのせきなの。」

ぽにんは所定の位置に収まると、ぽよぽよと弾んでいる。

少しして冥が黄泉の元に戻ってくる。

「終わりました、友人からです。」

どうやらWhisper（囁き）らしい。

「仲間がこの周辺で迷子になってるらしくて、見かけたら連絡をと。」

「

「……………」

「相当女好きだから、私は接しちゃ駄目と言われました。」

軽く微笑みながら、冥は言葉が続ける。

「心配症なんです、ダクツさんは。」

そこまで言って、冥はふと黄泉の腕の中に居るぽにんを見る。

「貴方も、接しちゃ駄目。なのでしょうか……………」

「ぽにんはゝおなががすきました。」

「貴方はそればかりですね……………」

呆れつつも、そのマイペースっぷりに微笑む冥。

「……………」

黄泉はその様子を眺める。

聞き覚えのある名を噛み締めながら……………」

「お、来た来た。」

「よおおっさん、何しけたツラしてやがんだ？」

「どうしたの鴉？また雨の中に捨てられた子犬みたいな顔して。」

広間に来た鴉を、いつもの調子で迎える面々。

「何でも、ない。」

少し寂しげな表情の鴉だったが、周囲はお構い無しに話し掛ける。

「あれ？冥と女の人は？」

「ぼにんさんも居ません！」

「中で募る話しをしているさ。」

たまとミリリの声に、鴉は最小限に返す。

「あゝ良かった！てつきり鴉ちゃんが追い出されたかと思ったよー
！」

「・・・女性はさりげなく確信を付く・・・。」

銀の安心した声に、鴉がポツリと呟く。

「うん？何か言った鴉ちゃん？」

「何でも、ない。」

気を取り直し（きれてないが）顔を上げる鴉。

「あ、お菓子が無いや。」

思い出したようにぼちが口を開く。

「お菓子？ああ、冥が持ってきてたな、私の部屋にあると思う。」

「そっか、持ってくるだけ持ってきてちゃうね。」

そう言つとぼちは冥達の居る部屋に向かった。

「やった！冥お手製の焼き菓子に違いないよ！」

「とつてもおいしかったです！」

「甘い嫌いなオレでも食えるわ。」

「ねーさっきの美味しかったよねー。」

「俺まだ食つてねえ・・・。」

焼き菓子一つに盛り上がる面々（一人仲間はずれ）である。

バターンッ

突然熱い良く開く教会の扉に、その場に居た全員が驚いて入り口を見る。

「やー悪いけど雨宿りさせてくれっかな？後こいつも。」

元気良く入ってきたのは、髪から衣装まで紫の男追跡者。
びしょ濡れである。

ドサツ

その肩に背負つてた男暗殺者を、床に落とす。

「な?! 怪我しているじゃないか! 何て扱いを・・・!」

床に投げ出された男暗殺者に駆け寄る鴉。

「か、鴉さん! その人!」

「そいつだよ! 冥を襲つたのは!」

「何だつて?!」

ミリリとたまの声に驚きの鴉。

「へえ・・・アンタかい? コイツをやつたのは。」

ス・・・ツ

腰にぶら下げてた大型の短剣を手に構え、たまを見据える男追跡者。

「!」

男追跡者の戦闘体勢と、無邪気な表情のアンバランスが、危険信号を表している。

たまは弦楽器を手に身構えた。

「・・・ジク、何やってやがる。」

不意に聞こえた声に、二人の男が反応する。

「へ? 匠じゃなか! つて事は・・・アンタは匠の知り合い?」

「いいから、そいつに刃を向けんなや。」

「わあつたわあつた、んなに睨むなつて!」

ジクと呼ばれた男追跡者はたまを見つめ、匠に言われて慌てて短剣を降ろす。

「知り合いだつたんですね・・・。」

そう呟いて、たまは弦楽器を降ろす。

しかし警戒は解いてない。

冥やミリリを襲つた者の知り合いには違いないからだ。

匠の声に反応したのは、ジク。

と、もう一人。

たまではない。

「先輩……。」

ジクの名が出て、改めて知り合いと認識したのだ。

「おーアキラもいるじゃんか。いい加減彼女出来た？」

久々に出会った後輩に気を良くするジクに……。

「……まだつす。」

久々に出会った先輩に、気が重くなるアキラだった。

懐かしい出会い(前) (後書き)

全然内容がわからない前書きですが、良しとしてください(謝)

1カ月も更新無かったです、懲りずに書きます。

彼らに逢いに！

懐かしい出会い（後）（前書き）

雨の中の訪問者、それはアキラと匠の知り合いだった。
そして黄泉を狙っている男でもあった・・・。

懐かしい出会い（後）

町外れのとある教会。

雨でびしょ濡れの男が怪我人を連れてやってきた。

雨宿りで思わぬ知合いとの再会に、上機嫌のジク。

「やー奇遇つてのはこの事だな！匠が居てアキラも居て！」

髪をかき上げジクは満面の笑みで匠とアキラを交互に見る。

「ちゃっかり役立ってんじゃんアンタ。」

その笑みを、扉の前に倒れている影に向ける。

しやがみ込むと、挨拶代わりの平手を肩へと向けた。

パシンツ

側に居た鴉が、その手を平手で退く。

「つて！何すんだよ！」

「こちらの台詞だ、意識の無い者に手を上げるんじゃない。」

そう言いながら鴉の手は光を帯び、影の傷を癒してゆく。

「鴉……。」

その様子を、少し離れた所からたまは声を掛けた。

複雑な表情で眺める。

自分が相手に負わせた傷を、自分の仲間が治しているのだ。

「たま、不満は後で聞く。今は集中させてくれ。」

「……ううん、やっぱり鴉だなあって思ってたね。」

鴉の声に首を振り、たまは軽い笑みを返す。

「た、たまさん……大丈夫なんでしょうか？」

その後ろで心配そうな顔で話しかけるのはミリリ。

たまと同じく、鴉の様子を見ていた。

ミリリもまた、関わった身である。

「医は仁術……と言った所でしょうね。苦しんでたら誰にでもあ

あです。」

不安にさせまいと、出来る限りの優しい声で返事をするたま。

「え？鴉ちゃん忍者だったの？」

「そうそう水遁風刃、畳返し・・・ってそれ忍術！」

呑気に聞き返す銀に、たまのノリツツコミが華麗に決まる。

「あつ仁術かー、素で間違えてたよー。」

ポンつと手を叩き、寒いのか匠のマントを羽織る。

「・・・銀さん。」

「うん？どしたのたまちゃん？」

「それ、頂きです。」

技の習得に余念が無いたまである。

「そういえばたまさん、アキラさんの反応がありませんね？」

アキラの技（？）が出てこない事に、不思議に思うミリリ。

「・・・それどころじゃないようですね・・・。」

ミリリの声に複雑な表情でアキラを見るたまだった。

コンコン

「冥、入るよ。」

扉の向こうに居る人物に、ぼちは一声掛ける。

カチャ・・・。

そしてゆっくりと扉を開け、中に入る。

「あ、ぼちさん・・・すみません今行きますね。」

黄泉と向き合っていた冥が、ぼちの声に振り向く。

「いいよ、ゆっくりしてなよ。」

ぼちはそう言いながら冥の元へと歩み寄る。

そして側にある仮設ベッドに座っている黄泉と、目が合った。

「初めましてだね、私はぼち。握手・・・平気？」

ぼちは黄泉の左腕が無いのを目の当たりにし、気を使う。

「・・・。」

スッ

そんなぼちに、黄泉は躊躇いなく右手を差し伸べる。

「平気みたいだね、よろしく。」

握手を交わし、ぼちは軽く微笑む。

「よみよみ。」

握手が済むとぼちはその手を降ろした。

しかし黄泉は自分の手をぼちの首元に近づけた。

「はうたべすぎました。」

「ん？どしたの？」

ぼちは避けもせずその手を受け止めていた。

ぼちの度胸強さと、黄泉からは敵意を一切感じなかった為である。

黄泉は自分の手を、ぼちの銀髪にと手を伸ばす。

その手を今度は自分の髪へと移した。

「ああ、うん同じ髪型だね、色も。」

黄泉の行動の意味が理解出来た。ぼちは、黄泉の隣に腰掛ける。

「そう考えたら似てるのかな？服変えたら皆判らなかつたりして。」

「いもたれです。」

「ぼにん、煩いです。」

黄泉の膝上に乗っかっているぼにんに、ピシャリと言い放つ冥。

「冥、スルーも大事だよ。」

そう言いながらぼちは、ぼにんを自分の膝上に乗せた。

「んだよ・・・つまんねえ野郎だな、なあアキラ？」

鴉の叩かれた手を軽く擦りながら、アキラに話をふるジク。

「・・・すみません先輩、俺のギルドマスターっす。」

鴉とジクの間で不穏な雰囲気の中、気まずい表情で返事をするアキラ。

「マジで？」

「・・・そおっす。」

「何だ言ってくれりゃうちのギルドに入れてやったのにさー！」

アキラの言葉に、不満そうなジク。

「いや・・・だつて先輩急に居なくなるし・・・不安定つすよ。」
ジクの言葉に恐る恐る答えるアキラ。

「不安定、なあ？」

「そお・・・つす。」

明らかかな不機嫌顔のジクに、再び恐る恐る返事をする。

「んなこたあない！女に目移りしたり八工運悪かったりで帰ってこないだけだ！」

「十分つす。」

力説するジクに、溜息混じりに答えるアキラ。

「・・・ジク、半年前一緒に飛行船乗った時よお・・・。」

そこに匠が割つて入る。

「ん？」

「気付いたら居なくなつてたよな？てめえはよ。」

匠の話に記憶を探り、手をポンと叩くジク。

「あー・・・あれか！あれはしょうがなかつたんだよな、うん。」

「何があつたんだ？」

「うん、飛行船にさ。」

「おう。」

「すんげー良い匂いのする女が居てさ！」

「・・・で？」

「後追つて降りちゃつたんだよね！」

「目的地で降りてください。」

すかさず突つ込むアキラ。

「らしいつつかアホつつか・・・でもよ？」

呟く匠が少し間を置き、ジクに疑問を投げかける。

「んで、今のギルドに世話になつて・・・ん？」

「そんな匂う奴居るか？記憶に無えぜ？」

首を傾げる匠に、無邪気な笑顔でジクは答える。

「匠は鈍感だからなー女にも。俺が鼻利くのもあつけどさー！」

「あれ？でも銀さんつて相方が居・・・。」

ギユムツ

「・・・るむぐあ！」

しゃべりかけたアキラの口を顔ごと押さえつけたのは、匠。

「アホ！余計な事言いやがって・・・！」

「ん？何？相方出来てたのか！」

気まずい顔の匠と、驚きと興味津々な顔のジク。

「お、マジだ指輪してら。もったいぶんなよー！どの子どの子？」

匠の結婚指輪を確認すると、ジクは周囲をキョロキョロしだす。

匠は無言でアキラを解放する。

「うーん、将来有望な可愛い子は居るけどなあ、違うだろ？」

ジクの目に留まったのは、たまの後ろに居るミリリだった。

「あーさつき居た子かな？黒髪のアルケミスト！そだろ？」

「・・・。」

「そつかそつか。とうとう匠にも春が来たか！アキラも早く彼女作れよなー。」

「あ、俺ちよいとそこの吟遊詩人の所に用が・・・。」

掴まれた顔を抑えいそいそとその場を離れようとするアキラ。

ガシツ

そのアキラの腕を掴み上げる匠。

「あだだだだだ！」

強く掴む匠の手が、アキラの腕にしっかり食い込んでいく。

静かに、そして低いドスの利いた声で匠は言った。

「・・・呼んできたらもぎ取っぜ・・・？」

「分かつ・・・！力で言い聞かせるのやめてくれってまじで！」

アキラの必死の訴えに、匠はようやく手を離す。

その場から逃げるように、アキラは足早にたまの元に向かった。

「あ、解放されたねアキラ。」

「だ、大丈夫ですか！腕取れそうなくらいギリギリやられてたようですが！」

ミリリが目一杯心配そうに声を掛ける。

たまとミリリは広間中央の椅子に腰掛けていた。そこから訪問者達のやり取りを見ている。

「取れたらやべえが、取れそうだった。」

強く掴まれた腕が、痛みと熱を帯びている。

アキラは椅子に座りながら、掴まれた腕側の手の平を握っては開いてを繰り返す。

「アキラ、取れたら接着剤で良いかな？」

「お前のその口を接着してやる！」

「あははは！たまさんそんな事言ってますが、心配してたんですよ？」

いつもの調子のやり取りに安心するミリリ。

たまの時と同じように、おしぼりでアキラの腕を冷やす。

「さんきゅっ。ん？」

「冥を襲ったアサシン・あんな酷い怪我、僕させてないもん。」

「・・・たぶんあの人がやったんだと思う。」

そう言つてアキラはジクを見た。

匠を指さしながらヘラヘラと笑っている。

怒鳴る匠。

それを注意する鴉。煩かつたらしい。

匠は不機嫌な顔でジクを小突く。

不満気に匠を見るジク。痛そうだ。

鴉が再度の注意、教壇側を指差し何かを言っている。

二人はしぶしぶとアキラ達の居る椅子に向かってくる。

場所を移せと言われたらしい。

「こう・・・善悪の区別無い人っぽそうだから、余計にね・・・。」

「安心しろ、俺も苦手な人だ。」

たまの言葉に同意見のアキラ。

「あれ？そっぴや銀さんは？」

「あ、冥さんとぼちさん呼びに行きました！」

「そっか、あんま戻って来ない方が良いかもな。」
「うん、あの男の人危なそうだし、女好きっぽいしね。」
「安心しろ、たま。」
たまの感想に、アキラは一言付け加えた。
「お前と大差ない。」

ココン

「冥っちゃん、ぽっちー、入るよー。」
カチャツ

リズムカルにノックをし、冥達が居る部屋の中に入る銀。
「ごめん、くつろいじゃった。」

仮設ベッドに黄泉と並んで座っているぼち。

膝上に置いたぼにんをぶにぶにと摘んでいる。

「ううん大丈夫。あ、初めまして！」

ぼちの隣にいる黄泉に気付き、銀は挨拶をする。

「銀っていうの、よろしくねー黄泉ちゃん。」

「.....」

「銀さん、入り口が賑やかなようですが.....」

広間の騒がしさが気に掛かり、冥は銀に訊いた。

「あ、うん。旦那の友達がね？怪我した人連れてきて、今鴉ちゃんが診てるよー。」

「あつ、これおいしくないです。」

「ぼにん、口を接着しますよ？」

相変わらずの自由発言のぼにんに、ピシヤリと言い放つ冥。

「?どうしましたか銀さん。」

視線を落とす銀に、冥は気になって声を掛けた。

「うん・・・その怪我した人、さっき外で会ってるんだよね.....」

「外で？」

「うん、大怪我した女の人待たせてるって言ったら「腕の無い女が

「?」って。。。」

「。。。ちよつとWhisperしますね。」

そう言つて冥はぼち達から少し離れた。

「鴉ちゃんにだね、分かつたよ!。」

その様子を眺める銀。

「さつきから何を口にしてるの? 拾つた物、出してみて。」

ぼちはぼにんの前に手を差し出した。

「そいえばたまちゃんが言つてたね。」ぼにんちゃんが何か拾つてる」って。」

思い出しつつ銀も話に加わつた。

「だね、キッチンではぼにんが「さつきひろつたのじやたりない」とか何とか。」

さつきのやり取りを思い出しつつ、ぼにんを突付くぼち。

ガシッ

グニーツ

ぼちの隣にいた黄泉は、いきなりぼにんの口を問答無用に押し広げた。

「やくーいたいのやだ。」

いつもと変わらぬ、緊張感0のぼにんの声。

痛そうには聞こえない、まったく。ちつとも。

「ちよ、ちよつと黄泉ちゃん! ぼにんちゃん千切れちゃうよ?!」

一メートルは伸びているぼにんを見て、慌てて銀が止めに入る。

「連絡とりました、。。。何ですこれは?」

用が済んだ冥は、ぼにんの口から覗く布に目を留めた。

「冥、慣れっこなの? この状況下は。」

冥の冷静な行動に、ぼちは思わず疑問を口にした。

「ええ割と。」

あつさりと答え、冥はぼにんの口から覗く布に手を伸ばす。

ズル。。。

そこから出てきたものは。。。

「・・・袋？」

冥は不思議そうに「それ」を見た。

「お、戻ってきたな。」

「あ！ぽちさんお帰りなさい！」

「ぽちお帰りー。」

広間に戻って来たぽちを、笑顔で迎え入れるミリリ。

「あれ？ぽちさん、素敵な眼鏡かけてますね！」

「あ、本当だー。それミニグラスだね、似合う似合う。」

右手に焼き菓子に乗せたお盆を持ったぽちは、眼鏡を掛けていた。

「へえ・・・化けるもんだなあ・・・賢そうに見えるぜ。」

「アキラ、変な事言つと倒されちゃうよ？」

「俺が悪かった。」

たまの言葉に、潔く謝るアキラ。

「・・・。」

そんなアキラに、無言で返すぽち。

「ト・・・。」

黙ってお盆を空いてる椅子に置く。

「ぽちさん・・・？」

不思議そうに声を掛けるミリリ。

「お？まーだ女の子が隠れてたのか！ほほうクルセっ子もいいねえ。」

「

「見境ねえな相変わらず。」

アキラ達が居る場までやってきた匠とジクは、空いてる椅子に腰掛

けていた。

「・・・肩までの銀髪・・・ねえ・・・。」

ポツリと呟くジク。

焼き菓子を持ってきたぽちの姿をくまなく観察している。

「先輩、俺のギルドメンバーすよ。」

「アキラの彼女候補？」

ガタガタガタツ

ジクの素朴な質問に、思った以上に動揺したアキラは椅子から落ちそうになる。

「断じて違います！さ、さつきも口論した位すから・・・。」
強い否定をしつつも、動揺が隠せないでいる。

「ふーん・・・はねつかえり娘かあ、にしちゃあ・・・。」

動揺しまくりのアキラには目もくれず、ぼちを眺めながらジクは言った。

「大人しいのな、しゃべんないし。」

「口数は元から少ないすよあいつは。」

ジクに答えながら、アキラはうつすら違和感を感じていた。
ぼちの反応の薄さに。

「あとさ、怪我してんの？あの子。」

そしてジクが探りを入れてる事も。

「へ？してないっすよ？さつきまで暴れてたし・・・。」

「でも消毒薬とか、止血剤とかの匂いがすんだけど。」

「それは・・・そういうのを置いてる教会だから、こぼしたのかも・・・す。」

ジクに答えるアキラの声が、自信無げになってくる。

「正直言っわ、ここにな？俺が探してる奴が看病されてるんじゃないかって聞いてさ。」

そう言っつてジクは鴉に看病されてる影を指差した。

「あいつから聞いたんだ、奴は大怪我したらここに立ち寄るって。」

次にジクは匠に視線を移した。

「偶然なんかな？奴が暴れたあの森で、俺が匠と会ったのは。」

「・・・ジク、そいつあ・・・。」

ジクの言葉に、何とも言えない表情の匠。

「まあそれはいいや。」

言いかけた匠の言葉を、遮る様にジクは言った。

「今俺が知りたいのは、そのクルセツ子が奴かどうか、さ。」

「先輩！何であいつが疑われるんすか！あいつ何も・・・！」

「そんだけ、状況が一致してるって事さ。」

ぼちを庇うアキラに、ジクは首を振る。

「・・・「片腕の悪魔」。肩までの銀髪で、左腕が無い女にさ。」

ガタンッ

椅子から立ち上がるジク。

「無口っぷりも似てる。」

そのまま静かに立っているぼちに近づく。

「なあアンタ、左腕はマントで隠してるのか？・・・あと。」

ジクは言葉を続ける。

「眼鏡、はずしてみてくれねえかな？確認してえんだよ。」

「・・・。」

ぼちの正面に来たジクに、無言のぼち。

一呼吸置き、ジクは言った。

「眼が、「片腕の悪魔」と同じ銀色かどうかを、さ。」

呼吸が落ち着き、床で静かな寝息立てている影。

ほっと一息ついた所で、鴉の脳に声が聞こえた。

「鴉様。」

冥からの囁き（ウイスパー）だ。

「ああ、どうした？私の声が聴きたくなったとか？」

「聞き飽きた位です。」

「相変わらず手厳しい・・・それで、何かあったのかい？」

「銀さんから訊きました、怪我した方を看病しているそうですね。」

「・・・ああ、男暗殺者だ。」

「・・・。」

「たまが言っていた、君を襲った奴だと。」

「そう・・・なんですネ。」

「すまない、君を不安にさせるつもりではなかったんだが・・・」
「聖職者の性です、構いませんよ。」

「・・・ありがとう。意識が戻ったら話を訊いてみる、同じ事をさせないようにもな。」

「はい・・・あの。」

「うん？」

「無事でしょうか？」

「ああ、顔色も良くなつてぐっすり寝ているよ。」

「・・・そっちじゃありません。」

「え？」

「何でもありません、それでは。」

そう言つて冥は囁き（ウイスパ）を終わらせた。

「・・・。」

スツ・・・。

ジクの要望に、ゆつくりと眼鏡をはずした。
マントで隠れていた左手で。

「え・・・あれ？」

「・・・何？君。」

静かな声が、その場に響く。

その声の正面にいたジクが、驚いて目を見開いている。

ジクは、目の前の人物を「片腕の悪魔」と思っていたから尚更である。

「人が・・・好きな人の所持品を身につけて、恍惚としてる所を・・・」

「ぼちの切れ長な眼がジクを捉え、右手をジクへと向ける。」

「や！・・・てつきり奴かと・・・！」

「邪魔するんじゃない！」

ビシイッ

ぼちの技(？)のデコピンが、動揺しているジクの額にクリーンヒツトした。

「いってええ！」

「ふん、初めての子にも遠慮しないからね。」

額を押さえうずくまるジクを見下ろすぼち。

「ああ良かった！今までどおりのぼちさんで！」

「脅かすなよな・まじ迷ったぜ。」

ミリリとアキラが安堵の声を上げる。

「俺女にデコピンされたの初めてだ！」

「はは！良かったじゃねえか、初体験。」

よく判らない事で感動するジクに、笑いながら話す匠。

「もしかしてアニバーサリーちゃんの？僕が貰ったやつ。」

たまが思い出したようにぼちに問いかける。

彼女の去りに際に手渡されたものである。

「うん。「アニバーサリーちゃん変装セット」って袋に書いてあったからね。」

うつとりと手の中の眼鏡を見つめるぼち。

「さつきファンって言ってたからよっほど嬉しいんだね。」

「ったく・・紛らわしい事しやがって・・。」

そんなぼちの様子に、微笑むたまと、苦笑のアキラ。

ギイ・・。

不意に鳴る扉の音。

教会から出ようとする銀の姿。

「お？黒髪のアルケミ子じゃん。」

デコピンされた額を押さえながらも、切り替えの早いジク。さすが女好き。

そして周囲を見る。

扉の側に居た鴉は扉を背に、少し離れた所に移動し影の意識回復を

待っている。

外に出る彼女に気付いたのはジクだけだった。

「外出たら濡れちまうのに・・・よし。」

ジクは皆の注意が逸れている隙に、こっそりと銀の後をつける。

「俺が温めてやればいいんだよな、うん。」

抜け駆けは大事だと心に言い聞かせ、雨の降る外へと向かった。

「ねね、ぼち。」

「うん？」

ふと思い出したようにたまがぼちに声を掛けた。

「袋の中身ってそのミニグラスだけ？」

たまの言葉にぼちは答える。

「ううん。」

ザア・・・。

風と共に小雨が全身に降りかかる。

教会から少し離れた所に銀は居た。

寒いのか、匠のマントを羽織ったままである。

「お、めっけめっけ。」

銀の後ろ姿を見つけたジクが銀に駆け寄る。

「ダメダメ！女が雨の中一人で居ちゃあ。アンタ俺の所来だよ。」

そう言っただけでジクは銀の左腕を掴む。

・・・はずだった。

腕の感触が、無い。

「・・・は？」

ジクは思わず間の抜けた声を出した。

その声を合図に、銀はくるりと振り向く。

そして真っ直ぐにジクを見据える。

銀色の眼で。

懐かしい出会い(後) (後書き)

次回はバトルシーン入ります。

しかしいつもながら前編後編あんま意味ないですよねorz

負傷者

町外れのとある教会。

その外では風と共に小雨が降りしきる。

教会の中の一室、鴉の部屋にて。

「は〜すつきりです〜。」

満足げな（多分）顔で仮設ベッドに居るぽにん。

「ぽにん、手当たり次第口にするのは止めて下さいな。」

床にこぼれた薬品類を手早く拭き取る冥。

「ぽにんちゃんは面白いね〜。でも危ないものだったら大変だよ〜。」

「

そう言いながらも銀は楽しそうである。

「あ！瓶こつちに置くね〜。」

床に転がった空の瓶を手に取り、机の上に置く。

「有り難う御座います。銀さん、袋は大丈夫ですか？」

「うん平気〜。こぼれたのは黄泉ちゃんにほとんど掛かっちゃった

からね。」

「ぼちさんはすぐ乾くからと、そのまま行っちゃいましたね。」

「ちよつとだけだったからね〜。でもさあ・・・。」

「はい？」

「この変装セットの袋の中に、何で銀の格好と同じ服入ってたんだ

ろうね？」

「カツラも入ってましたね。」

「銀に変装してたのかな？んまあいつか！黄泉ちゃんの着替えにな

つたし！」

「カツラと羽織ってきたマントも付けさせたのは何故ですか？」

「うん、旦那が騙されるかな〜って思ってた。」

屈託の無い笑顔で銀は答える。

「ふふ・・・悪戯してはだめですよ。」

そう言いながら、冥も楽しそうである。

外で起こっている事も知らずに。

ジクの誤算だった。

「相手がなぜ外に出たか？」を考えなかったからではなく。

「なぜ誰にも気付かれずに入り口まで来れたか？」を考えなかったからだ。

移動の気配、動きすら感知出来なかった。

つまり、相手が相当の戦闘レベルを持っているからこそ、気付けなかったのだ。

そして雨で肝心の匂いも、判らなくなっていた。

・・・ジクはその相手を知っていたのに。

ザア・・・

風と共に小雨が全身に降りかかる。

「ちい！」

ザッ

とっさに後方に下がり、武器を構えようとするジク。

ジクが距離を取った女は、羽織っていたマントを外す。

姿勢好は製薬者、長い黒髪の銀。

しかしその銀色の眼と、欠けた左腕は紛れも無く「片腕の悪魔」そのものである。

バサアッ

「片腕の悪魔」、黄泉は外したマントをジクに向かって投げつけた。マントは届かない。

が、一瞬でもジクの気を逸らすには十分だった。

目眩まし。

そう思いジクはマント以外に注意を向ける。

が。

ブオンッ

目の前のマントが突然迫ってきたのだ。

「うえ?!」

奇怪な動きをするマントにジクは目を疑った。

マントはジクの首元を捉え、そのまま濡れた地面に叩きつける。

ドシャアッ

「あぐっ!」

叩きつけられた衝撃に耐え切れず声を上げる。

その首元を押さえていたのは、マントが絡んだ黄泉の右手だった。

片膝をジクの腰に、もう片膝を胸板に置きジクの動きを固定する。

ミシミシ・・・ッ

体重が乗った右腕を、ジクの首元に集中させる。

「ぐ・・・え・・・!」

黄泉の腕を掴み、苦しさに声を絞り出すジク。

そして。

「・・・っへ・・・良い・・・眺めじゃん・・・か。」

ジクの視線は黄泉の服。

ざっくりと開いた胸元に、体のラインにぴったりしたスカートから

覗く足。

雨で全身濡れていて、妙に艶かしい。

見る所はきっちり見えている。男の性である。

しかしそれも、余裕あつての事。

「・・・けど・・・な?」

ジクは黄泉を眺めつつ、そっと腰に下げてる短剣へと手を伸ばす。

その動きを黄泉は視線で追った。

この瞬間を、ジクは待っていた。

ブウンッ

黄泉の腕を掴んでいた左手を離し、渾身の力で黄泉の腕の内側から外側へと振り上げた。

振り上げた腕が、黄泉の体を右側に傾ける。

ジクは右手を伸ばし黄泉の左肩を掴む。

ガシッ

左手を黄泉の右腕に。

自分の右腕に勢いをつけ、黄泉をひっくり返すように地面に叩きつけた。

ドシヤアッ

上下逆転。

ジクは黄泉の上ののしかかり、左手で黄泉の手首を押さえ込んでいた。

咳き込みつつ、自分の下に居る黄泉を見下ろす。

「・・・げほっげほっ・・・俺は上が良いんだよ、分かる？」

そう言いながら、ジクは黄泉の眼を見る。

銀色の眼が、ジクを真っ直ぐに見つめている。

さっきの勢いが嘘のように、ぴくりとも動かない黄泉。

「・・・きれいな眼だなあ・・・」

不意に呟くジク。

「アンタを殺って、この眼を取んなきゃなんないんだけどなあ・・・」

「

咳きつつ右手を黄泉の目元に添える。

「・・・」

そこから耳、首、胸元へと近づいていく。

その感触でか、黄泉は首を仰け反らす。

雨で濡れた体が、より艶っぽさを増す。

「うん、とりあえずお楽しみ続きと行こうかな！」

任務より本能が優先なジクは、顔を黄泉の首元へと落としていく。

そこでジクは気付いた。

黄泉の首が仰け反ったままなのを。

不思議に思い、黄泉の顔を見る。

黄泉は後ろにある何かを見ているようだった。

ジャリ・・・

「お、アキラじゃんか、何してんの？」

視線の先にはアキラが立っていた。

「そのまま返します。何やってんすか・・・。」

ジクと黄泉の妖しい体勢に視線が泳ぎ、赤ら顔で落ち着かない様子である。

「これからだつて！見てく？」

「すっごい遠慮しときます・・・えと。」

アキラは続ける。

「外に出る先輩の後姿が見えて、俺達後を追ってきたんです。」

「そかそか、んで俺は今お楽しみ中なんだけど、見てく？」

「色々やり場に困るんで、遠慮しときます。」

「今後の勉強になるって！」

「雨の中でそういう状況下になるのも稀と思います。」

「んだよーせっかく追ってきたんだから見て・・・。」

言いかけた言葉を呑み、一瞬考え込むジク。

そしてアキラの顔をまじまじと見つめる。

「なあアキラ。」

「見ていきませんって！」

「じゃなくて！・・・あのさ？」

「・・・へ？」

気の抜けた声を出すアキラに、ジクは続けた。

「・・・「俺達」って、言った？」

その声は、緊張しているようだった。

喜怒哀楽の激しいジクが。

「・・・そおつす。」

アキラも同じように、緊張していた。

そしてその後の展開も、うっすら予想していた。

ジャリ・・・

その場に、もう一人の足音。

濡れた地面を静かに歩き、アキラの背後にたどり着く。

「・・・ジク、何やってやがる。」

雨の中、静かな低音がジクの名を呼ぶ。

教会で会った時と同じセリフなのに。

明らかなる違いは、目一杯抑えた怒りの声。

声の主の目線の先には、銀の格好をした黄泉と、その上にのしかかるジクの姿。

「た、匠・・・」

ジクは搾り出すような声で声の主の名を呼んだ。

雨で濡れている以上に、その場の空気は一気に冷え込んだ。

教会内。

扉を背に、少し離れた所で寝ている男暗殺者、影の様子を見ている鴉。

「そろそろベッドに移すか・・・」

呼吸の落ち着いた影をしゃがんだまま見下ろし、ぽつりと呟く。

「鴉！。様子はどんな感じ？」

その時、教壇から鴉の元へと向かってくるたまの声。

「たま、良い所に来たな。」

「う？」

鴉の言葉にきよとんとするたま。

「彼と一緒に運んでくれないか？」

そう言っつて視線を横たわっている影へと移す鴉。

「えー？」

たまは何やら不満げである。

「僕おハシより重いもの持った事無いよー。」

「その手に持つている重量感たつぷりの弦楽器は何だ。」

「これは僕の一部だもん。」
ポロン。

たまの奏でる軽やかな旋律が周囲に響く。

「ほら、両手塞がっちゃったし。」
ビシッ

そんなたまの後頭部に衝撃が与えられた。

「あた！後ろからなんて酷いよぼち！」

すでに犯人が分かったたまは、振り向いて抗議の声を上げる。

「デコピンじゃないよ、髪にやったんだよ。」

気に入った眼鏡を掛けたぼちがそこに居た。

「しっかり骨にまで響いたよ！」

そこまで言って急に考え込む体勢のたま。

背を向け俯きつつ、ぶつぶつと呟いている。

「髪飾りにかけて・・・いやでも使い所が・・・。」

「どうでも良いから早く手伝ってくれ。」

鴉は苛立つ事も無く（いつも通り故）催促の声を掛ける。

「今気付いたよ鴉、看病してたんだね。私が出来る事あるかな？」

「あたしも何かお手伝いしたいです！」

自分の世界に入り込んだたまを無視し、代わりにぼちとミリリが鴉の側に行く。

「うん？ああ、彼の武器を私の部屋に。ミリリ、ぼちに渡して欲しい。」

床に置いてある影の武器、カッターを手にする鴉。

「あ、はい！」

「ぼち、あと仮設ベッドを空けて置くようにと冥に・・・。」

そこまで言いかけた鴉が、ふと気配を感じた。

ミリリに武器を渡そうとする手に、別の手が伸びる。

床で寝ているはずの、影の手。

ドシッ

「わわっ!?!」

武器ごと勢いで押され、後方へとよろめくミリリ。

倒れそうになるミリリを、すぐ後ろに居たぼちが庇うように支える。

「ぼ、ぼちさん! 鴉さんが!」

「・・・鴉!」

二人は鴉を見た。

両手を背中に組まれ、身動きの取れない鴉を。

その両手を掴み上げているのは、片手にナイフを持った影だった。

「彼を放せ! 君を看病してくれたんだよ?!」

ぼちが影に鋭い声を投げる。

「ぼち、ミリリ。私は大丈夫だ。」

鴉は心配させまいと、落ち着いた声で二人に声を掛けた。

「ふん・・・随分と余裕を見せるじゃないか。」

影はナイフを鴉の首元に当て、刃で胸元までなぞっていく。

なぞった通りに傷ができ、うっすら血が流れる。

「・・・っ!」

「これで大丈夫とはな。」

苦痛に歪む鴉を横目で見ながら、不気味な笑みを浮かべる影。

「やあ・・・やめてください!」

見るに耐えかねたミリリが悲痛な声を上げる。

「・・・先刻のガキか、あの生き物を連れて来い。」

「え・・・あ・・・。」

影の言葉に戸惑うミリリ。

「・・・先刻?」

ぼちが影の言葉を繰り返して、頭を働かせる。

自分が教会に来る前に、あつたはずだ。

「たまが私達を助けた」と言うミリリの言葉の意味。

ミリリの身に起こって、自分に起こってない出来事。

そして「私達」に関わっているであろう「生き物」。

その生き物が、誰と直接関わっているのかを。

「もう一度だけ言う。あの生き物を連れて来い！」

「・・・君が冥やミリリを襲ったんだね？で、目的は誰なのさ。」
苛立ちで声が大きくなる影に、ぼちは話し掛けた。

「誰が勝手に喋って良いと言った、貴様には関係無い。」

影はぼちに睨みを利かせ、ナイフを鴉の首筋に向ける。

「「片腕の悪魔」、でしょ。」

不意に放ったぼちの言葉に、ナイフを持った影の手が止まる。

「貴様は何を・・・知っている・・・？」

「割と。友達だもん、似てるでしょ？髪型と髪の色も。」

「・・・。」

「女の子なのに強いよね、左腕も無いのにさ。」

影はじつとぼちの言葉を聴いている。

関係者じゃなければ知り得ない事を、相手が喋っているのだ。

ぼちは続けた。

「さつき此処に来てさ、大怪我してたから看病して・・・。」

そこまで言って、ぼちの言葉が途切れた。

目の前に居る影から扉側に視線を移し、驚いた表情をしている。

「ちよつと！そんな体で外に出ちゃダメだつて！」

ぼちの言葉に、影の視線が反射的に扉側へと移る。

そこには誰も、居なかった。

キーンッ

乾いた音と共に、影のナイフが宙に舞う。

影の視線が逸れた隙に、ぼちは腰に下げた剣の切先で影のナイフを切り上げたのだ。

その太刀筋を影の首先へと素早く向ける。

「・・・貴様！」

影はぼちを睨みつつ、剣を前に後退りする。

ぼちは置かれた距離だけ切先を近づけた。

「意外だな。こんな初歩的な騙しに引つかかるなんてね。」
切先を向けたまま、ぽちは影に話しかける。

「君、アサシン成り立てだね？動きに余裕が無さ過ぎる。」

「ぽち、それ位にしておくんだ。」

床に座り込んだままの鴉が、ぽちに声を掛けた。

「鴉さん！血が・・・！」

まだ傷からつつすらと流れる血をみて、ミリリが思わず声を出す。

「ああ、すぐ治るさ。」

心配するミリリに、軽い調子で返事をする鴉。

首元から胸元にかけての傷を手先で軽く撫でていく。

すると流れていた血がピタリと止まった。

「ほら、もう大丈夫だ。」

問題無い。と言いたげな笑みをミリリに見せた。

「よ、良かったです！・・・でも痛いのも見るのも痛いですよ・・・」

ほっとしつつも、まだ不安そうなミリリ。

手に持った影の武器をぎゅっと抱きしめている。

「・・・見るのも痛い、か。優しいなミリリは。」

「そ、そんなんじゃ無いですから！」

鴉の言葉に、ぶんぶんと手を振って否定するミリリ。

そんな様子を柔らかな笑みで返す鴉。

パキイ・・・ン

その場に響く、乾いた音。

座り込んでいる鴉のすぐ傍で、石の欠片が撒かれた。

「ベナムダスト！」

影の低い声と共に、床に毒々しい色が広がる。

「え?!」

ザッ

ぽちは驚くと同時に後方に下がり距離を置く。

しかし下がった先もまだ、毒の領域だった。

細かな毒の霧がぼちの足元にまとわり付き、そこから一気に全身に息苦しさ、立ち眩みや激しく波打つ鼓動がぼちを襲う。

「うあ・・・！」

ぼちは胸を押さえてその場で動けなくなった。

影に向けていた剣も下ろすはめになった。

「ぼち！」

「ぼちさん！」

二人の呼びかける声は、影の低い声でかき消された。

「ベナムスプラッシュャー！」

その声を合図に、ぼちの体から淡い毒色の霧が滲み出てきたのだ。
ドンッ

「あう！」

ミリリの体を、鴉が後方へと突き飛ばす。

同時にぼちからにじみ出た毒の霧が、側に居た鴉も包んだ。

そしてその霧は、火花を散らしぼちと鴉の体を襲った。

ドオン・・・

毒の霧が起こす、爆発。

それは確実に、二人の体を傷つけた。

「・・・ぐっ！」

「・・・っ！」

膝を付き、痛みが収まるのを待つ。

・・・暇は無かった。

「ガキ、まずその武器を返してもらおうか。」

つかつかと足早に、影はミリリへと向かっていた。

鴉が、巻き添えにしないようにと突き飛ばしたその先に。

「あ・・・ああ・・・。」

突き飛ばされた衝撃で、ミリリは床に座り込んでいた。

影の武器を抱きしめながら、少しでも離れようと後ろへと下がる。それ以上の距離を、影に縮められてしまう。

「もう一度言う、その武器を返してもらおうか。でなければ・・・」
そう言いながら影は隠し持っていた次なるナイフをちらつかせた。
「力づくだかな！」

ダダッ

そして一気に距離を縮める。

「やめ・・・！」

ぼちの止める声。

手を伸ばすが、届かない。

「つく、キリエ・・・！」

鴉の防御壁を唱える声。

それも、届かなかった。

先に届いたのは・・・。

「デコピンを髪にやったらヘアピン！」

良く通る、無駄にいい声の、無駄なジョーク。

「うーん、キレが今・・・ねえ鴉、今はどう・・・。」

自分の世界に浸っていたたまが振り向くと・・・。

ピキピキ・・・ン

そこには二人の男女が氷漬けになっていく光景が。

影の手がミリリに届く、その数cm手前だった。

「ちよ、ミリリさん！？おまけに寝てたアサシンまで！」

たまが驚いてその光景を見ていたが、すぐに周囲も見回した。

「ぼち！鴉！大丈夫？！何があつたのさ？！」

うずくまっているぼちと鴉に慌てて駆け寄る。

「私が訊きたいよ・・・何この展開。」

腑に落ちない、納得いかない、馬鹿げてる。

助かったのに、どちらかと言えば落胆な顔を見せるぼち。

「いわゆる、カミ展開って奴だね！」

真顔で言うたま。天然にも程がある。

「逝ってよし。」

そう言いながらも、ぽちの体中の毒が徐々に抜け、呼吸も落ち着いてくる。

「ふう・・・とりあえずミリリの氷割るから。そっちのアサシンは縛りつけよう。」

立ち上がりながらぽちは言う。

そして鴉に振り返る。

「鴉、大丈夫？」

床に座り込んだままの鴉に声を掛けた。

「ああ、すっかり油断してしまっていたよ。」

ぐったりしつつも、笑顔で返す鴉。

「ちよつと鴉！胸のところの血はどうしたのさ！」

不意にたまが鴉を指差し、声を上げた。

「うん？ああさつきちよつとな。」

鴉は影に付けられた傷を軽くなぞる。

血は止まっている・・・はずだった。

「・・・鴉？」

ぽちの呼びかけには答えず、鴉はなぞった手を見た。

どろりとした血が手を染めていた。

脈打つ鼓動が早い。

しかし傷に対しての痛みは無い。

「そうか・・・別な毒が・・・。」

ドサッ

一言呟き、鴉は床に崩れ落ちた。

負傷者（後書き）

ほっといたらR指定のジクです（あ

どこまで書いたらアウトになるんだろうと思いつつ書いてました。

次回、彼の運命は？！

って、そんな重要な人物のつもりは（ry

たまはもう完全フリーダムです（笑

かいほう

サア・・・

薄暗い大地に小雨が降りしきる。

小雨と言えど、外に出て濡れて喜ぶ人は居ないだろう。

しかし。

それでも外に出て濡れてる人は居た。

四人も。

しかし、喜んでいる様子は無い。

当たり前だが、当たり前じゃない事情があった。

大人の事情と言う奴だろう。

第三者が見たら、間違い無くこう思うだろう。

修羅場だと。

ズザザザッ

女にのしかかっていた男が慌てて離れて後退りした。

手遅れと思いつつ。

「ま、待て匠！コイツは違うんだ！俺の探して・・・。」

「・・・探してたよな？オレの嫁を。なあジクよお？」

匠はパイプタバコを啜えつつ、相手の名を呼びゆっくりと近づいていく。

静かに、静かに怒りを抑えた声。

雨と、薄暗い空間で表情は見えないが、その声で十分想像出来るというもの。

「聞けつて！コイツが銀髪の片う・・・。」

「ほお・・・名前までチェック済みたあな。」

ジクの弁解も虚しく、匠は都合の悪い所ばかり耳に入っている様子。怒り心頭の間人には、何も言わないのが得策だ。

が、それを目の当たりにしている人間には難しいものである。

「あ、先輩。俺教会に用事あるんで戻るっす。」

その様子を後ろから見ていたアキラが、声を掛けその場をいそいそと離れた。

「あーアキラずりい！逃げんじゃねえ！」

アキラの言葉に反応し、ジクがアキラに声を投げる。

「・・・ジク。」

そのジクに声を掛けたのは匠。

湿った空気を軽く吸い込み、静かに低い声で言った。

「・・・そこに、居ろや。」

パイプタバコをはずし、大型の斧を取り出し両手に構える。

「うえ？！ちょ！マジで待・・・っ！」

虚しくも、ジクの声はかき消される。

「っはあああああ！！！」

匠の気合（というかマジ切れ）の咆哮によって。

ビリビリと空気に振動が伝わるほどの。

「マキシマイズパワー！」

「ウェポンパーフェクション！」

「アドレナリンラッシュ！」

「オーバートラスト！」

見る見るうちに斧が輝き、切れ味が増す

動きに隙が無くなり、その鋭い眼光は的を逃さない。

無駄の無い動きが、ジクを確実に捉える。

腰に下げた道具袋から瓶を取り出し、中身を飲み干した。

「ちい！一旦退きや・・・。」

しゃべりかけたジクが、言葉を詰まらせた。

逃げようと思っていた視線の先。その道の先に、匠が居たからだ。

ついさっきまで匠が居た場所の、正反対。

瓶の中身はアキラと追いかっこ（アキラは命がけ）の時に使った

物と同じである。

匠とジクの距離は二、三メートル。

ズザアッ

それも一気に縮められた。

雨でゆるんだ地面にも関わらず、的確にジクに標準を定める。

ジクが避ける間も無く、匠の大型の斧が振り上げられる。

そのまま怒り任せに振り下ろした。

ガシンッ

その時。

体重の乗った斧を持つ匠の腕が、掴まれた。

「・・・な!？」

目を白黒させ、匠は我に返りその人物を見た。

ジクではない。

ジクは匠と同じように目を白黒させ、自分の目の前に立つ人物を見る。

さつきまで、ジクが戦っていた人物だった。

教会に戻ったアキラを迎えたのは、一戦を終えたような場面だった。入ってきたアキラから近い順に、胸元から血を流して倒れている鴉。困惑の表情で鴉の側にしゃがみ込んでいるたま。

同じくしゃがみ込み、ぼちは胸元のギルドバッヂに呼びかけていた。

「冥、鴉が倒れた、広間に来て！」

突然のギルドチャットに流れるぼちの声。

「な・・・何だよこりゃ?!」

状況を飲み込めないアキラが、誰とも無く声を投げた。

後方には、氷漬けになっている影とミリリが居た。

ナイフをミリリに向け、届く寸前の所で凍ったようだ。

ミリリは影の武器を抱きしめ、覚悟を決めたように目を強く閉じた姿。

「・・・怪我人が暴れたってどこか。で、何で凍ってるんだ？たまか？」

当たりをつけてアキラがたまに声を掛けた。

敵を低確率で凍らす技が、吟遊詩人にあつたはずと思つての話の振りだ。

寒いジョークの事とは思つて居なかつたわけだが。

「え？」

おしぼりで鴉の血を拭う手を止め、きよとんとするたま。

一瞬の間。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うんそうだよ僕がカツコ良くやつたんだよ！」

「間がなげえよおい。実は違うだろ！」

拳を握り締めながら力説するたまに、すかさず突つ込むアキラ。

「カツコ良く、の所はまるでいらなかつた。」

そして正論な追い討ちをかけるぼちだつた。

バタバタバツ

教会の奥から駆ける足音。

現れたのは冥と、ぼにんを抱えた銀。

「え?!凍っちゃつてるよ!どしたのこれ!」

銀が先に目に入ったのは、氷漬けの二人だつた。

「あつておねーさんとくろいこがかつちかち。」

銀に抱えられているぼにんも、異変に気付いたようだ(珍しく)。

「あ、あれ?銀さんさつき外に居たんじゃ・・・。」

そんな銀を驚いた表情で見るアキラ。

さつきの修羅場(しかも知合い)が脳裏に浮かぶ。

「ん?ずつと冥ちゃん部屋に居たよ?」

不思議そうにアキラを見つめる銀。

その表情が突然パツと明るくなる。

「あ！それ黄泉ちゃんだよー、アキラちゃんが引つかかったんだね？」

にこにこ嬉しそうな顔をする銀に戸惑うアキラ。

「引つかか・・・そっちがあんな女だったのか！」

「えへへ。んでも旦那が引つかかると思ってたのになあ・・・」
得意げな顔をした後、ちよっぴり残念そうな顔をする銀。

「・・・いや、後追って外行ったよ。先輩と。」

「え？ホント？」

「・・・ああ・・・」

気まずい表情で返事をするアキラ。

さっきの修羅場が脳裏に（以下略）。

「やったね！あーでも引つかかったままだったらどうしよう・・・」
銀は手をパンツと叩き喜びの表現をする。

が、直後考え込み、要らぬ心配をしている。

そんな銀をよそに、アキラは視線を変えた。

その先には二体の氷漬け。

「とりあえず野郎は縛っとくか。銀さん、紐とか縄を持っていたりは？」

そう言つてアキラは氷漬けの影の側に行き、銀に声を掛けた。

「え？あー紐かー、お裁縫セットの・・・」

「縫うんじゃ無くて縛る奴！そりゃ細すぎる！」

こんな状況下でも天然つぶりを見せる銀に、すかさず突っ込む。

聞いて聞かずか、銀は片手でござごと道具袋から裁縫道具を取り出している。

「あ、そっか。縛るんだよね。」

やっぱり聞いていなかった。

「天然が多すぎる・・・」

「ん？何か言つた？アキラちゃん。」

「いや、何でもない！」

不思議そうな顔を覗かせた銀に、アキラは慌てて首を振った。

一方。

「状況を。」

冥は一言声を掛け、たまのすぐ傍にしゃがみ込み、倒れている鴉の介抱に取り掛かる。

鴉の傷口にヒールを掛け、空いてる片手で鴉の額と首筋に手を当てる。

汗はかいておらず、目立った体温の増減もない。

「あの男からの傷が原因さ。」

ぼちは後方を振り返り、洗面で氷漬けになった影を見た。

「……！」

冥はぼちの視線の先に居る人物を見て、息を呑む。

自分に襲い掛かってきた男に違いないからだ。

「一度止めた血が、止まらないんだ。」

続いてぼちは冥に、たまが傷を拭いていたおしほりを見せた。

血を十分吸ったおしほり。

しかし傷口からの血はまだ止まらない。

胸元の浅い傷口からじわりと滲み出ている。

「一度止めた。と言うのは？」

訊きつつも冥は鴉の首筋に当てた手で、手際よく鴉の脈も取った。

「鴉が自分で。」

淡々と話すぼち。しかしその表情は暗く沈んでいた。

新しい布巾を取り出す冥。

「けれども、また血が流れたと……ぼちさん？」

ふと、ぼちの口調が沈みがちなのに気付き、声をかけた。わずかな沈黙。

「……私さ、側に居……。」

「ああー！！アキラその縄で何する気！？」

間を置いて口を開いたぼちに、割り込む形でたまが叫んだ。たまは立ち上がり、つかつかと足早に相手の元にと進む。

ぼちは言いかけた言葉を止め、指をさし憤然とした顔で抗議をする。たまの視線を追った。

氷漬けの影とミリリの前に、銀と片手に縄を持ったアキラが居る。

「あん？縛るに決まってるんだろ。この凍った野郎を……」

「なんて野蛮な！ミリリさんを縛るなんて！」

突然割って入ったたまに返事をする……が、それも勘違いに解釈されるアキラ。

「良くわかった、お前を先に縛る！」

アキラは縄を持ったまま、体の向きを影からたまに変えた。

「わわ！冗談！冗談だつてば！」

近づいてきたアキラから慌てて逃げるたま。

側に居た銀は、そんな二人の様子を呑気に眺めていた。

「二人とも仲良しさんだね。」

「なかよしさん。」

銀とぼにんのまったり組も、十分に仲良しである。

「男性は元気ですね。」

「……そうだね。」

新しい布巾で鴉の傷口から血を拭いながら、冥が口を開き、ぼちが答える。

「ぼちさん。」

「うん？」

「大丈夫です、脈も呼吸も正常です。熱も無いです。」

「……そつか。」

「傷も浅いです。」

「……。」

「ぼちさんが居なかったら、もっと危険にさらされていたと思います。」

「……そつかな。」

「ええ。」

冥は横目でぼちの様子を見る。

ぼちの暗く沈んだ表情が、いくらか落ち着いたように見えた。
「それにしても……。」

視線をぼちから鴉に移し、傷口から滲み出る血を見て呟いた。
「血、止まらないね……。」

冥の視線を追い、鴉の傷口を見て同じく呟くぼち。
そして思い出したように顔を上げ、冥に振り向く。

「そつだ！冥、鴉は倒れる前に「別の毒」と言ってたよ確か。」
「別の……毒？」

ぼちの言葉に顔を上げ、二人の視線が空中で合う。

「毒？」

その言葉に反応する、アキラの声が聞こえた。

二体の氷漬けの前に居るアキラ。

たまを縄で縛り上げ、ギユムギユムと踏みつけながら締め上げている。

「あだだだ！痛いよ踏まないでよ解いてよ汚さないでよ！」

「そんだけ元気ありや自力で抜け出せるだろ？ちと行って来る。」

「ちょ……放置プレイ良くないよ！」

縛っても騒がしいたまを床に放置し、アキラは冥の元に向かう。

「たまちゃんそんな趣味あつたんだ。」

「あつたの〜。」

「見守らずに解いて頂けるととても嬉しいのですが……。」
「まったり組の二人に、ささやかな助けを求めるたまだった。」

足早に冥の側に行くアキラ。

「マスタ、毒に掛かつてるのか？」

アキラは誰とも無く尋ねた。

「あ……アキラさん。ええ、どうやらそのようで……。」
側に来た事に気付き、振り向いて冥が答える。

それに続いてぼちも口を開く。

「アキラ。でも普通の毒じゃないかもなんだ。」

「へえ……んでも毒ならこいつが効くかも知れねえよ？」

匠の声にも反応せず、黄泉は少し先にある森をただ見つめた。

細かな雨が降り注ぎ、薄暗くなった周囲がより森の奥を闇へと誘う。「なあなあ匠。」

不意にジクは匠の側に行き、短い袖をグイグイ引っ張って話しかけた。

「んだよ？」

「俺、庇われたよな？惚れられたよな？脈有りだよな?!」

少年のように目を輝かせ、期待を込めた声を出している。

匠は溜息をつきながら、銀の格好をした黄泉からジクに視線を向けた。

「そいつあ無えわ。オレを止めたただけだろが。」

素っ気無く答える匠。しかし内心ちよつとしたショックもある。

黄泉がジクにホの字（古い）。

ではなく（当たり前前だ）、前衛職と言えど女性に力で止められたのが原因である。

「や！マジで期待して良いって！」

そんな匠のショックに気付くわけも無く、ジクのテンションは上がっていく。

さつきまでの険悪ムードはどこへやら。

「そんな事は皆無です。」

「んだよ！期待したって良いじゃ・・・。」

完全否定の声に反論するジク。

が、声の主が匠でない事に気付いて言葉を止めた。

ザッ

声の主は、黄泉がじつと見つめていた森の奥の闇から姿を現した。緑の短髪に目隠しをした男修行僧と。

「クエー」

「ムキキ！（おお、昼間出会った女子がおる！）」

その横にペコペコと、その背中にサルが乗っかっていた。

「何だダクツじゃんか！あとサル太さんと・・・そのペコペコは何さ？」

「彷徨い仲間だそうぞ。」

「訳わかんね。」

「ジクも大差無いでしょう。」

「俺は進んで彷徨ったりしねえ！八工運なくて迷っただけだ！」

「胸張って言う事じゃないですね。」

「八工代ケチって徒歩なアンタに言われたかないね。」

数時間ぶりに会った二人。

後半毒気づいているようだが、二人にとっては単なる挨拶である。

得意げな顔をしているジクに、目隠して表情が見えない男。

匠は、ジクとダクツと呼ばれた男との他愛の無いやり取りを見ていた。

匠の横に居た黄泉も、二人をじっと見ていた。

自分を襲った男、そして致命傷を負わせた男。

いつまた襲われるか判らない。

が、黄泉は構えることも無く、ただその様子を見ていた。

「ムキ？（む？しかし昼間の時と様子が違うじゃが・・・）」

そんな曖昧な場の空気中、サルが黄泉をずっと見ていた。

ピョーン

スチャッ

そしてペコペコから華麗に（本人曰く）飛び出し、華麗に（以下略）着地する。

仲間内ではトップクラスのダンサーらしい（どうでも良いが）。

トコトコトコッ

軽やかな足取りで黄泉の元に向かう。

「・・・・・・・・。」

黄泉は自分の足元に來たサルに目をやった。

サルはペタペタと黄泉の足を触っている。

「あ、どうよサル太さん。俺がさっき言ってた女よそいつは。」

サルの行動に気付いたジクが、声を掛けた。

「ムキ？（ほほう？この女子じゃったとは。成る程良い手触りじゃ）」

「だろ？だろ？格好は違うけど中身は奴なんだよな。」

二匹のサル、もといジクとサルは互いにニヤけた顔をしている。

同じ顔をしているように、見えなくも無い。

「ジク、阿保面はその辺にして、本題に入りましょうか。」

丁寧な口調の中に毒気を交えながらダクツは声を掛けた。

「本題つてえと・・・。」

ようやく口を開いた匠。

匠は横目で黄泉の顔色を伺った。

意識が無く、いたる所の骨が砕け、血を流していた黄泉を、匠は見ている。

黄泉をそこまで追い込んだ人物が、目の前の男修行僧だと。

戦いに生きた者の本能が、そうだと訴えていた。

が、黄泉の目には恐怖も戦意も浮かんでいない。

ただただジクとダクツを見つめている。

そして彼らもまた、戦うつもりは無い様に見える。

「失礼、俺はダクツって言います。貴方は？」

次の言葉に躊躇していると、ダクツが匠に話しかけてきた。

「・・・匠。」

「では匠、そこに居る女は知り合いですか？」

「今日会ったばっかだ、良くは知らねえ・・・が。」

「が？」

「そいつが「片腕の悪魔」で、てめえらが狙ってる事は知ってっぜ？」

そこまで言っただけ匠はダクツの反応を見た。

少し考え込んだダクツは、しかしさりと返す。

「そうですか。」

別段困った様子でも、構えを取るでもなく。

「その内容は忘れてください。」

そしてダクツの言葉は、匠とジクを同時に驚かせた。

「へ？何という事なん？」

「・・・つまり？」

二人は互いに疑問を口にした。

「先ほど得た情報によると・・・。」

そんな二人にダクツは言った。

「奴を敵にする事は、過ちだという事です。」

事実

サア・・・

小雨が大地に降り注ぐ。

そんなとある町外れの教会。

ギイ・・・

中に入ると教壇のある広間、その左奥にはキッチンや寝室へと続く通路がある。

「つたく、ろくなことしねえ野郎だぜ。」

「本当だよね、僕の顔踏みつけてさ！」

「お前に言ってるの！俺は！」

教壇の側では賑やかに二人の男が言い合っている。

その中に目当ての奴が居ないようだ。

賑やかな光景を横目に通路へと向かう。

二つある寝室のうち、通路口手前の寝室に入る。

ガチャ・・・

ノックは面倒なのでそのまま開けた。

サングラス越しにも、明るくて整頓された部屋。

入って正面は書類だらけの机、窓の側にある。

右側に洋服ダンス、左側にあつた仮説ベッドは元のベッドに設置しなおされている。

そのベッドに男聖職者、鴉が横たわっていた。

薄い掛布が胸元まで覆っている。

「あ・・・匠さん。」

無断で部屋に入って来たにも関わらず、人懐っこい笑顔を向ける女聖職者、冥。

ベッドの側で椅子に座っていたが、腰を上げパタパタと部屋の入り口に来た。

冥を目で追い、啞えていたパイプタバコを外す。

「野郎を看病してたんじゃないかねえのか？おっさん。代わりにくたばってやってんのか？」

冥の表情に緊迫感が無いのを確認してから、いつも通りに声を掛けた。

「何と言いますか・・・不意打ちをされてしまったようで・・・でも。」

表情が一瞬暗くなる冥。

が、すぐに表情を和らげ言葉を続けた。

「アキラさんに、鴉様が受けた毒を中和して頂いたので、大丈夫です。」

冥が話している間、ベッドにいる鴉に目を向ける。

襲われたようには見えない位、落ち着いた表情で横たわっている。なるほど、大丈夫なわけだ。

「あの、匠さん。皆さんの様子を見に行きたいのですが・・・。」

鴉を観察していると、冥はおずおずと声を駆けてきた。

「あ？好きに行ってこいや、見てっから。」

「ありがとうございます、少し行ってきますね。」

「おう。」

返事を聞くと冥はパタパタと部屋からでて広間に向かった。

「・・・。」

静まり返る部屋。

横たわっている鴉の微かな呼吸だけが聞こえる。

寝息か、そうじゃないかの区別くらいは付く。

足をベッドに向かわせ、側に行く。

腰に下げた道具袋を漁り、中身入りの瓶を取り出す。

白く透き通った水が、瓶を振る毎に気泡が泳ぐ。

ポンッ

無造作に蓋を開け、そのまま瓶をひっくり返す。

ベッドに横たわっている、鴉の顔面に向けて。

バサアッ

僅かに、鴉の反応が早かった。

掛布を舞い上げ、流れる水の進路を塞いだ。

その勢いで掛布が瓶に触れ、手元が狂いそうになる。

瓶を握り締め直し、中身のまだ入った瓶を勢いつけて落とした。

ポフッ

横たわっている鴉の顔面を狙って落とした瓶は、代わりに枕が受け止めた。

鴉は枕を盾にしたのだ。

そして瓶を受け止めた枕を、横たわったまま投げつけてきた。

ごく近距離からの攻撃、そして反撃。

互いの反射神経は、腕利きの戦士と変わらないほど。

枕を背負ったような瓶が目の前に来る。

ガシッ

顔の真ん前まで飛んできた枕付き瓶(?)を難なく受け止める。

受けた勢いをそのまま鴉に向け、力の限りに投げつける。

ドムンッ

しかし投げつけた瓶付き枕(どっちでも良いが)は、誰も居ないベッドに虚しく当たる。

ベッドの軋みを一度だけ聞き、鴉はベッドから離れていた。

互い呼吸の乱れも無く、数秒間の攻防戦を終えた。

手に持っていた、軽く湿った掛布を大雑把にたたみベッドにのせている。

「目え覚めたかよおっさん。」

軽い運動を終え、首を軽く回すと関節の部分が鈍く鳴る。

「普通に起こしてくれ!!人を永眠させる気か!」

鴉は信じられんと言いたそうに(言ってるかもしれない)声を張り上げる。

「起きてたくせに何言ってるやがる。」

「・・・それは。」

真つ向から指摘された鴉は、一瞬視線を逸らした。

すぐに視線を戻し、人差し指を口元に当てた。

「シートだ。」

「誰にだよ。」

「まあそれは良いとしてだ。」

そう言いながら鴉は、ベッドに腰掛けた。

すぐ側にある、さっき投げつけた中身入りの瓶を手に取っている。

「お前の中で白ポーションの役割は何だ。」

「目覚まし。」

「是非自分に、そして回復剤として使用してくれ。」

「手っ取り早く起こせて良いじゃねえか。」

「水浸しになるのも考慮してくれ。」

そこまで言って、鴉は瓶のあった場所に視線を向ける。

白ポーションを吸ったベッドの一部は、雨漏りがあったように濡れていた。

「どうせ乾く。」

その言葉を聞き、鴉は軽く溜息を付く。

「まあ、おっさんが誰に襲われたかは置いといて・・・。」

「今お前に襲われたがな。」

「目覚まし。」

「心臓に悪い目覚ましはいらん。」

「体には良いぜ？白ポーションだし。」

「寝ている人間に使わないでくれ、しかも顔に。」

「洗顔も兼ね・・・。」

「兼ねない！」

きりが無い。いつもこんなだ。

「で、どうした？」

一呼吸置いて鴉は突然聞いてきた。

用も無しに一对一になる事は無い事を、知っているからだ。

「……あの女の事を訊きに来た。腕無い方。」
話を切り出すと、鴉の表情が険しくなった。
構わず続ける。

「さつき会ったぜ、あの女を襲った連中。」

「……黄泉だ、それで？」

「一人はさつきの追跡者。もう一人は修行僧。」
モック

「それから？」

続きを訊きたそうに、落ち着かない様子。

「狙いは、あのおん……黄泉の……。」

「黄泉の？」

「「眼」だ。」

「……。」

「知ってつか？その「眼」に何が仕掛けられてんのかを。」
そこまで言つて、鴉の反応を見た。

予想通りだ。

驚いてはいない。

「連中はそいつを狙ってた。」

「……お前は黄泉と一緒に居たのか？」

急にそんな事を訊かれるとは思わなかったが。

「オレが、まだ話してんだぜ？」

「答えてくれ。」

投げやりに溜息をつき、鴉に返事をする事にする。

「……外で合流した、連中とも。」

返事をしたので話を続ける事にする。

「じゃあ……なぜ黄泉は今一緒に居ないんだ？」

と思つたのにまた訊いてきた。

鴉は腰掛けたベッドから身を乗り出すように迫ってくる。

「一緒に居なきゃいけない理由は無え。……おっさんよ。」

苛立ちを抑えつつ、サングラスを外す。

そして鴉の真剣な目を真つ向から睨み返す。

「オレが話してるつつつてんだろ？黙って聞けや。」

「・・・黄泉は・・・。」

グイッ

鴉が言葉を続けようとするとするのを、服の襟を掴み引き寄せせる。

「限度つてのも、あるぜ。うん？」

目に凄みをを利かせ、鴉の目を捉える。

これで数々の人間やモンスターを恐怖で怯えさせ、少数には闘争本能を駆り立てた。

「・・・すまない。」

一瞬間を置いて、鴉は一言呟いた。

怯えもせず、闘争心も一切無い。

まだ落ち着かず、心配そうな表情を浮かべている。

神に仕える者と言つても、恐怖心や闘争心は必ずある。

人間だから。

鴉には、一切それが感じ取れない。

先刻の攻防戦さえ、ただ反応したに過ぎない。

「面倒くせえな、おっさんは。」

掴んだ鴉の襟を放し、サングラスを掛け、呟く。

「歳を重ねるとこうさ・・・話を続けてくれ。」

「・・・邪魔すんなよ？」

割り込まれないようにと、念を押しておく。

「分かった。」

鴉が返事をし、またベッドに座つたのを確認し、話を再開する事にする。

「おん・・・黄泉は。」

外でのやり取りを思い出しながら、パイプタバコを啜える。

「眼に仕掛けられている物が核となって生命を維持出来ている。」

反応を見るため、鴉に目を向ける。

予想通り、これも驚いていない。

確認したので、続ける事にする。

「更にそいつあ、兵器としての機能を持ち、黄泉を誕生させた。」
一呼吸置き、そしてその単語を発した。

「ユミルの心臓」「だとさ。」

少し離れた森の入り口。

薄暗くなってきた外は小雨が降り注ぎ、静かに大地を濡らしてゆく。
そんな中。

「気功！指弾！」

シュウウ・・・

自分の周りに気を作り、ダクツはそれを数m先に居るジクに向けて放った。

ドウンッ

「！」

突然の事どつさに身体を横にずらして回避するジク。
ザッ

そのすぐ目の前に、ダクツの存在があった。

軽く屈み、拳を繰り出す体勢を見ている。

「ま、待てっておい！」

ようやく開けた口も虚しく、ジクに多段攻撃が仕掛けられる。

「三段掌！」

「連打掌！」

ドガガッ！

三打、四打撃と繰り出される攻撃に、ジクは全部を避け切れなかった。

「・・・にやるお！」

ほとんどの攻撃を避け、ジクが睨むも束の間。

「猛龍拳！」

更なる追撃。

ダクツの拳に、凝縮された気と力が込められる。
その拳がジクに向けられていた。

そんな二人を、匠は見ていた。

ダクツの突然の攻撃、戸惑いながら避けるジク。

仲間割れでもなく、プライドを掛けた戦いでもなく。

目の前の光景を目で追いながら、ダクツの言葉を反芻した。

「「奴を敵にする事は、過ちだという事です。」」

そう言っただクツは匠からジクに向き直り、一言。

「「せつかくだから、実際見た方が早いでしよう。」」

そしてダクツはジクに攻撃を仕掛けた。

黄泉を敵にする事が過ちである事を、この戦いで見られると言っただ。

匠はちらりと横目で黄泉を見た。

今だに銀と同じ服を着ているし、黒髪のカツラも着けたままだ。

雨に濡れた服が体にびったりと張り付き、体のラインがよりくつき

りと。

というのは置いといて。

黄泉はじつと目の前の二人の戦いを見ていた。

ダクツは、見た方が早いと言った。

つまり、この戦いの「何処」に黄泉が反応するかという事。

一方的にダクツがジクを攻撃しているが、らしい反応は無い。

ジクが攻撃を避け、時折食らうときも、反応は無い。

先刻ジクを匠の攻撃から庇ったのに。

そしてもちろん、匠にも反応らしい反応は今はない。

匠は頭を働かせた。

(・・・庇って無いとしたら、奴がオレを止めた理由は・・・理由?)

パイプタバコを啜え、考えを整理する。

(・・・さっきのオレに合って、今は無い・・・?)

そんな考えをしている匠の目の前で、ダクツはジクに気を込めた拳

を向けていた。

ビュンッ

気を込めたダクツの拳が虚しく空を切る。

拳の軌道の先に居たはずのジクは、姿を消していた。

ダクツが構え直したその時。

「っざけんなつてよ!!」

ズザアッ

ダクツのすぐ背後に突如姿を現したジク。

腰に下げていた短剣を振りかざし、力と怒り任せに振り下ろす。

「バツクスタブ！」

背後からの奇襲攻撃に、ダクツはとっさに反応出来なかった。

否。

反応しなかった。

ビュオンッ

風を切る音すら聞こえる素早いジクの剣技。

素早いながらも体重を乗せた狂いの無い攻撃。

そして。

匠は見た。

黄泉が反応するのを。

目を細めたように見えた直後。

その姿はそこには居なかった。

濡れた地面が、一つの旋風が通り過ぎたようにえぐれている。

カシャンッ

不意に聞こえた金属音に、匠は注意をそちらに向けた。

直後。

「は？つて・・・どわ！」

「ぐっ！」

ドシャアッ

二人の声が聞こえ、濡れた地面に倒れこむような音。

見ると、ダクツの上にジクが覆い被さるように倒れていた。ジクの振り下ろした短剣は、なぜか地面に落ちていた。その少し離れた所に、黄泉が居た。

急に動いた所為か、髪が顔や体に張り付いている。

パサッ

いい加減邪魔だったのか、黄泉はカツラを外した。

カツラで隠れていた肩までの銀髪が露になる。

「……ってえ……うわ!? バカ俺は野郎に馬乗りになる趣味は無え！」

ズザザザッ

ジクは起き上がったと思うと、ものすごい勢いでダクツから離れた。「貴方は全部そっち系に回路が張られているわけですね、他は皆無と。」

濡れた地面で背中側が汚れたダクツも、皮肉を言いつつ立ち上がる。

「……今のは何が起きた？」

無言で見ていた匠が、誰ともなく口を開く。

「え? あ、うーん……俺がダクツにキレて攻撃したら、目の前にアイツが居てさ。」

体勢を立て直しながら、首を傾げつつジクが口を開いた。

「俺は……。」

そこにダクツが割って入る。

「ジクが背後に来た瞬間に、別な気配を感じて……。」

ダクツは手で泥を払いながら、顔を黄泉へと向けた。

「その気配に、ジクと同じ様な思いを向けてみたんです。」

「あ……何言ってるのアンタ? 気持ち悪いんだけど。」

ダクツの言葉に、目一杯嫌そうな表情を見せるジク。

「そしたら、この有様です。」

ジクの声を一切無視し、ダクツは倒れた拍子に付いた泥まみれな姿を見せ付けた。

「……その思いつてのはもしかすつと……。」

啞えたパイプタバコをゆっくり外しながら、匠が自分の考えを言葉にしようとする。

「お判りのようですね。ジクよりずっと冴えてますよ。」

「比べるのが間違ってる。」

「んだよ匠まで合わせるこゝろ無えだろー？」

一人置き去りなジクは面白くなさそうに口を尖らせる。

「さっきのオレに合って今のオレに無く、ついさっきのジクに合った。」

匠はジクに視線を向け、そしてダクツに向き直った。

「ダクツつつたか？てめえがジクを誘導させ、自分もタイミングを見計らって……。」

軽く息を吸い込むと、匠は言葉を続けた。

「ジクに向けた。敵意って感情をな。」

「……正解です。」

名指しで声を掛けられ、黙っていたダクツが口を開いた。
「半分は。」

事実（後書き）

野郎だらけですねorz

まあそれはおいといて・・・

ROの世界観があくまで好きなので、ユミルのくを
持ってきてみました！

そして遅くなりましたがまだ少し続きます！

解き解かれ

「よっ……と。」

アキラがしゃがみ込み、倒れている鴉の胸に手をかざす。

薄い霧の様なものが手を包んだかと思うと、吸い込まれるように鴉の体に消えた。

その様子をじっと見ていたぼちが声を掛ける。

「今の霧は何？」

「まあ見てろって。」

アキラの言葉が合図のように、鴉の体に変化が起きた。

じわりと汗が滲み出てきたのだ。

「よし来た！」

得意げな表情でガッツポーズをとるアキラ。

「冥さん、汗ふき取ってくれ。俺もやる。」

「あ……はい！」

手を差し出したアキラに慌てて布巾を渡す冥。

「後は安静にしてりや落ち着くさ。」

アキラは渡された布巾を鴉の服に突っ込み、大雑把に拭いた。

冥は汗でじっとり濡れた鴉の顔や首を丁寧に拭いている。

「アキラ、適當過ぎ。」

「いいの！風邪ひかないようにざっと汗拭ければ十分なんだ！」

ぼちの言葉にアキラが返す。

「毒はもう大丈夫なの？」

そしてぼちは疑問を口にした。

「ああ、大丈夫と思うぜ。」

アキラは鴉を横目で見ながら答えた。

「今の出てきた汗が、体内の毒気なんだ。」

「へえ……どんな仕組み？」

ぼちは更に訊いた。

「んとだな……。」

アキラは片手で布巾を、鴉の胸の傷周りを避けて拭きながら言葉を選ぶ。

「毒に対する気を送り込んでだな？汗と一緒に追い出すんだよ。」

「対する気？一緒に追い出す？」

「神の力を使うのが聖職者、自然の力を魔力に変えて使うのが魔術師。」

「うん。」

「そのどれにも属さないのが毒。」

あらかた拭き終わり、布巾を床に置くアキラ。

「自然からも、作り出す事もできるこいつは、俺ら盗賊達が好んで使うんだ。」

そして言葉を続けた。

「便利っちゃあ便利さ、ターゲットをどんな陥れ方にもできっからな。」

「それで？」

「逸れちまったな、悪い。……毒を知ってるから、その気を探つて解く事も出来る。」

傍で冥は鴉の傷口にヒールを掛けつつ、脈を取ったりしている。

「毒の気を探れるのは俺ら盗賊達だけ。気を押し出せるのもだ。」

「ふうん……。」

「汗は体内の老廃物を出すだろ？毒もそれに溶け込んでるから、結果汗と一緒に出す。」

一通り説明を終えたアキラは、一息ついて鴉と冥を見た。

いくらか落ち着いた様子の鴉に、安堵し、胸を撫で下ろす冥。鴉の胸元の傷も、血が止まり軽く痕が残る程度。

その痕も徐々に薄らいでいく。

「アキラ。」

目の前の二人の様子を見ていたアキラに、ぼちが声を掛けた。

「あん？」

「メモ見ずに説明できたら尊敬したのに。」
そう言つてアキラの手元をじっと見るぼち。

アキラは鴉を片手で拭きながら、もう片方の手は手帳を開いていたのだ。

「うっさいわ！んな長いのいちいち覚えらんねえの！」
ぼちの声に、半分ヤケ気味のアキラ。

「これでアナタも盗賊系を身近に感じる本！」を馬鹿にすんな！」
その発言で距離を感じるよ。」

ムキになるアキラに、冷めた目で呟くぼち。
「騙された。」

「人聞き悪い事言うんじゃないねえ！」
「人聞き悪い職業だよ、ローグだし。」

他愛の無いやり取り。
少なくともぼちはそう思っていた。

だからアキラの反応が返ってくるのを待った。
「……………」

だがアキラは下を向いたままじっとしていた。
「アキラ？」

「たまの縄解いてくつか、マスターをベッドに運ぶ人手が居るわ。」
声を掛けたぼちの声には応えず、アキラは立ち上がってその場から

離れた。
「無視された。」

「……………ぼちさん。」
「うん？」

その場に残されたぼちが呟くと、今まで黙っていた冥が声を掛けてきた。

「アキラさんは幼少時代に、父親によってローグギルドに売られたんです。」

「……………そうなんだ。」
「孤児と言っていましたから、多分父親というのも血の繋がってい

ないものでしょう。」

「……。」

「望む職業を知らずに、育てられたのです。そこまで言って、冥はアキラを目で追った。」

氷漬けのミリリと影の足元に縄で縛られ転がっているたま。

その様子を楽しげにしゃがみ込んで見ている銀。

に、抱えられているぽにん。

その場に歩み寄るアキラ。

にやにやしながらたまの背中を足でぐりぐりと突付いている。

たまは信じられないといった顔をアキラに向け、なにやら抗議をしている（当たり前）。

慌てた様子で銀がアキラを止める。

アキラが一言言つと、銀は胸を撫で下ろした。

するとたまは必死に首を振る。

アキラは笑いながらしゃがみ込み、たまの縄に手を掛ける。

「アキラ、楽しそう。」

「そうですね。」

「冥は、アキラの事知ってたの？」

「……いいえ。自己紹介の後に、少々。」

ぽちの言葉に、首を振る冥。

「そっか。」

素気なく呟くぽち。しかし寂しそうである。

そして視線をアキラに向けた。

よく見ると、たまを縛っていた縄が更に足にまで行き渡ってしまっている。

上半身の自由が利かない上、足まで縛られますます身動きが取れないたま。

アキラは悪戯っ子の様に笑い、床に座り込んでたまを指さしている。青い長髪を振り回し訴えるたま。

その様子が面白いらしく、銀もアキラと同じように笑っている。

銀の腕の中ではぽにんが呑気にぽよぽよと弾んでいた。
ポンス

ぽちは不意に叩かれた肩に驚き、はっと我に返った。

「ぽちさん、ほらアキラさんを止めてこないと。」

ぽちの肩に手を置き、アキラの元へと促す冥。

「……でも。」

言いかけたぽちに、優しく微笑み首を振り、ぽちの背中を押す。

「……行ってくるね冥。」

一呼吸置き、ぽちが冥に声を掛け、アキラの居る場へと足を向かわせた。

幾らか軽い足取りにも見える。

「世話が焼けます。彼らも……貴方も。」

それを見届けると冥は鴉に視線を戻し、鴉の頭を優しく一撫でする。

その手が、ピタリと止まった。

冥は振り向き、ぽちを見た。

否。

ぽちの行く先を見た。

その表情は穏やかなものでは無かった。

「いやホント！アキラってばホントに解いてって！」

「ばっか、落書きするチャンスが俺が逃すわけ無えだろ？」

床で身動き取れずうごめいてる物体。

もとい、たまがアキラに懇願するも、更に不敵な笑いを浮かべてペンを取り出すアキラ。

キュポンスと軽やかな音と共にペン先があらわになる。

もはや当初の予定の「影を縛って鴉をベッドに移動」など無かったようである。

「アキラちゃん、何て書くの？」

「すみません銀さん止めていただけじゃないでしょうか！」

「大丈夫だよたまちゃん。すぐ落ちる奴だよきつと。」

「後処理の心配より現状を止めてください！」

「油性ペンって書いてあるぜ。」

「あ、落ちないねそれは。」

「おちないの。」

「ちよつと！シヤレにならないから！」

「額に肉って書くのは基本だよな。」

「何でだろうね？」

「いにしえからのロングセラーだよなあ。」

「書きかけて内って書くのもオツだよね。」

「やめて！僕の顔で遊ばないで！！」

たまの叫びも虚しく周囲に響き、アキラと銀は何を書くかで盛り上がっている。

コツコツ・・・

「あ！ぽち！ちよつと助けてよ縄解いてよ二人を止めてよ！」

その時、床でうごめいているたまの近くにぽちが来た。

急いでと言わんばかりに早口で捲くし立てる。

足元に居るたまを一瞥すると、ぽちはその視線をアキラに向けた。

無言の視線に気付き、アキラと銀はぽちを見た。

「あ、ぽちーも遊びに来たんだー？」

「あそぶの。」

銀、ぽにんの後、アキラがぽちに声を掛ける。

「んだよ？」

「・・・。」

アキラの声に一瞬の間を置き、ぽちは口を開いた。

「アキラ。」

「あん？」

「横にして匹って書くのはどうかな？」

「お！グッドアイデアじゃん！その発想は無かったわ。」

ぽちの提案を快く受け入れ、早速試そうとするアキラ。

悪戯を止めるどころか促進させているぽち。

「たま、私褒められたよ。」

「見たら判るよ！僕を犠牲にして！」

ぼちは足元に居るたまに話しかけた。

当然ながら叫ぶように声を張り上げるたま。

ピキ・・・

「チヨビヒゲも書くか。」

キコキコとペンを滑らしつつアキラが次なる書き込みを思索する。

「たま、匹って書かれてるよ。」

「身をもって判るよ！見てないで助けてよ！」

「うん、動いてズレないように体固定してるよ。」

そう言うぼちは、しゃがんでたまの肩や頭をよりがっちり抑えていた。

ピキピキ・・・

「アキラの手助けじゃなくて僕の！」

「アキラちゃん、ふさふさのおヒゲはどうかな？」

「・・・悪い、俺の腕ではペンでそこまで表現出来ないんだ・・・」

「

ガツクリと肩を落とし悔しそうな顔をするアキラ。

「あの柔かさと臨場感俺にはとても・・・。」

「そんな高度技術いらないよ！」

「そ、そっかあ・・・でもアキラちゃんならきつと出来る日が来る

よ！」

「くるの〜。」

「来なくていいです！」

落ち込んだアキラを慰めるべく、拳を握り元気付ける銀。 + ぼにん。

たまの悲痛なツッコミも虚しく場に響く。

「そうだね、アキラなら可能性有るね。」

「皆・・・サンキュな、俺頑張るぜ！」

「解くのを頑張つてよー!!」

女性軍（ぼにんも含まれるらしい）に励まされて自信を取り戻すア

キラ。

すかさずツツコむたま。

喉は丈夫なのか、幾らツツコミをしても枯れる事は無い。
アキラが二人の肩をポンポン叩いて深く頷いている。

「くすん・・・ミリリさあん・・・。」

盛り上がったる三人と一匹から視線を移すたま。

肩や頭を抑えていたぼちからそつとズレた。

盛り上がっているので気付いていないようだ。

たまが見たのは二つの氷漬けのオブリエ（というか背景）。

その間に挟まれてたまやアキラ達が居る。

影を縛り付ける為に、二つの氷漬けは一メートルほどの距離を置かれて
いる。

その縄は今たまに使われているわけだが。

たまはミリリを見た。

恐怖に目を閉じて、影の武器を抱きしめている。

僕も武器になりたい。

とたまが思ったのは言うまでも無い。

「僕も武器になりたい・・・。」

思ったら言うのがたまである。

「あ、見えそう。」

ズリズリと芋虫のように体を伸び縮みさせ、ミリリの足元に近づこうとする。

「こら、たま逃げんじゃ無え！」

がしつとアキラに捕まれその先に進めなくなるたま。

男の野望を止められた瞬間である。

「半分つてえと・・・？」

教会から離れた森の入り口付近。

小雨に降られながらも、匠は情報を得ようとダクツに訊き返す。

「俺がジクに敵意を持つても、奴は俺には反応しなかつたんです。」
「・・・説明やがれ、半分でいい。」

ダクツはコクリと頷いた。
そんな二人と違う世界に入ってる二匹。

もとい、一人と一サルが匠達から数メートル離れて黄泉の側に居た。

「うーんやっぱアンタは銀髪がいいよウン。」

「……………」

黄泉を目の前に、ダクツと同じように納得し頷いているのはジク。
意味合いはまるで違うものだが。

「ムキ！（おぬし、この女子が今日のお持ち帰りかのか？）」

そのジクの足元にいつの間にか居るサルがジクに話しかける。

戦闘を察し、身を隠していたのだ。

「是非そうしたいとこだけどなあ、何か敵じゃなくてもイイみたいだし。」

「奴が反応するタイミングは、二つ。」

ダクツはにやついているジクを無視して口を開いた。

指を二本立て、続ける。

「敵意の対象が奴自身に向けられた場合。さっきの最後の条件が当てはまります。」

「まてや、てめえが向けた敵意はジクにじゃねえのか？」

「ジクにも向けました・・・続けます。」

「……………」

「二つ目。これが厄介です。」

そう言つて一呼吸置き、ダクツは続けた。

「敵意の対象が片方にのみあつた場合。」

「片方に？」

ダクツは頷いた。

「片方の敵意が発生する時、奴は反応するのです。」

「・・・それがさつきてめえが言つてたもんでか。」

「そうです。互いに向けた敵意が成立する場合は、奴は反応しない

のです。」

「面倒くせえな……。」

パイプタバコを啜えなおし、匠は黄泉を見た。

二匹のエロ親父……もとい、ジクとサルに絡まれている。

が、まったく無関心な表情でジクとサルを見るばかり。

しかしこうしてみると普通の人間の女にしか見えない。

(……普通の……人間の?)

ふと、匠は思い出した事を口にした。

「何で、あの女を狙うことが過ちになるんだ?」

ダクツの言葉に、匠は疑問に思ったのだ。

奴が、とダクツが言おうとした時、間髪入れず匠は口を挟んだ。

「もう一つ疑問はあるぜ?」

「……何でしょう?」

ダクツの声に、これには少し間を置き匠は疑問を口にした。

「あの女は……「人間」なのか?」

ダクツの言葉は、実験の結果を想像させるのだ。

それも人間としてではなく、研究材料の様な意味合いで。

「……それも一緒に答えましょう。」

ダクツは溜息をつくと、静かに語りだした。

ピシッ

ビキビキッ

「え!」

「何だ?!」

「な、なにになに!?!」

「こおり〜。」

不意に聞こえた激しい氷の亀裂音に、緊張が走る

場に居る全員（ぼにんは銀の腕の中）が体勢を整えた。

「ちよ、ちよつと縄！縄！」

と思つたらたま一人取り残されていた。

パキイ・・・ン

乾いた音と共に、氷漬けだったミリリの体が自由になる。

「わ・・・あわわわわ！」

ドシンッ

重心が取れないまま解放された体は、支えも無く床に倒れこむ。

「ミリリさん！」

「ミリリちゃん！」

ミリリ側に居た二人が声を掛ける。

「あ、白。」

ムギユリッ

「むぎゃ！」

たまの眩きごと顔を踏みつける足。

ミリリが解放されたという事は、同時に影も該当する事となる。

襲い掛かる体勢で氷漬けになった為、その足でたまを踏んでしまっ

たのだ。

「ぬお?!」

ズベシヤアッ

思わぬ足元の感覚に、影自身も床に体を叩きつけるように倒れこん

だ。

解放された瞬間に駆け出すことは出来る。

が、まさか足元に軟らかな障害物があるとは思っても見なかったの

である。

しかし前のめりに倒れた為、結果ミリリの近くに行く事になった。

「あわわ?!」

急に自由になった体。そして目の前に現れた影。

突然過ぎて頭の中が真っ白のミリリ。

その間にも影は体勢を立て直し、言葉より先にミリリの抱えた武器

に手を伸ばす。

ガシッ

その伸びた腕を、側に居た銀が両手で阻止した。

「み、ミリリちゃんに手を出しちゃだめ！」

銀は影と数時間前に外で会った事を思い出すと、少なからず恐怖を感じていた。

だが身の危険を感じても、ミリリに迫った危険を放って置けなかったのだ。

「！貴様はあのと・・・ぐあ！？」

影は言いながらも銀の手を振りほどこうとした。

グイッ

その影の手を、違う手が上から捻るように掴み上げたのだ。

「ぼっちー！」

「女の子に手を上げるなんて、紳士じゃ無いね。」

関節が曲がらない方向に手に力を込めているのはぼち。

「よっ、たまナイストラップじゃねえか良くやった！」

その後ろでたまの側にしゃがみ込んでd(・・)なポーズを見せるアキラ。

「自分の顔を畏にしないよ！」

靴の形にたまの顔が真っ赤に擦れ、痛みに完全に涙目である。

「俺が落書きしなければ無事だったかもな。」

「そこは大事じゃないよ！解いてくれてたら無事だったよ！」

「覗きに移動しなきゃ良かったんじゃねえの？」

「う・・・それはシーツだよ。」

「誰にだよ。」

そう言いながらアキラはたまの縄を解いた(仕方なく)。

解き解かれ（後書き）

たまには覗いた罰が当たりました（あ）

やっぱりシリアスよりドタバタが好きです

が、彼らが好きなので何でも書きたいです！

さり気ない言葉

サア……

小雨が大地に降りしきる。

町外れにある教会、その広間にて。

「つたく、ろくなことしねえ野郎だぜ。」

ぼりぼりと自分の頭を掻きつつ呟く赤髪の男。

「本当だよね、僕の顔踏みつけてさ！」

顔が足跡の形に赤くなり、額に「匹」の文字が書いてある男が憤慨している。

「お前に言ってるの！俺は！」

びしつと指を相手に向け言い放つ。

「ええ？！僕踏まれて犠牲になつたんだよアキラ！」

言われた男は顔の足跡を、これ見よがしに指をさしている。

「それは自業自得！俺が言ってるのはさっきのだ！」

「だ……あれはフカコウリヨクだよ！」

アキラの勢いにたじろぎつつも、抵抗を見せる。

「なあにがフカコウリヨクだ！何も考えて無いからだろ！」

「違うよ！ただつい……。」

「それを考えて無いっていうんだ！」

ぎゃーぎゃーと二人だけで随分賑やか(?)に言い合っている。

「たまさん、アキラさん。」

その場に、その雰囲気と対照的な静かで落ち着いた声が響いた。

それを合図に、二人の言い合いがピタリと止まる。

「あ、冥。鴉の様子はどう？」

相手の存在に気付き、たまが冥に声を掛けた。

「問題無いでしょう。」

落ち着いた表情で答える冥。

「傷も癒えました、起きたらまた仕事に戻ってもらいます。」

「なはは！そんな事言ったら、マスター暫く起きてこないんじゃないかね？」

冥の返事に笑いながらアキラが言った。

「今匠さんに様子を見ていたいただきます。」

「・・・寝ても居られなさそうだな。」

匠の乱暴っぷりを想像して少しばかり鴉に同情する。

しかし鴉の適応性の高さを考えると、案外寝込みを襲われても大丈夫かもしれない。

例えば寝ている所に水をかけてきたとしても。

上手い事かわして反撃すらしてみたり。

アキラはそんな考えを頭に巡らしていた。

実際その通りの事が起こっていたなど、知るはずも無いのだが。

「うん？そっぴい匠は何時戻って来たんだ？」

アキラはふと、思った事を口にした。

「匠さん？先程部屋にいらしたのですが。」

「そっぴいばあの女の人は？黄泉さんだよ。あとヤな感じの人。」

冥に続いてたまが口を開く。

「そっぴい・・・三人一緒に外に居たはずだったな。」

アキラは少し考えてみる事にした。

匠、ジク、そして黄泉。

この三人が外で修羅場(?)なる現場を見ている。

銀(の格好をした黄泉)がジクに押し倒された場を目の当たりにした匠。

誤解と言えど、匠の怒りMAXを向けられたジク。

そして間に挟まれた黄泉。

三人中二人も戻っていない。

もし丸く収まったのなら(奇跡的に)揃って戻って来てもいいはずだ。

ジクは女性や匠やアキラ、連れて来た怪我人の影(優先順序が最後である)に。

黄泉は鴉や冥達に会いに戻るはずである。

まさか、とアキラは顔を上げ、軽く目を細める。

「やられちまったのかな……。」

「え？」

アキラの言葉に反応する冥。

「誰がやられたって？」

冥に続く声。

「いやあ先輩が……。」

その声に返事をするアキラ。

言いかけた言葉が、ピタリと止まった。

目の前には冥とたまが居る。

アキラは冥の視線が、アキラ自身ではなくその後ろだった事に気付いた。

……時は遅かった。

ガシンッ

「っだ！」

アキラが気配を感じた時には、その両腕はアキラの首を締め付けていた

片腕がアキラの首を捉え、もう片方は首を押さえた腕を内側に引き寄せる。

結果。

アキラが苦しい（当たり前だが）。

「アキラさん！」

「アキラ！」

冥、たまが順に呼びかけた。

「っせん……無事……っ！」

ギリギリと容赦なく締め付ける腕。

この腕にアキラは覚えがあった。

暫くぶりではあるが、幾度と無くこの腕に締め付けられてきたからである。

慣れてると言っても、苦しいものは苦しい

「ああん？聞こえねえよ、で？誰が誰にやられたって？」
締め付けている所為で聞き取れないのだが。

緩める事無くアキラに問いかける男。

「ちよつと！アキラを放してよ！」

アキラの直ぐ側まで駆け寄るたま。

その勢いでアキラの首を絞めている腕を解こうと手を伸ばす。
ゲシッ

「あいた！」

しかし近づいた所、蹴られて尻餅をついてしまう。

「うつせーよアンタ、俺はアキラと遊んでんの！」

そう言つてたまを睨みつける。

ヒョイッ

「は？」

男が蹴つた足を下ろそうとした時に、アキラの足が絡む。

「………せん！」

苦しそうに吐いたアキラの言葉。

男が聞き取るより、聞き返すより早く、視界が一転した。

グイッ

ズダーンッ

「つてえ！」

足を絡め取られバランスを失った体は、アキラが掛けた重力によつて後方に倒れこむ。

背中に受けた衝撃で思わず声が出る。

腕が緩み、その隙にアキラはその腕を掴んで抜け出す。

げげほとむせ返りつつも、視線は男を向いている。

「アキラさん！」

「アキラ大丈夫?!生きてる!?!」

解放されたアキラに駆け寄る冥とたま。

しかしアキラは二人が寄ってくるのを手で止めた。

「え……？」

止められるとは思っていなかった二人。

アキラの息切れが聞こえるくらい近くまで来ていた。

だが待てという合図を見て、駆け寄った足がスピードを落としていく。

ベチャツ

「ふぎゅ！」

……たまは派手に転んでいた。

何せ尻餅から立ち上がり無理な体勢で走ろうとしたところを止められたのだ。

勢い余って床にスライディングした。

「床が好きなのか？」

アキラの呆れ声がたまの前方から聞こえる。

「そんなフエチ無いよ！」

すかさず反論するたま。

顔や腕は転んだ拍子に赤くなっている。（顔は踏まれた時のモノかも知れない）

「おー痛！反撃されっとは思わなかったけどなー。」

床に体を打ちつけた男は、頭を掻きながら起き上がった。

幸いにも、アキラの首にしがみ付いていたお陰で頭部への衝撃は免れたようだ。

相手が無事なのを確認して、アキラは安堵した。

と同時に、仕返しの覚悟も決めていた。

「……すみません先輩。」

そう言つてアキラはチラリと相手の様子を見た。

先輩と呼ばれた男は、背中や肩を押さえながら立ち上がる。

「おい、このジク先輩が立ってんだ、早く立てよ。」

「す、すみません！」

ジクが立ち上がり、間髪入れずに声をかけてきたのでアキラは慌てて立ち上がった。

すぐ後をたまがゆっくり続いた。

「まあアキラの反射神経の良さが見れたし、いつかな！」

「よく判らないけどすけどありがとうございます。」

怒っているかと思いきや、ジクは意外にもへらへらと笑っている。

ホッと胸を撫で下ろした。良かった、機嫌がいい、と。

無邪気に笑うジクはふと、たまに視線を移した。

「そっちは鈍臭そうだけどな。」

他愛の無いジクの一言。

「力加減が出来ない人よりマシと思うけど。」

同じく他愛の無いたまの一言。

しかし。

この瞬間、確実にこの二人は互いを敵視したのであった。

本当にたまはろくなことしない。

アキラは二人の様子を見ながら、何も起こらないように祈ってみた。

・・・無駄と判っていても。

少し時間を遡った教会の広間。

「じっとしてろ！」

アキラの足元には縄で縛られて転がっている男。

もぞもぞと相手が動くので、思うように縄を扱えない。

その相手は、黄泉を狙ってきた男暗殺者。

「ほどけねえだろ！馬鹿たま！」

「だって！余計に締め付けてるんだもん！」

ではなく、アキラに縛られ放置されてたたまである。

半分ほど解けて縄の先端が床に伸びている。

が、残り半分が複雑に絡み合っている為、あちこち引っ張っては緩み締め付けていく。

「解けるまで動くんじゃねえ！」

「大体、なんで縛ったときより時間かかってるのさ！」

「簡単に解かれない結び方」をやってみた。」

そう言つてアキラは「これでアナタも盗賊系を身近に感じる本！」を取り出した。

「じゃあ簡単に解かれない結び方の解き方」もやってみてよ！」

「載つてねえんだよなこれが。」

「一番大事な部分無いの?!」

「いや。」

騒いでいるたまに、本をパラパラとめくりながらアキラが真顔で言つた。

「己の腕を信じよ。」つて書いてある。」

「それは教え子への最後の言葉だよ！下手したら結んで放置プレイじゃん！」

「たま。」

コントをやっているような二人に、落ち着いた声が掛けられる。

「あ、ぼち！ぼちも何か言つてやってよ！」

救いの声と思い、たまはぼちの言葉を待った。

数分前にも同じような流れがあつたことに、気づくのが遅かった。

「アキラを信じてあげなよ。」

「僕にじゃないよアキラに言つてやってよ！」

真顔で言つぽちにすかさずつつこむたま。

ぼちは言われたとおり視線をアキラに変えた。

「アキラ。」

「あん？」

解くのに苦戦して、手を休めずにぼちを見るアキラ。

「結ぶ手順の逆をやつたら良いんじゃないかな。」

これ以上無い位のグッドアイデアである。(むしろそれが普通)

「いや、それがな？」

「……何が問題なのさ。」

気まずそうなアキラの横顔を見ながらたまが不機嫌に聞いた。

「逆に解くと針に刺さるようになってる。」

「変な物仕込まないでよ！結構命がけじゃん！！」

「また盗賊系に距離を感じた。」

ぼちはまた冷めた目でアキラを見た。

「ぼち、奴の様子は？」

「何も無かったみたい振舞わないで！」

間髪入れずに口を挟むたま。

「うん、いま銀が引き止めてる。」

そう言っただけは後ろを振り返った。

そしてはっと何かに気づいた表情を見せ、銀の元に駆けていった。

「バイオプラント！」

ポポンツ

銀の元気な掛け声と共にあらわる植物。

「っわ?! マンドラゴラ！」

突然生えてきた植物、マンドラゴラの姿に驚きの声を上げる。

「うん、アルケミストはこれが使えんだよねー。」

のほほんと、驚いた声に返す。

ちなみに驚いた声はミリリである。

うねうねと触手のように蠢く茎が、男の全身を締め上げている。

「もう・・・怪我人は大人しくしてるの！」

「・・・。」

全身の自由を奪われ、身じろぎせずに銀やミリリを睨む男暗殺者、影。

縄をアキラが持つてくるまで待てないと、ぼちは銀に頼んだのだ。全身植物で締め上げておけば大丈夫だろうとぼちは判断した。

短時間しか召喚出来ないが、充分の効能はある。

「・・・肩、大丈夫？」

睨む目に怯えつつ、銀は影に話しかけた。

「か、肩・・・？」

ミリリが聞き返す。

「うん・・・矢。外であつた時刺さつてたからね。」

視線を影の肩に向けながら銀はそう言った。

雨の中、矢が刺さつていた影に声をかけ回復財を提供したのだ。

「でも、動かせるみたいだから大丈夫かなー。」

自ら聞いておいて勝手に納得する。

「でも暴れちゃだめだよ？傷口開いたらまた痛いからねー。」

子供に言い聞かせるように、影に言い聞かせる。

「銀さんも優しいんですね！」

「え〜？優しくないよ〜普通普通。」

ミリリのキラキラした目を見ながら、軽く微笑んで返す銀。

ふと、銀は影を見た。

睨む目では無く、ただじつと銀を見つめている。

「・・・さ・・・。」

「え？なあに？」

くぐもつた声で発している影の声に、耳を傾ける銀。

・・・優しさに。

銀の耳にはそう聞こえた。

しかし。

続きまでは聞き取れなかった。

「・・・命を落とす輩も居る。」と。

さり気ない言葉（後書き）

今回は影のお話になります。

登場するたびひどい扱い受けてますが、いや好きですよ？盗賊系全員。

しかしアキラとたまが入るとコントに成る事が立証されました（全部じゃん

ちなみにたまとジクは同じ女好きですが・・・ゲフゲフ

続きはWEBで！（いや書きますけどね。）

それにしてもなんて遅い投稿・・・長期非投稿表示になってしまっ
（汗

追憶

シユウシユウ・・・

「え?!」

何か溶ける様な音。

それが、影を束縛していた植物に対してのものだと気づいた時には、遅かった。

影の両の手から発せられた毒の霧は、植物の細胞組織を破壊・消滅させる程のものだった。

あっという間にマンドラゴラは枯れ果て、その姿を保てず細かな粒子が宙を舞う。

そして、影の体が自由になった。

ほんの数秒の、出来事だった。

「そいつから離れて!!」

離れた所に居るぼちの声を合図に、銀とミリリに我に返った。

ザザッ

風のように影が動く。

影は、ミリリの足元にある自分の武器目掛けて床を駆ける。

銀はミリリを庇うようにミリリの前に。

「コール・・・わあ!!」

ホムンクルスを呼ぼうとした銀の目の前に、影は居た。

ドンッ

一気に間を詰めた勢いで銀を突き飛ばす。

「あう!!」

銀はそのままドサリと床に倒れこんだ。

「退け!!」

影は鋭く声を飛ばし上体を低くし、ミリリの足元にある武器に手を

伸ばす。

ヒュオンッ

その時、影の背後から風を切る音が聞こえた。

駆けつけて影の側まで来たぼちが振った剣の音である。

刃先が影の背中を狙う。

ギャリインッ

金属のぶつかり合う鈍い音が聞こえた。

「・・・つく！」

ぼちは厳しい表情で声を漏らした。

ぼちの剣と対峙したのは、暗殺者用の武器、カタール。

僅かな差で、影は武器を手にしていったのだ。

両の手に構えて交差させ、背後に迫ってたぼちの剣を振り向いて受け止めていた。

左右の手に装着出来るそれは、先読み難解な剣筋を可能にさせる事が出来る。

ぼちの剣を弾き、直後に左右別の動きを見せ斬りかかった。

ギインッガシユッ

ぼちは、胴を狙った刃は剣で防げたが、足までは防げなかった。

丈夫なブーツに傷が付く。

シユンッ

しかし怯む間も無く、影の左の武器がぼちの脇を狙う。

「！」

避けられない。

だからこそ、ぼちは行動に出た。

ギリッ

攻撃を防いだ剣に力を込め、一気に重力をかけたのだ。

それにより、影の体勢が崩れる。

脇を狙った刃先が、掠めるだけとなった。

ぼちはその勢いで剣を、影を武器ごと斬りつける。

ギャリインッ

「っはあ！」

火花が散るように、激しく鈍く、金属が擦れ合う音がした。

「そいつから離れて!!」

何かに気付いたぼちが、ミリリ達が居る方向に駆け寄り鋭く声を飛ばす。

その声に顔を上げ、ただならぬものを察したアキラ。

刃がぶつかり合う音も聞こえてきた。

「あんにやろつまた・・・！」

音の方向に目を向けると、ぼちが影を武器ごと斬りつける所だった。ギャリインッ

激しく鈍い音がする。

その場面を見てアキラは、一瞬目を奪われた。

凜々しくも勇敢に戦うぼちの姿に。

肩までの銀髪が、ぼちが動く度にサラサラと揺れる。

切れ長の眼が正面から影を捉え、一種の宝石のように輝いている。

キリッと整った顔立ちが、より強くアキラを惹き付ける。

攻撃を受けても怯む事無く、大胆且つ無駄の無い動き。

まるで剣舞を見ているかのように、観客として釘付けになっていた。

「ちよつとアキラ！縄まだ解けないの!？」

突然の声に、はっと我に返るアキラ。

声を掛けられてなかったら、ずっと観賞していたに違いない。

「あ、ああ悪い、もちつとだと思っただま。」

慌てて縄を手繰り、たまに巻きついていたので解いていく。

「いて！針が刺さつちまつたぜ・・・。」

「余計な畏仕掛けるからだよ！」

アキラにすかさずつつこむたま。

「うるせえな護身用だよ護身用！」

「護身もなにも、巻き付ける段階になつたらいらなんでしょう!」
「ギヤーギヤー言い合う二人。静かだったためしは無いのだが。」

そうこうしている内に、たまの全身に巻きついた縄が次第に緩んでいく。

「んしょっと・・・!」

上体を起こし、慎重に縄に手を掛けるたま。

たまが自力で抜けられるようになったのを確認するアキラ。

「よし、ぼちに加勢しに行くぞ!」

一言声をかけ立ち上がり、ぼちが居る方に足を向ける。

「ふう・・・ようやく緊縛プレイから解放されたよ・・・。」

若干の疲労（ツツコミのし過ぎによる）顔で立ち上がり縄を外していく。

「そういう趣味が・・・。」

「なワケ無いよ!アキラが縛ったんじゃない!」

「ま、まあ今は置いといてアッチだあっち!」

たまの正論をかわし（誤魔化し）アキラはぼち目掛けて駆け出す。

「あ、今の「なワケ無い」は「縄」と掛けたんじゃないからね?」

「あん?」

たまの言葉に、振り向かずアキラが聞き返す。

意味を理解するのに、1秒掛からなかった。

しかしそれでも遅かった。

ピキピキンッ

「あ。」

たまが間の抜けた声を出す。

アキラが寒いジョークで凍ってしまったのだ。

男暗殺者が味方に刃を向けている、この状況下で。

一瞬の間。

たまが口を開いた。

「・・・やっちゃった。」

（やっちゃったじゃねええええええええええ!）

力の限り、心の中で激しくつつこむアキラ。
心の声も虚しく、分厚い氷の内側で響くだけ。
しかし目の前の光景は見えていた。

影が素早く間合いを取ったかと思うと、突然教会の出入り口の扉へと足を向けた。

その手前には、鴉を看病している冥の姿があった。

「銀！と・・哺乳類を！」

ぼちは銀に、ホムンクルスの召喚を呼びかけた。
足はすでに影を追っている。

「う、うん！コールホムンクルス！」
ポンッ

銀の掛け声と共に、一体の青い小鳥が場に現れた。
丸い体より小さい羽でぱたぱたと宙を飛んでいる。

「わ！かわいい！」

「えへへ、銀のホムンクルスの「哺乳類」だよー。」
目を輝かせてホムンクルスを見るミリリに、「哺乳類」を紹介する
銀。

どう見ても鳥だが、そう名付けたかつたらしい。

「後にして！今はあいつを追わせて！」

ぼちの鋭い声が飛ぶ（当たり前だが）。
ヒュンッ

一瞬後ろに振り向いていた隙に、ナイフがぼち目掛けて飛んできた。

「！」
キンッ

咄嗟に剣を盾にして防ぐ。

再びぼちが影を見た時には、冥との距離が五メートルも無かった。
走りながら影は武器を構え狙いを定めた。

冥は一度襲われている。

二度目の可能性だって充分あり得るのだ。

人質にするかも知れないし、怪我を負わせるかも知れない。
最悪の場合も、あり得る。

冥一人なら逃げられたかも知れない。
が、冥の傍には鴉が横たわっている。

庇っても逃げても、被害者は必ず出てしまう。

冥は立ち上がって、鴉を庇うように前に出る。

そして正面から影が迫ってくるのを見ていた。

否、唱えながら見ていた。

風のように、羽のように体が軽くなり、行動速度を上げる祝福を。

・・・影に。

「冥?!」

驚きの声を上げるぼち。

ぼちに唱えて影に追いつかせると思っていただけに、その行動に目を疑った。

驚きもつかの間、銀の召喚したホムンクルスがぼちを追い抜いていた。

後三メートル。

バチコーンッ

冥が唱え終わるより先に、ホムンクルスが影に体当たりをかました。

「な?!」

突然の衝撃に、前につんのめる影。

「速度増加!」

ピシーンッ

直後、冥の風の祝福が影に掛けられる。

背後からの不意打ち、そして風の祝福により影と冥との距離が目前に迫った。

考える間も無く、影はその勢いで冥に武器を振り上げた。

無理な体勢かも知れないが、一撃を与えるには十分である。

その時、影は見た。

冥の表情を。

恐怖に震えた顔。

・・・ではなく。

強い意志を持った眼で、真っ直ぐに影を見つめていたのだ。その眼に気を取られ、何かを唱えているのには気付いていなかった。そして足元の存在にも。

パキ・・・ンッ

アキラを覆っていた氷がひび割れ、音を立てて砕けた。

「っは・・・この馬鹿たま！ギャグやってる場合じゃないだろ！」
体が自由になつて速攻つつこむアキラ。

「あ！アキラ！あの男が居ないよ?!」

「ごまかすんじゃねえ!・・・って、本当に居ねえや。」
たまが話題を変えようとしたのかと思つたら、そうではないらしい。冥が床に座り込み、ぽちが駆け寄り側に行く。

続いて銀とミリリも駆け寄る。

ホムンクルスはなぜか床を突付いていた。

アキラは氷漬けになりながらも、影が冥に襲い掛かるまでの一部始終を見ていた。

でも、影が逃げ出したわけでもなく、消えた。

冥の目の前で。

真相と冥達の安否を確かめるべく、アキラ達も冥の元へ向かった。

サア・・・

小雨が落ち着き、湿気を帯びた生暖かい風が吹いている。

当然だが教会の外、少し離れた森の入り口にも吹く。

「クエ」

に、何とも呑気な声で鳴く生き物が居た。

大きく色鮮やかな羽を羽ばたかせ、飛ぶ代わりにトトトテと歩く鳥。ぽちが移動用に飼い馴らしているペコペコ、彩である。

エサが・・・もとい、猿がジクの元に行き、彩は新たなエサを求めて教会へ。

立ち寄ると、冥が用意していたエサに有り付く事が出来るのを覚えていたからだ。

「クエ」

トテトテと歩いて教会が見える位置まで来ると、ピタリと立ち止まった。

羽を一度大きく広げ、ゆっくりと閉じていく。

エサを感知した、ある種の喜びの行動である。

猿を見つけた時にもやった動き。

感知した本能は、視線を教会に向けた。

否。

その手前の空間に向けていた。

シュンッ

気配と共に現れた男。

「クエー！」

彩は喜びのあまり、羽をもう一度大きく広げて見せた。

グイッ

「くそ・・・あの女ワープポータ・・・ぬお?!」

男の服をくちばしで挟み、そのままヒョイと持ち上げ背中に乗せた。

「お、おい！降ろせ！俺はや・・・！」

トテテテッ

軽やかな足取りで走り出す彩。

男の声も虚しく、彩は先ほどまで居た四人とエサ一匹(?)の元へ向かうのだった。

新たなエサを手に入れた喜びの報告である。

ずっと、忘れられない記憶がある。

ガキの俺は屋敷に居て、屋敷の外が騒がしかった。親父と一緒に外に出てみると、屋敷の先にはモンスターの群れが居た。

どんなモンスターが居たかは大して憶えていない。

そしてその後どうなったかも。

でもその間の出来事は、色鮮やかに再生出来る。

ガアア・・・

モンスター達の雄たけびともとれる声が周囲に広がる。すぐに危険と思った。

「親父！プロンテラ騎士団に討伐の・・・。」
依頼を要請しようと。

振り向いて後ろに居る親父に声を掛けた。

だが俺は最後まで言えずに、言葉を失った。

目の前の光景は、まさに「狩りの瞬間」だった。

ザムッ

肉を断ち切るような鈍い音。

驚愕の表情の親父。

親父の眼は、飛び出すくらいに大きく開かれていた。

その背後から、赤く噴水のように細かく、大きく広がる液体が宙を舞う。

俺に向けた親父の手は、俺に届く事は無かった。

ドシャッ

親父の大きな体と共に、地面に崩れた。

そして、動かなくなった。

俺は咄嗟に、親父の背後に視線を移した。

その背後に、「奴」が居た。
モンスターでは、無かった。

銀髪の、一人の女。

左腕がごっそり無かった。

銀髪の女が、表情を変えずに倒れた親父を見ていた。
噴水のように宙に舞った赤い液体が、正面から浴びるように付いていた。

右手に装着してる武器からは、やはり同じ色の液体が付いていた。

銀と、赤。

左腕の無い女と、動かない親父。

悪夢を物語る色彩が、脳裏に焼きつく。

「……。」

……スウ

親父が事切れたのを確認した女は、姿を消した。
まるで初めから其処に居なかったように。

オオ……ン

キシヤア……

周囲からモンスターの声が聞こえてくる。

近づいているのか。

或いは遠ざかっているのか。

「狩りの瞬間」を見た俺には判らなかった。

声も出さず身動きも取れず。

親父の背中から湧き出る血を最後に、意識が遠のいた。
叫びとも取れるその響きを聞きながら……。

追憶（後書き）

えー・・・前後しまくりはご了承くださいorz
影ですか？弱くないですよ弄られ易いだけで（あ

理解

雨が落ち着き、薄暗い曇り空が広がるミッドガル大陸。
サア……

湿った空気を含んだ風が吹く。

町外れの教会から少し離れた森の入り口にも、勿論吹く。

その場に居たのは四人＋一匹（本人、もとい本猿は匹扱いと
思っていない）。

一人、緑の短髪の修行僧モンクダクツが不意に顔を上げた。

目隠しをした顔がある方向へと向け、気配を探るように動きを止める。

「おい……まだ話の途中だろうが。」

一人、黒い短髪の鍛冶屋匠ブラックスミスが軽く奇立ち、ダクツへと向けた。

一人、肩までの銀髪の女。通り名「片腕の悪魔」黄泉はただじっと
していた。

「……………」

否。

ダクツの探る気配の方向へとゆっくり顔を向けた。

話の途中、それは紛れも無く自分の事だと知った上で。

そして気配の対象が、自分に関わっていると知った上で。

「どうしたさ？アンタ……ん？」

一人、紫の短髪の追跡者チェイサージクは、黄泉を口説き中に気配に気付いた。

「……何だありゃ？」

同時に匠も気配に気付いた。

（あの方向は……教会か。ペコペコだけにしちゃあ……。）

「ウキ？（おや？あの疾走音は彩殿。しかし重そうなのっ？）」

何気に匠と＋一匹の意見が一致した。

……事には誰も気が付かないであろう。思考だし、人語じゃない
し。

むしろ匠が気付いたらそれはショックだろう。

猿なんかと意見が合った事への。

それはもう八つ当たりとしてジクやアキラに矛先が向けられるだろう。

今の内に棺おけを用意しなければいけないくらいに。

それはさておき。

・・・ドドドドッ

謎の気配が、確実に迫ってくる。

「・・・影。」

ぽつりとダクツが呟いた。

「あ?」

「影?・・・ああ、そついや影の扱つ毒の匂いがするや。」

ダクツの声に匠が聞き返し、ジクが納得したように頷いている。

影?と、匠がジクに言おうと口を開きかけたその時。

「・・・まれ!止まらないか!」

「クエー!」

匠達の居る場に向かってくる気配から、声がした。

遠くから来るその物体が近づくとつれ、輪郭や存在が明らかになつていく。

それは紛れも無く一匹のペコペコ、彩と一人の暗殺者、影だった。

エサ(もとい影)が彩の背中ではじくとせず(当然だが)抵抗を試みる。

その勢いに負けぬ様に、軽やかな走りから重量の利いた力強い走りを見せている彩。

その姿が、匠達の所まで来てピタリと止まった。

「とま・・・うお?!」

急に動きを止めた彩がエサ(以下略)を振り落とす。

不意をつかれ、現状把握が出来ないまま地面へと落下する影。

ドサッ

素早く受身を取り、怪我も無く済んだ様子。

(こいつが・・・影か?)

突如登場してきた影の存在を訝しげに見る匠。
数時間前に、自分が三メートル近く蹴り飛ばした相手の事をすっかり忘れている。

「クエー」

彩が猿に向き直り、満足げな声を出す。

「ウキ? (おお、そうかそうか。しかしワシには食べ物が女子をじやな?)」

「影っち! アンタ何やって・・・。」

二匹のやり取りを他所に、突如現れた影に声を掛けるジク。

そりゃ重傷で教会で休んでいるはずの知人が、何の前触れも無くここに現れたのだから当然である。

しかしジクの言葉を、影が遮った。

同時に、別なもう一人が動いた。

「・・・「片腕の悪魔」!!」

その声を合図に、二人の人物が動き出した。

影と、黄泉。

ザザッ

ジクの側に居た黄泉は後方に飛び、体は影に向けたまま距離を置く。

影は逆に前方へ飛び、距離を縮めて黄泉を狙う。

ヒュオンッ

影の武器の刃が黄泉を襲う。

しかし、その刃は届かなかった。

ギイインッ

刃と刃がぶつかり、金属音が周囲に響く。

「・・・邪魔するな!」

影は相手にその言葉を向けた。

「俺の・・・ジク様の獲物だっつたじゃんかよ。」

その相手、ジクは笑みの無い表情を影に見せていた。
直後。

ガンッ

ジクは短剣で影の攻撃を遮りつつも、足で影を素早く蹴り上げた。
トリッキーな動きは、ジクはお手の物である。

ドムッ

「ぐあ……！」

脛を蹴られ、直後腹部にも衝撃をつけた影が顔を歪め、呻き声を上げる。

地面に膝をつき、それでも武器を持つ手を緩めない影。

「ど……け……！」

苦痛に歪みながら、ジクを睨み、その先に居る黄泉に視線を向ける。
その様子を見てジクは舌打ちをする。

「うつせえよ。」

ヒュンッ

一言呟き、手持ちの短剣を両手に構え、影に向けて振り下ろす。

ガシッ

「へ！？」

振り下ろしたその腕を、止められた。
反射的にジクはその相手を見た。

「どういう……つもりだ！」

影の鋭い声が周囲に響く。

濡れた地面に膝を付き、ジクの攻撃を避けられずに居た現状。
それが自分の予想に反して、防がれた。

しかも、自分が命を狙っていた標的によって。

ジクと並ぶように、黄泉は左側に居た。

ブウンッ

右手でジクの短剣を持つ手ごと掴み、地面に叩きつけるように振り下ろす。

「おわ!?!」

ジクはその勢いで上体が前のめりになりバランスを崩す。

黄泉は掴んだ手を離し、その手で素早くジクの背中に一撃を与える。そのまま地面に叩きつける。

・・・はずだった。

背中の一撃がジクの踏ん張った足のバネになり、瞬時に後ろに下がって構えなおさせてしまった。

「ひゅう! あつぶない危ない!」

短剣を前に構え、あつという間に攻撃態勢になったジク。

その表情は、楽しい玩具を目の前にした子供の様。

声も、言葉と裏腹に楽しくてたまらない響きがある。

しかし。

その眼はギラついており、今にも飛び掛かってきそうな雰囲気を出している。

まるで飢えた野生の獣。

待ちに待った御馳走である獲物を目の前にした時の様でもある。

「・・・あんだよ?」

不意に、ジクの声が不機嫌なものに変わった。

構えていた短剣を下ろし、目の前の人物に視線を向けた。

「ジク、ここは引いて下さい。」

ジクの目の前に立ち塞がった一人の男。

目隠しの修行僧、ダクツである。

黄泉への視界を遮られ、その不愉快さを相手に向けた。

「は? バカじゃねえのアンタ。」

嫌悪感たつぷりに返事をするジク。

「任務なんてどうでもいいんさ、俺の邪魔すんな!」

ギロリと睨みを利かせ、ダクツに言い放つ。

ザッ

地を蹴る音が聞こえ、ジクが反射的にそつちを見た。

森の奥を目指し、駆ける黄泉の後姿が見えた。

「さて!!」

その後を追うように影が立ち上がり後を追う。

「おい俺が・・・!」

ガシッ

後に続こうとジクが足を進めたその正面から、ダクツはジクの両肩を?んだ。

「お願い・・・お願いですから行かせてやって下さい・・・!」

目隠しの奥から真剣な眼差しが感じられる程、その声には悲痛な力強さがあつた。

数分前まで冷淡に、ジクを軽蔑する様にしていたのが嘘のよう。そう、懇願しているのだ。

「!・・・っは・・・」

突然ダクツの体が、妙な呻きと共に体が硬直したような動きを見せた。

同時にジクの肩を掴んでいた手と体の力が抜け、ズルズルと手が降りる。

ダクツの膝が地面につく前に、ジクはダクツの腹部を蹴り飛ばした。

ドグンッ

鈍い音とともに、ダクツは後方へよろけ地面へとうずくまった。

腹部を押さえ、足を踏ん張り立ち上がる。

歯を食いしばり痛みを堪え、それでもジクを見るのを止めなかった。

押さえた腹部からは、なぜか血が流れていた。

ジクは、反撃をしないダクツの側に行った。

近寄ると、ダクツの顔目掛けて素早く片手で短剣を振った。

「っ!」

パシッ

ダクツは腹部を押さえた手で、反射的に短剣の柄をジクの手ごと押さえた。

弱弱しく防御した手は、真っ赤に染まっていた。

それと同じ色が、ジクの短剣の先にも付着していた。

ジクは、ダクツが攻撃を防いだその手を、自分の空いている片手で掴んだ。

動かないように。

ドゴンッ

手を引きダクツの体を寄せ、がら空きになった腹部の、血の流れる箇所を再び蹴り飛ばした。

「・・・っ!!」

声にならないような音を発し、ダクツは膝をついた。

手を離し、短剣を握り締め直したジク。

濡れた地面に混ざるダクツの血を見ながら、ジクは見下した。

「邪魔すんな、って言ったじゃん。」

そう言い放つて、血の付着した短剣を振り下ろした。

ジクの誤算は、ただ一人。

きれいさっぱり忘れていた人物が居た事。

ドゴゴオオ・・・ン

「うえ?!」

「っぐ!!」

突然の地響き。そして揺れ。

激しい音と共に、二人の足元がぐらつく。

短剣を振り下ろしたジク、濡れた地面に膝をついていたダクツ。

「シカトし過ぎじゃねえか?ジクよお?」

地面に叩きつけた大型の斧を、声と共にゆっくり両手で持ち上げる男。

そしてサングラス越しにジクを睨み付けた。

「や!た、匠の事放置したわけじゃあなくてだな!」

間を置いてようやく地面にしっかりと足を着けたジクが、慌てて手を

横に振る。

ついさっきの、無慈悲且つ容赦無い攻撃はどこへやら。まるで悪戯が見つかった子供の様に、言い訳をしている。

「……。」

ジクの弁明を無視し、匠は無言でクルリと体の向きを変えた。そしてペコペコの彩が影を連れて来た方向へと歩き始めた。

「……つて、あれ？」

ジクはその行動にポカンと口を開け、匠の後姿を見た。怒り狂った匠は恐ろしい。

その事を十二分に見てきたからこそ、何もせずにその場を去るのが不思議だったのだ。

「四人。さっきの教会。」

数メートル離れた所で、匠は呟いた。

何の数字かを考える間も無く、ジクは我に返り匠に呼びかけた。

「え？マジで？まだ会って無い子居るのか！」

「来るかよ？」

「行くにきまつてんじゃん！よし行こう行こう！」

調子よく答えるジクの声を聞きながら、匠は苦笑いを浮かべた。

人数と場所だけを伝える場合、この二人の中では総女性数を表している。

ジクが察したのは、黄泉がそこに居ないはずなのに人数が変わっていない事。

つまり、もう一人の存在の確認をしに行こう。ということである。

はしゃいでいるジクを尻目に、匠は木陰に居る生き物に声を掛けた。先ほどの緊迫した状況から距離を置き、コソコソと隠れていた彩と猿である。

「おい、コイツをあのモンクに渡せ。こいつぁ駄賃だ。」

そう言っただけ匠はカートから一つの包みを取り出し、バナナを一房ちらつかせた。

「ウキー！（おお、それはまさしく砂漠の都市、モロクのバナナ！）キラリと目を輝かせ、猿は木陰から姿を現してトコトコと匠の足元にやってきた。」

「ウキー！（ほほ、この色。艶。香り。どれをとつても言うこと無しじゃ！）」

「いいからとつと行け。その後思う存分食えや。」

匠に言われ、猿は包みとバナナを手にし、まだ隠れている彩に乗り込み歩かせた。

「クエー」

「ウキキ（まあそう言うな。彩殿の分もあるからの。）」

匠はそんな二匹のやり取りを目で追い、ダクツに向かうのを見届けながら歩き出した。

そしてはしゃいでいるジクと共に教会へと向かった。

「・・・と、言うわけさ！」

ジクが教会の椅子に座り、目の前に居る相手に得意げに語っている。その向かいの椅子に居るのは、赤い短髪のお馴染み（？）アキラ。

「えつと・・・つまり。」

軽く咳き込み、困った表情で続けるアキラ。

「トドメを庇った女に止められ、その場を去られやるせなくて此処に来た・・・と。」

「違いよ！良い女が勢揃いつて聞いて匠に付いて来たんだ！」

力説するジクを見てふう、と溜息を付くアキラ。

そのアキラの後ろから、二人の視線を感じる。

「凄く、まだ、かなり、アキラさんとたまさん（大分オマケ）の傍が安全ですね。」

「カツコ内もちゃんと聞こえてるよ！何その扱いの下っ端さは！」

アキラの後ろの椅子で、青色ペアが言い合っていた。

水色の短髪の女聖職者冥。

青い長髪の吟遊詩人たま。

二人のやり取りにはあ、と溜息を付くアキラ。

(落ち着ける人間関係が欲しい……。)

ギコギコと椅子を傾けながら、半ば祈りつつ思いを募らせる。

「何だよアキラ？溜息ばっか付いてさ。」

いつの間にかアキラの目の前に居たジクが、正面からアキラの顔を覗き込む。

「どわ?!」

ガタガタツツガコンツ

いきなり目の前に顔があつた驚きで、傾けて座っていた椅子を倒してしまふアキラ。

しかし本日二回目の状況なので素早く反応し立ち上がり、倒れたのは椅子だけで済んだ。

「んなびつくりするなよーちよつと覗いただけじゃんか。」

そう言つてジクは無邪気に顔を緩ませた。

ここだけ見ると、単に悪戯好きの少年のようである。

アキラは倒れた椅子を起こし、座りなおした。

「で？アキラ、そっちの可愛い子は誰なん？」

やはりというか、ジクはアキラの後ろに居る冥に目をつけた。

声を潜めるでもなく、冥に顔を向けてアキラに訊いている。

「ギルドメンバーっす。手え出しちゃだめっすよ？」

真顔で言つアキラの肩をパシパシ叩きながら、ジクは無邪気に笑っている。

「……返事が欲しいっす。」

溜息混じりにアキラは突っ込みを入れるのであつた。

「自己紹介しないで人の事聞き出すの、失礼じゃないかなあ。」

後ろの席に居るたまが、アキラ達の様子を不機嫌そうに見ている。

例えば、お気に入りの玩具が、嫌いな人間が目の前で自分の代わりに手にしている。

しかもこつちの事はお構い無しに楽しそうにしている。それは、玩具が人に代わった所で、より感じる喪失感。やるせ無さ、苛立ち、不安。

色々な負の要素がたまの中を駆け巡る。

アキラのような、遠慮のいらぬ関係である友人が少ない分、余計にである。

「たまさん、仮にもアキラさんの先輩、匠さんの御友人ですよ？」

その隣に居る冥が、たまの言葉を制する。

「大人しくするべきです。」

「うー・・・そうだけども・・・って。」

冥の正論に渋々納得しつつ、ふと思った事を口にするたま。

「あれ？冥はあの人の事知ってたっけ？」

「銀さんが少しお話して下さいました。」

「そっかぁ・・・。んと、冥を襲ったあいつを連れて来たのも・・・？」

「はい。」

「・・・不安とかは、無いの？」

冥の表情を読み取るうと、こっそり横目で観察する。

「不安・・・ですか。」

たまの言葉をゆっくりと繰り返す冥。

伏し目がちに俯き、そして結論に達したように顔をたまに向けた。

「・・・そうですね・・・。」

「やっぱり、不安だよな？」

「いえまったく。」

「無いの!?!？」

「はい。」

強情を張っているワケでも無く、首を振りごく当たり前のように言っただけだ。

冥のさりりとした返答にすかさずツツコミを入れるたま。

「信じて下さいな。」

少しの沈黙の後、冥が呟くように、しかしはつきりと言った。
何で？と聞く前に言われてしまい、返答に困るたま。

「え？う、うん・・・冥が言っただから間違いないと思うけど・・・」

冥の言葉にしどろもどろに返事をする。

その返事を聞いて、冥はくすくすと笑った。

「ほ、ホントだって！冥の言葉信じるってば！」

「やっぱり・・・違いますよ、たまさん。」

誤解されないようにと強い口調で返すたまに、やはりくすくすと笑っている。

「う？」

きよとんとして冥を見るたまに、言葉が続けた。

「自分自身が大事に思っているものが、信じさせてくれる事を。です。」

カタンツ

冥は椅子から立ち上がった。

「冥？」

「それでも不安なら、その不安の側に行くことです。」
そう言っただけ冥はアキラと話しているジクの側へと向かった。

「・・・これは？」

ジクにやられた傷を抑え、回復に専念しているダクツ。

あまり地面が濡れていない木陰に移動し、気を集中させる。

そこに、包みを持った猿たちがやってきたのだ。

目の前に差し出された包みを受け取り、中身を取り出す。

「イグドラシルの・・・実？」

そこにあるのは、紛れも無く生命の木の実。

一部千切れており、千切ってからあまり時間が経っていない断面だと、触れて気付いた。

もし当人が使った後なら、他を気にすることも無く、かぶりついた跡があるはず。

誰かに食べさせた残りだろうか？

例えば、自らで手にとって口に運べない重体の人物に？

そんな人物を、ここ数時間以内に三人、心当たりがある。

内二人は、ジクと女教授。

ジクは猛毒を喰らったのであり、この実では治らない。

女教授は治療を受けて、今じゃぶつぶつ言いながらも元気である。

・・・まさか。

ダクツは少し考え、少し千切って口にした。

噛むごとに甘酸っぱい高貴な果汁と香りが口に広がり、喉を過ぎていく。

その刺激が脳に信号を与え、全身に指令が行き渡る。

痛みが、癒しへ指令が変更されたら脳が認識すると、体が楽になった。

腹部の刺し傷の血がピタリと止み、蹴られて動けなくなる程の痛みも和らいだ。

成る程。

「奴」が「あの後」から数時間程度で支障無く動けた理由はこれか。ダクツは納得したと同時に、匠がこれをくれて寄こしたのだろうと理解していた。

ハンマーウォール。

あの時の地響きは、匠がダクツの危機を察しての行動だと、ダクツは感じていた。

怒り任せでやると、響きも、地面に叩き付けた音もまた違う。

目隠ししている分、他の感覚がより発達する事で感じた情報である。

匠は、黄泉に深手を負わせた相手がわかっていた。

その傷を治したのが、この千切れたイグドラシルの実。

その実を寄こした事で、黄泉を助けたという意味を持つ。

同時に、ダクツの考えの味方という意味合いも入っている。

とつとと治して、黄泉と影を追え。というメッセージである。

「匠・・・感謝します。」

ダクツは一言呟き、残りの実を包みに戻し、立ち上がった。

そして、黄泉と影が消えた森の奥へと足早に向かった。

理解（後書き）

意識したわけではないのですが、ジクって足での攻撃多いんですね
（あ）

次回は黄泉と影のお話を予定しています。

真実

深い緑が生い茂る森の奥。

雨が止み、湿気を多く含んでいるその場所。

むせ返るような緑と大地の香りが立ち込めている。

そしてただ静寂だけがその森に存在していた。

ある瞬間までは。

ザザッ

静寂を破ったのは、二人の存在。

道と言えぬ道を、草木の間を駆け抜ける。

雨の後では地面がぬかるんでおり、足を取られる危険性が高い。

草木が茂る所であれば、地面に直接雨がかからずぬかるみも少ない。そして滑り止めの役目もある。

しかし安全であると同時に、視界が狭く行く手を阻み、進行を困難にさせる。

黄泉は、体に当る草木や枝などお構いなく、森を駆けた。

十数メートル離れて、後方に影が迫っている。

道と言えぬ道を通る場合、誰かが通った後の方が幾分足場も出来ている。

つまり、追われる側が実は不利になるはずである。

それでも、黄泉はその距離を縮められることは無かった。

黄泉が、目指す場所が明確に理解出来ていたからこそ、躊躇わずに足を進められた。

突如視界が開け、その場所へと辿りついた。

地面が大きくえぐれており、どす黒い模様が広範囲に付いている。

多少開けた場所であっても、木々が生い茂ったこの空間にはあまり

雨も届かない。

数時間前ここで起きた戦いの跡が、そのまま流れずに残っていた。素早く周囲を見回し、黄泉はある一点に目を向けた。うつすら雨に濡れ、輝きを増すそれ。

数メートル先にあり、普通に歩いてもすぐ手にする事が出来る。焦らずとも、手に入る。

しかし、黄泉はそれすら許されなかった。

ヒュンッ

進むより速く、後方からナイフが飛んでくる。

それも三本。

黄泉は素早く振り向き、手を伸ばした。

時間差は多少あるものの、同時に迫ってくる速度に見える。

常人の目には、である。

パシッ ギギンッ

一番近くに迫ったナイフをキャッチし、二番目三番目のナイフを払い落とす。

そして手に持ったナイフを飛んできた方向へと瞬時に狙い返した。

素早く前方に向き直り、目当ての物に向かって駆ける。

キインッ

後方からナイフを弾く金属音と地面に落ちる音、それと舌打ちが聞こえた。

黄泉は身を屈め、目当ての物に手を伸ばす。

「グリムトウース！」

ドシユドシユッ

突如、黄泉の足元から現れた地面からの鋭い突起。

とっさに手を引き後方に下がり、紙一重でそれを避ける。

しかし体勢を立て直す間も無く、真後ろに剣を振る気配を感じた。

それと同時に右腕を胸元の構える。

ザアンッ

構えた腕を水平に、素早く体を捻りつつ風を切る。

ドシュッ

腕の動きを追いかけるように衝撃波が発された。

「っぐ！」

鈍い呻き声が聞こえ、声の主は黄泉からわずかに距離を置いた。

その隙に黄泉は手を伸ばしてそれを取る。

手に取る直前、黄泉は自分の手の平を見た。

シユウ・・・

軽く、火傷を負ったように皮膚がただれていた。

影のナイフを、攻撃を返す際に触れた箇所だけ。

「っはあ！」

ヒュオンッ

背後から再び剣を振る気配。

風を切る音が、黄泉の背中に迫る。

ガギインッ

「くそ！」

がら空きの背中を狙った影の、両の手に構えたカタールが防がれた。同種の、少し形の違うもので。

黄泉の手には、目当ての物が装備されていた。

暗殺者用の武器、そして片腕の黄泉用に改良されたカタールである。数時間前にここで起きた戦いの際、武器を手放したまま気を失った。

そして誰にも気付かれず、この場に置かれていたのだった。

ギヤリインッ

武器を捻りながら垂直に武器を振り、影の両の手で襲い掛かった刃を払う。

その一振りで、難なく影の攻撃を止め、後退させた。

力の差は明らか。

しかし黄泉は気になっていた。

武器を握った手の平を。

「・・・貴様用だ、その反応は。」

距離を置き、武器を構えなおした影が口を開いた。

「普通の人間には、血が止まらず気を失うだけだ。」

黄泉が手を気にしている様子を見ながら、話を続ける影。

「だが俺が付着させた毒は、特殊な毒に反応する物……。」

「……。」

「毒を含んだその体には化学反応を起こし、麻痺や細胞組織を破壊させる。」

上体を低くし武器を目の前に交差させ、攻撃態勢をとる。

黄泉もそれに続き攻撃態勢をとった。

しばしの沈黙、静寂。

「ようやく見つけた……親父の仇……。」

静寂を破り、低く唸る様に呟き、そして続けた。

「今、此处に!!」

その言葉を合図に、二人が動き出した。

ザザッ

影が黄泉との距離を一気に縮め、交差させた武器で狙いを定める。

「インベナム！」

ジャリンッ

両の手に構えた武器の刃同士を摩擦させ、黄泉の首元へ。

ギギヤリンッ

黄泉は右腕を振り、その武器は弧を描くように動き、影の攻撃を払った。

……ように思えたが。

黄泉の首元が火傷していた。

影の武器の動きにそって小さなバツ印のただれが出来ていたのだ。

刃には直接触れていないにもかかわらず。

ザザッ

両者距離を置く。

「……。」

黄泉は首元を気にしつつ、影から目を離さずに居る。

影は武器を下ろし、柄を握り直した。

「エンチャントポイズン！」

低く呟くと同時に、武器に透明な液体が伝い、刃先に流れ落ちる。

ヒュオンツ

武器を一振りし、駆けて黄泉との距離を縮めた。

そして両の手に構えた武器を大きく振った。

「ソニックブロー！」

上下左右、斜めからの連続攻撃。

不規則な動き、素早い攻撃。

常人には決して避けられない、先読み不可能の暗殺者の技である。

ガガンツ

しかし黄泉は初めの一撃を真つ向から防いだ。

同じ技で。

ガギギギンツ

あらゆる角度からの攻撃を、すべて防いだ。

ギャリインツ

最後の一撃は力で押し切り、影の片方の武器を弾き飛ばした。

その勢いで後退する影。

「・・・ぐう！」

影は呻き声をあげ、カランツと音を立て地面に落ちた武器を目で追った。

ザザツ

黄泉はその隙に影との距離を縮め、武器を構えた。

そして影に狙いを定め・・・。

「・・・。」

影の様子を見た黄泉は、なぜか急に構えを解いた。

そして素早く距離を置く。

その間に影は落ちた武器を手にし、構え直した。

黄泉の体は、点点と火傷の痕が付いていた。

影の攻撃。刃こそは当たっていないが、毒の液が体に付着していたのだ。

刃同士が衝突する、その衝撃によるものである。

「……どういうつもりだ？」

怪訝そうに黄泉を見る影。

「……。」

黄泉は影をただ見つめていた。

否、口の動きを読んでいた。

発している言葉と、別な言葉がある事に気付いたのだ。

そして気配も違うものを瞬間的に感じた黄泉。

武器を弾き飛ばされた影が、武器を目で追った後の様子。

影はなぜか驚いた表情をしていた。

そして今も舌打ちをし、意識が違う方へと向いているようだ。

「貴様は……なんだ？」

答えもせずにいる黄泉に、再び声をかける影。

「なぜ斬らない？隙が今あっただろう？」

「……。」

変わらず黄泉は影の口の動きを見ていた。

「ダメレ」

微かに動く口から、その言葉が読み取れた。

「情けか？隙を見せた俺に？」

「……。」

「そのはずは無い……貴様は俺の親父を背後から斬り付けた。」

「キサマニハカンケイナイ」

首を振り、影は続けた。

「理由無く、な。」

「……。」

「真相を知る為暗殺者ギルドに入ったが、そんな指令は無かったと言っ事だ。」

「ダカラドウシタ」

「貴様は、無意味に親父を・・・殺したんだ！」

「モウカカワルナ」

ジャリッ

砂混じりの地面を強く踏みしめ、影が動いた。

両手に構えた武器で左右別の動きを見せ、黄泉に向かってくる。

黄泉は武器を胸元に構えた。

そして影の表情を見た。

殺意に満ちていた。

・・・はずだった。

深い緑が生い茂る森の奥。

道と言えぬ道を、草木の間を駆け抜ける一人の修行僧。

「影、聞こえますか？・・・影！」

伸びた枝が体に当たりつつも、囁きで声をかけるダクツ。
ウイスパー

「影！」

「・・・邪魔をするな、奴と一戦交えている所だ。」

少し間を置いて、相手からの返事があった。

「奴と戦うのは間違いです、影！」

「仇が目の前に居る、何が間違いだと言うのだ？」

ダクツの言葉を遮り、鋭く言葉を向ける影。

「奴は貴方の、殺意に反応するんです！」

「だからどうした？俺はこの時を待っていた。」

「敵意や殺意、そういったものに対する行動を・・・。」

「だまれ。」

「影！とにかく戦いを止めて下さい！」

「貴様には関係ない！」

「もう一度言います、奴は敵意や殺意に反応するんです！」

「もう一度言う、だからどうした？もう関わるな！」

「言ってる意味・・・判りませんか？！」

「貴様の行動が判らない。」

「ほん・・・。」

ダクツの伝えかけた言葉が、遮断された。

テレパシー 思念伝達に似ているが、違う。

ウィスパー

囁きは、送られる側が思念を意識的に遮断出来る。

ダクツは唇を噛み締め、駆ける足を速めた。

「させない・・・殺しなんて！」

誰ともなく呟き、森の奥、遠くに感じる二人の気配を追う。

この先は・・・数時間前に「奴」が暴走した場所？

気配が近づく。

同時に殺気も伝わってくる。

影のものとすぐに判った。

ではなぜ？

なぜもう一つの気配は何もしない？

ダクツの疑問が解決する前に、辿り着いた。

数時間前に死闘を繰り広げた場所。

そして二人の暗殺者がいる場所に。

影が、武器を振り上げる瞬間だった。

不愉快だ。

俺はダクツの「囁き」を断ち切り、目の前に居る「片腕の悪魔」を
改めて見る。

火傷を負った様なただれが所々にある。

しかし俺の武器による切傷は一切無い。

この毒以外では、奴に攻撃を当てる事すら叶わないらしい。

そのくせ、奴は攻めてこない。

弱者に振るう手間も惜しむのだろうか？

ふざけた奴だ。

俺は武器を構えた。

奴は、残虐非道の暗殺者だ。

暗殺者は、指令や依頼以外での殺しは一切しない。

それが、闇の世界で生き抜く為の「仕事」であり「使命」だ。

それなのに奴は、任務以外で親父を斬った。

背後から一振り・・・それが親父の命を奪った。

表情も変えず、何も言わず。

俺は深く息を吸い込んだ。

森林や地面の湿った匂いなど、今の俺には必要無い。

奴に休みを与えずに攻撃し続ける為の一呼吸だ。

砂利混じりの地面を強く踏みしめ、奴へと駆けた。

殺意を全面に出しながら。

不意に、ダクツの「囁き」が脳内で再生される。

「奴は貴方の、殺意に反応するんです！」

そう、そうでなくては倒し甲斐が無いからな。

ドクン・・・

気持ちが騒ぐ。

俺は殺意を消さない。

仇をとるまでは。

親父は、無防備の所を襲われたんだ。

ドクン・・・

気持ちが、また騒ぐ。

何だ一体？

俺は、奴を恐れているのか？

親父の二の舞になるのではないか、と？

・・・違う、それではない。

ドクン・・・ドクン・・・

謎の胸騒ぎを他所に、奴は目の前に居た。

俺から近づいたのだから、当然と言えば当然だが。

俺は武器を、左右で違う動きにし、斬りにかかった。

その時、再びダクツの「囁き」が脳内で再生された。

「もう一度言います、奴は敵意や殺意に反応するんです!」

「言ってる意味・・・判りませんか?!」

ドクン・・・ッ

一際大きく鼓動が鳴る。

どう言う事だ?

ダクツは最後・・・何と言った?

「ほん・・・。」

ドクン・・・ッ

何と・・・言いかけたんだ?

(ほんとうに?)

違う・・・そうではない・・・。

ドクン・・・ッ

違う・・・違う!

あの感じは・・・ニュアンスは・・・。

「本当は、判ってるんじゃないですか?」

ドクンッ

馬鹿な、充分理解している。

奴が敵意や殺意に反応する事を。

だから、俺が攻撃する度に奴は行動を起こしている。

身を持って、体感している。

ドクンッ

打楽器のように、不安が鼓動を叩きつける。

なら・・・ならば・・・。

俺はその時、一つの疑問が浮かんだ。

あつてはならない、疑問だった。

信じ難い、だがそれで納得できる、疑問だった。

無意識に閉ざしていた、疑問だった。

あの時、「奴」は反応したんじゃないのか？

「親父の殺意」に……。

そしてその殺意の目の前に居たのは……。

「影……！！！」

背後から聞こえる声。

きつと俺を止めようとする声なのだろう。

しかし、遅かった。

俺を止めるのも。

俺がそれに気付くのも。

そして真実に気付くのも。

……「奴」が、俺の攻撃を避けるのも。

すべて……遅かった。

何故？

目の前の影は、そう言いたげな表情だった。

黄泉はその視線ごと受け止めていた。

両の手に構えたカッターを振り下ろし、左右違う動きでの影の攻撃を。

左肩から胸元にかけての袈裟斬りに、右腕への一文字斬り。

皮膚を刻む刃物の感触。

直後に神経や肉が悲鳴を上げ、血管を裂き、赤い液体が噴水の如くほとばしる。

噴出す血の先に見えた影の表情。

「あの時」と、まったく同じだった。

深い緑が生い茂る森の奥。

・・・から、トコトコと歩く一匹のペコペコ、彩。

「ムキヤ！（ふうむ、この香りに齒触り。絡みつく甘さは官能的だのう！）」

彩の大きな翼を持つ背中に乗ってバナナを頬張っている猿。

ジクの相棒（女好き仲間）のサル太さん。

しかし「サル太」なのか「サル太さん」までが名前なのかは、ジク以外知らない。

ジク以外は呼ばないのだからやはり猿と表記する。

「クエー」

「ムキキ（おお、すまんすまん。ほれ彩殿の分じゃ）」

猿は一房のバナナから一本もぎ取ると、皮を剥いて背中越しに彩に食べさせた。

「クエー！」

大きな翼をバタバタと羽ばたかせ、喜びを表した。

「ムキー（そうかそうか、彩殿にも美味であったか）」

それを見た猿もなにやら満足げである。

「ムキヤキヤ？（しかし、彩殿はずっと放浪しておるが、主は心配せんのか？）」

「クエツクエー」

「ムキヤ（おお、そうであったか。すまんのう）」

「クエー」

「ムキー（不思議に思っとなんじゃよ）」

クエーだのムキーだのと、人間には（ジク以外）鳴き声を続けている二匹。

そして生意気にも（？）猿は続けた。

「ムキヤツキヤ（あの銀髪のクルセ娘が主な訳が無いと、のう）」

真実（後書き）

シリアスな話が最後に台無しに（あ）

黄泉＋影ペアではシリアスが免れないと同時に、猿（サル太さん）
＋彩ペアではボケが免れないと言う役割があります。

「何故後のペアを入れたし」なんて聞こえません（コラ）

読者の皆様はどのキャラが好きなんだろうかと、気にせずに書いて
ますが気になります（ドツチダ）

怒り

驚愕の表情のその少年。

怯えよりも、目の前の出来事を、現状を把握しようとする瞳。

石の様に、振り向いたその体勢が固まって動かない。

「殺意の塊」は、背後からの一撃をまともに喰らい、そのまま倒れた。

少年に伸ばしていた手は、届かなかった。

その時の温かい血が、全身に飛んでくるのが感じられる。

「殺意の塊」が事切れたのを確認し、身を隠し移動した。

オオ・・・ン

蠢くモンスターは、少年のすぐ近くまで来ていた。

ザァンツ

衝撃波を、少年の側に来ているモンスターに放つ。

まともに衝撃波を受けたモンスターは、少年に触れる事無く消滅した。

隠れたままで群れの中心にまで移動し、姿を現すとモンスターは一斉に向かってきた。

十・・・二十・・・まだまだ居る。

少年に狙いを定めていたモンスターも、標的をこちらに変えた。

その直後、少年は倒れた。気を失ったのだらう。

しかしこれで少年の安全は確保した。

後は暴走しているモンスターを片付けるだけ。

体を捻る様にして武器を振るう。

ズバァンツ

一振りする度、肉を断ち切る鈍い感覚が、武器から手にと伝わる。

モンスターごとに、種族ごとに違う、伝わってくる衝撃。

皮膚、毛の一つ違っても随分変わるもの。

グオオ・・・ン

キシヤア・・・ア

断末魔と共に崩れ落ちるモンスター。

それでも次々に襲い掛かってくるのを、握り直した武器で斬り捨てて行く。

程なく、辺りは静寂に包まれた。

気を失っている少年以外の、命の気配は、無い。

じきにプロンテラ騎士団のテロ討伐隊が来るだろう。

周囲を見回すと、沸いて出てくる様子が無い事が判る。

それを確かめてから、この場を去った。

恐怖と絶望を知り、生命が果てていくのを、今までずっと見てきた。しかし。

気を失い倒れた少年の、あの時の表情。

目の前の人物が血を噴出し、倒れる時の少年の表情。

何故か幾年経っても、忘れられなかった。

緑深き森の奥。

広まった空間のその場所には、二人の暗殺者。

一人が武器を振るい、もう一人がその攻撃を喰らい、血を流している。

黄泉は影の攻撃を受け、溢れ出る血をそのままにしていた。

二箇所の大きな切傷から流れる血の量は、体を支える力を奪っていた。

ドサッ

地面に片膝をつき、一瞬目を閉じた。

「早まった事を！」

その声が近くに聞こえ、目を開けた。

すぐ側にダクツが来ており、膝をついた黄泉を片手で支えた。血が溢れる箇所にもう片手をかざし、温かな癒しの気を当てる。それでも、止め処なく流れる血。

「・・・つく！ヒールが間に合わない！」
顔を歪ませダクツは声に出す。

極めてはいない治癒術でも、簡単な止血ぐらいは出来るはずだった。しかし、目の前の黄泉の傷から湧き出る血は、癒しの気を上回る勢い。

地面にも血溜まりが出来ている。

普通の人間なら、失血死は免れない程。

ふと、ダクツは慌てて自分の服を探り始めた。

生命の木の実、イグドラシルの実。

体感したあの癒しの奇跡なら・・・。

しかし焦ると中々出てこない。

黄泉を片手で支え、もう片方で癒しの気を当てていたその手で探っている。

気を当てるのを止めた途端に、溢れ出す量が増した。

思わず目当ての物を探る手を止め、癒しの気を当てた。

流れる量が少しだけ落着いたものの、止まらない事に違いは無い。

支えを止めたら、そのまま黄泉は倒れ、意識を失う可能性がある。

そうなるとせつかく取り出した木の実を与えられない。

癒しの気を止めたら、実を取り出して口に入れさせるまでに、出血多量で命が危ない。

悪魔の様な強さだつて、失血死しないとも限らない。
生命の実を探すのを止めたら・・・。

「どけ！」

突然の声に、我にかえるダクツ。

片手に小瓶を持った影が、気付いたら目の前に居た。

そして癒しの気を当てていたダクツの手をどかした。

その瞬間に、血の量が増す。
ダクツが影の行動を止めるより早く、影は持っていた小瓶の蓋を開ける。

その中身を、黄泉に掛けた。

「影！それは毒・・・！」

「初めまして、冥と申します。」

冥は座っているアキラの前に行き、正面にいるジクにゆっくりとお辞儀をした。

顔を上げ、毅然とした態度でジクを正面から見つめる。

冥の可愛い顔立ちと落ち着いた態度を見たジクは、ひゅーと口笛を鳴らした。

「いいねえ！今日とはびきり良い女とよく巡り会ったな！」

そう言うジクは、ほくほくと上機嫌な様子。

「僕もだもん。」

立って挨拶をしている二人を、少し離れた椅子に座りぼそっと呟くたま。

「ミリリさんでしょ？銀さんでしょ？」

「何張り合ってたんだよ。」

指折り数えるたまの、すぐ前に座っているアキラがすかさずつつこむ。

「黄泉さんにアニバーサリーちゃん。」

「じゃじゃ馬ペアも入れるのか・・・。」

「ホムンクルスの哺乳類に、ポポリンのぼにん！」

「それは人ですら無え。」

力強く言い放ったまに再びつつこむアキラ。

「アキラ。」

「何だよ？」

「差別はいけないよ。」

「それ以前の問題だろ。」

「種族が違つてもちゃんと女性として意識しないとイケない。」

「意識出来る箇所がねえんだよ!」

「胸とかおしりの丸みとかあるじゃない。」

「体が丸すぎてわかんねえよ!」

「そんなんじや立派な紳士になれないよ?」

「モンスターの性別判断出来る紳士が居てたまるか!」

「そこまで言い合つて、たまはフンと鼻を鳴らした。」

「僕出来るもんね。」

「判つた、いいから胸張んな。多分そんな偉くねえ。」

「というわけで、今日出逢つた素敵な女性は六人だよ。」

「何が」というわけで「だ。せめて人間だけにしとけよ。」

「種族の壁がこんな所で・・・ガツカリだよ・・・。」

「アキラの声に、がくりと肩を落とすたま。」

「お前の発想がガツカリだよ。」

「うー・・・じゃあアキラはどうなのさ?」

「あん?」

「今日出逢つた素敵な女性だよ、居るよね?」

「たまに言われて、無言になるアキラ。」

「別に恥ずかしがっている訳ではない。」

「何をもつて「素敵な女性」なのか、ニュアンスにピンとこなかったのだ。」

「元より、「素敵」も「女性」もどっちにも縁が無かつたアキラだからこそその反応だ。」

「うるせえよ。」

「しまった、アキラに怒られてしまった。」

「・・・訳ではなく(そうだと信じたい)アキラはぶっきらぼうに答えた。」

「そんな事言つてー、分かっているんだからね?」

「悪戯な笑みを浮かべながら、たまはアキラの耳に顔を近づけた。」

「ぼちでしょ？」

その名を聞いた瞬間、アキラは体を硬直させた。何故コイツがそれを？と思った訳ではなく、その名前に驚きすぎたのだ。

正確には、何故驚いたのかという事に驚いたというか。

脳が、体が、すでにその名を記憶し、何かを訴えている。

しかし本人は、意識している事を意識していない（紛らわしい）。

その為、この反応が何を意味するかを、アキラ自身はさっぱり分かっていなかった。

女性に縁が無いからこそその反応だ。

「うるせえよしつこいんだよ！」

またアキラに怒られてしまった。

・・・訳ではなく（と思うが自信が無い）声を荒げた。

アキラの頭の中は「？」マークがぐるぐる回っていた。

一方では胸の鼓動は高鳴り、速過ぎて破裂するんじゃないかと感じるほど。

と、アキラが一人固まりつつ内部がえらい事になってる、まさにその時。

大きな、衝撃音がした。

もちろん、アキラの鼓動ではなかった（当たり前）。

「冥ちゃんかー、俺はジクってんだ。よろしく！」

可愛らしく、幼顔ながらも落ち着いた雰囲気の冥を見て、上機嫌のジク。

屈託の無い笑顔で、冥に手を差し出した。

しかし冥は手を出さなかった。

ジクの目をただジツと見つめている。

「ん？もしかしてアンタ、俺に気があるとか？」

勝手に好都合に解釈して、満更でもない顔をするジク。

「やー嬉しいねえ！アンタが例え」

「・・・血。」

乗り気なジクの言葉を遮る様に、冥が呟いた。

「へ？」

「血の匂いがします、貴方から。」

間の抜けた声を出すジクに、冥は続けた。

「それも人の血・・・そして貴方は怪我をしていない。」

「へえ、可愛いだけじゃないんだなアンタも。」

意外そうに冥を見るジク。

「・・・失礼ですが、一体何があったのでしょうか？」

「聞きたい？そんなに聞きたい？」

複雑な表情の冥に、ジクがずっと身を乗り出す。

「やー、さっきギルメンがさー。」

返事を待たずに、ジクは得意げに話しだした。

「言いたい事言う奴でさ、まあ実力は認めっけど。あ、そいつダク

ツって名のモンクね。」

一瞬、冥は目を細めた。

ジクは気付かずに話を続ける。

「いつもは無愛想で無関心な奴だけどさ、さっきはやたらしっこか

つたんだよなー。」

腕を組んでなにやら考え込んでいる。

「ぶっちゃけ邪魔だったんでさー。」

考えるほどの事でもなかったらしい。

「・・・それで、どうなさったんですか？」

「ん？俺？」

先へと促す冥の顔を覗きこむように、ジクは聞き返した。

真剣な顔で頷く冥を見て、ニカツと笑顔になるジク。

「そんなマジな顔すんなよー、結局大した事無かったんだからさ！」

「・・・どうになりましたか？」

「ん？だから俺は何とも・・・。」

「相手の方、です。」

「あーそりゃそうか、俺の方が強いもんない。」
ケラケラと愉快そうに笑うジク、それを無視して冥はもう一度聞き返した。

「どう……なりましたか？」

「んー……どうだろ？」

組んだ腕を解き、ジクは顎に手を置き考えるポーズを取った。

「刺して……蹴って……。」

少し間を置き、答えた。

「死んだんじゃないね？」

ヒュオンツ

風を切る音。

ズバシイインツ

ドガシャアーンツ

風を感じると同時に、ジクの左の頬に衝撃が走った。

「へ？」

一瞬何が起こったか解らなかった。

気がつけば床に、そばにあった椅子数脚と一緒に転がっていた。

正面には、挙げた右手をゆっくり下ろす冥の姿。

さつきまでの、幼さが残る落ち着いた表情ではなく。

静かに、しかし激しい怒りの眼をしていた。

「先輩！」

「冥！」

アキラとたまの声で我に返るジク。

たまは冥に、アキラはジクに駆け寄った。

「先輩！だいじょう……。」

「俺、何で床にいんの？」

「え？いや……えーとですね……。」

「俺、普通に話してただけだと思うんだけど。」

「さ、さあ？俺には良くわからな・・・って先輩！」

アキラの声を無視してジクはゆっくり起き上がった。

「失礼します。」

そう言つて足早に外に向かおうとする冥を、たまが慌てて止める。

「冥！待つてよ何があつたのさ！」

たまが掛ける声も空しく、冥はツカツカと外へと向かう。

「冥つて・・・。」

グイッ

背後から伸びる手に、たまは肩を引つ張られる。

「ば・・・え？うわ?!」

引つ張るといふより、障害物を退かす様に無造作に放られた。

ベチャッ

とつさの事で、受身も取れずに床に倒れるたま。

退かしたたまには目もくれず、ジクは冥の後を追つた。

「いたた・・・ちよつと何するん・・・むぐ！」

文句の一つでも、と上体を起こすたまは、突然背後から口を塞がれた。

低くドスの利いた声が、たまのすぐ耳元で聞こえる。

「・・・お前はあの人に聞かぬ。いいな？」

ぞくりとする凄味のあるその声。

今までに無いそのトーンに、たまは一瞬思考が停止した。

信じられない事に、アキラのものだった。

それは同時に、怯えの様なものも感じられた。

賑やかで騒がしい印象がある（周囲の所為だが）アキラ。

その分、この静かな脅迫の違和感が意味するものが分かった。

危険度が違う。

アキラが伝えたいのは、そう言う事だろう。

たまの無反応を理解と判断したアキラは、口を塞いでいた手を離して立ち上がった。

そしてその足でジクを追いかける。

たまはアキラを目で追っていた。

覚悟を決めたその背中を。

「単純過ぎて、逆に面倒くせえんだよな。」

背後からの突然の声に、たまはビクツとした。

低くガラの悪い声・・・しかしアキラではない。

何せアキラは視線の先にいるからだ。

「ジクって奴あよ。」

たまが振り向くより早く、たまの横を通り過ぎた。

その男は、パイプタバコを握り締めていた。

ポント

違う手が、たまの頭の上に乗った。

優しい手だった。

「そろそろ私も働かないとな。」

「あ・・・。」

顔を見ずに、たまは判った。

「ギルドマスターとして。」

長い髪も衣装も黒い男は、目の前の男を追った。

バアソツ

手を伸ばし扉を開けようとする冥より早く、ジクが塞ぐ様に扉に手をつけた。

「・・・その場を開けて下さいませ。」

「アンタ、随分威勢が良いんだな？」

冥の言葉を無視し、ジクは扉の前に立ち、進路を遮った。

「彼を・・・ダクツさんを探します。」

「あんな奴放つときゃいいんだ、それよりアンタ・・・。」

そう言つて扉に手を伸ばしかけた冥の手を掴む。

「気に入ったよ。」

ニヤリと笑つて冥を見る。

「！」

ヒュンッ

冥は手にスナップを利かせ、再びジクに狙いを定めた。
パシッ

しかしその手は止められた。

止めた手は、ジクでは無かった。

「アキラさん!？」

「ま・・・間に合った・・・!」

手を握って繋がったままの冥とジクの間に、アキラが割って入る。

「・・・良いトコなんだけど?」

冥への視線を遮断されたジクが、感情を込めずに言う。

「すみません先輩、彼女には手を出さな・・・。」

アキラの精一杯の勇気の言葉。

どこで逆鱗に触れるか判らない、この行動すらすでに危うい。

命懸けとも言っている、それ程相手が危険なのだから。

しかしその言葉は最後まで言えなかった。

「・・・あ?」

ジクの声聞き、ジクの眼を見て、アキラは全身が凍りつく感覚がした。

残念ながら寒いジョークではない(当たり前)。

眼で殺すというのはこの事かと、身をもって体感した。

そしてアキラはこの先を予想した。

死を。

その直前の、無慈悲な恐怖を。

脅すとか、凄味を利かせるとか。そんなものは相手を生かす前提の取引手段でしかない。

そしてジクはそれを使わない事も、アキラは知っていた。

この眼を向けられて、ジクの前で無事でいた輩を、アキラは知らない。

怪我をした、というかわいいものではない。

全身骨折、内臓破裂、出血多量、激痛のあまりショック死、刺殺、

撲殺。

すべてジク一人でしてきた事だ。

相手に非があつても無くても・・・そう、無くてもジクにこの眼をさせてはいけない。

しかしアキラはもうさせてしまった。

ジクから目を背ける事も出来ずにいた。

ジクのこの眼を見ている間中、脳の奥がキリキリと締め上げられる様に痛む。

死神の様な、いや見たことは無いけれど、この眼を回避する術は、無い。

(神よ・・・しまった死神も神か)

などとノリツツコミをしつつ、覚悟を決めた。

(悪魔でもいい！後を頼・・・)

スココーンツ

「つて！」

「痛え！」

謎の効果音と同時に、ジクの顔が歪んだ。

と思つたら時間差でアキラにも衝撃があり、おなじく顔を歪める。

その瞬間、アキラはジクの眼の呪縛から解放された。

全身の張り詰めた神経が緩み、脳の締め付けも消えた。

力も抜け、床に倒れるように座り込んだ。

その床には、見覚えのあるパイプタバコが転がっていた。

どうやらこれが飛んできたらしい。

「アキラさん！」

すぐ傍に居た冥も慌ててしやがみ込む。

「すみません、私の所為で・・・。」

「俺・・・無事・・・何で・・・。」

力無く咳くアキラの背後で声がした。

「良い女見るとすぐこれだ、ちつたあ落ち着けや。」

「んだよー良いトコだったのに！タコ匠！」

「一方的にだろうが。」

声を聞いて、アキラは思った。

救いは、神でも悪魔でも無かった。

鬼だった。と。

「冥、アキラ。私の後ろへ。」

その声に、はっとなつて先に顔を上げたのは冥だった。

「鴉様！」

「心配かけてしまったな、すまない。」

「マスター……。」

声を聞いて、心底安堵するアキラ。

ジクと匠が小突き合い、アキラと冥が床に。

その間に鴉が居る。

間違い無く、もう大丈夫だった。

「しかし良かった。右手で。」

背を向け、顔だけアキラ達に向けながら鴉は呟いた。

「？何の事だよ。」

アキラの問いには答えず、鴉は続けた。

「冥の左手は手加減が利かないから、吹っ飛ぶだけじゃ済まないからな。」

意味が判らず、ふと冥を見ると、俯いて顔を赤らめている。

「……内緒です。」

手遅れだし、と、アキラは心の中でそつと突っ込んだ。

そして何となく思った。

鴉の平手打ちの師匠は、冥なんじゃないかと。

怒り（後書き）

作者乱入のお見苦しい点はフィルターを掛けて頂いて・・・（え）

冥、最強伝説ですね（苦笑）

そして久々の黒い人！いや以前そう表現してたので・・・。

訪問者

砂漠の街、モロク。

首都プロンテラを南西に進み、ソグラト砂漠の中心にある、オアシスの街である。

短時間の雨などものもしない、熱帯地域。

街中の至る所に張られたテントは、突き刺す様な日差しを遮る為の物だ。

街の中央には、物々しい雰囲気の、モロク城がある。

その周りを貯水池で囲み、熱気と乾燥した空気で荒んだ人々の心を潤していく。

「あ！ねえあれアイスだつて！」

「直に売ってる所、初めて見ました！」

モロク城のすぐ傍でアイスを販売している男がいる。

それを見た二人は、初めての土地での事が珍しいらしく、見慣れぬ物を見ては騒いでいる。

「銀、ミリリ。遊びに来たんじゃないんだぞ？」

はしゃいでいる二人を制し、足を止めずに進む一人。

「あーっ・ごめんねぼっちー。」

「ご、ごめんなさいぼちさん！」

叱られた子供のように、素直に謝る二人。

黒髪の製薬者銀と、栗毛の冒険初心者ミリリである。

「用事済んだら、食べようね。」

背後にいる二人に声を掛け、軽く振り向き笑顔を見せる一人。

銀髪の聖戦士^{クルセイダー}ぼちである。

「やったあ！ぼっちー、話わかるう！」

「ありがとうございます！」

両手を合わせて喜ぶ銀。ミリリも同じ様に喜んでいる。

二人の様子を確認してから、ぼちは目的地へと振り向き直し、足を

進めた。

聖職者冥フリーリストに頼まれ、ワープポータルでここに運んでもらったのだ。城に用があるわけではない。

城から左手に進み、二軒ある酒場の内の一つを目指す。

一軒は一般人、冒険者が自由に出入り出来る酒場である。

ぼち達はもう一軒の酒場へと向かった。

もつとも、そこが酒場だとは外観からは絶対に判らない。

小さめの建物。古い外観。

入り口のすぐ脇にあるのは、看板ではなく一本のヤシの樹。

目印ではあるが、入り易いようにはなっていない。

入り口とヤシの樹の間には少年が一人立っていて、決して客引きではない。

この熱帯地域で、汗一つかかずに、じっと佇んでいる。

眼光が鋭く、その建物に入る人物を隙無く見極める。

その動作は・・・そう、暗殺者アサシンそのものだった。

ぼちは建物の側に行き、銀とミリリを一度待たせて少年に近づいた。

「・・・此処は誰もが入って良い場所ではない・・・。」

年齢相応とは到底思えない、冷ややかな声で少年は言った。

切れ長の眼からは、警戒心が全面に出ている。

不安そうに見守る銀とミリリ。

ぼちは物怖じせずに、少年とは目を合わせずに、小声で囁いた。

「黄泉の件で。」

その言葉に、少年の眉がピクリと動いた。

「・・・ように見えた、一瞬の事である。」

「・・・入れ。」

一言だけ発し、少年は建物の中へと促した。

ぼちは振り向き、銀とミリリを手招きする。

「い、いいの？入ったら襲われない？」

ぼちと少年とのやり取りを、ビクビクしながら見ていた銀が、不安そうに声を掛けた。

「大丈夫さ、行こう。」

何事も無かったように、ぼちは銀とミリリを手招きした。慌ててぼちの傍に駆け寄り、銀とミリリ。

ぼちを先頭に、建物に入る。

「あうーアイスはつめたいです。」

ぼち、銀、そしてミリリの順に入った直後に、その場に聞こえた声。
「……。」

建物の入り口に居た少年は、注意深くその声を追った。

アイス屋の側に緑の軟体生物が見えた。

ポリン系モンスターのポポリン。

そのモンスターは事もあるうちに、ぼち達が楽しみにしているアイス屋を襲っていた。

と言うより、入れ替えの為に置いたアイスを勝手に頬張っているのだが。

モンスターであると同時に、黄泉の相棒でもあるその生き物。ぼちのである。

建物の中に入ると薄暗く、地下深くまで続く階段がある。

ひんやりした空気は、心地良さより薄気味悪さを感じさせる。

「ね……ねえ、本当にここなの？ 罨とか無い？」

恐る恐る階段を下りながら、銀が不安を口にした。

「罨が此処だつて言つてたから、間違い無いさ。」

怖がる様子もなく、スタスタと進むぼち。

「話を聞くだけだし、攻撃される理由は無いからね。」

「そ、それでもこここの空間は圧倒されてしまいます……。」

銀の服を掴み、怯えつつ慎重に進むミリリも、思いを口にした。

静寂で覆われた空間は、ぼち達の足音しかしない。

なのに誰かに常に見張られている様な、そんな気持ちにさせるのだ。

「アイスが待つてるよ。」

「そ、そうだね！」

「が、頑張ります！」

ぼちの言葉に、はつと顔を上げて意気込みを見せる二人。判り易い反応に、苦笑いをしながらぼちは進んでいった。長い階段を下りた先に、ようやく見えた明かり。

そこをくぐると、そこは確かに酒場だった。

数人の客が、それぞれ酒を楽しみ酔いを楽しみ、中には男女で喧嘩をしている様子も。

その様子を見て見ぬ振りをし、カウンターの内側でグラスを拭いているバーのマスター。

どこの酒場でも見かけそうな光景である。

ぼち達が入った瞬間に漂った、張り詰めた空気を除いては。

ここは単なる酒場ではなく、ましてや酒場の奥に向かうとなると、用が限られてくる。

馴れた手付きでグラスを拭くマスターや、奥にいる浪人風の騎士は、周囲より鋭い目を向けている。

行く先に、極秘の存在を意識するように。

ぼちはそれらを無視し、酒場の奥へと突き進んだ。

慌てて後に続く銀とミリリ。

「ぼっちーって、堂々というか、躊躇わないよね……。」

「で、ですよね……。」

囁くように銀とミリリが口にした。

そうしている間に、ぼちは目的の入り口に辿り着いていた。

門番のように其処に居る男騎士が何か言う前に、ぼちが口を開いた。

「マルザナと話がしたい。」

「話くらいイイじゃなかさー。」

「てめえはそれじゃ済まねえだろうが。」

「程度問題だ。」

町外れにある教会の中、入り口で言い合っている三人。

順チェイサーに追跡者ジク、鍛冶屋匠ブラックスミス、聖職者鴉プリーストである。

ジクは面白く無さそうに頭を掻いている。

匠の投げたパイプタバコが当たった所が痛痒いらしい。

「君がとても前向きで、勇気のあるフェミニストと言う事は理解出来たがね。」

言葉とは裏腹に、好意を感じられない声のトーンの鴉。

「そーそー、俺ふえみにすと！」

「アホ、馬鹿で無礼な女好きって言っただよ。」

自慢げに腕を組んで仁王立ちのジクに、問答無用なツッコミをする匠。

「大体、此処は教会だ。不道德な真似は避けてもらいたい。」

一旦言葉を切り、顔を匠に向ける鴉。

そして視線をジクに戻した。

「・・・極力。」

「こつち見んなおっさん。」

鴉は匠の言葉を、聞こえない振りでやり過ぎすことにした。

「特に、彼らは私の大事な仲間だ。」

そこで区切って、再び続ける。

「アキラは君の後輩だろうけど、今はこのギルドの一員なんだ。ちよっかいは・・・。」

チラッと鴉が見た先は、座り込んでいる聖職者冥プリーストと、噂のアキラ（？）が居る。

「構わないが。」

（良いのかよ！少しは止めてくれよ！）

吐き出したい本音をぐっと堪えて、アキラは鴉をジッと見ている。いや、ジトツと、かも知れない（どうでもいい）

「俺、アキラと話したいんだけど。」

話を聞いてか聞かずか、ジクが鴉の目を見て言った。

口調は普通なのに、眼だけは獲物を捕らえる瞬間のように見える。恐らく、「嫌だ」と言ったら真っ先に実行に移すだろう。

そんなジクの眼を見て悟った匠。

「おっさん、退いてやってくれや」

顔には出さずに、鴉は匠の囁き《ウィスパー》を聞いた。

「安全の保障はする。・・・万が一の時は、全力で止めっからよ」

「・・・判った。」

ジクの声にはなく、匠の囁きに同意し、鴉は道を開けた。

「アキラさー。」

未だに力が入らず、床に座り込んでいるアキラと視線を合わせるように、しゃがむジク。

「な、ナンデシヨウカ。」

鴉と匠の囁きのやり取りを知らないアキラは、冥を後ろに庇い、ぎこちない返事をする。

その後ろでは、冥が心配そうにアキラの腕をぎゅっと掴んでいる。

「アキラ、その役を代わってくれないか」

(羨ましげに囁きすんなよ!!)

頭の中で聞こえた鴉の声に、心でツツコミをしたアキラ。
鴉をキツと睨む。

「・・・だめか。」

「しょんぼりすんな！それどころじゃねえし！」

思わず囁き返しをするアキラ。

「あれ、聞いている？俺の話。」

「はい！すんません先輩！続きをドウゾ！」

若干（いや目一杯？）ヤケ気味に、アキラがジクに返事をした。

「アキラさー・・・。」

「な、ナンデシヨウカ。」

巻き戻したように、同じやり取りをしている。

「大丈夫？」

「いえ全然。」

即答しなきゃ！というアキラの気持ちだが、思わず正直に返事をする事に。

そんな大間違いに、言った後に気付いたアキラは自然と硬直してしまつた。

「い、いや今のは違つて、その！」

慌てて弁解するが、はつきり言つて言えてない。

「。。。。」

目の前には、アキラを無言で見詰めるジク。

「。。。。」

時が止まつた。

互いに無言で相手を見ている。

ゴクリとつばを飲み込みながら、アキラはまた覚悟を決めた。

(。。。今度こそ終わりかも知れない。)

一瞬目を閉じ、祈るように目を開けた。

そこは、薄暗い部屋だつた。

入り口は何となく明るいの、部屋の奥に行く程暗くなる。

扉を閉めると、部屋の外に居た人達の気配や音が瞬時に消えた。

そういう作用がある部屋なのだろう。

「四分だけ時間をやろう。」

そう言つたのは、部屋の中央に居る一人の女。

首元までの黒髪に切れ長の鋭い眼光が、ぼち達を見据えている。

黒っぽい布を巻きつけた様に着ており、黄泉の格好と類似する。

仁王立ちで腰に手を当て、質問を待っている。

「マルザナで良いのかな？ 毒に最も詳しいのは貴女だと聞いた。」

時間制限に躊躇わず、ぼちは話を切り出した。

「そうだ、私以上に毒を上手く扱える奴は居ないだろう。」

「他のアサシンに毒の扱いを教えているのも？」

「そう。しかしここ十数年は、特殊な毒以外の扱いは部下に任せる

事になっている。」

「と言う事は、特殊な毒を扱うアサシンは、貴女の管理下にあると

？」

「貴様・・・何が言いたい、はつきり言え！」

マルザナの鋭い声にも動揺せず、ぼちは続けた。

「「片腕の悪魔」、黄泉を狙う男アサシンの目的を知りたい。」

一瞬、マルザナと呼ばれた女は目を細めたように見えた。

「「片腕の悪魔」をその名で呼ぶのは、私とあの二人・・・鴉と冥だけだと思っていた。」

「鴉はギルドマスターだ。」

そう言っただけは、胸元の十字架を象った、鴉の作ったギルドバッヂを見せた。

「私はぼち。ギルドメンバーのミリリに、鴉と冥の親友の銀。」

ぼちは簡単に紹介をし、銀とミリリはビクツとなって体を強張らせている。

「そうか。」

短く応え、マルザナは銀とミリリを一瞥した。

「人間、悪魔、モンスター・・・鴉も保護者で御苦労だな。」

呟く様に言い、再びぼちを見る。

「男アサシンと言ったな、特徴を言え。」

ぼちはこくりと頷いた。

「紫の短髪。毒をメインで戦い、付けた傷口からは血が止まらないんだ。」

影と戦った時の様子を思い出しながら続ける。

「・・・それは影だな。」

マルザナはぼつりと呟いた。

「幼少時代に父親を黄泉に斬られた。その復讐だろう。」

はつと息を飲む声は、銀とミリリ。

「斬られ・・・。」

「古木の枝テロ中に起きたこの事件は、本当に突然の出来事だった。」

ふと、マルザナは話を止めて、視線を部屋の入り口へと向けた。

バターンッ

「！」

ザッ

勢い良く開いた入り口の扉に、咄嗟に身構えるぼち。

気配を断つ部屋は、訪問者が近づくのも感じさせなかった。

「ふえ！？」

「きゃあ！」

銀とミリリは慌ててぼちにしがみ付く。

「……これ位？」

突然やってきた訪問者を目の前に、ぼちはマルザナに声を掛けた。

「そう、これ位。」

そんなやり取りをしながら、部屋に居る全員が訪問者を見た。

正確には、訪問者の掴んでいる緑色のモンスターだが。

「悪いなマルザナ。このアイス泥棒が、その者達の名を言っていた

んでね。」

訪問者は、入り口に居た見張りの少年だった。

ぼち達の話している時に、ぼち達の名が少年に聞こえたのだろう。

「あうゝどろぼうじゃないのゝ。」

手の中の緑色の物体が抗議をした。

「じめんにおちてたからゝもつたいないからゝ。」

「アイス屋の男が、アイス入れ替え中の出来事だと言ってたぞ。」

「ぼにんがもらうことにしたのゝ。」

「……と、言う事だ。被害が悪化しない内にアイス屋からこいつ

を回収してきたんだ。」

そう言う少年は、ミリリに掴んでいた物を手渡した。

「っわ！」

「お前がこいつの主か？アイス代、弁償していく様に。」

そう言い残し、部屋に登場してきた時とは対照的に、静かに出て行

った。

「きつかりだ。」

マルザナが初めに切り出した。

「何が？」

「四分経った。」

そして終わりを告げた。

「なーにシケた面してんのアキラ。」

アキラが目を開けると、満足げなジクが目の前に居た。

「へ？」

「俺がブチキレた時んこと聞いたんだよ。」

ジクはアキラの額を指で突つきながら、話を続けた。

「大丈夫ーなんて言われたらシヨックじゃん？力関係的に。」

「は、はあ・・・そ、そおっすね・・・。」

どうやら難は免れたらしい。

ぎこちない返事をするアキラは、安堵感で一杯だった。

「ジク。」

「うん？」

不意に匠がジクに声を掛けた。

「いつまで連打してんだよ。」

「そ、そおっすね・・・。」

アキラもそれに続いた。

ジクはずっとアキラの額をツンツンと突付いていたのだ。

痛みも勢いも無い程度の威力だが、ずっと突付かかっているとその感覚が麻痺してくる。

怪我の心配こそは無いが、第三者から見たら不可解極まりない行動である。

「や！秘孔はどこかなあと。」

「そこ突いたら死んじまうだろ。」

スクツ

いきなりアキラは立ち上がった。

「へ？」

急に立ち上がったので、ジクの突付いていた指がアキラの脛にヒツトする。

「すみません、ちょっと失礼します。」

アキラはそれも気にならないようで、ジクに背を向けて走っていった。

「私も、失礼します。」

冥はゆつくり立ち上がってお辞儀をし、足早にキラの後を追った。

「去つてく秘孔突いちったのかなあ。」

「無えよそんなもん。」

指をまじまじと見つめるジクに、匠がパイプタバコで頭をノックしている。

カランカラン・・・

鳴った音は、決してジクの頭をノックした時の音ではない（当たり前）。

鴉は呼び鈴が鳴る前に気配を感じ、扉側に居た。

キイ・・・

ゆつくり開けた扉の向こうには一人の男。

緑の短髪モンクの修行僧タクツだった。

「アキラー！！」

良く通る声で呼びかける声。

アキラの向かう先には一人の男。

青い長髪バードの吟遊詩人たまである。

座り込んでいた床から立ち上がり、アキラに向かって駆けて来た。

互いに駆け寄り、後一メートルの所でたまが両手を広げる。

スッ

同時にアキラは走った勢いのまま上体を低くした。

「とう！」

ゲシッ

「無事で良かった……だ?!」

ベチャッ

アキラのスライディングによる足払いに、たまはバランスを崩して倒れる。

「あいたた……」

幸い、床には赤い絨毯が敷かれているので、大した痛みではないのだが。

「何すんのさ!人が心配してアキラに手を振ったり踊ったりモノマネしたりしてたのに！」

「よし、すごい勢いで空気読んでくれ、頼むから。」

そう言いつつも、アキラはジクから解放された為に、笑ってすらいた。

遅れて来た冥は、アキラとたまを交互にみて微笑んでいる。

後にしよう。と、冥は思った。

「大事に思っているものが、信じさせてくれたでしょう?」
と、たまに言うのは。

二人のやり取りを見ていると、教会の入り口の騒がしさが耳に入ってきた。

「そう言えば呼び鈴が……」

振り向いて見ると、見覚えのある訪問者が居た。

冥の友人のダクツ。

ダクツと争って、刺して蹴ったの目に遭わせたと、ジクは言っていた。

しかし、ダクツは血の跡が所々見えるが、平然と立っている辺り無事なのだろう。

安堵で力が抜け、冥はその場にペタンと座り込んでしまった。

それに連動して、冥の目が潤んだその時。

離れていても聞き取れる距離に居る冥の耳に、ダクツの言葉が入ってきた。

その言葉は、冥が後でたまに言う筈のセリフを、見事にかき消した。

「大事に思っているものが、信じさせてくれたでしょう?。」

「「片腕の悪魔」を・・・殺しました。」

訪問者（後書き）

マルザナは「過去との出会い（後）」に名前だけ出てきたキャラで、黄泉の育ての親です。

ゲーム上にちゃんと登場するキャラで、毒の知識に長けていて、右に出る者は居ないすごい人ですが、ゲームでも四分程度しか出番がありません（あ）

ので、この話に登場してもらいましたが、やっぱり四分だったというorz

しかし連載初期と比べると、初期がどれだけ適当な書き方をしていたかと・・・。

予定ですが、番外編専用の短編シリーズを書きたいなと思ってます。執筆遅いのにな！

思い

「いやあマジでやばかったわ。棺おけに片足突っ込む所だった。良く見ると冷や汗気味のアキラ。」

「僕両あ・・・しただだだだだ!!」

言いかけた所に、激痛の為声を張り上げるたま。

足払いでうつ伏せに倒れたたまの背中に、アキラが乗っている。・・・だけならまだ良かった。

たまの足に向けて背中に座り、たまの両足首を両脇に抱え、グイッと引き寄せていた。

自然とたまの体が反る形になり、足から腹部に掛けて圧迫する。

「この「逆エビ固め」から相手の足と俺の足を絡めて、後ろに反り返り相手のアゴを引っ張ると「アキラ・ヴァーミリオン」になる。」

「なんなくて良いよ！何で僕、技掛けられてるの！」

「何でじゃねえ！視界の端でちょこまかしゃがって！」

「だって！アキラが限界ギリギリの顔してたから、癒そうと思って！」

「「精錬依頼の失敗時に浮かぶホルグレンの不敵な表情の真似」が癒しになるか!!」

「に・・・似てたでしょ？自信あったんだからね！」

「似過ぎてその場面に遭遇した時の記憶が甦るわ！」

声の勢いで、たまの足を引き寄せる力が増す。

「あだだだだ！ギブ！ギブだってば！」

手を床にバンバン叩いて抗議するたま。

「え？もつとやれって？たまはやっぱりMなんだなあ。」

「ギブミーじゃないよ！ギブアップ！」

「そうか、んじゃ次は「アキラ・ヘブンスドライブ」を・・・。」

「今の技にじゃなくて！全部に対してギブアップ！」

「じゃあ何が良いんだよ！」

「何もしなくて良いんだよ!」

「っち・・しょうがねえなあ・・・。」

しぶしぶと、たまの足を解放するアキラ。

「げほっげほ!うー・・・体がギシギシ言ってるよあ・・・。」

逆工ビ固めから解放され、たまは息切れしながら文句を言ってる。

「歳か?」

「技の所為でしょ!どう見ても!」

「ええと4の字固めは確か・・・。」

アキラはたまの背中中で足を交差させながら試行錯誤しだした。

「技はもう良いよ!聞いてよ僕の話!」

めげずに突っ込むたま。

そしてふと、教会の入り口に目が行った。

ずっとこっちが騒いでいたので気付かなかったのだが、どうやら訪問者のようだ。

「ねね、アキラ、アキラだだだだ!」

「あ、そうか。相手が仰向けじゃないとダメだったんだ。」

たまの足が若干可笑しな角度になっており、体と声が悲鳴を上げて

いる。

「たま、仰向けになってくれよ、背中降りるから。」

「ならないよ!そうじゃなくても降りてよ!それより玄関見てよ!」

ようやくたまの背中から降りたアキラは、たまの指してる方向へと

顔を向けた。

「あん?客か?」

教会の入り口に居る、緑の髪の修行僧が目に入った。

目隠し、血が付いた服。

一見して「迷子になりました」等の理由でここに来たのでは無い事

が判る。

ジクが嫌そうな顔を修行僧に向けているので、二人は知り合いなの

だろう。

その様子を、

アキラ達と入り口の間位置に居る冥も見ていた。

座り込んだまま、ぴくりとも動かない。

「冥さん、知り合いか？なあ……。」

近づいて声を掛けるアキラにも無反応の冥。

再度声を掛けようとした所で、入り口で音がした。

怒りをぶつける音が。

ポヨンッ

「あゝ、おねーさんたちです〜」

ミリリの腕の中でぽにんが弾む。

「非常に遅いよ、気付くのが。」

「よくここまで来れましたね！」

「ね、ね。後で銀達にアイスちょうだいね！」

薄暗い部屋に咳払いが聞こえ、三人ははっとして振り返った。

「時間だぞ。」

マルザナが外に出るように促す。

「まったく、君の所為で聞く時間が減っちゃったじゃないか。」

不満そうな顔で、ミリリの腕の中のぽにんを突つくぽち。

しかし大雑把な話は聞けたので、心底怒ってはいない。

「あうゝわるいことしてないの〜。」

「悪い事しかしてないんだ。」

「まあまあぽちー、悪気があったわけじゃないしさ！多分！」

そう言いながらぽち達は、マルザナに礼を言ってゾロゾロと部屋の外へと向かう。

「……何だ？」

マルザナは、扉の入り口に声を掛けた。

そこには、ぽにんを抱えたミリリが居た。

「あ、あの！」

「……時間だと言ったはずだが？」

思い切って声を掛けたミリリに、無表情で返すマルザナ。

「す、すみません！、でも一つだけ訊いて良いですか！
たじろぎながらも、ミリリは引かなかった。」

「……。」
マルザナはミリリに背を向けたが、今度は何も言わなかった。

「マルザナさんは、その……。」
ミリリはおずおずと、マルザナの背中に声を掛ける。

「どっちの味方……なんですか？」
「……どっち、とは？」

背を向けたまま、マルザナは訊いた。

「……黄泉さんと……影さんです。二人の……。」

「そんな下らない事を訊きたかったのか？」

背を向けたマルザナの声は、ミリリを冷たく突き放した。

「！……違います！」

「では何だ？」

腕の中のぼにんをぎゅっと抱きしめ、ミリリは俯いてしまう。

「下らなく……無いです。」

それでも、ミリリの声は小さくしかしはつきりと主張した。

「大事な事、です。」

「……。」

「あつゝくるしーの。」

「私、黄泉さんに助けられて……影さんは黄泉さんを狙って、鴉
さんを傷つけて……。」

「……それで？」

「そんなにぎゅってしたらだめなの。」

「影さんは悪い人だって思ってた……でも。」

「でも？」

「そういえばじゅーしょーです、おなかがすきました。」

「すみません、自由な発言は後で聞きますから！」

ぴしゃりと言い放ち、ぼにんのフリーダムタイムを止めるミリリ。

「あつゝじゅーしょーなの。」

ぶるぶると体を震わせ抗議をするぽにん。

一旦無視して、ミリリは話を続けた。

「でも、今のお話を聞いたら……。」

「……聞いたら？」

「影さん……悪くなかったのかなって思って……。」

「……。」

一瞬の間があった。

「……そうか。」

マルザナはミリリへと振り向いた。

声は、さっきの様な冷たさは消えていた。

「下らない事と言ったのは、余りにも当たり前な事を訊いたからだ。」

「

「え？」

「どちら仲間だぞ？敵も味方も無い。」

「そ、そうですね……。」

きっぱり言い切るマルザナに、拍子抜けするミリリ。

マルザナは真っ直ぐミリリの目を見た。

「どちらも無事で居れば、良い……難しいだろうけどな。」

そして再びミリリに背を向けた。

「よみよみ……。どこ？」

「後で会えますから、もうちょっと待っていてください！」

フリータイムを続行し始めたぽにんに、再びぴしゃりと言いつつミ

リリ。

「名は？」

顔だけミリリに向き、マルザナは声を掛けた。

「え？あ、えっと……あたし、ミリリと言います！」

急に訊かれ、戸惑いながらも答えるミリリ。

「ぽにんはね〜ぽにんっていつの〜。」

「ぽにんさん！しーっです！」

「し〜。」

「そうか・・・所で時間だが。」

ふと切り出したマルザナの言葉が、ミリリを気付かせた。

「え？あ、ご、ごめんなさい！お時間取らせてしまって！」

慌ててミリリは謝る。

「いや。」

ミリリの反応に、マルザナは言い直した。

「上で待たせているんじゃないのか？」

「・・・あ！」

言われて気付き、ミリリは慌てて部屋を出た。

「あの！」

と思ったらまた顔を覗かせた。

「何だ？」

「えと、ありがとうございます！」

ペコリと頭を下げお辞儀をし、ミリリは今度こそ部屋を出て行った。

元気の良い足音が遠ざかる。

「・・・。」

薄暗い部屋に静寂が訪れる。

キイキイと扉は軋み、うっすらと開いた。

ミリリが閉め損ねたのだらう。

マルザナは扉に向かった。

そして誰も居ない部屋に、ポツリと呟いた。

「そうか・・・あれが・・・。」

そして扉の取っ手に手を掛けた。

ドガアンツ

力任せに殴りつけ、閉めた扉全体が軋むほどの勢いがついて相手が吹っ飛んだ。

「っぐ！」

抑え様も無い怒りを込めたジクの一撃。

その速度は、すぐそばに居た鴉や匠が目で追えないほどだった。

ダクツはそれを、真正面からあえて受け止めた。

咄嗟に胸を庇った腕の骨が、ミシミシと音をたてている。

「アンタ、奴が俺の獲物だって知ってて言ってる訳？」

拳を握り直し、ジクは再び殴りつける攻撃態勢に入った。

「おいジク！よさねえか！」

「君！」

匠がジクに駆け寄り、羽交い絞めにして動きを封じ、鴉はダクツへ駆け寄った。

「・・・匠、離してくんない？」

「あほ！ちったあ落ち着け！」

ジクに声を飛ばした匠だが、ジクが落ち着いている事を匠は知っていた。

ジクの殺戮本能はピークの時ほど冷静で、冷淡で、冷酷無情な事も。

「・・・離せつつつたんだけど。」

ジクの無感情の声が、匠に向けられた。

この声も、匠は知っていた。

最悪の状況の、一歩手前だと。

「良く聞け、聞いてくれるだけでいい。」

匠は可能な限りの、全力で落ち着いた静かな声で訴えた。

あの匠が、である（失礼）。

一方。

ダクツに駆け寄った鴉。

「大丈夫か！今手当てを・・・。」

スツ・・・

「お構いなく。」

そう言っ手をかざそうとするのを、ダクツに止められた。

「！・・・しかし腕が・・・！」

「失礼、貴方は？」

鴉の声を無視し、顔をジクに向けたままで、ダクツは鴉に声を掛け

た。

「鴉だ。この教会の神父の代理等をやっている。」

この状況で自己紹介している場合ではないのだが、この相手にはまず返事をする方が早いであろう。

そう判断し鴉は手短かに問いに答えた。

ジクから鴉に顔を向けるダクツ。

「そうですか、貴方が……。俺はダクツと言います。」

痛みを堪える声でもなく、ダクツも自分の名を告げた。

「ダクツ、腕を手当てするから詳しくは後に……。」

「大丈夫です、冥に治療してもらうので。」

一瞬、鴉の動きが止まった。

「……冥の友人か。」

「ええ。治療の仕方、慣れたやり方のほうが互いに良いでしょうし。」

「そうか……。では冥を呼……。」

「鴉。」

振り向こうとした鴉を、ダクツは呼び止めた。

「うん？」

ダクツに視線を戻す鴉。

「何を動揺してるんです？」

不意を突かれた質問に、鴉はギクリとした。

鴉は無言でダクツを見つめた。

目隠しをした無表情からは、何も感じ取る事が出来ない。

だからダクツが口元を緩ませた時に、鴉は気が騒いでしまった。

「……君の怪我を、冥に早く見てもらおうとね。」

「その気配とは質が違う様に感じられましたがね、ずっと。」

ダクツは知っている、間違いなく。

しかしそれは冥の事だろうか？

それとも、黄泉との関わりの事だろうか？

彼は試そうとしているのだろうか？

「オレは試されるのは好きじゃねえんだよ。」

はっとなつて鴉は振り向いた。

声の主は匠だった。

ジクにしていた羽交い絞めを解き、視線をダクツへと向けている。

「ダクツ、さっきのセリフを鵜呑みにするってえと、おかしな点があるぜ？」

「聞きましよう。」

匠の言葉に、ダクツはすんなり聞く体勢になった。

腕を庇うようにして、匠を見る。

ジクは今も不機嫌だが、ダクツと匠を交互に見ているだけ。

取り合えずは、大人しくする事にしたらしい。

匠の横で腕を組み、成り行きを見ている。

事の流れによつては、また怒りが再発するかも知れないが。

鴉も二人を見比べていた。

匠が先に切り出したので、匠の意思を尊重したのだ。

と言つと聞こえはいいが、迂闊に割つて入ると今度は匠が暴れかねない。

きつと「オレが話してるつつつてるだろうが！このアホ！頭力チ割んぜ！！」となる。

今はジクという悪友も居る為、問題児タッグを組まれては手に負えなくなるだろう。

そう思い、鴉はこの場を任せた（安全の為）。

パイプタバコを啜え、匠は考えた。

実際の所、匠にはダクツが何をしたいのかが今一つ理解出来ていない。

ジクが落ち着く（戻る）までの時間稼ぎの為に、話を切り出しただけなのだ。

匠は、ジクと言う爆弾と、ダクツと言う導火線を切り離す為の言葉

を選んだ。

パイプタバコを外し、匠は口を開いた。

「てめえじゃ殺せねえってな。」

「・・・続きをどうぞ。」

返事の手応えの無さに匠は舌打ちをする。

「「片腕の悪魔」は、ダクツの取っておきの奥義を、少し前に一度喰らっている。」

ダクツの反応が無いので、匠は確かめる様に聞いた。

「そうだろ?」

「それで?」

「・・・だがあいつはもうピンピンしてたぜ?」

「つまり?」

どうとでも取れる反応しか返ってこず、匠は苛々しつつも続けた。

「てめえが・・・もう一度同じ技を食らわせても、死なねえってこった。」

「違う技ですよ。」

しれっとしてダクツは答えた。

「あほか！阿修羅霸王拳、あれを超える技を、てめえは持ち合わせ
てねえだろ。」

「それはどうでしょう。」
ベシンツ

「つて！何で俺を引っ叩くんだよ！」

いきなり後頭部を叩かれ、ジクは匠に抗議の声をあげた。

しかし今のでジクの調子が戻ったらしい。

禍々しい気配は、今は無い。

代わりに匠に移ったようでもある。

「悪い、我慢出来なかった。」

頭をさするジクを横に、匠はダクツにガンを飛ばした。

当然だが、ダクツの目隠しの所為で届かなかった。

「ダクツ、てめえははつきりしねえな?」

「そうですね。」

「そこははつきりしなくていいんだよ。」

相手に聞こえるように舌打ちをし、匠は続けた。

「確認するぜ?」「片腕の悪魔」は・・・どうなったんだ?」

「片腕の悪魔」は・・・。」

ダクツが答えた。

「この世を去りました。」

「去ったんです。だと完璧だったのになー。」

ベシンツ

「あた!何すんのさ!?!」

いきなり後頭部を叩かれ、たまはアキラに抗議の声をあげた。

「危ねえだろ!またジョークで凍っちまうじゃねえか!」

「あ、よく判ったね?悪魔が去つ・・・。」

ベシンツ

「あた!」

再度アキラのスマツシュが飛び、頭を押さえるたま(ジョークではない)。

「ばっか!凍っちまうって言ってるだろう!この馬鹿たま!空気を読め空気を!」

「ポンポン叩いてポンポン言い過ぎだよ!叩かれ過ぎて馬鹿になっちゃうじゃん!」

「今が最悪だから大丈夫だ。」

「しれっとして言わないでよ!冥からも何か言ってるよ!」

すぐ横でペタリと座り込んだままの冥に、たまは声を掛けた。

「信じ・・・られません。」

「ほら!信じられないってさ!」

「でも冥さん、こいつがこれ以上馬鹿になる所想像つかなくね?」

「・・・あり得ません、こんな酷い事・・・。」

「ほら見る!ありえないって言ってるじゃねえか!」

「じゃあ他の人にも聞いてみようよ！絶対紳士の僕が正しいって！」
「私・・・訊いて来ます。」

「いやいや、そろそろ違うだろこの会話の噛み合せ！」
ふらふらと立ち上がる冥をアキラが慌てて引き止めた。

「冥！」

たまが腕を伸ばし、ガシツと冥の腕を掴んで振り向かせた。
虚ろで精気の抜けた眼が、たまを見る。

「冥・・・、冥。僕の間を見て・・・。」
そう言つてたまは真っ直ぐに冥の視線を絡めとつた。

左手で冥の右腕を掴み、右手を冥の背中に回してふらついた冥の体を支えている。

「・・・そう、落ち着いて。」

たまの良く通る澄んだ声と穏やかな表情が、冥の不安を僅かにだが、和らげた。

今の二人の構図だけを見たら、間違いなく良いムードのカップルなのだが。

その間、アキラはどうしていたかというところ・・・。
信じられない事に、黙って二人を見守っていた。

あのアキラが、である（失礼）。

（たまの本気を見た。）

アキラは心でそっと呟いた。

自分が同じ事をやったらきつと、不良が美女に絡みガン付けている所と見られるだろう。

そう思い、アキラは感心してその様子を見ていた。

「黄泉・・・ダクツさんに黄泉が・・・。」

冥の悲しげな眼が、たまを真っ直ぐに見た。

「ダクツは、冥の友達なんだね？」

たまの言葉に、コクリと頷く。

「冥・・・そうか、そうなんだね。」

そう言つてたまは、それでも目を逸らさなかった。

「冥、今は僕を見て。落ち着いたら目を閉じて……。」
たまは優しい声で、冥に言い聞かせる様に囁く。
言われるままに、冥はゆっくりと目を閉じた。
そしてたまは、スッと顔を冥に近づけた。

ヒュンッ

バチコーンッ

「ぶっ！」

アキラが動くより速く、冥の平手打ちがたまにクリーンヒットした。
ドベチャッ

その威力でたまが床に倒れ込む。

「あたたた・・・冗談だったのに。」

平手打ちされた左頬を押さえ、たまは顔を痛みに歪めて起き上がった。
た。

「もう！弱みに付け込んで何て事を！」

咄嗟に手が出たが、されそうになった事を想像し、みるみる顔が赤くなる冥。

「そうプンスカしないでよ、未遂だったんだし。」

「そう言う問題じゃありません！」

平然と言ったのけるたまに、ぴしゃりと叱り飛ばす。

「あっはは！良かった、怒る元気があってさ。」

「！」

たまの言葉に、はっとして冥はたまの目を見た。

「冥、でも僕の考えを聞いて？」

冥が返事をする前に、たまは遮る様に言葉を続けた。

その言葉は、冥が後で言おうとした事を思い出させた。

「大事に思っているものが、信じさせてくれたでしょう？」

「黄泉さんは、生きてるよ。」

思い（後書き）

逆エビ固めと4の字固め以外の技は架空のプロレス技です（あ）

それは良いとして、アキラ+たまペアの絶好調ぶりに一安心！

しかしダクツが最近ムダに活躍しているような・・・。

そしてたまの本気は、きつと大して続きません（何）

食い違い

ヒュンッ

匠が止めるより速く、ジクは動いた。

手に大振りの短剣を持って。

素早く振り上げ、扉の前に居るダクツの喉元を狙った。

ギギインッ

「っは？」

ダクツの目の前で、その切先は透明な壁で遮られた。

素早く後ろに下がり、まじまじとダクツを見る。

「君達が話に集中している間に、キリエエレイン防御壁をかけさせてもらったよ。」

ダクツの脇から、鴉が二人の間に割って入る。

怒りの一撃が空振りに終わり、不服な表情のジク。

しかしその反動か、ジクは再び素に戻った様子。

「また仕掛けるんじゃないか、とね。」

「・・・鴉。」

不思議そうに鴉の名を呟くダクツ。

「アンタ、どういっつもりだよ？アンタに関係なくね？」

「目の前の出来事に、無関係も無いだろう。」

そう言つて鴉は後ろに居るダクツに顔を向けた。

「ダクツ、君の目的は分からないが、まず・・・。」

そして何気なく正面に向き直した。

「・・・まず？」

途切れた言葉に聞き返すダクツ。

返事は無かった。

代わりにアキラ達の賑やかな声が聞こえ、そして静かになる。

「・・・黄泉というんですね、彼女は。」

ダクツはぼつりと呟いた。

「・・・冥と面識があつた・・・とは。」

そして周りが気付かない位微かに、唇を噛み締めた。

ダクツはジクの攻撃で痛めた腕を、自分の胸に当てた。より痛む、その場所に。

その直後。

風を切る音。

激しい平手打ちの音と共に、倒れ込む音が周囲に響いた。

「お？あの鈍臭い野郎が引っ叩かれてら。なんで？」

すっかり調子の戻つたジクが、匠に声を掛けた。

「・・・知るかよ。」

若干ジクの目を逸らしつつ、匠は素気なく返事をした。

横目で見えていた事はどうやら秘密らしい。

「いい気味だ。」

「・・・鴉、今のは？」

満足そうな声を出す鴉に、ダクツが声を掛けた。

「ああ、お調子者のギルドメンバーに、天誅が下つた所だ。」

「・・・なるほど。」

ダクツは意識を冥達に向ける。

少し聞いた所で、たまの言葉に反応した。

驚くと同時に湧く好奇心。

思わず緩む口元。

たまの出方を、ダクツは期待したのだった。

理解をするのに時間が掛かっている冥。

困惑の表情が浮かんでいる。

それもそのはず。

友人ダクツの発言と、たまの発言が、真つ向から違っているからだ。

アキラはというと、目の前で行われたショック（キスシーン手前）

からすでに立ち直っていた。

今さっき見たのは夢だったと思う事にし、冥の代わりに聞く事にし

た。

「あん？つて事は何か？あいつはわざわざホラ吹きに来たって訳か？」

「やだなーアキラは。ウルフが来たぞー、じゃあ無いんだからさ。」

「じゃあどういう事だよ？」

たまのからかう様な言い方に、ムツとして聞き直すアキラ。

「ホラ吹き少年は最後、信用されずにウルフに襲われたんだよね？」

「あん？」

「だから結果は、その場は少年一人の犠牲で済んだんだ。」

「・・・で？」

「ホラ吹き少年は気付かなかっただろうけど、彼は村人を助けたんだよ。」

そしてたまは一言付け足した。

「時間稼ぎをしたからね。」

そう言つてたまは鴉達の近くへと向かった。

「何のこつちや。」

「・・・どういう事になるのでしょうか？」

その様子をポカンとして見送る冥は、隣に居るアキラに聞いた。

「わっかんねえな・・・たまの思考回路は。」

首を傾げて返事をするアキラ。

「でもあれだぜ？冥さん。」

「え？」

「好きな方、信じようぜ。」

「！・・・ですが・・・。」

「そりゃあ実際は見なきゃわかんないだろうけどさ、・・・いや悪い意味じゃなくてだな！」

冥の表情が再び暗くなつたのを見て、慌てて訂正するアキラ。

「たまは結構自由に、思ったままに動くだろ？」

「・・・ええ本当に。」

「黄泉が生きてるって思ったから、ああ言ったんだ。」

「……。」
「理由があるはずだ。たまにも、ダクツって奴の発言にも。」
「……はい。」
「……って、あいつ！先輩に近づくなつて言ったのに！」
アキラは慌ててたまの後を追う。
「好きな、方……。」
咳く様に、冥はアキラの言葉を繰り返した。

「何か？」
「何しに来やがった。」
「何アンタ、邪魔なんだけど。」
「何でジツとして居られ無いんだ？」
たまの登場に、四人が口々に思つた事を言っている。
「何この散々な言われ様！まだ何もしてないじゃない！」
煙たがられ具合に不服なたま。
「何かあつてからじゃ遅えんだよ。」
すぐ後から来たアキラは、軽くたまを睨んだ。
「何事も信頼から、ですね。」
少し離れた所に居る冥にも、大差ない事を言われている。
「くすん……いや！紳士は挫けちゃいけないんだっだ！」
冷たい仕打ちにもめげず、たまはダクツに視線を向けた。
「冥から聞いたよダクツ、初めまして。僕はたま、吟遊詩人やつて
ます。」
気を取り直して、たまはダクツに自己紹介をする。
「初めまして。」
突然の自己紹介も気にせず、ダクツは簡単に挨拶をした。
「ギルメンの冥の友達だから、くだけて話しても良い？」
「お好きにどうぞ、俺は変わりませんが。」
「うんうん、それが楽ならその方が良いけどね。」
子供の様な笑みを浮かべてたまは頷いている。

「おい、たま。わざわざ自己紹介しに来たわけじゃねえだろ？」

「あ、そうだった。」

アキラに突付かれ、ハツとして改めてダクツを見るたま。

「ダクツ、聞こえてたかも知れないけど……。」

ダクツの反応が無いので、たまはそのまま続けた。

「僕は彼女が生きていると主張するよ。」

はつきりと、その場に居る全員に聞こえる良く通る声で言った。

「そうですか。」

動じずにダクツは、場の流れを待った。

「「片腕の悪魔」か？アンタも会った事があるのが面白くないけど

さ……。」

ジロリと疑うような顔でたまに話しかけるジク。

「って事はさ、このダクツは、わざわざホラ吹きに来たって事なん

？」

拳を作り親指でダクツを指すジク。

「ううん。」

たまは首を振った。

アキラと同じ質問だったが、それだけで終わらせた。

ジクには関わるなど、アキラに言われたからだ。

そうでもなくても関わりを避けたい為だったりする（のが本音）。

「……でもアンタは、「片腕の悪魔」が生きてるっていうわけじゃないん？」

そんなたまに、ジクは質問を続けた。

「ううん。」

たまは再び首を振った。

「おかえり。」

「ミリリちゃん、ぼにんちゃんおかえりー。」

秘密の酒場から外に出た所で、ぼちと銀はミリリを迎えた。

「た、只今戻りました!」

急いで来た事で乱れた息を整えながら、ミリリは元気よく返事をした。

「お疲れ様、そんなに慌てなくても良かったのに。」

「ぽにんちゃんが持つてったアイスの代金は、ぽっちーが払ってくれたよー。」

「あう、おちてたから。」

ミリリに抱えられたまま、ぽにんはぽよぽよと弾んでいる。

「ぽにんがもらうことにしたの。」

「落ちてないんだってば。勝手に回収したの、君は。」

ぽちは注意しながらぽにんを突付いているが、本気では怒っていない。

ぽにんがクーラーボックスの役割を果たし、アイスを体内に保存出来ているからだ。

空間転送移動をしてくれるカプラ職員を目指して、三人は歩いた。と言っても、アイス屋のそばに居るからすぐなのだが。

「ミリリ、話聞けた?」

ぽちは振り向いてミリリに声を掛けた。

「あ、はい!」

「何聞いてきたのー?」

ミリリの横に並んでいる銀も、それに続いた。

「はい、あの・・・黄泉さんと・・・。」

「と?」

問いかけてから、ぽちは素早く正面を向いた。

ザッ

その音は同時だった。

ぽちが構えるのと、相手がその場に現れるのと。

「・・・探したぞ。」

相手の静かで低い声が、ぼち達に向けられた。
ぼちは、先程マルザナから聞いた名を呼んだ。
「・・・影！」

「は？アンタ、自分の言ってる事判ってる？」

「判ってるよ。」

「じゃあ何で話がアベコベなんだよ？おかしいじゃんか！」
たまの言葉に、苛立ちを超えて純粹に疑問として、ジクは言葉を投げかけた。

「「片腕の悪魔」はダクツに殺された、けどアンタは生きてると主張してくれた。なのに・・・。」
そこまで言って、ジクはたまを睨み付けた。

「ダクツはホラ吹きじゃねえ？「片腕の悪魔」は生きてねえ？どういっつもりなんさ？」

「ちなみに、彼女の名前は黄泉さんだよ。」

「たま！」

鴉の鋭い声が飛んだ。

黄泉の名は、関係者以外は極力秘密にしていたからだ。

「別に良いでしょ？「片腕の悪魔」はもう居ないんだから。」
ドンッ

「うわ?!」

急に突き飛ばされ、たまは床へと倒れた。

グイッ

ジクはたまの襟を掴んで、上半身だけ引っ張り起こした。

「アンタ・・・ダクツと違う意味でムカツクな？」

「褒められてると思う・・・事にするよっ」

襟を引っ張られる様に？まれ、息苦しくも言い返すたま。

「で、黄泉ちゃんって言うんだ？」

ヒョイ

「うえ？」

猫の様に襟を後ろから？まれて、ジクは自然にたまを解放する形になつた。

「ジク、落ち着けや。」

ジクを掴み上げた匠は、ジクを大人しく立たせた。

「ガン付けたり名前チェックしたりで忙しいだろうがよ。」

「だってさー、コイツもはつきりしねえからさー……。」

ぶつぶつと文句を言うジクに、匠はふと考えた。

「……いいや、ちつと違うな。」

「違う？」

「たまははつきり言ってる。「生きている」「もう居ない」ってな。」

「だから！そこがおかしいんじゃないか！」

「ああ、おかしいな。けどよ？」

「けど、何だよ？」

ジクの声には答えず、匠は床に倒れているたまを見た。

その傍に、ダクツが向かつていくのも、匠は見た。

「立てますか？たま。」

ダクツは床に倒れているたまに、無事な方の手を差し伸べた。

「……うん。乱暴だったけど怪我は無いしね。」

そう言いつつも、たまはダクツの手を取って立ち上がった。

「でもあんま好きじゃない人だから、関わりたくないんだけどね。」

たまはジクに聞こえ無い様に囁いた。

「ったく、関わるなつつつたる！この馬鹿たま！」

すぐ側に居たアキラもジクに聞こえない様に、囁いて怒っている。

「違うよ向こうから関わってきたんだよ。」

「近くに居たらそうなっちまうだろ！」

「……たまは面白い男ですね。」

ダクツはポツリと呟いて、アキラとたまのやり取りに割って入った。

「だよな？アキラって面白いよね？」

「名指しでそこまで違える思考回路が羨ましいぜ。」

「いやあそんなに褒めなくても良いのに！」

「微塵も褒めてねえ。」

二人のやり取りを聞いて、ダクツは堪える様に低く笑っている。

「ダクツも面白いよね。」

不意に振られた内容に、ダクツは動きを止めた。

「……俺がですか？」

「うん。」

素直に頷くたま。

「回りくどいと、よく言われますがね。」

「あはは、色んな考えが頭にあるからだろうね。」

ダクツの言葉にも、笑って返している。

「たまは……。」

「う？」

「分かっていたのですか？俺の言葉の意味を。」

「うん？あー、黄泉さんの事？」

「瞬考えて、再びダクツに顔を向けた。」

「そうです。」

「ううん。」

「？しかし……。」

首を振るたまに、ダクツは首を傾げた。

「僕はね、まず結論から動くんだよ。」

「結論から？」

「そそ。んで、その結論に行くにはどうすれば良いかなって。」

「……。」

「そう思ったら、ダクツの言ってる意味もそうなのかな？って思ったワケ。」

「……。」

「……羨ましい位に自由な発想ですね。」

「いやあ、また褒められちゃった。」

「本当に羨ましい位、自由に幸せな奴だ。」

得意気な顔のたまに、アキラは溜息混じりに呟いた。

「褒めているんですよ、本当に。」

そう言つてダクツは低く笑つた。

「なあ、ダクツ。」

それまで黙つていたアキラが、ダクツに声を掛けた。

「何です？」

笑いの余韻を残しながら、返事をするダクツ。

「お前は自由じゃねえの？」

アキラの何気無い言葉に、ダクツから笑いが消えた。

「あいつ等、ホラ吹きにや見えねえぜ？」

たま達の様子を見ていた匠が、ようやくジクに返事をした。

「あーもう！じゃあ何なんだよ！」

苛々して、髪が乱れるのもお構いなしにジクは頭を掻き回している。

「メンドクせえ二人だよなあ。なあおっさん？」

側に居るはずの鴉に呼びかける匠。

だが其処には鴉は居なかつた。

「あ？」

何気に振り向くと、鴉は冥のいる所に移動していた。

冥に両手を広げて側に寄つたが、きつく睨まれて残念そうに両手を

降ろしている。

気を取り直して話し掛けるが、プイツとそっぽを向かれて若干落ち

込んでいる様子。

しよんぼりした顔で、鴉は匠の側に戻ってきた。

「枯れた顔すんなや、歳だけでいい。」

「今の言葉で風化しそうだ……。」

精気の無い声で答える鴉。

肩をガツクリと落とし、ギルドマスターの威厳も何処へやら。

「大丈夫？アンタ。さっきの元気はどうしちゃったんさ？」

あまりの変わり様に、ジクが思わず声を掛けた位である。

「・・・小丈夫。」

「ワケわかんね。」

鴉の返事に首を傾げるジク。

とりあえず冗談を言える余裕はあるらしい。

「ジク、退けや。」

「へ？」

ザザッ

ジクは匠の声に反応した。

声より先に、体が動いていた。

危険を察して。

ビュオンッ

素早く移動したジクのすぐ横を匠が通過した。

匠から聞こえたのは、武器を素振りする音。

それも大振りの両手斧。

数メートルの距離を置いており、助走を付け易くしている。

深く足を踏み込み、それをバネにし鴉に向かって斧を構えていた。

鴉の頭上で大きく振り上げる。

ブオンッ

その勢いで振り下ろした。

ガギインッ

斧を弾く音が響く。

「・・・っち。」

不発に終わり、匠は仕方なく斧を降ろした。

鴉には、防御壁キリエレインが掛けられていたのだ。

「匠！危ないだろう！」

目を白黒させて鴉は匠に鋭い声を掛けた。

「・・・冗談だぜ。」

「嘘をつけ！舌打ちしたじゃないか！」

「手が滑った。」

「斧はなぜ持った！さっきまで素手だっただろう！」
容赦無く入る突っ込み。

「じゃあ足。」

「助走つきただろう！しかも頭上に狂い無く振り下ろしているし！」
「そうプンスカすんなよアンタ、未遂だったんだしさー。」

「そう言う問題じゃない！」
へらへらとしているジクに、ぴしゃりと叱り飛ばした。

「おー、随分元気なっただじゃん。さっきはホントに枯れ果てそうだったし。」

「まるで別人だぜ。」

「命掛かっているからな。」

ジクと匠に返事をして、鴉は離れた所に居る冥を見る。

冥は鴉に向けて構えていた手を下ろし、鴉の視線を感じて目を逸らした。

防御壁は、冥が掛けたのだ。

「素直じゃないな……。」

鴉は微笑みながら呟いた。

「匠、素直じゃないってさ。」

「そっぢゃない！」

匠に肘で突付いているジクに突っ込む鴉。

ジクに言われ、匠は鴉に視線を向けた。

「……おっさん。」

「嫌な予感しかしないが何だ。」

「本当は仕留めるつもりだった。」

「その素直さはいらなかった。」

予感通りの答えに溜息を付く鴉。

一瞬考え込み、眼に光が宿ったように見開いた。

「そうか、黄泉は……。」

鴉の呟きに、匠とジクが反応した。

「あ？」

「へ？何なに？黄泉ちゃんがどうしたって？」

二人の声を背に、鴉はダクツの所へ向かった。

「ダクツ。」

「どうしました？鴉」

やって来た鴉に返事をするダクツ。

「やっと理解出来たんだ。」

「理解？」

「君とたまの、発言の食い違いの一致がね。」

「・・・お調子者のギルドメンバーに、先を越されてましたね。」

鴉の言葉に、からかう様に話し掛けるダクツ。

「アキラ、言われてるよ。」

「疑い無く俺に振るな！」

「残念ながらお前なんだ、たま。」

「・・・鴉。」

「凄く嫌な予感しかしないが何だ。」

「もうボケ入っちゃったの？」

「入ってない、残念そうな顔を向けるな！」

たまにぴしゃりと言い放ち、軽く咳払いをして鴉は再度ダクツに話し掛けた。

「まあ何だ、おかしな感じはしていたんだ。」

「クッキーとかケーキとか？」

「お菓子じゃねえよ馬鹿たま！」

たまの横やりに、すかさず突っ込むアキラ。

「もう！馬鹿馬鹿言い過ぎだつてば！ホントに馬鹿になっちゃったら責任とつてよね！」

「分かった、今責任とつて見送る事にする。」

「放置プレイじゃん！それは無責に・・・んぐぐ！」

言いかけたたまは、突然口を塞がれた様にジタバタしている。

「さて、静かになった所で続けよう。」

沈黙の術を掛け、ふうと息をつき、手を叩いて鴉は話し出した。

「「片腕の悪魔」を殺した、と言われても、今一つピンと来なかったからだ。」

そこまで言って、鴉はたまを見た。

もがもが言ってるたまに、アキラが指を指して笑っている。

「よし。」

「確認はいいから続けろよおっさん。」

「ですよね。」

匠とダクツに言われ、鴉はしぶしぶ続けた。

「さっきの匠の言葉で、ようやく意味が判ったんだ。」

「仕留めるつもりって奴？」

「死んでしまುದらうそれは。」

ジクの言葉に突っ込み、鴉はめげずに続けた。

「まるで別人、とね。」

一瞬訪れた静寂。

「……つまり、「片腕の悪魔」と「黄泉」は別人と、言いたいのですか？」

初めに静寂を破ったのは、ダクツだった。

「そう、しかし同時に同一とも言える。」

不思議そうに鴉を見る周囲の反応を感じ取りつつ、鴉は確信した。

やっと落ち着いて話せる、と。

食い違い（後書き）

そっちかよ!!

と、作者ですらツツコミを入れてしまったのは秘密です。

そして本当に続かなかったたまの本気。

しかし本領は発揮していた気がしますね、ポケ過ぎて（苦笑）

全体的に寄り道（主にポケ）が多くて先に進まないですが、気長に見守っててください！><

戸惑い

チャキツ

影の姿を見るなりぼちは剣を構え、素早く攻撃態勢を取った。

「だ、だめですぼちさん！」

しかし、すぐうしろに居たミリリにマントを引っ張られてしまう。

一瞬そつちに気を取られ、ぼちに隙が出来た。

「・・・なぜ貴様が俺の名を知っている？」

だが影はその隙を見逃した。

ぼちは警戒をそのままに、影を観察する。

こちらを睨むでもなく、ただ待っているようだ。

鴉の教会での行動を考えると、疑うくらいに大人しい。

武器すら構える様子がない。

今は、敵意が無いように見える。

ぼちは考えを巡らせた。

そして剣を下ろし、真っ直ぐに影を見据える。

「マルザナから聞いた。」

「・・・そうか。」

「・・・ぼにんをどうしたいの？」

「え？ぼにんちゃんに用があるの？」

びっくりした表情で銀がぼちと影を交互に見た。

「そつだよ銀。だから安易に渡し・・・。」

「そつかー、ちょっと借りちゃうね。」

ヒョイツ

ぼちが言い切る前に、銀はミリリからぼにんを取り上げていた。

「え？銀さ・・・。」

「あつ。」

緊張感のまったく無い声をだすぼにんを抱え、銀は影に近づいた。

「ちょっと銀！」

ぼちの声を聞き流し、銀は影の正面に立った。

「……また貴様か。」

「銀だよ影ちゃん、「きさま」より「ぎん」のが二文字で短いでしょう？」

「……名を呼ぶなら呼び捨てろ、女。」

「だからー、「おんな」より「ぎん」のが短くて良いでしょって……」

「どうでも良い。」

「良くないよ！要求する時はちゃんとお互いの名前を呼び合ってますんだからね！」

「ねー。」

銀はぼにんを片手に抱え、空いた手を腰に当てて主張している。

「……ふん。」

「もー、いい加減呼んでくれたって良……」

「銀、そいつを渡せ。」

「……」

「どうした、呼んでやったぞ？」

「え？あ、う、うんそうだね！」

慌てて返事をする銀は、なぜか顔を赤らめていた。

「？おかしな女だ。」

銀の様子を訝しげに見る影。

「まあ良い……もう一度言う。銀、そいつを渡せ。」
そして手を差し出した。

「う、うん！そうだったよね。」

影に言われ、銀は気を取り直しぼにんを両手に抱えた。

「銀！渡しちゃだめだって！」

銀の背後に居たぼちが耐えきれずに割り込んだ。

「うにゅ？大丈夫だよぼっちー。」

「大丈夫じゃないから言ってるんだ！」

「だって、用途はあげるか、投げるか……」

ぼちの鋭い声にも動じずに、指折り数える銀。

「な、投げる？」

驚いて思わず聞き返すミリリ。

「食べるかしかないからねー。」

「・・・食べる？」

ぼちすら聞き返してしまった。

「ぼにんちゃん、お願いできるかなー？」

困惑している二人をよそに、銀はぼにんを突付きながら話しかけている。

「はい影ちゃん、これが欲しかったんでしょ？」

そう言つて銀は手にしたものを影に差し出した。

「これは何だ。」

「え？アイス。」

「何のつもりかと聞いている」

「ほえ・・・。」

銀は不思議そうに影を見た。

「え？影ちゃんアイスが欲しかったんじゃないの？」

「どうしてそうなった。」

「あのね銀？話の前後つて大事だよね。」

フォローになつてないフォローを入れるぼち。

「・・・ぶん。」

影は、ポカンとしている銀の手からぼにんとアイスを取り上げた。

「あ、ぽっちー。やっぱり影ちゃんはアイスが欲しかったんだよー。」

「

銀は振り向いてぼちに話しかけた。

「違うでしょ！ぼにんを持っていかれたんだよ！」

すかさずツツコミを入れるぼち。

「あ、ホントだ。ぼにんちゃんが居ないよ。」

「居ないんじゃないかって持っていかれたんだってば！」

「そっかー、ぼにんちゃんが収納してるアイスも欲しかったのかな

？」

「そろそろアイスから離れて！」

「うん大丈夫！影ちゃんが持つてったから、離れたよー。」

「発想を！・・・おかしいな、たまの幻影が見える・・・。」

切れ長の目を閉じて眉間に手をやり、軽く首を振る。

「ぽっちー・・・。」

「何？」

「疲れてるの？」

「疲れたの。」

「疲れたら甘いものだよね。影ちゃーん！アイス一個ちょーだい！」

「

ぽちがツツコミを入れる間も無く、銀は振り向いて影に声をかけていた。

「・・・ミリリ、笑っている場合じゃないんだよ？」

閉じた目をつつすらと開け、意識だけを後ろに居るミリリに向けた。お腹を押さえて笑いを堪えてる気配が、見なくても判るのだ。

「す、すみません！」

ぽちに注意されるも、口を押さえた手の隙間から笑いがこぼれているミリリ。

すぐ傍に、自分達を襲った輩が居るというのに。

確かに、相手が攻撃を仕掛ける気配がまったく感じられないにしても。

「危機感が0過ぎる・・・。」

再び目を閉じ、信じられないといった風に首を振るぽち。

前方に、ぱたぱたと銀が傍に来る気配がした。

そして目の前にひんやりした甘い空気を感じた。

「はいぽっちー、これ食べて一息ついてね。影ちゃん達も落ち着いてるし。」

「溜息ならついてるよいつぱい。」

やれやれと溜息をつき、目を開けて差し出されたアイスに手を伸ば

した。

そこでふと、ぽちは不思議に思った。影が銀にアイスを渡した？

いつの間に仲良しに……。

「……じゃなくて！」

自分の考えにツツコミを入れるぽち。

よっぽど疲れているらしい。

「ど、どうしたのぼっちー、足りないの？」

銀の天然をスルーし、ぽちは銀の後ろに居る影を見た。

「……達？」

手にはぽにんもアイスも持っていない。

そしていつの間にか、もう一人居た。

影の隣に居る人物が、持っていた。

ぽにんとアイスを。

器用に、片腕で。

ぽちのすぐ後ろにいたミリリも、その人物を見て驚いて、笑いが止まった。

その人物は、体のあちこちに火傷を負っている女だった。

「よ、黄泉さん！」

「別人で、同一？」

ジクは首を傾げて鴉の言葉を繰り返している。

教会の入口の、扉の傍にたま、並んでアキラ。

その正面に匠とジク。アキラ達の横、少し離れたところに鴉とダクツ。

冥は鴉たちよりも少し離れたところで、見守っていた。

「つまり、「片腕の悪魔」は、あくまで通り名であって……。」

鴉がそこまで言って、鴉の後ろに居たたまがアキラの腕を引っ張っ

た。

「んだよたま？あん？書くものよこせって？」

たまのジエスチャーを読み取り、アキラはポケットからノートを取り出す。

一枚破って、ペンと一緒にたまに渡した。

たまは紙を手に乗せて書いている。

アキラは横から覗き込んで、書いている文字を見た。

「何なに？・・・悪魔とあくまで、とで上手い事いつてる？」

こくこくと頷くたまは、なぜか得意げだった。

ベチンという音が背後から聞こえ、鴉は思った。

しゃべらなくても騒がしいなんてと。

「その名が無くなったところで、本人の体にはまったく影響無いわけだ。」

「要するに、「片腕の悪魔」ってえのは、着せられた罪って事か。」

「じゃあ今の黄泉ちゃんは・・・。」

匠の言葉にジクが反応し、一瞬考え込んだ。

「素っ裸って事かな！」

「期待した目でこつち見んな。服じゃあなくて罪だつたろう。」
少年のように澄んだ目をしているジクに、すかさずツッコミを入れる匠。

「何なに？・・・ぼくも見てみたい？」

メモを読み上げるアキラに、こくこくと頷くたま。

意志の強い目をアキラに向けたところで、アキラの右手がたまの頭にヒットした。

鴉は諦めてダクツにだけ話す事を決めた。

「ダクツ、これは推測でしかないのだが・・・。」

「何でしょう？」

名指して声をかけられ、ダクツは返事をした。

「ダクツ、または君の身近にいる人物が、「片腕の悪魔」に恨みを持っていて・・・。」

「・・・それで？」

「でもそれが誤解だった、あるいは救われた。となったら・・・。」

「・・・なつたら？」

鴉の言いたい事を薄々感じながらも、ダクツは先を促す。

「自分、またはその人物の中で「悪魔という事実」を「殺した」事になるのでは？」

「・・・。」

ダクツの無言を、鴉は事実だと解釈し、続けた。

「・・・だとしたら、私はダクツに礼を言わなければならない。」

「礼を・・・？」

鴉の言葉を呟くように繰り返すダクツ。

「黄泉の通り名を・・・」「片腕の悪魔」を・・・。」

一瞬間を置き、ダクツを真っ直ぐ見つめて鴉は言った。

「殺してくれてありがとう。」

訪れる静寂。

そして。

「・・・っ。」

「え？」

「くく・・・はははは！」

耐え切れずに、ダクツは笑い出した。

押さえようとせせず。

「ダ、ダクツ？」

鴉は何事かと思い、ダクツに声をかけた。

「何あれ？気が触れちゃったんかな？」

ジクがダクツを指差して匠に話しかけた。

滅多に無い事らしい。

「違うだろ。」

ジクにツッコミを入れるのは匠の役目。・・・ではないがさすがツッコミを入れた。

「初めてですよ……。」

「え？」

ダクツの言葉に聞き返す鴉。

「殺してくれてありがとう」なんて……くはは！」

台詞の所々に笑いが入り込んでいる。

よっぼどツボにはまったらしい。

「鴉……貴方、聖職者でしょうか？どんな感謝の仕方ですか……
くく！」

「君だつて、神の名の下に使える者だろうに。」

ダクツの様子を苦笑いしながら鴉は眺めた。

「それで？ダクツ。」

「……ふう……何です？鴉。」

充分笑つたようで、一息ついてからダクツは返事をした。

「なぜこんな回りくどい真似をしたんだ？」

「それは……。」

「何なに？……ホラ吹き少年の最後だつて？」

裏返した紙にたまが書いた内容を、アキラが読み上げる。

「ワケわかんね。」

「どう言つこつた？」

「たまさんは、こう解釈してました。」

今まで黙っていた冥が、ダクツの目の前まで歩いてきた。

「ホラ吹き少年の犠牲で村人は助かった、と。」

そう言いながら、冥はダクツの手を取った。

「……つまりダクツは……。」

鴉の若干羨ましそうな含みの声を聞きつつ、冥は続けた。

「ええ。」

一呼吸置き、冥はダクツの手を少し上に上げる。

「もう、痛くないようですね？」

「ええ、冥。大丈夫です。」

ダクツは軽く微笑んで言った。

冥も同じ言葉を言った。

「時間稼ぎを、しましたから。」

バターンツ

ゴスツ

その時、教会の扉が勢いよく開かれた。

若干鈍い音がしたが、入ってきた面子は大して気にも留めなかった。

「戻ったよ。」

「たっただいまー。」

「ただ今戻りました！」

元気良く開けて入ってきたのは、ぼち、銀、ミリリだった。

「お帰り、ご苦労だったね。」

「お帰りなさい皆さん。」

鴉と冥が三人を暖かく迎えた。

「お、目の保養が揃ったな！」

ジクはほくほくと満足げに、帰ってきた三人を見ている。

「おー帰ってきたか・・・ところでぼち。」

アキラが足元に転がっているものを見ながら、ぼちに声をかけた。

「何？アキラ。」

アキラの目線の先を見なかった事にし、ぼちはアキラを見た。

「狙ったろ。」

「うん。」

「よし此処だ！って、思ったろ。」

「うん、思ったね。」

「俺ギリで避けたけどな。」

「うん、アキラなら避けると思ったから、カ一杯開けた。」

「そうか。」

そんなやり取りをして、アキラはしゃがんで足元にあるものに声をかけた。

「おい。」

「……。」

「大丈夫じゃないよな？」

床に転がっているものは、返事の代わりに紙にぎこちなく書き込んだ。
だ。

「何なに？……判ってたらおしえてよ？」

アキラが書き込んだ内容を読み上げ、書いた相手は力無く頷いた。

「判ってたからほつといてみた。」

床をバンバンと叩く音が聞こえる。

紙に書く所が無くなったらしい。

代わりに床を叩いて抗議をしている。

目一杯勢い良く開いた扉に激突し、たまは床に転がっていたのだ。

「で？起きねえの？」

痛みを訴えつつも中々起き上がらないたまに、アキラは聞いてみた。

「文字ちつちええよ。何なに？……。」

書く所が紙の隅っこのみになっても書きたま。

アキラは米粒ほどの文字を読み、身をより屈めてたまにそつと話しかけた。

「……マジで？」

こくこくと床で頷きたまと、視線を同じくしようとするアキラ。

「何やってやがる、てめえら？」

「眺めがいいって……どわ?!」

上からの声に返事をしたアキラは、突然背中に衝撃を感じ、体勢を崩してしまふ。

「……眺め？」

アキラを片足でぎゅっぎゅと踏みつけ、視線の先を追う匠。

ぼちが冥に話しかけ、冥は姿勢良く聞いている。

冥の服には深くスリットが入っており、立っているだけでも脚のラインがきれいに見える。

銀はミリリの傍に居た。

健康的な長い脚が、タイトスカートから覗かせている。
下からだど、もっとラインが良く見えるだろう。

「……。」

匠は踏みつけたアキラの背中に、さらに力を加えた。

「いだだだだ！」

分厚い靴底でぐりぐりと踏まれ、アキラは痛みで声を上げる。

スコンッ

アキラの隣に居るたまには、パイプタバコを頭上に投下されていた。
たまは床に文字を書くように、指でなぞった。

「あ？・・・いたい？」

指でなぞった字を匠が読み上げた。

スコンッ

力無く頷くたまに、二個目のパイプタバコが投下された。

「ならとつとと起きやがね。」

「な、なあ・・・扱い違過ぎやしねえ・・・か？」

未だに踏みしめられているアキラが、差別具合に抗議の声を上げて
いる。

足元の声を無視し、匠は入り口の近くに居る銀を見た。

同時に、鴉と話している銀と、目が合った。

パタパタと匠の元に駆け寄る銀。

「たくちゃん、ただいまーだよー。」

元気良く甘えるような声で匠の傍に来た。

「おう。」

足元に居る二人が顔を上げたのを力強く踏みしめ、匠は銀を見た。

「たくちゃん、ただいまのちゅーだよー。」

がしっ

自分よりずっと小さい銀が顔を近づけてきたのを、片手で覆うよう
に止めた。

「むーむー！」

片手でちゅー攻撃(?)を止められ、銀は匠の手の中で顔をモガモ

ガさせている。

「躊躇い無くすんな。」

暴れる元気がなくなるのを確かめてから、匠は銀を解放した。

「えーん、たくちゃんがちゅーさせてくれないよう。」

悲しげな表情を作り、銀は涙も出ていない目をこすりながら、冥の所に報告しに行った。

「まだ書いてんのお前？・・・ラブラブだね？」

匠の足の下で、たまが指で床をなぞり、アキラがそれを読んでいた。一度アキラの背中から降り、再び踏みつけるように乗っかる匠。

足元から低い悲鳴のようなものが聞こえたが、匠は無視した。

気がかりが一点、あつた。

銀と冥が話している内容。

ではない（とも言い切れないが）。

「ジク・・・何処行きやがった？」

この状況下で絡んでこないジクを不審に思い、周囲を見回した。そしてもう一人も居ない事に、気づいた。

薄暗い外。

森は静かに佇み、風も無い。

ゴシャアッ

そんな中で、殴りつけるような鈍い音が聞こえた。

「ぐあ！」

ドシャッ

声と連動し、地面に倒れるような音も聞こえた。

相手が起き上がる間も無く、横たわるわき腹を力一杯踏みしめる。

「つぐ！」

鈍い声が、足元から聞こえた。

鈍い音、鈍い声。

散々自分を苛立たせた相手に、容赦無い攻撃をしていく。

ジクは腰に装着していた大振りの短剣を取り出し、相手にちらつかせた。

もっとも、相手は目隠しをしているため、見えないだろうが。

ジクは刃を下に向け、狙いを定めた。

後輩に確かめていた、額の部分に。

そして躊躇わずに、短剣を持っている手を離した。

直後に、鈍い音がした、

さっきよりも、鈍い音だった。

戸惑い（後書き）

銀の暴走、のつもりではなかったのですがついかってなって（え

時間稼ぎ（前書き）

前の話の、最後の詳細？です。

時間稼ぎ

町外れの教会。

周囲は薄暗くなり、静かな空気が漂い始める。

が、教会の中に居る者達には一切関係しなかった。

「そうか・・・彼は黄泉の・・・。」

鴉は、ぼちのモロクであった報告を聞き、複雑な思いでいた。

「でも、もう大丈夫みたい。二人で行動してたから。」

一部始終を伝え、ぼちはVサインを鴉に見せた。

「そういえば、黄泉は火傷していたよ。」

「!・・・大丈夫なのか!」

「うん、ケロっとしてた。銀が、調合した薬を渡したから心配ないよ。」

「そ、そうか。銀が・・・。」

ぼちの言葉に胸を撫で下ろし、鴉は銀へと向いた。

そこには、さめざめと泣いている(と思ったら目薬の匂いがする)

銀が居た。

その銀の肩をぽんぽんと優しく叩く冥。

銀の傍で、ただオロオロしているミリリも居た。

「宿に戻ってからになさっては、如何ですか?」

「しくしく・・・それはお疲れ様のちゅーだもん、ただいまのちゅーじゃないもん。」

「そ、その差は大きいですよね!きつと!」

元気付けか、或いは他に浮かばなかったのか、ミリリは取り敢えず力強く言った。

「あら・・・困りましたねそれは・・・ちよつと言ってきましたね。」

冥はそう言つと、その場から離れて匠の元へと向かっていった。

「銀。」

「あ、鴉ちゃん。たくちゃんがね、ただいまのちゅーさせてくれな

いんだよう。」

鴉に声を掛けられ、銀は薬品の香りのする涙を拭いながら不満をこぼしている。

「そうか、後でお仕置きキスのキスをするといい。それは良いとして、黄泉の事だが……。」

「は、はい銀さん！ここで提案が！」

急に、ミリリが突然元気良く挙手した。

「はい、ミリリちゃん。元気に答えてくださいね。」

先生気分になって、銀はミリリに発言を許す。

なので、鴉が銀に聞こうと思つた黄泉の事が、保留にされてしまつた。

しかし無事らしいので、後でじっくり聞く事に決めた。

続けようとする事が無駄になるに違いない、と思つたのが本音だが。

「あ、はい！えつとですな……。」

元気というより若干興奮気味にミリリは答えた。

「銀さんが鴉さんにちゅーの振りをすれば、匠さんが危機感を感じて……。」

「うむ、私にもあるね、危機感。命の。」

「慌ててちゅーをしに来るんじゃないかなと！」

「慌てて殺しに来るんじゃないかなと。私を。」

「あーいいねえミリリちゃん賢い！」

鴉の呟きを他所に、ミリリと銀は名案(?)にテンションが上がっている。

「一つだけ問題がある。」

「問題？」

ミリリと銀は不思議そうに鴉を見た。

「一人死ぬ。」

鴉は冷や汗を流し、真剣な表情で言った。

「匠さん。」

ゆったりとした足取りで、冥は匠の元に行った。

「あ？」

名を呼ばれ、匠は踏み台から降りた。

「あ……扱いひつでえ……。」

ぜーはーと息切れをし、床から起きる力も無く呟く踏み台。

……では無かった、アキラだった。

冥が来るまで、ずっと匠が乗っかっていたのだ。

踏み台其の二のたまはというと、まだ床でぐったりしている。

……と見せかけて、こっそり覗き見しているわけだが。

「銀さん、悲しんでましたよ？」

それに気づいてか不明だが、冥は立ち位置を変えた。

たまの視線の先に、銀やミリリが行かない様に。

「何言つてやがる、人前でできるかっつての。」

「いいじゃないですか、キス位。」

「良いわけあるか！」

「別に、減るものでもないでしょうに。」

くすくすと悪戯な笑みを浮かべる冥に、匠は舌打ちをした。

女つて、めんどくせえ。

頭をかきつつ、パイプタバコを啜る素振りをして、冥の耳元に顔を近づける。

一言呟くと、匠と冥が同時に顔を赤らめて顔を逸らした。

「あ、何なにどうしたの？たくちゃん、冥ちゃんに何いったの？」

匠と冥のやり取りが気になり、銀が間に入ってきた。

その後ろに、胸を撫で下ろして安堵の表情の鴉と、その肩を憐れむ様に叩くぼちが見えた。

ミリリはなぜかちよっぴり残念な顔をして二人の傍にいる。

「何でもねえよ。」

「うっそだあ、二人して顔真っ赤っかだもん。」

「……後でな……。」

小声で呟き、耳まで赤いまま、匠は足早に銀と冥と踏み台から離れ

た。

「ふう……背中きつとアザになってるぜ……。」

踏みだ……アキラはそつと起き上がり、傍に居る冥と目を合わせた。

「ヒールさんきゅーな、助かったぜ。」

「それは良かったです。」

アキラが笑って見せ、冥は釣られて微笑んだ。

匠に見つからないように、ヒールを掛けていたのだ。

「見られてたら、「元氣じゃねえか」って言って、追加攻撃してたらうしな。」

「ええ、性格的にそうですね。」

二人して真面目に頷いている。

「……にしても、匠は冥さんに何を言ったんだ？」

首を傾げてさっきの光景を見ていたアキラに、冥が近づいてきた。

そして意を決して、アキラの耳元にそつと顔を近づけた。

「……あの。」

「な、何だよ冥さん？」

女性が至近距離に居る経験などまず無いアキラは、どぎまぎしながら冥に聞いた。

「あの……減るそうです。」

「減る？何が？」

顔を真っ赤にしながら、冥が答えた。

「キスしすぎて……擦り減るそうです。」

床にまだしぶとく横たわっているたまには、二人の声は聞こえなかった。

たまは、アキラと冥の様子を不思議そうに見ていた。

二人して、気まずそうに顔を赤らめていたからだ。

床に指をなぞり、「ラブコメ？」と書いていた。

教会から少し離れた森。

薄暗く、森は静かに佇んでいる。

風も無く、森の香りが湿気を帯び、漂っている。

そこに、ダクツは居た。

木の一つに寄りかかり、軽く息を整えている。

教会の外から女性三人組の気配を感じ、隙を見て抜け出したのだ。

ダクツは両手を開いては閉じた。

次に両腕を広げ軽く捻る。

「。。。。」

風も無い其処に、木の葉が一枚。

ダクツの頭上から落ちてきた。

シュピッ

その木の葉を、空中で難なく取った。

。。。はずだった。

「随分おっかない顔してんじゃん。」

聞こえた声に、ダクツは振り向かず返事をした。

「元からですよ。」

いつもの様に、表情無く答えた。

自分が教会を抜け出してから、大した時間も立たずに相手が出る事が、気配で判っていた。

「そ？いつも何考えてるかワケわかんねえ顔してるんさ、アンタは。」

「貴方に分かって貰う必要は無いです。」

そう言っただクツは相手の方を向く。

澄み切った気が、相手から感じていた。

純粹な、負の気が。

狂気にも似たそれが。

体ごと相手に向け、相手の言葉を待った。

「・・・何の、時間稼ぎだったんさ？」

静かで、落ち着いた声だった。

却ってそれが、不気味だった。

「・・・和解の、ですよ。ジク。」

ダクツは、口元に軽く笑みを浮かべて、そう言った。

そして不意に、ある言葉が脳裏に浮かんだ。

「お前は自由じゃねえの？」

遡る事、数十分前。

「自由・・・とは言えませんね。この目隠しは透けませんから。」

目隠しをそつと抑えて、ダクツは答えた。

「そうじゃねえよ。」

アキラは、すぐにダクツの返答を否定した。

ダクツの表情の変化を、見逃さなかったからだ。

「・・・貯金生活で、八工代すら節約して・・・。」

「体でも、金の事でも無え。」

「宿無しなので、時折野宿も・・・。」

「生活の不自由でもねえ！」

否定と言うより、ツッコミに近くなってきた。

「服と食事は、臨時雇いのギルドから支給され・・・。」

「衣食住から離れる！」

「ダクツつてば、意外に苦労人なんだね・・・。」

横に居たたまが、同情するような視線をダクツに送っている。

「ま、まあそんな内容が聞けるとは思ってたけどな。」

気まずさに、頭をぼりぼり搔いて誤魔化すアキラ。

「まあ・・・なんつーか・・・。」

頭を搔くのを止めて、真っ直ぐダクツを見た。

「何でか、見ててそう思っちまったんだよなあ・・・。」

アキラは首を傾げてダクツの目の前に立った。

トッ

そして拳を作ってダクツの胸を軽く叩いた。

「ここが、犠牲になってるんじゃないかってな。」

「・・・何の事ですか？」

ダクツの声に変化は無い。

だが鼓動が異様に速いのを拳に感じ、アキラは確信した。

「思ってた良いんだぜ？本音くらい。」

「・・・。」

「溜めたら腐っちゃうんだ。食い物も気持ちもな。」

返事も出来ず、ダクツはアキラの言葉に耳を傾けていた。

「全力で本音を吐き出しちまえば良い、そしたら楽だぜ。」

「・・・全力で、本音を・・・。」

そしてゆっくりと、アキラの言葉を繰り返した。

「たまを見てみる、気持ちが無制限オーラ全開だろ？」

「そうそう、僕ストライクゾーン広いからねえ。」

ふふん、と得意げに手を腰に当てているたま。

「遠慮も配慮も空気読めも無いって事だけだな。」

「何それ！それじゃただの迷惑な奴って言ってるみたいじゃないか！」

「みたいじゃねえ！迷惑の根源だつての！」

わーぎゃーと言い合っている二人のやり取りを聞き、ダクツは思っ

た。

この二人は、隠している暇も無いに違いない。

ダクツは低く笑った。

そして気持ちが軽くなっていくのを、実感していた。

そして気持ちが軽くなっていくのを、実感していた。

「そういや、ダクツは何処に行ったんだ？」

匠の衝撃発言での恥ずかしさを紛らす為に、アキラは誰とも無く言

った。

「ダクツさんは、急用が出来たとかで帰っていかれましたよ。」
冥もその案に乗り、気を取り直して答えた。

「へえ・・・意外だな。」

「え？」

「いや、礼を欠かないタイプと思ってたからさ。」

アキラは続けた。

「本当に急だよな。ぼち達が帰ってきて、すぐくらいだろ？」

「そう・・・ですね。」

「挨拶くらい、してから行きや良いのに。」

そう呟いてから、教会の中を見回した。

鴉はミリリと一緒に居て、ミリリの発言に慌てて首を振っている。きつと無茶な事を言っているに違いない。

ぼちは、匠の後を追いかけている銀を呼び止め、質問している。

すると銀は驚いた表情になり、顔を真っ赤にした。

慌てて自分の人差し指をぼちの唇に当て、匠に見られないようにしている。

それだけ拳動不審なのだから、匠が気づかない訳が無い。

振り返り、その行動を不審に思い、銀へと近付いていった。

声を掛けると、飛び上がるくらいに驚いて、必死に首と手を振る銀。

匠はぼちを見たが、首を振ってだんまりを決めたぼちには無駄だった。

手に持っていたパイプタバコで、匠は銀の頭をコツコツと叩いている。

それでお咎め無しらしい。

自分への扱いの違いさに、アキラは感動すら覚えた。

そして踏み台はまだ床に居る。

「踏み台じゃないよ！足乗せないで！」

踏み台が文句をいい、そこで初めてアキラは気が付いた。

「あ、悪い悪い、差別はいけないよな。」

そう言つてアキラは、踏み台に乗せていた片足を、右足から左足に

変えた。

「これでよし。」

「良くないよ！気づくのそこじゃないでしょ！」

「たま。」

「う？」

「声出せるようになったんだな。」

「あ、そーなんだよ！ようやく効果切れたんだよね！」

「そうかそうか、それは良かった。」

「ねえアキラ。」

「あん？」

「あのね？」

「何だよ。」

「もう降りて！！！」

声が出せた途端に繰り広げられる即興漫才。

「うち・・・気づかれたか。」

渋々とたまの背中から降りるアキラ。

「気づくよ！ずっと足踏みしてるんだから！」

たまは背中のマントの汚れを手でぱたぱたとはたき、表面の汚れを落としていく。

ぶつくさと文句は言うものの、何だかんだで楽しんでいる様子。

「・・・ねえアキラ。」

そんなたまが、アキラに声を掛けた。

さっきまでのテンションは、消えてしまったかの様に、真面目な声だった。

「・・・何だ？」

アキラも、薄々気付いていた。

教会の中を見回したのは、その為だったからだ。

「居ないよね、ダクツも・・・ジクも。」

その事実は、嫌な予感しかしなかった。

風も無く、湿った空気が漂う。

「影と黄泉。彼等は和解する必要があったのです。」
ダクツはそう続けた。

「・・・何の？」

「ただ一人の肉親を黄泉に殺された・・・と、思い続けて影は生きてきたのです。」

「へえ。」

まるで興味の無いような返事をするジク。

「復讐をする為に・・・しかし、本当は逆だった。」

「逆？」

「黄泉は、殺意に反応します。」

「らしいやね。」

「それを感知したからこそ、黄泉は影の肉親を・・・父親を斬ったのです。」

「・・・逆じゃねえじゃん。殺したんだからさ。」

ジクの言葉に、ダクツは首を振った。

「救ったんですよ・・・ちゃんと。」

「いちいち言い方が回りくどいんですよ。」

ジクは腕を組み、足はタンタンツと地面を叩いている。

苛立ちを表しながらも、無表情だ。

ジクは言った。

「あれだろ？実はオヤジが影を殺そうとしてた。そのオヤジを斬ったから影が助かった。だろ？」

それを聞き、ダクツは指を二本立てて見せた。

木の葉を掴もうとした手で。

「Vサイン？何、やっぱ当たってたワケ？」

ジクの声の調子が、若干緩んだ気がする。

「二人共、ですよ。」

「は？」

「父親は、憑かれていたんですよ・・・霊に。」
急な展開に、ジクは状況を飲み込むのを忘れるくらいに、ポカンと
していた。

「憑かれた父親が出した犠牲者は、子供一人で済みましたがね。」
そこまで言つて、ダクツは話を止めた。
言つても無駄だと思つたからだ。

我が子に手を掛ける前に黄泉に止めてもらい、心が救われた影の父
親。

霊は、かつて国により処刑された、古木の枝テロ犯である事。

子供は、ダクツ自身である事。

そのすべてを、言わなかつた。

本当に言いたい事は、別にあつたのだ。

「・・・さて。」

少しの間を置き、ダクツは口を開いた。

「ジク、彼等を貴方に邪魔されないように、俺は時間を稼いだんで
すよ。」

そして身構えた。

ジクの気が渦巻いているのが判る。

狂気に似た、それが。

「話、おわり？」

短く、ジクが聞いた。

「ええ。」

同じように、短く返事をした。

「じゃあおわりさね。」

「ええ、終わりですね。」

ダクツは地面を踏みしめた。

すぐ足元には、木の葉が一枚落ちていた。

ダクツが、掴む事が出来なかつた木の葉である。

ジクの登場に動揺したからでは無い。

「時間稼ぎ。」

組んでいた腕を解き、ジクはダクツへ近付いて行った。

教会で喰らった攻撃で、感覚が鈍った腕を構え、最後に腕に触れた友人を想った。

・・・冥。

優しい友人・・・いや、それ以上の気持ちは持っていた。

お金が貯まったら、告白するつもりでさえいた。

「ジク。」

「・・・あ？」

ジクは短く聞き返した。

死の宣告の声で。

ダクツはその声は初めて聞いた。

全身を巡る温かな血液が、瞬時に体内から失せる様な感覚。

脳にも酸素が行き渡らず、思考回路が停止を訴える。

危険と思う事ですら。

今のジクの目がダクツに見えていたら・・・。

絶望を目の当たりにしていただろう。

理不尽な死を、ただ迎えていただろう。

抵抗さえも知らずに。

ダクツはその状況で、なぜかアキラの言葉を思い出していた。

消失するギリギリの思考で。

冥を想っていた筈なのに。

かろうじて繋ぎ止めた、希望の言葉。

「全力で本音を吐き出しちまえば良い、

そしたら楽だぜ。」

その言葉が、すべての負をクリアにした。

脳に信号を与え、全身に指令が行き渡る。

血の気を失う感覚が、癒しへ指令が変更されたと脳が認識した。

そして急に、体が楽になった。

知らずに停止していた呼吸は正常に動き、酸素や血が体内を駆け巡る。

生への息吹を、全身に宿した様に。

ほんの数秒の出来事だった。

そんな僅かな間に、死と生を実感したのだ。

ダクツは言葉を続けた。

「俺はね・・・ジクの事が。」

そして思ったままを吐き出した。

穏やかに、ゆっくりと。

ジクに一番言いたかった事を。

「頭も性格も愚かなジクが、大っつつっ嫌いでしたよ。」
ダクツは人生の中で、一番満足した笑みを浮かべた。

それがジクに見せた、最後の笑みであった。

時間稼ぎ（後書き）

決して、ラブコメではありません。

途中でアキラが観察していた鴉達の状況は、次回見られます。

ちなみに、影の父親に乗り移っていた霊は、

三、四話に出てきた男ですね。

詳細はWEBで！（載ってません）

疑惑

何をすればいい？

・・・俺は。

ずっと、追いつけて来た。

ずっと、親父の仇を取ろうと。

ずっと、この時が来るのを。

待ち望んでいた、ずっと。

・・・そして。

目の前に、「奴」が居る。

俺の一撃をまともに喰らい、多量の出血に、地面に膝をついていた。

無表情だが、血は、体や地面を広範囲に濡らしている。

普通の人間なら出血死は、免れない。

本来ならば・・・。

いや、俺の目指していた通りの物語なら・・・。

これで、完結だ。

仇を無事取ることが出来た俺は、生きる目標も、無くなる。

「奴」の骸を虚しく眺め、過去を振り返り・・・。

現在を見つめ、未来を思う事も無く。

生命を惜しむのも忘却の彼方へと消え・・・。

俺は、暗殺者として。

自らを殺していた。

それで、完結だ。

・・・そのはずだった。

「じゅーしょーです。」
目の前のポポリンが、目障りな程に揺れ、苛立たしくゆるい声を出している。

不気味なまでに軟らかな緑の体を上下に弾ませ、疎ましが更に増加した。

湿り気を帯びた風が心地良く思える程に、この物体が不愉快なのは何故だろうか。

「おにーさん」。ぽにんはおなががすきました。」
面倒な事に、視線を向けられ、話しかけられてしまった。

「・・・そうか。」
だからどうした？などと話を繋ぐつもりは一切無かった。

一本の樹木に身をもたせていた俺は、視界にそいつが入らないように、顔を背けた。

「おにーさん」。ぽにんはじゅーしょーなんです。」

再度ゆるい声で、そいつは謎な事をほざいている。

「・・・脳がか？」

俺とした事が、思わず発言してしまった。

そいつに存在しそつにもない事を。

どうにも、ペースを乱す奴が多い様に思える。

こいつといい、さっきの黒髪の女といい。

あの女は結局、何がしたかったのだろうか？

理解に苦しむ解釈をした挙げ句、顔を紅潮させ、友人のように俺と接した。

二度。

さっきの事を入れると、三度、会っている。

一度目は、森の中で。

二度目は、教会で。

どちらも、互いに良い思いは無かったろうに。

三度目のモロクでは、それまでの事が無かったように、接触してきた。

理解に苦しむ。

一緒に居た二人この、目の前にいるポポリンもそうだ。

「奴」をおびき出す為に俺は、こいつを人質(?) 代わりにしようとした。

それなのに、清々しいほど腹立たしく思う俺に、不思議に懐いている。

・・・記憶に無いだけでも知れないが。

「あゝ。ぼにんのごはん。」

不意に、俺の背後に顔(体か?) を向け、騒ぎ出した。

そう、気配を消して俺の背後に居た存在に、こいつは気づいたのだ。

俺は視線を、その存在にゆっくりと向けた。
もっとも俺が、理解に苦しむ存在。

肩までの銀髪に同色の眼。

簡単に纏った漆黒の衣装。

そして何より、片腕が無い女。

俺が、「片腕の悪魔」と呼び続けた、存在。

俺は今更ながら気が付いた。

今まで、なぜ気が付かなかったんだろう。

目の前の存在が大事だと。

他の奴に取られたくない。

そう思った俺は、体が勝手に動き出していた。

最愛の人の傍へと。

「・・・ってなると思うんですね!」

「うん、凄く良い話に持って行こうとしているねミリリ。」
両手をぎゅっと握り締めて力説するミリリを、鴉が引きつった笑顔で答えている。

「鴉さん！女の子はこう言うくだりが好きなんです！」
真剣な顔で真っ直ぐ鴉を見るミリリ。

「その設定に匠を当てはめるのは構わないが……。」
若干押され気味の鴉。
それでも何とか答えた。

「匠に恋愛要素を求めるのは、砂漠に雪を求めるのと同じくらい、無意味だ。」

「そこをですね！」
ビツと鴉を指差して、ミリリは続けた。

「匠さんと銀さんの友人である鴉さんが、間に……。」
「入らない。」

「そこで嫉妬の炎が……。」
「燃えない。むしろ私が燃え尽きる。命が。」

「そして銀さんは匠さんに愛されてる実感を感じ……。」
「私は身の危険を感じ……。」

「銀さん大喜び！」
「私は往生しそうだが。」

「という流れはどうでしょうか！」
勢いに乗ったミリリの発言に、鴉は脳をフル回転させて考えた。

「その流れについていけない。」
しかし鴉は首を振って、そう答えるしかなかった。

「砂漠に雪……そういえば。」

傍で鴉とミリリのやり取りを呆れながら聞いていたぼちが、ふと思
い出した。

モロクでのやり取りを。
そして視線を、匠の後ろを追いかけている銀へと向けた。

「銀、ねえ銀。」

若干小声で呼びかける。

「ほえ？」

その声に気づき、銀は匠から離れてぼちの元へ。

「どしたのぼっちー？声小さくしちゃって。」

「うん、さっきのは何だったのかなって思ってた。」

「さっきって？」

キョトンとしてぼちの顔を見る銀。

「モロクで影と話してる時、顔赤かったからさ。」

何となく理由がわからなくもないぼちだったが、敢えて聞いてみた。

「もしかして、旦那に似てたからとか？」

まさかそこまで判り易い事は無いかな？と思いつつ。

「え？！ちよ・・・何でわかつちやったの！？」

心底びつくりした表情で、銀は顔を真っ赤にした。

「まさかここまで判り易いとは思わなかったな。だん・・・。」

「わー！しーっだよぼっちー！しーっ！」

ぼちの言葉を遮るように大きな声を出し、自分の人差し指をぼちの

唇に当てている。

「あ、柔らかい。」

「銀、突っ込みが間に合わないんだけど。」

銀の行動に、ぼちはそう答えるしか無かった。

「何してやがる。」

「わきやあ！？」

突然の背後からの声に、銀は飛び上がるほど驚いて振り向いた。

匠である。

「う、うん！何でも無いんだよ、ホントだよ?!」

凄い勢いで首と手を振る銀。

どう見ても何かあっただろうっ的な行動を取る銀を、ジロリと見る匠。

その視線をぼちに移した。

ぼちは真っ直ぐ匠を見て、首を横に振った。

1：何も知らない。
2：何も言わない。
3：何を聞いても無駄だと思う。
等などの意味を込めて。
匠はそれを察したようで、匠は諦めて再び銀に視線を移した。
そして手持ちのパイプタバコを使い、銀の頭をコツコツと叩く。
それで終了らしい。

「あー……」
軽く叩かれた頭をさすりながら、銀は切ない声を上げた。

匠は口も態度も悪く、粗暴な性格だが、銀に対しては明らかに違う。
銀の一方的な熱愛だと思っていたが、実はそれだけでもないようだ。
ぼちは二人の様子を不思議そうに眺めた。

ふと、ぼちは視線を変える。

視線は、アキラを探していた。
無意識に。

教会内は入り組んではない。今居る玄関口から、ほぼ一目で見渡せる。

アキラはすぐに見つかった。

玄関を背に、右側に鴉とミリリ。正面に匠と銀。

その奥にアキラは居た。

冥やたまと一緒にだ。

なぜか床に居るたまの背中、足踏みをしている。

たまは散々喚いた後に、ようやくアキラの足踏みから開放された。

アキラはとても生き生きとした表情をしている。

たまをいじり倒して楽しいらしい。

声を掛けようとして、ぼちは近寄ろうとした。

しかし、アキラの表情の変化に、思わず踏みとどまった。

生き生きとした表情は消え失せ、困惑を交えた暗い表情をしている。

たまや冥も、同じように表情に暗い。

「……アキラ？」

ぼちは小さく呟いた。
届かない位の声で。

「……………」

「奴」は無言でしゃがみ、手に持っていたハーブ類をポポリンの前に数枚撒いた。

探して取ってきたらしい。

ポポリンは目の前の食料に素早く反応し、摂取しだした。

どう聞いても、ハーブを食しているように聞こえない音で噛み締めている。

ハーブに似せた焼き菓子かと一瞬思ったが、触れてみてその考えを消去した。

存在が不可解だと思ったら、構造も不可解だった。

だが、もつとも……………」

「奴」はしゃがんだまま俺を見た。

表情の変化を見ようと、俺はいつの間にか観察していたらしい。

視線が合う。

銀色をした「奴」の眼が、俺を捉えた。

そして立ち上がり、俺の近くへを歩を進める。

何をすればいい？

……………俺は。

ずっと、追い続けて来た。

ずっと、親父の仇を取ろうと。

だがそれは間違이었다。

気づかずに、俺はずっと、殺意を抱き続けてきた。

物言わぬ「奴」に、濡れ衣を着せてしまったのだ。

俺の目標は、「奴」を殺す事だった。

「片腕の悪魔」を……………」

だがもう、殺してしまった。

俺の中で、「片腕の悪魔」は抹殺した。

暗殺者^{アサシン}として、初めて殺めたのが、無の存在だったとは。

・・・スッ

「奴」は俺の目の前で止まり、手を伸ばしてきた。

そうか。

何もせずに、居れば良い。

「奴」なら、武器が無くとも、仕留める事が出来るに違いない。
楽に、或いは瀕死の状態を継続させる術も。

全部、受け止めれば良い。

それが俺の、罪の償い方だ。

暗殺者が、暗殺者に殺される。

珍しい事ではない。

俺は眼を閉じた。

現実を受け入れる為に。

「ね、ねえ不安だよ・・・探しに行こうよアキラ！」

言葉通りの表情をし、アキラの腕を掴むたま。

「ああ！」

アキラが返事をし、それを合図に冥が支援魔法を掛けていく。

「予想しとけよ？」

声を落し、アキラがたまと冥に声を掛けた。

「最悪の状況、出来れば斜め上の発想で。」

「そんな！」

「たまさん。」

アキラの言葉に、たまはショックを受けた。

そんなたまに、冥は落ち着いた声で呼びかける。

「最悪の状況に、対向する術は？」

「え……。」

冥と目が合い、たまは一瞬思考が止まった。

そして冥の質問を頭の中で繰り返し、答えを口にした。

「……最善の、対策！」

シヨックを押し隠し、たまは力一杯そう答える。

「では、それで行きましょう。悩んだりした後です。」

「うん！」

にっこりと微笑み、冥はアキラに視線を移した。

「たまさんは単純ですから。」

「俺もそう思う。」

「せめて声潜めるとかしない?!二人とも！」

「……単純……。」

「……思う……。」

「遅いよ聞こえた後にやっても！」

すかさずつつこむたまを見て、にやりとするアキラ。

「その元気で探そうぜ。」

アキラの言葉に、たまは無言で頷いた。

望みを持つにしろ、不安はまだ拭えていないからだ。

仲が良いとは言えないダクツとジクの二人。

未遂とはいえ、ジクがダクツを襲うのを、目の当たりにしている。

そして二人とも短時間で居なくなった。何も言わずに。

この事が意味するものが、たまには不安要素でしか無かった。

「私、鴉様に伝えてきます。」

「分かった、俺達は先に探しに行く。」

「うん。冥、匠にも声掛けてくれる?あの人の扱い上手そうだし。」

「分かりました。」

そう言っただけ冥は小走りで鴉の元へと向かった

「たま、武器持ってけよ念の為。」

「うん……あ、あんな所にあった。」

たまは教会内をぐるりと見回し、教壇手前に落ちている弦楽器を見

つけた。

アキラに縛られてから、ずっと其処にあったのだ。

足早に向かい、弦楽器を拾い上げ、ぱたぱたと埃をはたき落とす。大事そうに抱きしめてから、たまはアキラの居る場所へ戻った。

「行こう、アキラ。」

「おうよ。．．．なあ、その楽器さ。」

「う？」

「まさかと思うんだけどな？」

「うんうん？」

「．．．女？」

「うん。」

「そうか。」

「うん。」

二人は頷き合った。

一瞬の間。

「．．．え？マジで言ってるんのお前。」

「え？当たり前だよ、適当に聞き流してると思ったの？」

呆然としたアキラの顔を見て、ムツとしながらたまは続けた。抱きかかえている弦楽器を、アキラの目の前にまで近づける。

「これぐらい、見て判るでしょ？」

「そんな次元の違う目利きは持つちゃいねえ。」

アキラは正直に言った。

「じゃあ特別に教えてあげるよ、このラインが．．．。」

たまはそう言っつて弦楽器を上から下になぞった。

「ほうほう？ラインが？」

「中央にくびれがあるでしょ？ウエストだね。上からバスト、ウエスト、ヒップを表し．．．。」

相槌を打たれ、すすんで説明をするたまは、違和感を感じた。違う。

アキラじゃない。

反射的に顔を上げ、相槌を打った人物を見た。
アキラに「関わるな」と念を押された相手だった。

「あれ？続けてくれねえの？」

不思議そうにたまを見るジクが、そこに居た。
ジクだけが、教会に戻って来たのだ。

信じられなかった。

信じたくなかった。

いや、百歩譲って信じたとしよう。

・・・どういう事だ？

影は、頭部にある違和感を感じた。

痛みは無い。

衝撃も無い。

覚悟していたとはいえ、極度の緊張で全身の筋肉が萎縮していたの
だが。

影が頭上を感じたのは、温もりだった。

決して、血の温もりでは無い。

その感覚が無くなるまで、影は目を閉じていた。

怖くて開けられなかったというか。

視界を閉ざしたことが、感覚を倍増させる。

荒んだ世界に身を投じてきた影にとっては、まさに未体験だった。

頭を、撫でられる事が。

それも乱暴ではなく、優しく、撫でる。

時折、髪に指を差し込まれての撫で上げは、影の体をゾクリと振る
わせた。

思考が完全に停止した影は、ただ耐えていた。

影にとっては、刑罰とも思えるこの行動を。

どれだけの時間が経っただろう。

温もりが、消えた。

ザッ

たまは咄嗟に後方に下がり、ジクとの距離を置いた。

ジクのすぐ傍にアキラが居て、当惑した表情をたまにみせている。

二人の間に、ジクが割って入ってきたのだ

いつの間に……。

「はぁ……しかし成る程ね。」

片手を顎に当て、ジクは妙に納得した顔をしている。

「女のボディラインをモチーフにしたとはねえ。」

そしてたまの弦楽器をまじまじと見つめた。

「女の体を抱きしめて歌って演奏！なーんて、吟遊詩人もエロいねえ。」

にやにやしながら、ジクは弦楽器へ手を伸ばした。

たまは素早く背を向け、庇う様に弦楽器をジクから遠ざけた。

「……なんさ？」

「神秘的な存在である、女性の強く穏やかで、柔らかな曲線から作られたんだよ。」

無表情のジクに、たまはキツパリと答えた。

「不純な気持ちで触れないでよね。」

「……そういう所、似てるんさね。言い方ムカツく所。」

「誰に？」

「ダクツに。さつき居た奴に。」

その名前に、アキラとたまが反応する。

そうだ、ダクツはどうなったんだろう？

二人居なくなつて、一人だけ戻ってきた。

帰っただけなら、どれだけ安心する事か。

「あの……先輩。その……ダクツの事なんすけど……。」

「あ？何？」

不機嫌そうな返事に、アキラは心構えをした。

馬鹿たま！関わるなって言ってるのに！と、心で悪態を付いた。たまはアキラを見て、申し訳無さそうな表情を覗かせている。だがこれでたまへの不穏要素は、アキラへ八つ当たりする事で紛れるだろう。

無い唾を飲み込み、アキラはようやく切り出した。

「あいつ、挨拶も無しに行っちまったもんで……。」

ジクの目を見るのを恐れ、アキラは目を逸らし、続けた。

「せ……先輩も、何も言わずに居なくなって、でも戻ってきたんで……。」

「……ああ、目の保養が居るからな。」

そう言っただけは、出入り口付近に集結している女子の集落に手を振った。

皆、ぎこちない表情をしているのが分かる。

「……で、ですね？」

「ん？」

「あいつ……ダクツも……戻ってくるんじゃないかなあ！……つと。」

最後は無理やり元気に言った。

暗く言えば恐らく、ジクは気になってたかも知れない。

自分がダクツをどうかしたんじゃないか？と思われる事を。

実際は、そんな面倒な事はジクは考えないのだが。

アキラはジクの怒りに、なるだけ触れないようにと明るく努めた。

「ふうん……。」

興味の無い声で呟くと、ジクは改めてアキラを見た。

「ダクツね、戻って来ないさ。」

そしてはつきりと答えた。

「……ええつと……帰っちまったって事っすか？」

アキラは気持ちを抑えて聞いた。

「んや。」

しかし、抑えてもまた出てくる、不安。
ジクは言った。

「消えてもらったからさ。」
関心の無い声で。

疑惑（後書き）

メリークリスマス！

明けましておめでとございます！

を、言えなかつた位に投稿が無かつたorz
まっことに申し訳ありませんでした；

次は早めに書きたいなあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1412f/>

ラグナロクオンライン達

2011年10月5日07時59分発行